

妹尾住田遺跡

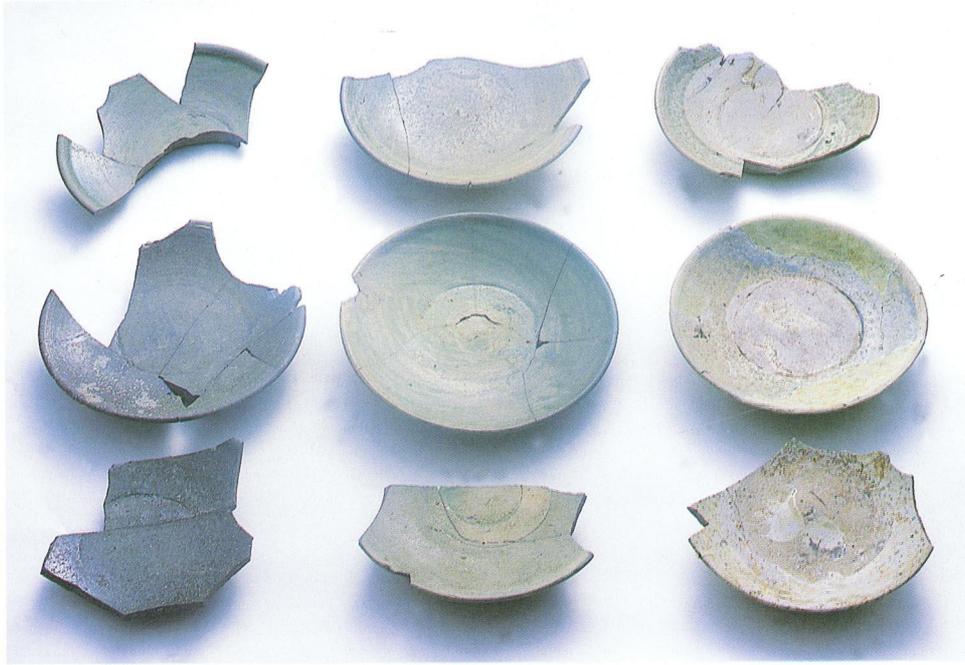
— 古代の公的港灣施設関連遺跡の発掘調査報告 —

2 0 0 3 年 3 月

岡 山 市 教 育 委 員 会

『妹尾住田遺跡』正誤表

		誤	正
頁	行	内 容	内 容
16	11	北側で検出されて	北側で検出された
45	6	土器については、P66ほど	土器については、P99ほど
65	土器番号 123	遺構 一	遺構 P458
69	土器番号 394・396・397	遺構 溝4土面	遺構 溝4上面
76	24	妹尾住田Ⅰ期が武田編年Ⅱa期後半に、	妹尾住田Ⅲ期が武田編年Ⅲa期後半に、
		妹尾住田Ⅱ期が武田編年Ⅱa期後半～	妹尾住田Ⅳ期が武田編年Ⅲa期後半～
	27	妹尾住田Ⅲ期は、	妹尾住田Ⅰ期は、
107	表7 P537 ネズミ類 備考	より大	ドブネズミより大



溝 4 出土緑釉陶器

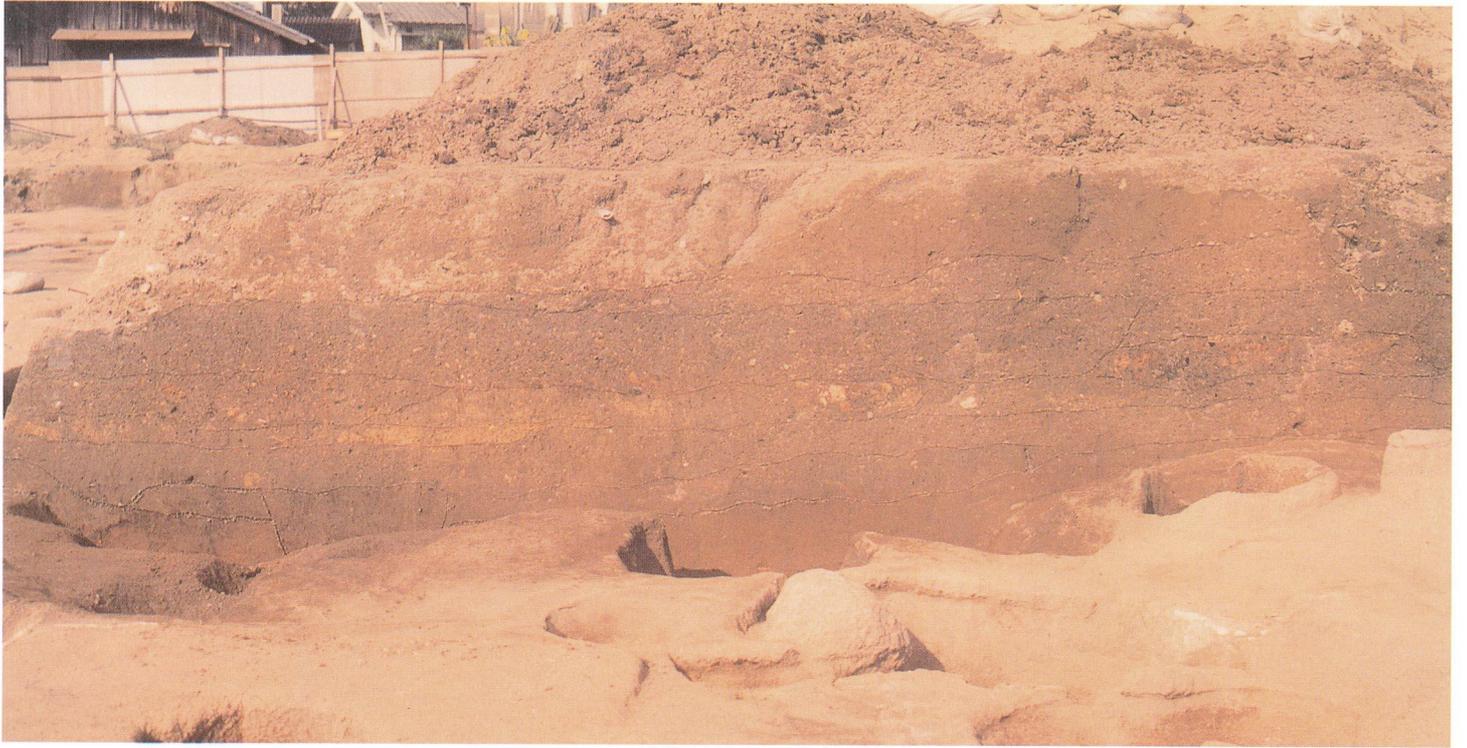


緑釉陶器(皿)



灰釉陶器(皿)





中心建物造成層断面



建物 6 柱穴断面



溝 4 緑釉陶器皿出土状況

序

岡山市域西半の足守川流域には広大な沖積平野が形成されており、そこを基盤として数多くの遺跡が形成されております。全国でも第4位の規模、立ち入りできる古墳の中では第1位の規模を誇ります造山古墳や、県下最古の古代寺院の1つであります大崎廃寺などの著名な遺跡も数多くあり、古代の備中国はもとより、県下全域と一部広島県を含んだ「吉備国」の中核地と考えられます。この地域の南側は今では水田地帯が広がっていますが、それは近世の干拓後の景観で、中世以前は瀬戸内海に通じる吉備穴海と呼ばれる内海でした。この海に面して中山茶臼山古墳や車山古墳などの大型古墳が築かれており、中世には「水島合戦」、「藤戸合戦」といった源平の主要な合戦がおこなわれていることから、重要な海上交通路だったと考えられます。妹尾は内海に浮かぶ小島でしたが、その背後には吉備国中核地、前面には内海交通路といった、いわば交通の結節点に位置していました。平家方の有力な武将として、妹尾と関係の深い妹尾(瀬尾)太郎兼康が登場するのも、交通の要衝といった妹尾の地理的条件によるものと推測されます。

妹尾住田遺跡は市営住田団地建て替え事業に伴って発掘調査されました。中世から縄紋時代の遺構や遺物が出土しましたが、中でも注目されるのは9世紀末から10世紀初頭の青磁、緑釉陶器、灰釉陶器といった高級陶磁器が多数出土したことです。これほどの量を出土する遺跡は、内陸部の遺跡でも稀で、妹尾といった地域の歴史的な重要性を示す重要な資料といえます。

本報告書は、以上の調査成果をまとめたものです。岡山地方の地方史研究の基本資料として、多くの方々にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、発掘調査対策委員の諸先生方のご指導と、発掘参加者のご支援をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成15年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 玉 光 源 爾

例 言

1. この報告書は、岡山市教育委員会文化課が平成11年7月19日から平成11年10月15日と、平成12年2月16日から平成12年2月25日と、平成12年5月26日から平成12年6月20日にかけて岡山市市営住田団地建て替え事業に伴う、岡山市妹尾1180番地の発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、その執筆は草原が担当した。
3. 遺物の実測およびトレースは木村真紀、山元尚子がおこなった。遺物の写真撮影は草原がおこない、カラー写真については岡山市教育委員会文化財保護主事西田和浩がおこなった。編集は草原がおこなった。
4. 報告書の作成にあたって、動物遺体の分析を小林園子氏にお願いし、玉稿を掲載させていただいた。
5. この報告書に用いている高度値は標準海拔高度である。
6. この報告書に用いている方位は磁北である。
7. 図2は国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「倉敷」を複製し、加筆したものである。
8. 遺物、実測図、写真等は岡山市教育委員会にて保管している。

目 次

第 I 章	位置と歴史的環境	1
第 II 章	調査の経過	7
第 III 章	遺構と遺物	12
第 IV 章	結 語	72
附章	101
図版	1 ~ 21

挿入図目次

図1	妹尾住田遺跡の位置	1	図57	柵列1実測図	41
図2	周辺遺跡分布図	2	図58	柵列2実測図	42
図3	調査区位置図	7	図59	集石遺構1実測図	43
図4	調査区配置図及び断面図位置	9	図60	集石遺構2実測図	43
図5	調査区断面図	10	図61	集石遺構2出土遺物	43
図6	中世遺構配置図	13	図62	P99実測図	44
図7	建物8実測図	12	図63	P99出土遺物	44
図8	建物9実測図	14	図64	P114実測図	45
図9	建物10実測図	15	図65	P114出土遺物	45
図10	P31実測図	15	図66	P1実測図	45
図11	P102実測図	15	図67	P1出土遺物	46
図12	P195実測図	16	図68	P118実測図	46
図13	P195出土遺物	16	図69	P118出土遺物	46
図14	P278実測図	16	図70	P113実測図	47
図15	P278出土遺物	16	図71	P113出土遺物	47
図16	P400実測図	17	図72	P674実測図	47
図17	P400出土遺物	17	図73	P674出土遺物	47
図18	P446実測図	18	図74	P238実測図	48
図19	P446出土遺物(1)	18	図75	P238出土遺物	48
図20	P446出土遺物(2)	18	図76	P22実測図	48
図21	P446出土遺物(3)	19	図77	P22出土遺物	48
図22	P458実測図	20	図78	P572実測図	49
図23	P458出土遺物(1)	20	図79	P572出土遺物	49
図24	P458出土遺物(2)	21	図80	P23実測図	49
図25	P537実測図	22	図81	P23出土遺物	49
図26	P537出土遺物(1)	22	図82	P665実測図	50
図27	P537出土遺物(2)	23	図83	P665出土遺物	50
図28	P551実測図	23	図84	P50実測図	50
図29	P551出土遺物	24	図85	P50出土遺物	50
図30	P600実測図	24	図86	溝4東側コーナー部分遺物出土状況実測図	51
図31	P632実測図	24	図87	溝4出土遺物(1)	52
図32	P633実測図	25	図88	溝4出土遺物(2)	53
図33	P634実測図	25	図89	溝5出土遺物	54
図34	炉状遺構1	26	図90	溝5・7断面図	55
図35	炉状遺構2	26	図91	溝7出土遺物(1)	55
図36	炉状遺構3	26	図92	溝7出土遺物(2)	55
図37	溝2実測図	27	図93	E区遺構実測図	56
図38	B区遺構図	27	図94	古代造成層及び包含層出土遺物(1)	57
図39	C区遺構図	28	図95	古代造成層及び包含層出土遺物(2)	57
図40	C区P2出土遺物	29	図96	古代造成層及び包含層出土遺物(3)	57
図41	D区P27出土遺物(1)	29	図97	古代造成層及び包含層出土遺物(4)	58
図42	D区遺構図	30	図98	古代造成層及び包含層出土遺物(5)	58
図43	D区P27出土遺物(2)	31	図99	古代造成層及び包含層出土遺物(6)	59
図44	D区P27出土遺物(3)	32	図100	古墳時代前期の遺物	60
図45	D区P27出土遺物(4)	33	図101	縄紋時代の遺物(1)	61
図46	古代遺構配置図	34	図102	縄紋時代の遺物(2)	61
図47	建物1実測図	35	図103	縄紋時代の遺物(3)	62
図48	建物2実測図	35	図104	出土土器分類	73
図49	建物2柱穴出土遺物	35	図105	古代土器法量分布	74
図50	建物3実測図	36	図106	東山遺跡P508出土遺物	77
図51	建物4実測図	36	図107	調査区周辺の旧地形(復元)	79
図52	建物5実測図	37	図108	古代建物配置図	80
図53	建物6実測図	38	図109	備中南東部地域の平城宮式系軒瓦出土分布	83
図54	礎石建物1実測図	39	図110	瀬戸内海航路と妹尾住田遺跡	84
図55	礎石建物2実測図	40	図111	岡山県における地鎮・宅鎮遺構変遷模式図	89
図56	建物7実測図	40	図112	西村貝塚分布図	93

第 I 章 位置と歴史的環境

妹尾住田遺跡は岡山市域の西端に位置し（図1）、現在は前面に水田が広がっているが、かつては瀬戸内海の内海（古代には吉備穴海といわれた）に浮かぶ島であった。岡山市妹尾は江戸時代には妹尾村で、児島湾を臨んだ漁村であったが、文政2～同6年（1819～1823）の興除村の干拓によって前面に広がっていた海が水田へと変わった。しかし児島湾に対しての漁業権は持ち続け、漁村と農村の性格をあわせ持つ地域性を形成した。また水田域が拡大しつつあった元禄6年（1693）には、それまで妹尾村一ヶ村であったものを東磯と西磯に分け、それぞれに大庄屋や年寄りがおかれるようになった。その後、明治11年には再び単一の妹尾村になり、同22年には村制を施行した。そして同29年には町制を実施し、さらに同35年には隣接する箕島村と合併して、旧妹尾町の町域は固定された。昭和46年に岡山市と合併して今日に至っている。国道2号バイパス（現国道2号線）が開通したことにより、岡山市街地や水島コンビナートとの交通のアクセスが便利となった。そのためベッドタウンとしての開発は加速され、急激に住宅地が増えており、かつて海から水田へと変貌した時と同じ程の環境の変化が起こっている。

多くの島々が点在し、景勝の地でも知られる閉鎖性海域の瀬戸内海の現在の景観は、干拓以前の妹尾周辺の景観でもあった。ところが最終氷期の最盛期である25000年前から15000年前、特に日本列島が最も寒冷化した18000年前のビュルム氷期厳寒期には、現海水面よりも100m以上低かったとされる。瀬戸内海は最も深いところで70mほどであるから、完全に陸地化した平原地形を呈していた。瀬戸内海ではよく漁の網によってナウマン象などの化石骨が引きあげられるが、それは該期の平原に棲息していたものである。また当時の山頂部で、現在は瀬戸内海に浮かぶ島々にはナイフ形石器を中心とした石器群を出土する旧石器時代の遺跡が分布している。内陸部であるが、足守川中流域の丘陵部上にある甫崎天神山遺跡⁽¹⁾、雲山遺跡⁽²⁾、矢部堀越遺跡⁽³⁾、杉尾西遺跡⁽⁴⁾などでも、ナイフ形石器や、

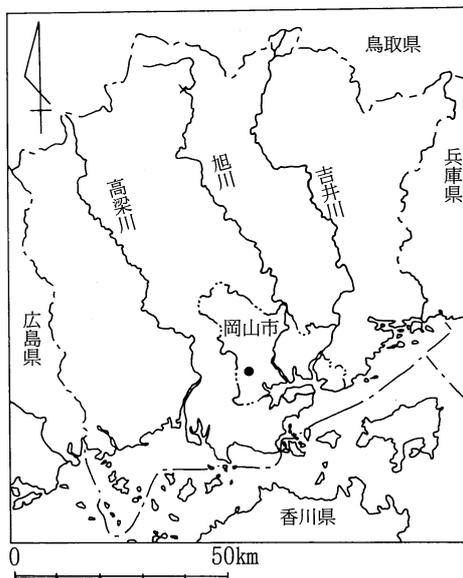


図1 妹尾住田遺跡の位置

尖頭器などの旧石器時代の石器が出土している。現在の瀬戸内海周辺だけでなく、かなりの広範囲に後期旧石器時代の人々の足跡は広がっており、妹尾でも和田宮東方の丘陵上で、サヌカイト製のナイフ形石器が採集されている⁽⁵⁾。

縄文時代になると、温暖化による海進のため、現平野のかなりの部分が水没していた。矢部伊能軒遺跡⁽⁶⁾や矢部奥田遺跡⁽⁷⁾では早期の土器が出土している。また児島の菰池遺跡⁽⁸⁾でも出土しているが、同期の遺跡の分布は点的である。前期になると、縄文海進によって形成された浅い内海には周辺の河川などが搬入した有機分が蓄積され、複雑な地形と速い潮の流れによって攪拌される。さらに砂州も形成される。そのため魚介類が豊かな海域となり、砂州上には数多くの貝塚が



- | | | | | | | |
|-------|------------|-------------|----------|-----------|------------|-------------|
| ▲ 貝塚 | ① 妹尾住田遺跡 | ⑧ 高尾貝塚 | ⑮ 新邸貝塚 | ⑳ 鯉喰神社墳丘墓 | ㉒ 矢藤寺山古墳 | ⑳ 矢部堀遺跡 |
| ● 古墳 | ② 関戸貝塚 | ⑨ 東栗坂古墳群 | ⑯ 日畑廃寺 | ㉑ 矢部遺跡 | ㉓ 車山古墳 | ㉔ 縄目瓦出土地 |
| ○ 散布地 | ③ 大内田貝塚 | ⑩ 川入・中撫川遺跡 | ⑰ 王墓山古墳 | ㉕ 矢部大塚古墳 | ㉖ 石舟塚古墳 | ㉗ ナイフ形石器出土地 |
| | ④ 浄泉寺裏山古墳群 | ⑪ 上東遺跡 | ⑱ 楯築墳丘墓 | ㉘ 東山遺跡 | ㉙ 伊能軒遺跡 | ㉚ 妹尾大村池下貝塚 |
| | ⑤ 奥坂遺跡 | ⑫ 二子14号墳 | ⑲ 王墓山遺跡群 | ㉜ 伝賀陽氏館跡 | ㉝ 岩倉遺跡 | ㉞ 骨蔵器露出地点 |
| | ⑥ 天神坂遺跡 | ⑬ 二子御堂奥古窯址群 | ㉚ 矢部貝塚 | ㉟ 吉野口遺跡 | ㉠ 下条遺跡 | |
| | ⑦ 新屋敷古墳 | ⑭ 西尾貝塚 | ㉛ 惣爪廃寺 | ㉡ 中山茶臼山古墳 | ㉢ 妹尾知行所陣屋跡 | |

図2 周辺遺跡分布図

出現する。遺跡の集中する中心地は倉敷市域の北側で、現在は小丘陵が群在しているところである。当時は大小の小島がかたまった内海的な海域であった。そこには前期の土器編年の基準ともなっている羽島貝塚⁽⁹⁾や磯の森貝塚⁽¹⁰⁾、中期では西岡貝塚⁽¹¹⁾、後期では福田貝塚⁽¹²⁾などの著名な貝塚をはじめとして多くの貝塚が存在する。妹尾では西端に中期と後期の妹尾大村池下貝塚⁽¹³⁾がある。妹尾の西側にある早島にも中期の大内田貝塚⁽¹⁴⁾、内陸部の丘陵裾部には中～後期の矢部貝塚⁽¹⁵⁾が存在する。しかし規模的、密度的にも倉敷市域北半の貝塚群と比べると貧弱であり、周縁部的な地域であったといえる。妹尾住田遺跡でも前期と中期の土器や石器が出土しているが、量は少なく、キャンプサイトであった可能性が推測される。

弥生時代になると、足守川流域の沖積作用や海退によって広大な沖積地が形成される。一方、妹尾周辺は海進の影響はあるものの、島という環境には変化がなかった。中期中葉から足守川流域の平野部では遺跡が増加し、後期になると吉備でも有数の遺跡密集地となり、やがて後期後葉には弥生時代の列島中最大規模の墳丘墓である楯築墳丘墓⁽¹⁶⁾が出現する。円丘部の両端に突出部を付属した全長約80mにも復元されるものである。この時期の葬送儀礼に用いられた特殊器台・壺は、埴輪の祖形であり、地域を越えて各地の首長に配られている。ただしそれは有力な墳丘墓にも供献されるが、墳丘を持たない集団墓の中でも出土することから、確立したヒエラルキーを明示しているとはいえない。いずれにせよ後期後葉の足守川流域は、岡山県全域から広島県の東半を含んだ広範囲に形成されていた吉備といわれる古代地域圏のなかではもちろん、汎列島的に見ても中枢地としての様相を呈していた。巨大な前方後円墳を築く古墳時代へと変化する列島社会の原動力の1つとなった地域であったことは疑いない。

妹尾周辺では弥生時代の遺跡としては高尾貝塚⁽¹⁷⁾があり、昭和31年に発掘調査されて出土した土器は「高尾式」として前期中葉の土器の指標となっている。また関戸貝塚⁽¹⁸⁾はヤマトシジミを主体とした貝塚で、上層から中期、下層から前期の土器が出土している。前期段階は足守川流域の平野部も同じ様相で、比較的小規模な集落が点々と分布していた。足守川流域の内陸部で画期を迎える後期では、妹尾に隣接する早島で大規模な集落が形成される。天神坂遺跡⁽¹⁹⁾、奥坂遺跡⁽²⁰⁾で中期末から集落の形成が始まるが、後期に盛期を迎える。竪穴住居、掘立柱建物、貯蔵穴が多数検出されている。また天神坂遺跡は弥生時代の集落の基礎単位を明らかにする良好な資料でもある⁽²¹⁾。

古墳時代になると、内陸部では弥生時代後期の発展の延長として、全長が100mを越える大型古墳が築造され、さらに全長360mの造山古墳が中期には築かれる。そのほか全長20m未満の小古墳も無数にある。一方、妹尾周辺の島々には前方後円墳は認められず、小古墳の数も極めて少ない。天神坂遺跡、奥坂遺跡は古墳時代前期にも竪穴住居があるものの集落規模は縮小している。妹尾住田遺跡では同期の土器が若干出土しており、小規模な集落が存在していたようである。ただし、前期後半以降の土器は出土しておらず、古代まで人が生活した痕跡は認められない。古墳時代前期には、瀬戸内海の沿岸部に点々と短期しか継続しない海浜集落が形成されており、前期の大型古墳が臨海性の性格が顕著であることと関係あるのかもしれない。そうすると、妹尾住田遺跡の古墳時代前期の集落も、該期の社会的な働きの1つであった可能性がある。

弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて、内海に面した島々や地域では外面にタタキを残し、口縁部を「く」字形に外反する甕を特徴とする土器が分布しており、島嶼部地域といった内陸部とは異なった地域圏を形成する⁽²²⁾。土器の特徴から東の播磨地域などの影響が感じられるが、古墳時代前

期中頃になるとその特徴は明確でなくなってくる。

古墳時代後期になっても内陸部との数的な差は歴然としているものの、それまでよりも数多くの古墳が築かれており、浄泉寺裏山古墳群のように数基集まった古墳群を形成するものもある。後期古墳は内部主体が横穴式石室で、6世紀後半以降爆発的に築かれるようになる。その背景は、製鉄や製塩といった手工業生産が広くおこなわれるようになったため、その生産の直接の担い手であった民衆、それまで古墳を築くことのできなかつた民衆も古墳を築いたためとされる。一方、古墳に埋葬された人骨の親族関係を分析した成果によると、竪穴式石室や箱式石棺に埋葬される前・中期古墳の場合、同一墳丘内には同じ血縁者しか埋葬されないが、後期古墳になると異なった血縁者、妻などの配偶者も埋葬されるようになるという⁽²³⁾。血縁よりも家族の紐帯が強くなったことが推測されることから、古墳時代後期は集団の最小単位である家族にとっても画期であったといえ、それは集団全体の再編へとつながるものであったと推測される。ともあれ妹尾周辺で後期古墳が築かれるようになったのは、明確な遺跡が調査されていないものの、製塩が盛んにおこなわれたことに起因すると思われる。また内陸部において、最も内海に面した遺跡の1つである川入遺跡⁽²⁴⁾からは飛鳥時代の軒丸瓦が出土しており、これは大和へ搬出されたものの一部とも考えられるものである。このことが示すように製塩・漁猟以外にも、海上交通路の担い手として島々の人々が関与していた可能性は十分にある。奈良時代の文献である『大税負死亡人帳』には、妹尾が含まれる備中国都宇郡深井郷には津臣の名が記載されており、その氏名は海上交通に関与したことを示している。早島の新屋敷古墳⁽²⁵⁾は終末期の古墳であり、規模的にはそれ程でないものの島々を拠点とした人々は連綿と古墳を築いていることがわかる。また同墳には畿内産土師器も副葬されており、畿内との関係も深かったことを示している。おそらく海上交通を通じて、畿内と吉備を結ぶ中継的な位置にあったためであろう。

奈良時代になると、足守川中流域には日畑廃寺、惣爪廃寺、大崎廃寺などの古代寺院や、津寺遺跡⁽²⁶⁾、矢部遺跡⁽²⁷⁾、川入遺跡⁽²⁸⁾などの官衙が集中して認められる。同様の集中度を示すのは、旭川東岸の旭東平野で、そこは備前国府の推定地である。足守川中流域は備中国の中枢地であることは間違いなく、備中国府との関連が想定される。妹尾は律令制下では備中国都宇郡深井郷に属していたとされ、隣接する箕島は近代には同じ妹尾村に含まれていたが、古代では『日本紀略』に撫河郷箕島村に関する記事が載っていることから、別の郷に分かれており、現在の汗入くらいが郷境であったと推測される。妹尾周辺には白鳳・奈良時代の古代寺院は認められないが、平安時代には大内田廃寺や、妹尾でも縄目瓦を出土する地点がある。大内田廃寺⁽²⁹⁾は小規模な寺院跡であるが、出土している瓦の中に備中国府と関連する寺と推測される加茂政所廃寺⁽³⁰⁾と同文の軒瓦も出土しており、片田舎の小堂というだけのものでもないように思われる。妹尾にある縄目瓦出土地も大内田廃寺クラスの寺跡が存在していたことを示している可能性がある。

古代末から中世は「源平の争乱」の時代で、付近では「水島合戦」や「藤戸合戦」などの主要な合戦がおこなわれている。それらの合戦の本質は、瀬戸内海航路の制海権奪取にあったものと思われる。平家方の有力武将であったとされる妹尾(瀬尾)太郎兼康が妹尾を本拠にしていたといわれるのも、妹尾が瀬戸内海航路と深く関わりがあったためと推測される。古代末から中世の遺跡としては、多くの貝塚が分布している。妹尾だけでも7箇所もの貝塚が知られている。これらは出土する遺物も少ないことや、貝種も限定されていることから、貝を加工した作業場周辺に形成された貝塚と考えられている⁽³¹⁾。中世以降の妹尾に関する文献でも豊富な海産物がとれていたことが記されており、その中に

ハイガイなども含まれている。また近世のものではあるが、寛政10年(1798)に西磯の氏神である御崎神社に、西磯漁師が奉納した干潟漁を描いた県指定有形民俗文化財の絵馬(児島湾漁撈回漕図)は、妹尾のそういった環境を具体的に示している。また、妹尾知行所陣屋跡の背後の丘陵上の崖面には、小貝塚とともに火葬骨の入った骨蔵器の一部が露出している⁽³²⁾。ただし、小貝塚の貝層と骨蔵器の位置は微妙にずれており、両者の時期差は現況からは判断できない。貝層も丹念に精査したが、土器等の時期を示す遺物を採集することはできなかった。骨蔵器は羽釜形の土師質土器で、15世紀の時期である。15世紀になると妹尾住田遺跡は廃絶しており、妹尾の中心地が該期には妹尾の陣屋町付近へ移動していたことを示唆している可能性がある。

近世になると、備中国は毛利領、秀吉の馬廻りの知行地、宇喜多領の三者が入り交じった複雑な様相を呈し、慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦後に、宇喜多、毛利の両勢力が備中国から駆逐された後も同様であった。妹尾は最初、窪屋郡と都宇郡を領した宇喜多領となり、家臣の花房家の所領となった。その後、宇喜多家が没落し旗本の戸川家による庭瀬藩が成立し、同藩の所領となった。そして寛文4年(1669)には三代藩主安宣の弟安成を旗本として分家させ、妹尾知行所が成立し、朱印高は1500石であった。現在陣屋跡には石垣と井戸が残っている。このほか、岡山県下で最初に開設された寺子屋とされる元亀元年(1570)につくられた矢吹学舎が知られており、それは今寺学舎、上寺学舎、和田学舎と点々と位置を変えながらも明治5年まで続いた。

注

- (1) 宇垣匡雅^{ほか}「甫崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 1994年
- (2) 正岡睦夫^{ほか}「黒住・雲山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 1994年
- (3) 浅倉秀昭^{ほか}「矢部堀越遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82 1993年
- (4) 柴田英樹^{ほか}「杉尾西遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報』2001(平成13)年度 2003年
- (5) 妹尾町『妹尾町の歴史』妹尾町の歴史編纂委員会 1970年
- (6) 小野雅明氏より御教示を得た。
- (7) 高畑知功「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82 1993年
- (8) 下澤公明^{ほか}「菘池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』71 1988年
- (9) 藤田憲司^{ほか}「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』11 1975年
- (10) 島田貞彦「備前国児島郡磯の森貝塚 特に爪形文について」『考古学雑誌』14-7 1924年
- (11) 沼田頼輔「岡山県下における貝塚発掘報告」『東京人類学会雑誌』130 1897年
- (12) 泉拓良^{ほか}『福田貝塚(山内清男考古資料2)』奈良国立文化財研究所 1989年
- (13) 間壁忠彦「第1章原始・古代の人々のくらし」『早島の歴史』1通史編(上) 早島町史編纂委員会 1997年
- (14) 鎌木義昌「岡山県都窪郡大内田貝塚」『日本考古学年報』2 1954年
- (15) 注6
- (16) 近藤義郎『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会 1992年
- (17) 鎌木義昌^{ほか}「高尾貝塚」『日本農耕文化の生成』東京堂出版 1961年
- (18) 鎌木義昌「関戸貝塚」『岡山県大百科事典』上 山陽新聞社 1980年
- (19) 高畑知功^{ほか}「天神坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53 1983年

- (20) 高畑知功^{ほか}「奥坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53 1983年
- (21) 藤田憲司「単位集団と居住領域」『考古学研究』第31巻2号 1984年
- (22) 中田宗伯「中部瀬戸内における甕形土器の地域色」『吉備の考古学的研究』(上) 山陽新聞社
1992年
- (23) 田中良之『古墳時代親族構造の研究』柏書房 1995年
- (24) 安川満^{ほか}「川入・中撫川(市道)遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1999(平成11)年度
2001年
- (25) 福田正継「新屋敷古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53 1983年
- (26) 高畑知功^{ほか}「津寺遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 1998年
- (27) 伊藤晃「矢部遺跡」『岡山県史』考古資料 1986年
- (28) 中野雅美^{ほか}「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 1977年
- (29) 注18
- (30) 柴田英樹^{ほか}「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138 1999年
- (31) 根木修「中世海浜貝塚」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年
- (32) 安原英、佐藤静太の両氏の案内で現地を見学した。なお、両氏からは有益な御教示を頂いた。

参考文献

- 妹尾町『妹尾町の歴史』妹尾町の歴史編纂委員会 1970年
- 同前峰雄『風土記児島湾』日本教出版株式会社 1985年
- 谷口澄夫編『岡山県の歴史』ぎょうせい 1996年
- 間壁忠彦・間壁葎子^{ほか}『新修倉敷市史』 1996年

第Ⅱ章 調査の経過

妹尾住田遺跡の前面には市街化している部分を除くと水田が広がっており、かつて島であった児島まで続いている。この景観は近世の干拓以降のものであり、遺跡が形成されていた古代や中世においては吉備穴海と呼ばれていた内海が広がっていた。妹尾住田遺跡は内海に浮かぶ小島の砂浜部に立地する遺跡なのである。

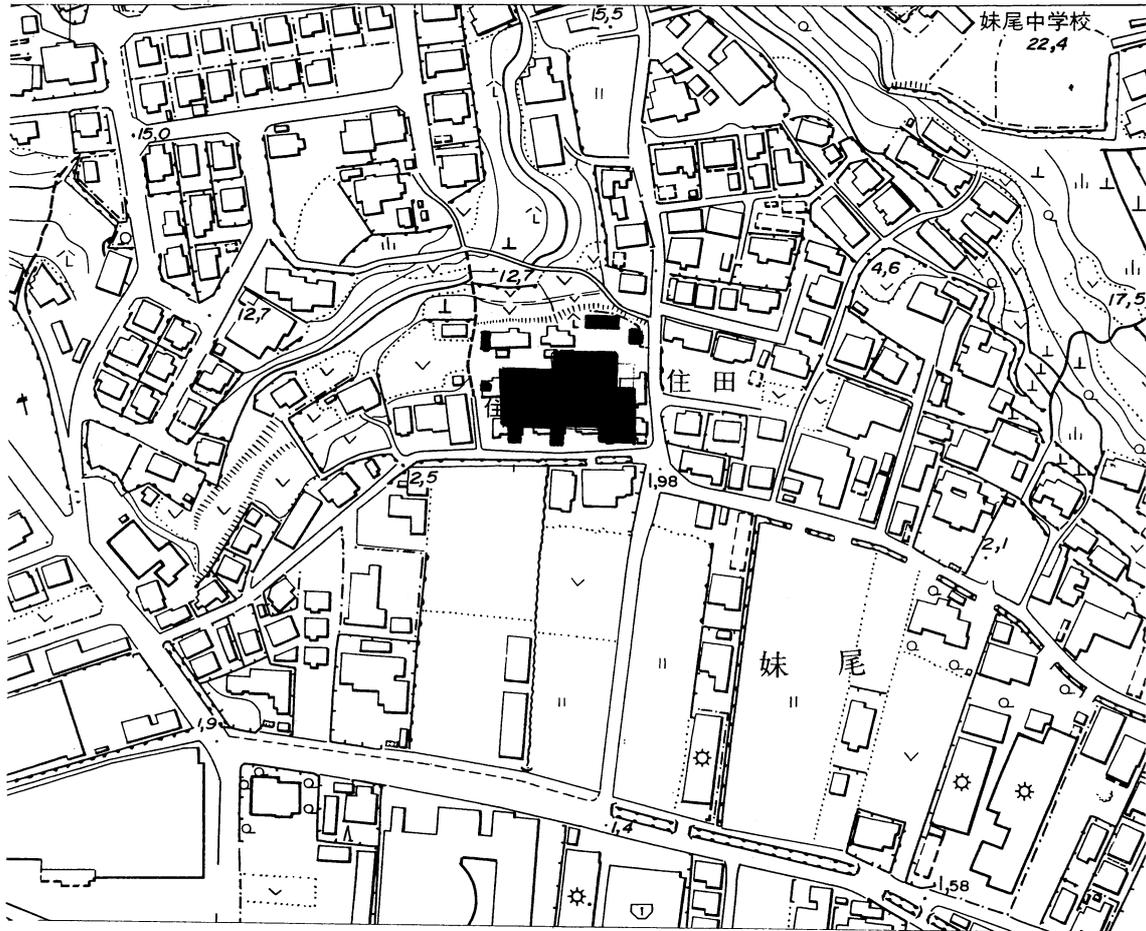


図3 調査区位置図

岡山市市営住田団地建て替え事業が岡山市都市開発整備局によって設定された。そして平成10年10月7日付で、岡山市教育委員会教育長宛に埋蔵文化財等の存在状況確認調査の依頼がされた。この依頼を受けた文化課は現地踏査をおこない、ハイガイ等の貝殻の散布を確認した。このため当該地には貝塚等の遺跡が埋没している可能性があることから、重機による試掘の必要性を指示した。試掘は平成10年11月4日に実施し、計画地全体に中世を中心とした包含層が存在していることが確認された。その結果から設計変更等により遺跡の保存を図るのは不可能であることが判明した。このため文化課は平成10年11月5日付で、当該地が埋蔵文化財包蔵地にあり文化財保護法の適用を受け、団地建て替

えの際には記録保存による事前の行政的措置の必要な旨の試掘調査に関する回答を都市整備局建築部住宅建設課に通知し、その実施に対する両者の連絡協議を要請した。文化課と建築部住宅建築課で協議を重ねた結果、記録保存を平成11年度に実施することで合意に達した。発掘調査の着手に先立ち、平成11年4月20日付で岡山市長から文化庁長官宛に、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘通知」が提出された。発掘調査は同年の7月19日に着手し、岡山市教育委員会教育長から文化庁長官宛に文化財保護法98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘通知」が提出された。発掘調査の終了は同年10月15日で調査面積は1200㎡である。しかしその後バリアフリーの観点からエレベーターを付設するよう計画変更があり、その部分20.7㎡を追加調査として平成12年2月16日から同年2月25日までおこなった。また住宅地北側に付設するガス庫とゴミ収集所の建設部分についても、追加調査として36.9㎡についてを平成12年5月26日から同年6月20日までおこなった。ガス庫とゴミ収集所の建設部分の追加調査をおこなっている際に、駐車場造成によって遺構面が露出した箇所を発見した。急遽記録を取り、それ以上の掘削をおこなわないように指示し、露出した遺構面は埋め戻して保護した。

なお、発掘調査現地説明会は平成11年10月2日(土)におこない、約400名の参加があった。

発掘調査組織

発掘調査主体者	岡山市教育委員会教育長 戸村彰孝
発掘調査対策委員	稲田孝司(岡山大学教授) 西川 宏(山陽学園講師) 狩野 久(京都橘女子大学教授) 間壁忠彦(倉敷考古館館長) 水内昌康(日本考古学協会会員 前岡山市文化財保護保護審議会会長)
発掘調査担当者	米村 博(岡山市教育委員会文化課長) 出宮徳尚(岡山市教育委員会文化財専門監) 根木 修(岡山市教育委員会文化課長補佐) 神谷正義(岡山市教育委員会文化課主査) 宇垣匡雅(岡山市教育委員会文化課主査) 乗岡 実(岡山市教育委員会文化課主任) (調査員) 草原孝典(岡山市教育委員会文化財保護主事) (経理員) 羅久井和恵(岡山市教育委員会文化課主事)
発掘調査現場作業員	岡田正人 合木利明 小山笑子 佐藤 武 為石千枝子 坪井伯美 鳥越澄江 中山政太郎 西岡和子 林銀治郎 藤田順一 松井政子 渡辺 勇
発掘調査現場補助員	木村真紀

発掘調査現場事務員 板野桂子

出土物整理事務員 山元尚子

調査にあたり、対策委員会の先生方に多大なるご指導ご助言をいただいた。また同前峰雄、伊藤晃、亀田修一、岡田博、鈴木景二、富岡直人、山元敏裕、地元研究者の方々には、諸々のご教示・ご助言をいただいた。諸々にご助勢下さった方々に深謝する次第である。

経過と概要

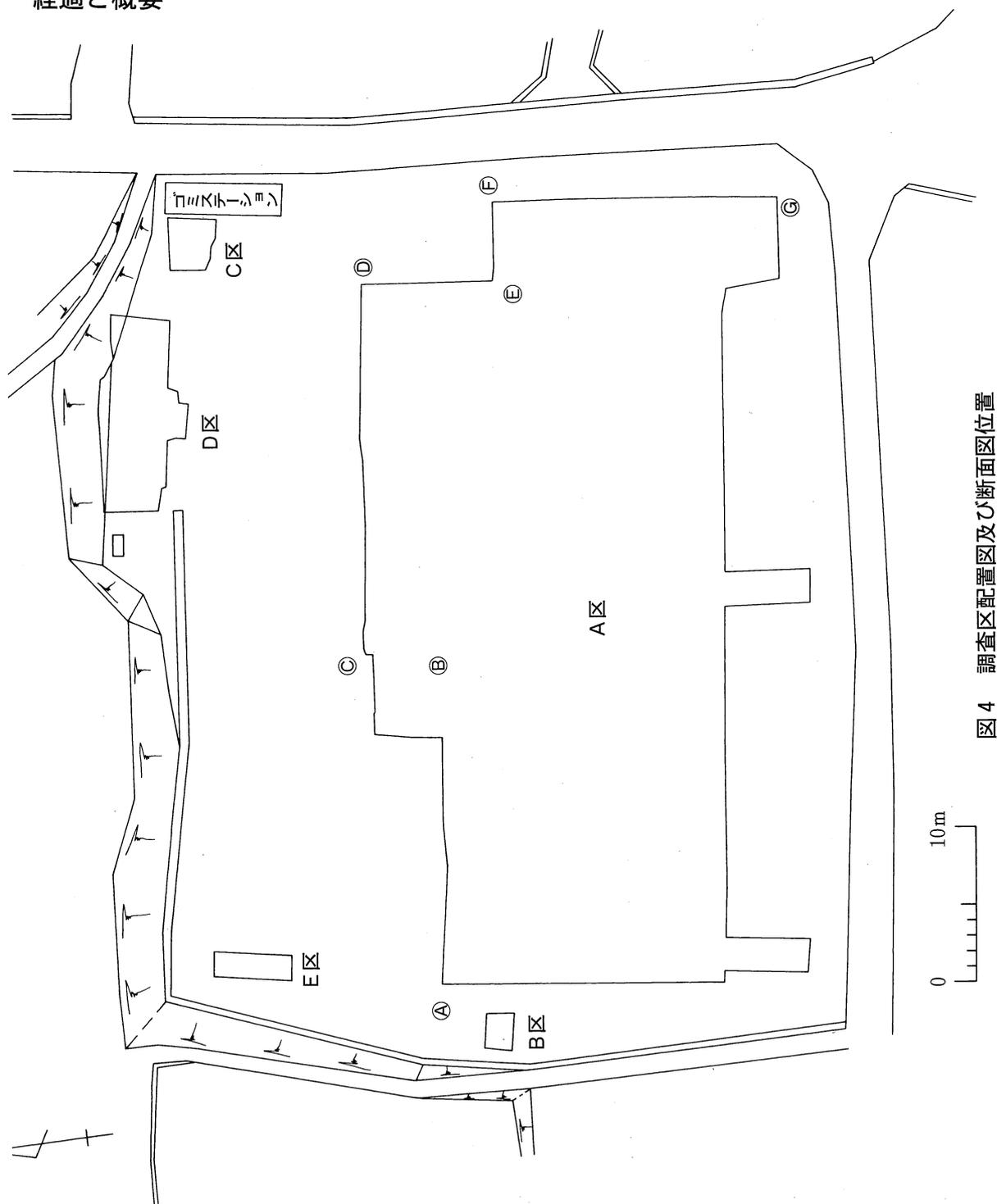


図4 調査区配置図及び断面図位置

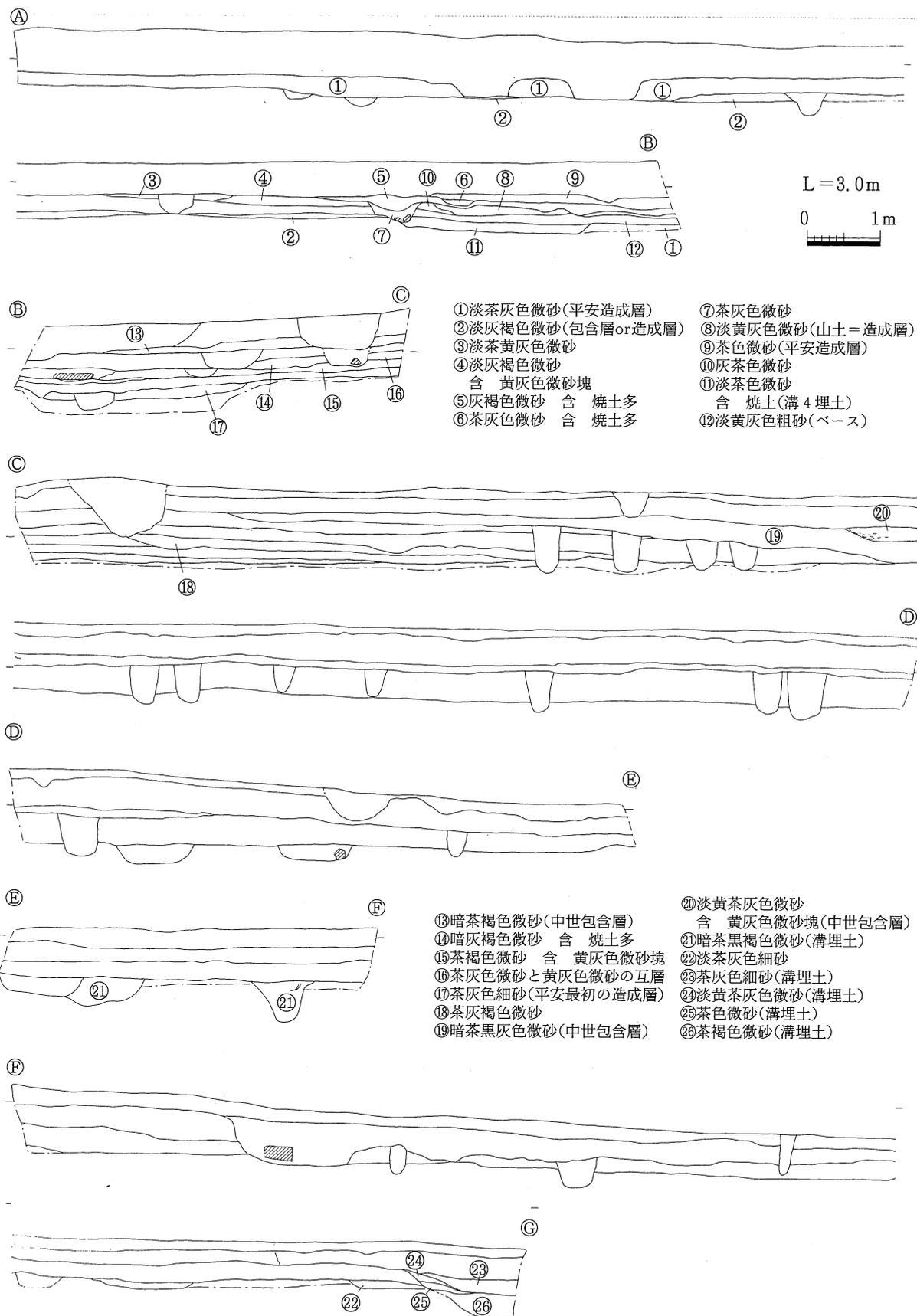


図5 調査区断面図

調査は既存の住宅の造成土が0.4mほどあったため、重機によって除去した。発掘区の層序は、北側と東側の側壁の断面観察から得た(図5)。調査区は市営住宅本体部分をA区、擁壁確認坑をB区、ゴミ収集所をC区、ガス庫をD区、駐車場造成の際に露出した調査区をE区と呼称する。

造成土除去直下は中世の包含層になっているが、その厚さは地点によってかなり異なっている。調査区中央北側付近では古代の包含層があるためわずか0.1mほど(13層)であるが、造成層のない東側へ行くと、0.6mほど(19・20層)にまでなる。調査区南側は現況の地表面でもかなり下がっており、特に中央南寄りの部分で一段下がる。これは浸食等の影響によるもので、この段以南の遺構の残存状況は良くない。こういった段状の浸食は調査区南端でもあり(23・24・25・26層)、中世以前の遺構は大きく削平されている。中世の遺構は敷地全体に広がっているようで、多数の柱穴、土壇、炉状遺構が検出された。遺構密度も濃く、遺物も多数出土したが、建物の配置には規則性もなく出土遺物も青磁や白磁などの高級陶磁器もほとんど認められないことから、一般的な集落の範疇に含まれると考えられる。

古代の遺構面も敷地全体に広がっているが、中世とは異なり規則的な遺構配置が看取される。南側部分は浸食されて部分的にしか検出できなかったが、外周は2本平行の溝によって画されており、背後の丘陵部もほぼ東西方向に方向を合わせてカッティングしている。建物も正方位に向いており、主要な建物は同じ位置で建て替えをおこなっている。また建て替えごとに造成をおこなっており(8・9・14・15・16・17層)、最後の建て替えには山土を用いて丁寧な造成をおこない、中心建物も掘立柱建物から礎石建物へと変化している。出土遺物も食器類が中心で、越州窯産青磁、緑釉・灰釉陶器が少なからず含まれていることから、古代の遺構面は官衙と考えてよい。

中世・古代遺構面の基盤層(12層)は砂層であり、当地がいわゆる海に面した砂浜部にあったことを示している。この砂層も掘り下げをおこなったところ、古墳時代前期の土器と縄紋時代前・中期の土器、石器が出土した。精査したが遺構は検出できなかった。遺物はそれほど摩滅が認められず、離れた地点から流されたという可能性は少ない。小規模な該期の集落が存在していたのであろう。

発掘日誌(抄)

平成11年7月19日	A区、B区発掘開始
8月13日	中世遺構面掘り上り、写真撮影
9月20日	古代遺構面掘り上り、写真撮影
9月27日	発掘調査対策委員会開催
10月2日	午前、妹尾小・箕島小の児童の遺跡見学会 午後、現地説明会開催
10月15日	調査終了
平成12年2月16日	エレベーター部分の追加の調査開始
2月25日	エレベーター部分の追加の調査終了
5月26日	C・D区の発掘調査開始
6月16日	駐車場予定地の造成で遺構面が露出、それ以上の掘削をおこなわないように指示、E区を設定し記録し埋め戻す。
6月20日	調査終了

第三章 遺構と遺物

中世から古代にかけての遺構が検出され、それぞれの層序関係については前章を参照されたいが、ここでは各遺構と、そこから出土した遺物の概要を大まかな時期ごとに説明する。

I 中世（12世紀～14世紀）

中世の遺構は調査区全体で認められるが、密度的には東側の方が濃い傾向がある。遺構の大半は柱穴で建物が復元できるものは僅かである。A区については南半に柱穴が少ない傾向が看取されるが、それは調査区の中央付近から南にかけて基盤層の傾斜が急になっており、包含層も2次的な堆積状況であることから、後世の風化や削平を受けたためと推測される。柱穴のほかには炉や土壇もあり、炉

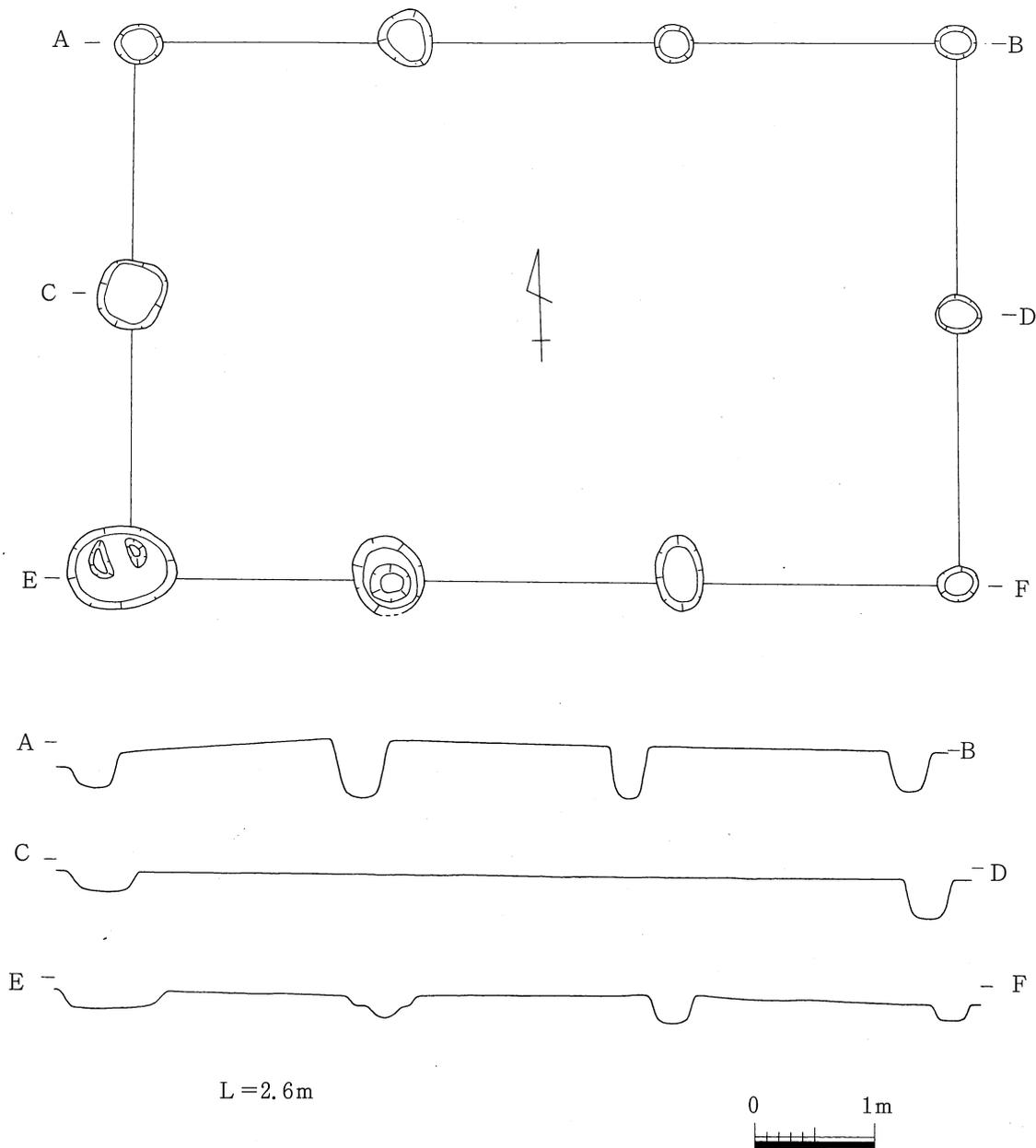


図7 建物8実測図

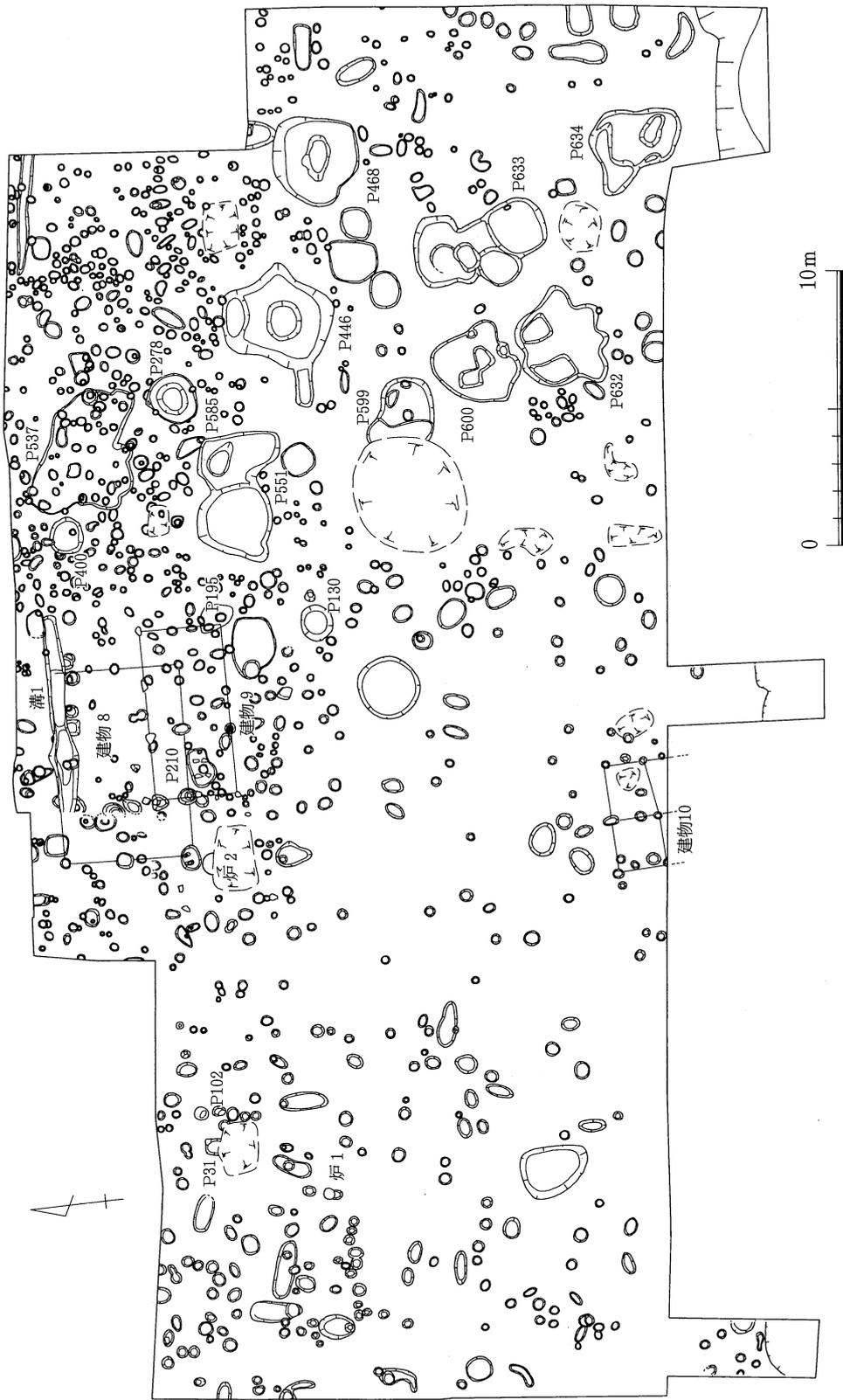


图6 中世遺構配置図

については製塩作業との関連がうかがわれ、土壌のなかには多量の貝殻を廃棄したものがあ。現在、遺跡の前面に広がる水田は近世以降の干拓の結果であることから、中世面の様相は海浜集落の一端を示していると考えられる。

1. A区 (図6)

建物8 (図7)

調査区の中央北端付近で検出された掘立柱建物で、桁行3間、梁間2間の柱構成である。棟方向はほぼ東西方向を指向している。柱穴の平面形は若干隅丸方形気味のものもあるが、基本的には円形で、径0.3~0.9mである。遺構検出面は2.6m付近である。建物8の下層には古代遺構面の中心建物群があり、周囲と比べ遺構面でのレベル高も高いことから、中世においても比較的しっかりとした建物である建物8が占地したものと推測される。

遺物は図化できなかつたが、土師器の小片が各柱穴から出土している。

建物9 (図8)

調査区の中央北端付近で検出された建物で、長さ20~40cmの角礫を用いた簡単な礎石建物である。礎石上面のレベル高は2.75m付近で共通している。桁行3間、梁間2間である。建物8の検出面より上に礎石底面のレベル高があることや、中世の包含層の一部が礎石の下に存在することなどから、中世面でも後半の時期に所属するものと推測される。ただし棟方向が建物8とほぼ平行することや、建物8と部分的に重複することから、建物8の建て替えの可能性があ。そうすると建物9になって礎石建物に変わるものの、床面積は縮小したことになる。また建物9の北側には、建物9の桁行の方向や長さとはほぼ同じの溝1がある。溝1が建物9に伴うと考えると、両者の間には3mほどの空間があ

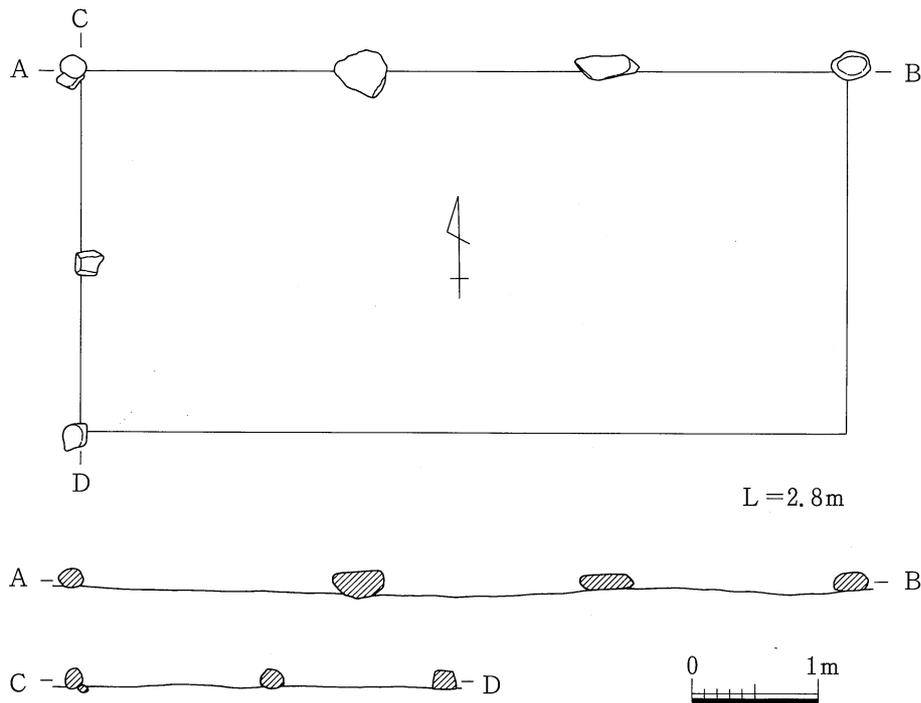


図8 建物9実測図

る。礎石は残存していないが、この部分にもう1間ないし2間ほど、建物9の柱間が存在していたとすると、床面積も建物8と同じか若干広くなることから、建物8の建て替えとして比較的スムーズに理解できそうである。礎石は残っていないが、一応現況よりも北側へ建物が広がっていた可能性も考えておきたい。

建物10 (図9)

調査区中央南端で検出された総柱建物で、南半は調査区外へ出るため不明である。遺構検出面は2.2m付近で、柱穴は径0.3~0.5mである。上面はかなり削平されていると思われ、遺構底面までの残存高は0.1~0.3mである。棟方向は建物8や建物9とほぼ同じである。遺物は図化できなかったが、土師器の小片が各柱穴から出土している。

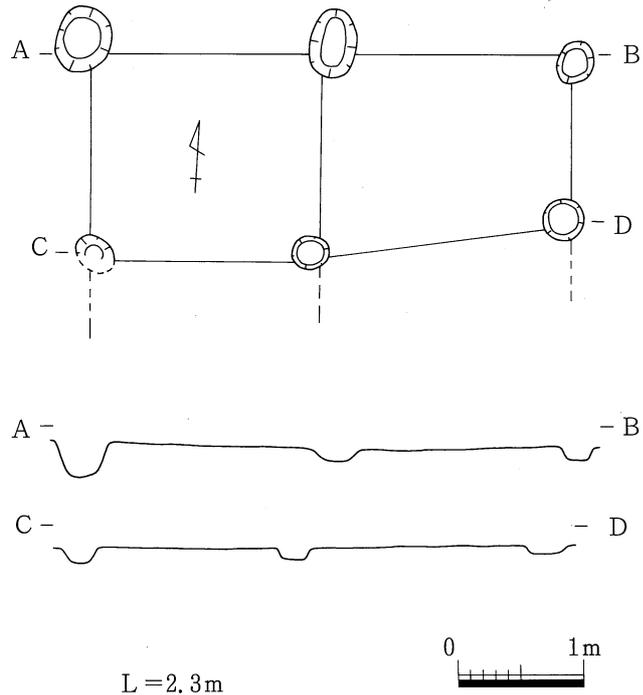


図9 建物10実測図

P31 (図10)

調査区の西北コーナー付近で検出された土壌で、南側は削平されているため全形は不明であるが、一辺0.6mほどの隅丸方形の平面形と推測される。遺構検出面は2.95m付近で、深さは検出面から0.24mである。断面形は台形である。遺構内の北東コーナー付近に貝殻がまとまって出土した(附章参照)。遺構の大きさから、本遺構は周辺にある柱穴と同じもので、おそらく柱を抜き取った跡に貝殻を廃棄したのではないかと考えられる。貝殻のほかには土師器の小片が出土した。

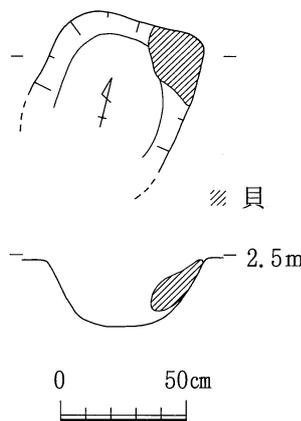


図10 P31実測図

P102 (図11)

調査区の北東コーナー付近で、P102の東側で検出された土壌である。径0.4mの楕円形の平面形で、遺構検出面は3m付近、深さは検出面から0.2mである。遺構内の南側からは貝殻がまとまって出土した(附章参照)。本遺構は柱穴と考えられ埋土に貝殻を投棄したか、もしくは平面形が南側に若干長いことから、柱の抜き取り穴に貝殻を廃棄したものと考えられる。貝殻のほかには土師器の小片が出土した。

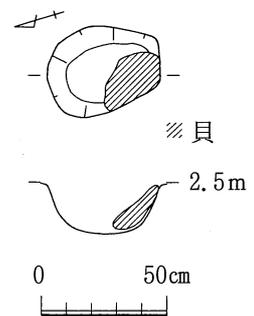


図11 P102実測図

P 195 (図12、13)

調査区の中央付近で検出された土壇で、長径1.2m、短径1.1mのやや北西部分が張り出した歪な平面形である。遺構検出面は2.7m付近で、深さは検出面から0.18mである。断面形は台形で、遺構の中央には貝殻が廃棄されている。貝殻以外には土師器碗の小片と鉄釘が3点(M1~M3)出土している。

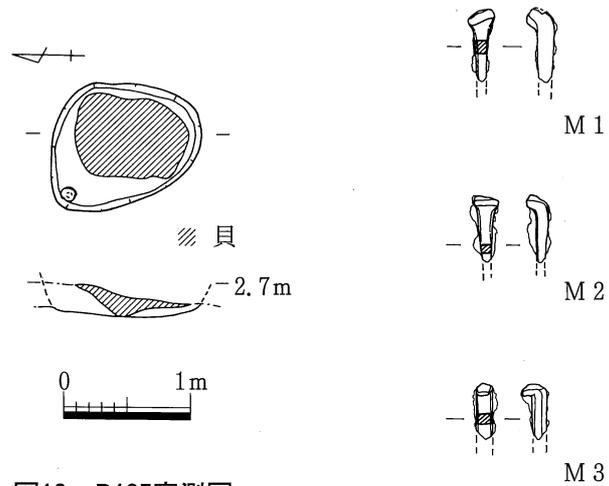
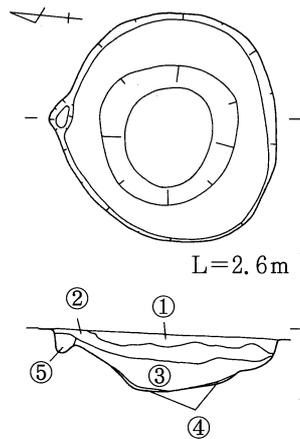


図12 P195実測図

P 278 (図14、15)

調査区中央北側で検出されて土壇で、径約0.9mの円形の平面形である。遺構検出面は2.5m付近で、深さは検出面から0.2mである。北端中央部には小ピット状の張り出しが付属する。断面形は基本的にU字形であるが、中央付近が径約0.5mほどくぼんでおり、その部分の傾斜が急となっている。



- ①暗黄茶褐色微砂
- ②黄褐色微砂
- ③暗茶黒灰色微砂・細砂
- ④黒灰色粘質微砂
- ⑤茶灰色微砂



図14 P278実測図

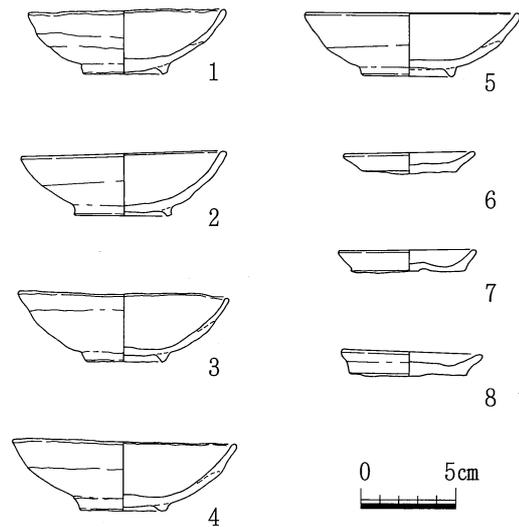


図15 P278出土遺物

遺物は③層からのみ出土した。土師質土器が比較的多く出土していたが、大半が破片であり、直径が計測できるほどに残存していたのは、図示した碗が5点と皿が3点のみであった。

P400 (図16、17)

調査区中央北側で検出された土壌で、長径1.32m、短径1.2mの楕円形の平面形を呈する。当調査区で検出された中世の遺構の中では最も古い。遺構検出面2.7m付近で、深さは検出面から0.4mである。断面形は傾斜の急な台形である。

出土遺物は、平面的には遺構中央部にまとまっているが、断面をみると遺構の東側から落ち込むようにして埋没していた。おそらく、P400が埋没する過程で東側から投棄されたものと考えられる。遺物は備前焼(9)、土師質土器碗(10~14)、土師質土器皿(15~22)、土師質土器深皿(23・24)、鍋(25)、カマド(26)などである。

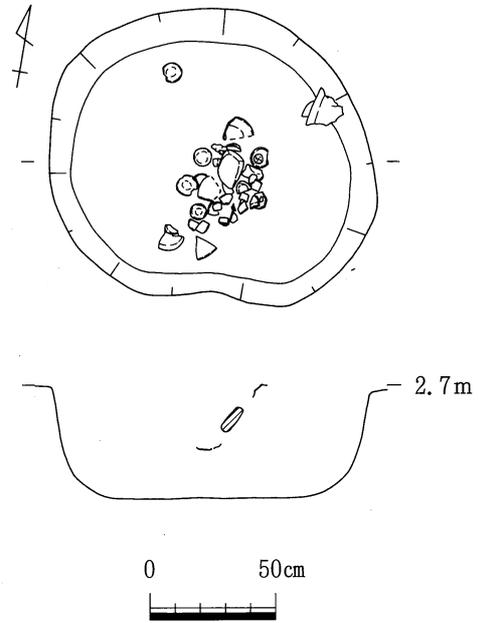


図16 P400実測図

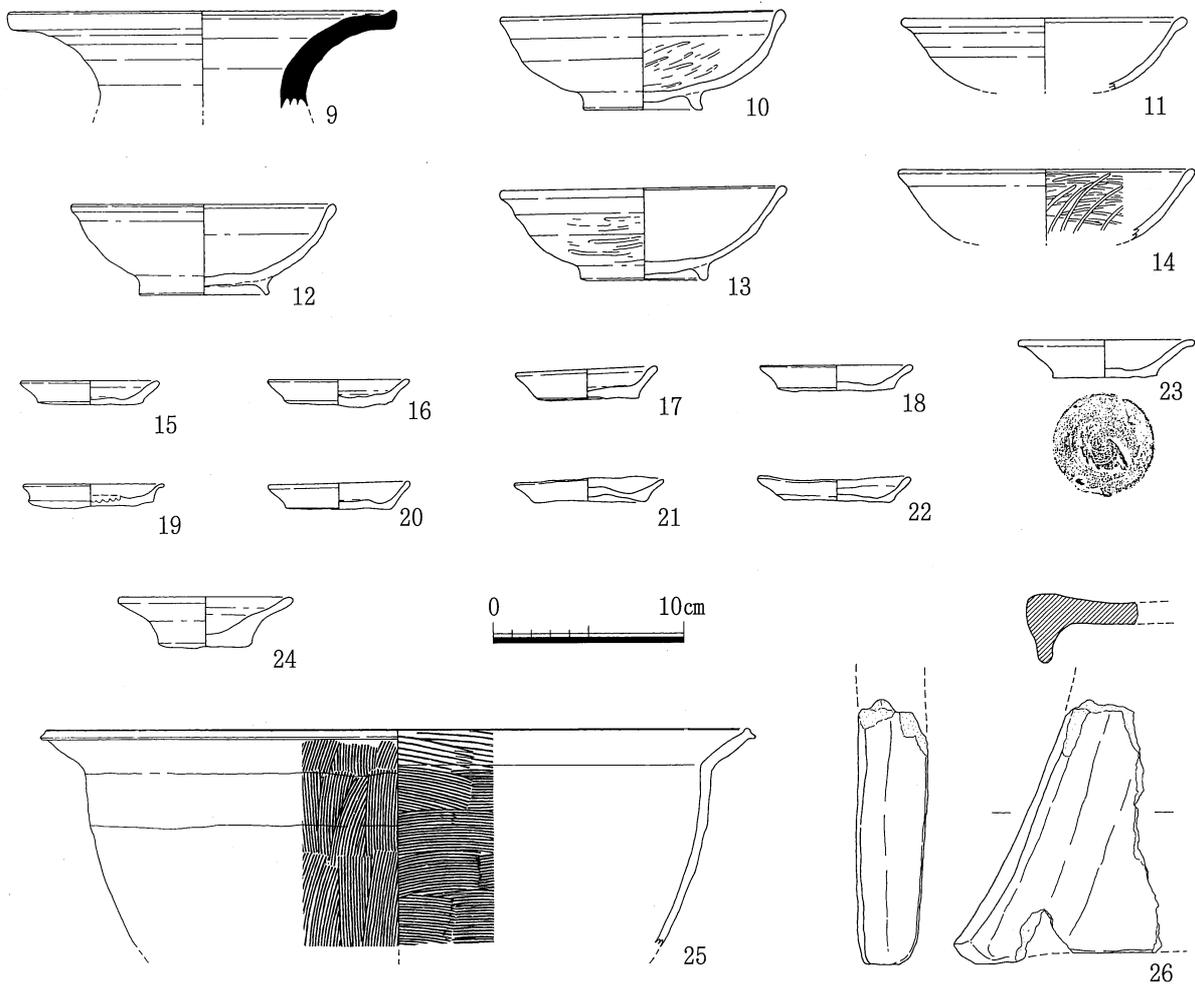


図17 P400出土遺物

P446 (図18、19、20、21)

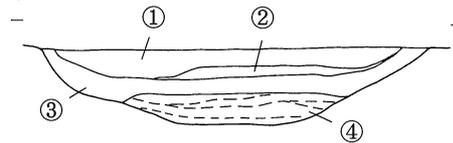
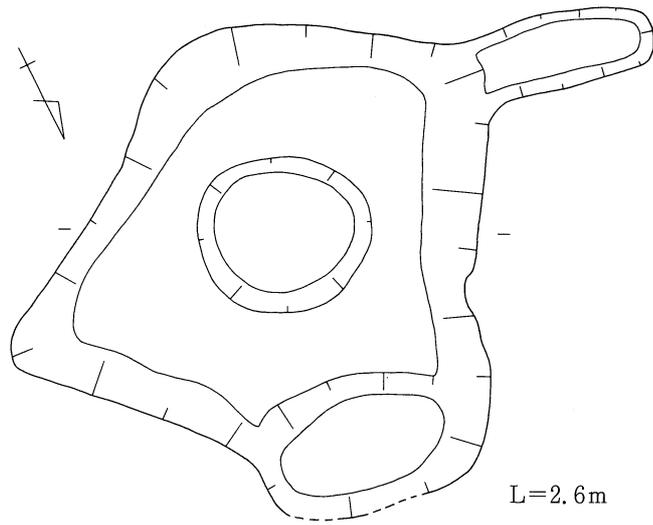
調査区中央やや東寄りで検出された土壌で、長径2.0m、短径1.9mの不整形な平面形を呈する。遺構検出面は2.5m付近で、深さは検出面から0.3mである。断面形は傾斜のゆるいU字形で、底部には凹凸がある。埋土は4層で、最初の埋土である④層は多量の土器を含むが、その上層にある①～③層にはほとんど遺物が含まれない。おそらく土器等を投棄した後は、自然に周囲の砂が流入して埋没していったものと考えられる。

出土遺物は、土師質土器碗・皿・鍋、陶磁器、フイゴ羽口(C1)、土錐(C2・C3)、銅銭(M1)である。出土遺物の大半は土師質土器碗・皿の破片で、図示したものは直径が計測可能なものだけである。

P458 (図22、23、24)

調査区東側で検出された土壌で、長辺3.3m、短辺3.1mの隅丸方形気味の平面形を呈する。遺構検出面は2.4m付近で、深さは検出面から0.7mである。断面形は箱形であるが、中央付近が、長径1.5m、短径1.1m、深さが0.1mの不整形なくぼみ状の落ちが認められる。埋土は5層で、②層と④層に多量の土器が含まれていた。

出土遺物は、土師質土器碗・



- ①黄茶褐色微砂
- ②淡黄褐色粗砂
- ③暗茶褐色微砂
- ④暗茶褐色微砂と淡黄褐色粗砂の互相



図18 P446実測図

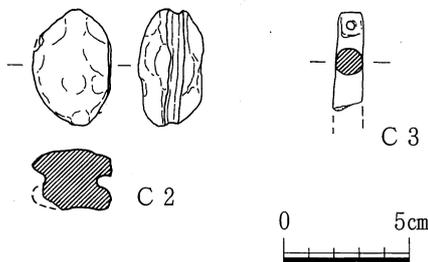


図19 P446出土遺物(1)

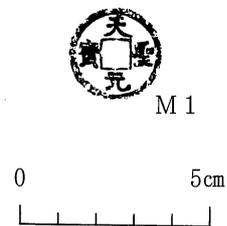


図20 P446出土遺物(2)

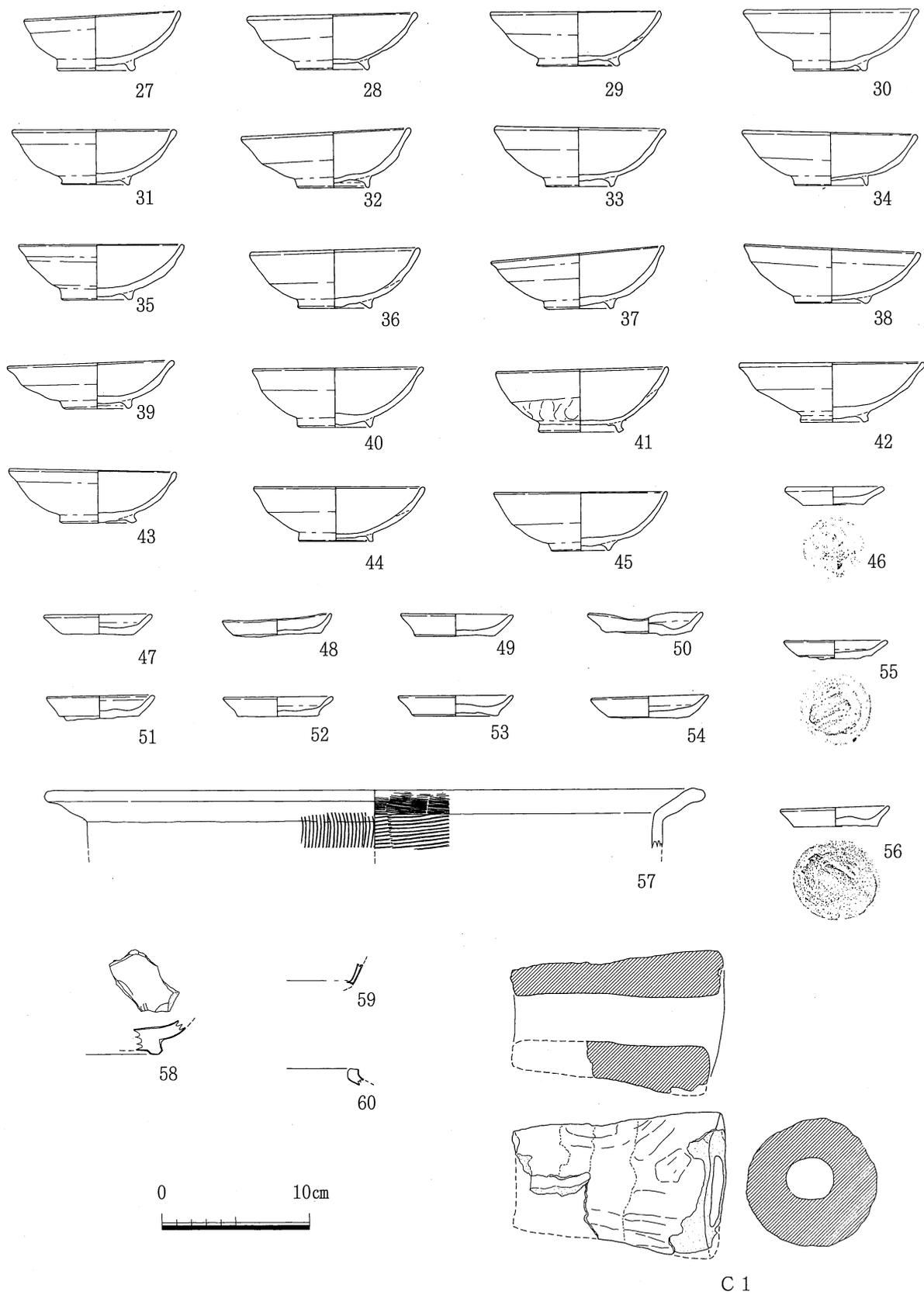


图21 P446出土遺物(3)

皿、魚住焼こね鉢(124)、白磁(121)、緑釉陶器(122・123)、土錘(C 4)である。土師質土器碗・皿は、破片数も入れると相当な数になるが、図示したものは直径が計測可能なものだけである。

P537 (図25、26、27)

調査区の中央北側で検出された土壌で、長径5.3m、短径3.2mの不整形な平面形を呈する。遺構検出面は2.3m付近であるが、それは最終埋土となる貝層の分布範囲で、遺構全体の平面形は2.7m付近である。したがって深さは貝層の検出面からは0.55mである。断面形もかなり凹凸があり、複数遺構の切り合いの結果といったことも予想され、埋土の掘り下げを段階的におこなったが、確認されなかった。また貝層についてはサンプリングをおこない、貝類や動物遺体の分析をおこなった(附章参照)。

出土遺物は各層から出土している。主体は土師質土器碗・皿であるが、羽釜形の瓦器(125)のような当地では珍しい搬入品も認められる。ほかに混入と考えられる灰釉の皿(126)や、貝層中からは鉄釘が4点(M 1～M 4)出土している。

P551 (図28、29)

調査区の中央やや北側で検出された土壌で、長径4.5m、短径2.6mの不整形な平面形を呈するが、径2.7mほどの円形の土壌に長さ2.9m、幅1.4mの張り出しが付属していたようにもみえる。遺構検出面は2.4m付近で、円形部分の断面形は台形を呈し、深さは検出面から0.7mである。埋土は6層で、遺物は主に⑥層から出土した。

出土遺物の大半は土師質土器碗・杯・皿で、多量に出土したが直径が計測で

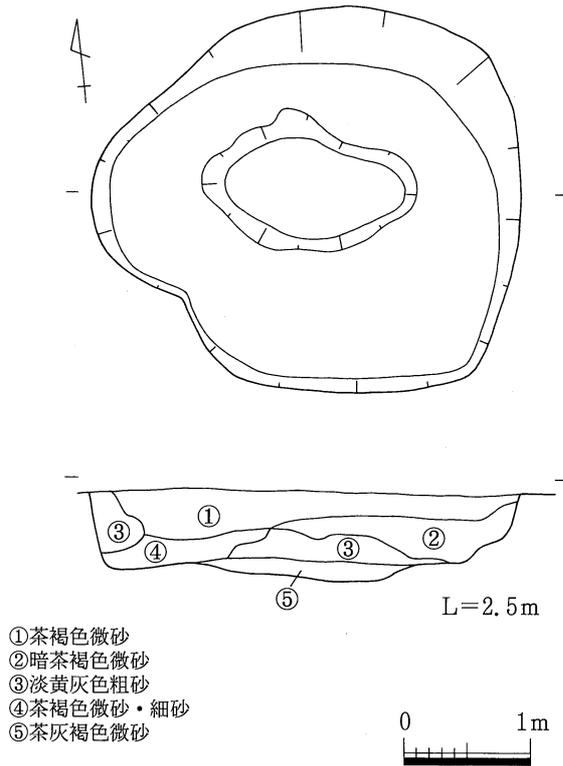


図22 P458実測図

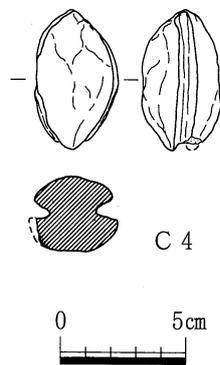


図23 P458出土遺物(1)

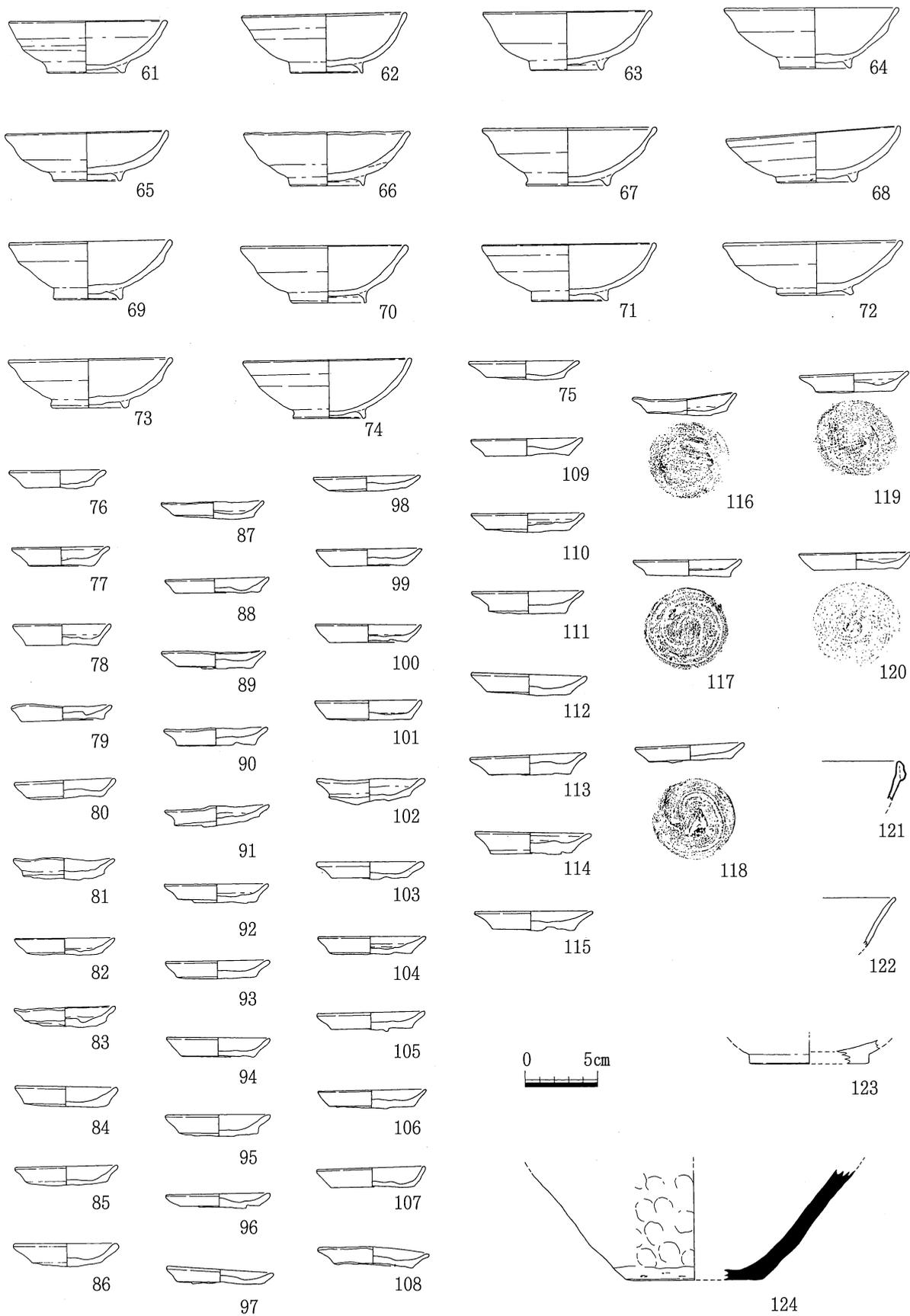
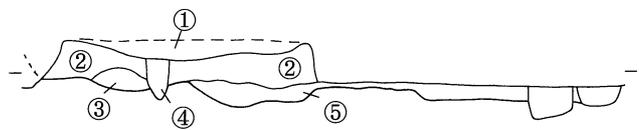
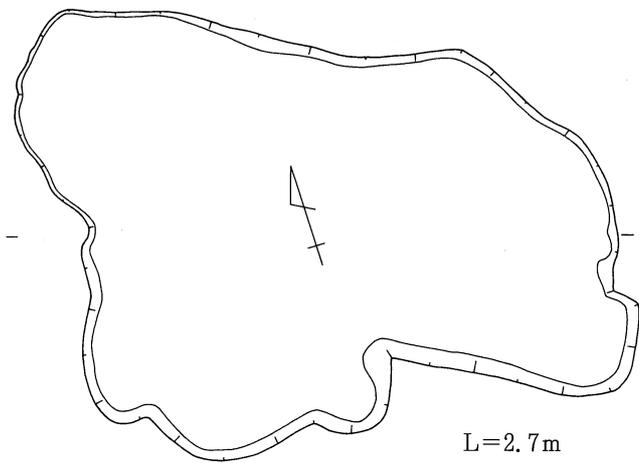


图24 P458出土遗物(2)



- ① 貝
- ② 暗茶褐色微砂
- ③ 暗茶灰色微砂
- ④ 暗灰褐色微砂 (含貝)
- ⑤ 淡茶灰褐色微砂

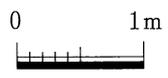


图25 P537実測図

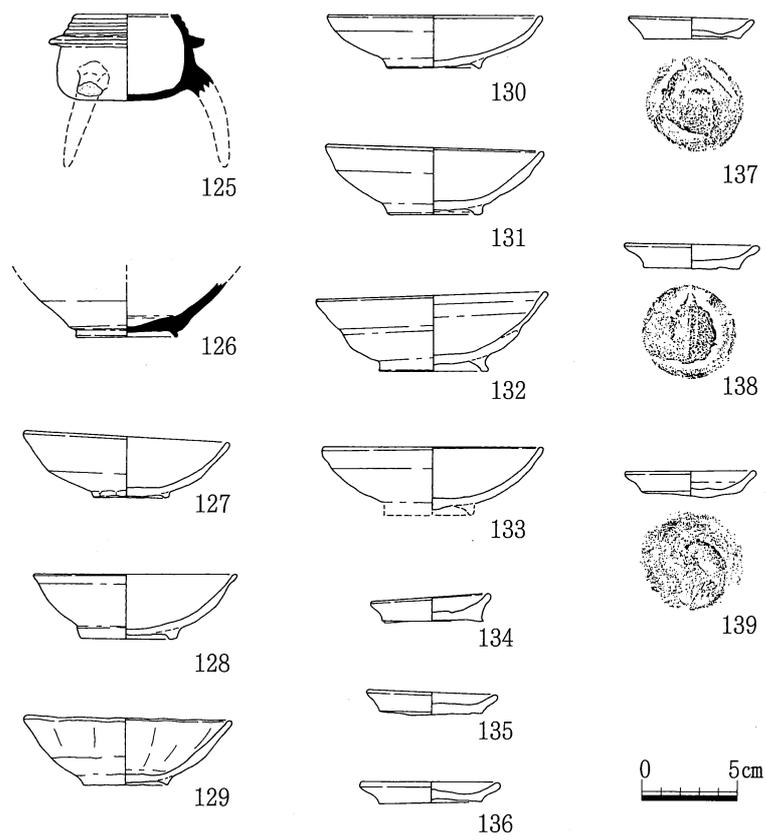


图26 P537出土遺物(1)

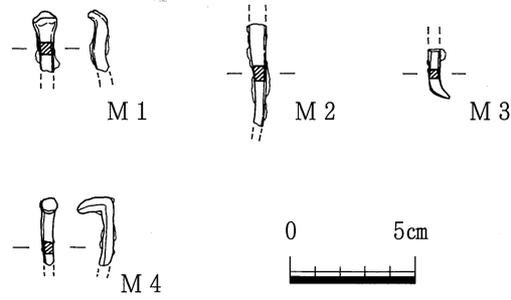
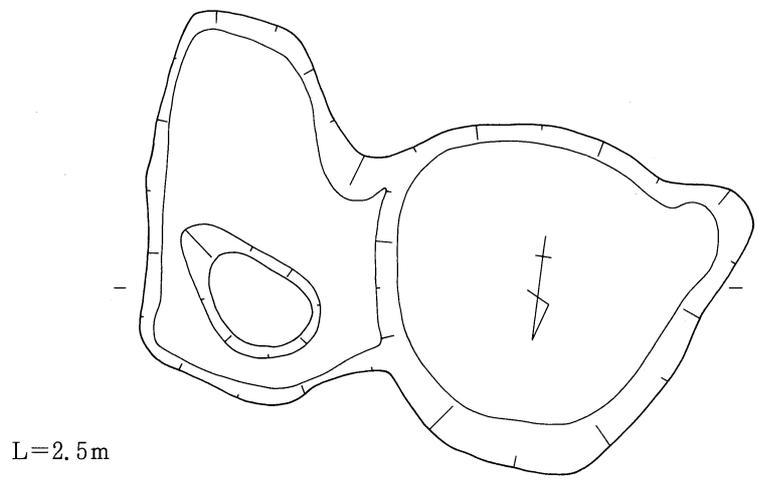
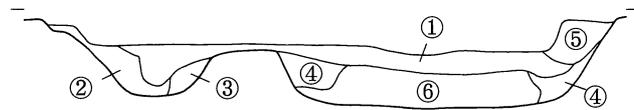


図27 P537出土遺物(2)

きるほどに残存していたのは、図示した椀5点と杯1点、皿9点であった。ほかに内面に暗文の認められる黒色土器椀(146)、青磁碗(156)、白磁碗(157)、灰釉陶器(158)が出土している。



L=2.5 m



- ① 暗灰褐色微砂
- ② 淡黄灰色粗砂(山土)
- ③ 灰褐色細砂
- ④ 黄灰色細砂
- ⑤ 茶灰色微砂
- ⑥ 灰褐色微砂
含淡黄灰色粗砂塊

図28 P551実測図

P 600 (図30)

調査区東側で検出された土壌で、長径3.0m、短径2.7mの不整形な平面形を呈する。遺構検出面は2.1m付近で、深さは最深部で検出面から0.4mである。底面も平面形と同様に、かなり凹凸が認められる。埋土は3層で、遺物は③層から土師質土器の細片が多く出土した。

P 632 (図31)

調査区東側で検出された土壌で、長径5.3m、短径2.6mの不整形な平面形を呈する。複数の土壌の切り合いとも考えられたが、土層観察からは、同時の埋没がうかがわれた。遺構検出面は2.2m付近で、深さは最深部で0.4mである。底面も平面形と同様にかなり凹凸が認められる。埋土は2層で、遺物は各層から散在的に出土した。出

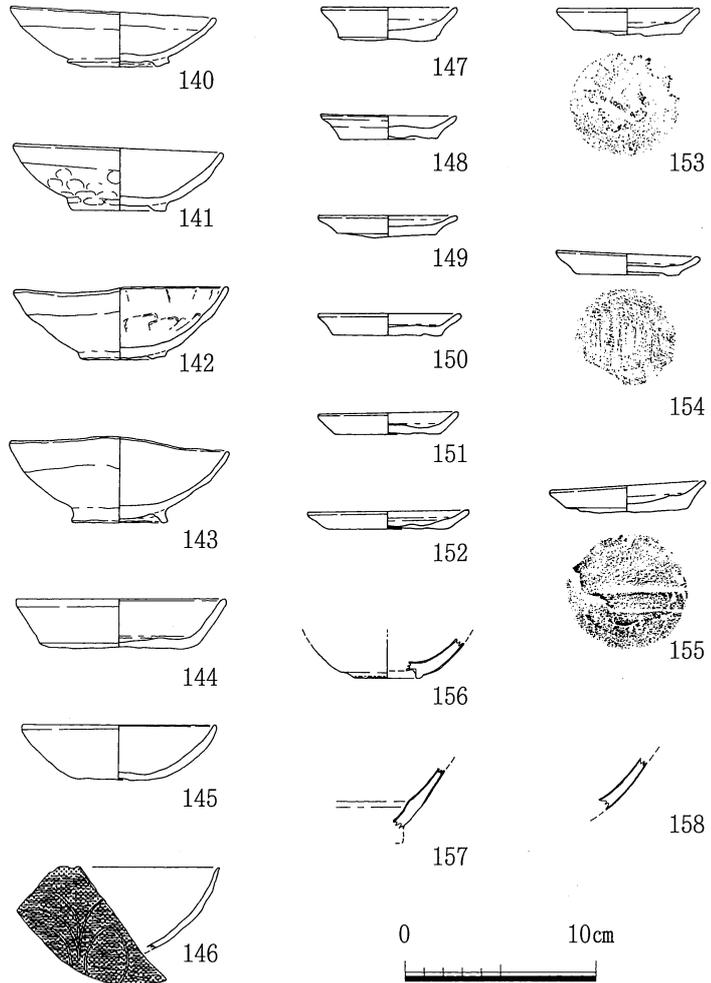


図29 P551出土遺物

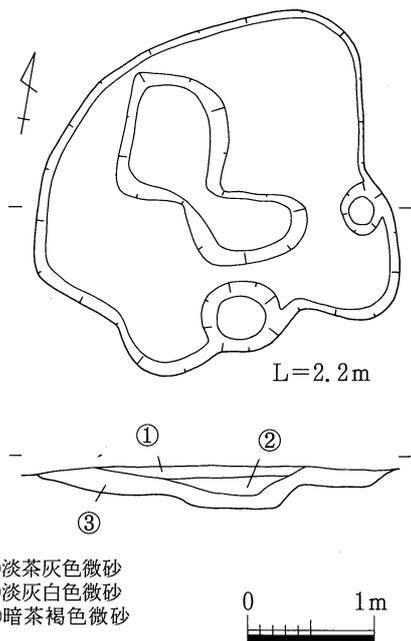


図30 P600実測図

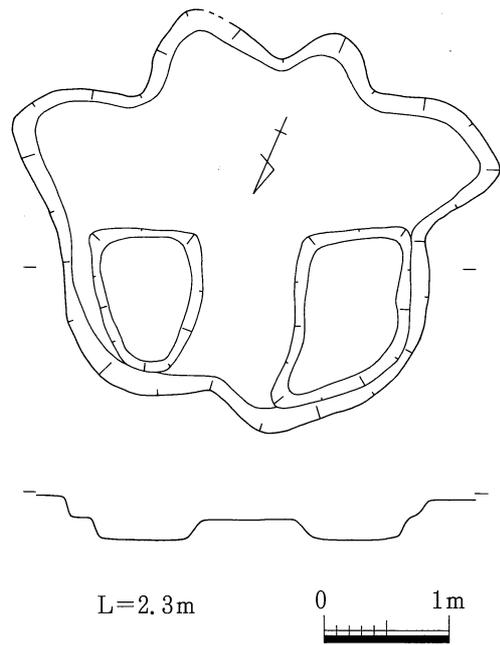
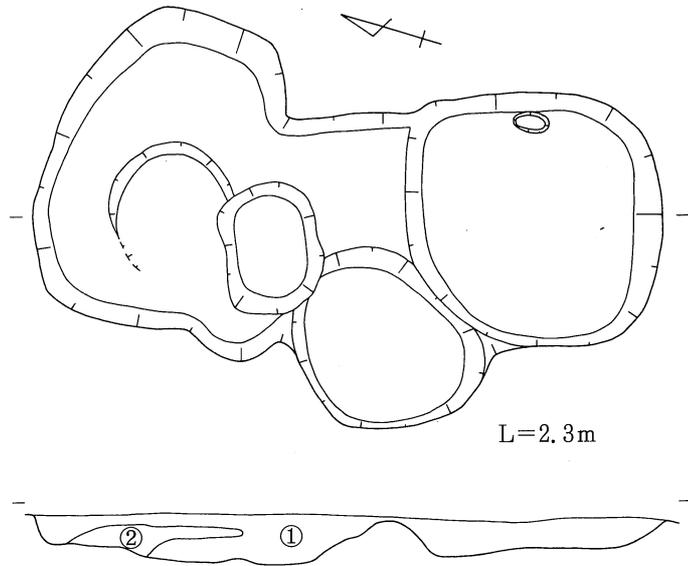


図31 P632実測図

土した遺物は、土師質土器の細片ばかりで図化できなかった。

P 633 (図32)

調査区東側で検出された土壌で長径4.0m、短径3.3mの不整形な平面形を呈する。遺構検出面は2.3m付近で、深さは最深部で検出面から0.4mである。底面も平面形と同様に凹凸が認められる。出土した遺物は土師質土器の細片ばかりで図化できなかった。



①暗茶褐色微砂 ②淡黄灰色細砂 0 1m

図32 P633実測図

P 634 (図33)

調査区南東コーナー付近で検出された土壌で、長径3.4m、短径2.3mの不整形な平面形を呈する。遺構検出面は2.3m付近で、深さは最深部で検出面から0.3mである。底面も平面形と同様に凹凸が認められる。出土遺物は土師質土器の細片ばかりで図化できるものはなかった。

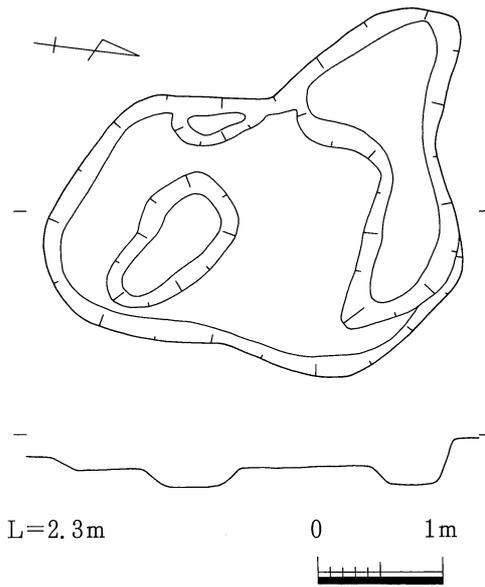


図33 P634実測図

炉状遺構 1 (図34)

調査区西北部で検出された炉状遺構で、径0.3mの円形の平面形を呈する。深さ3cmほどのくぼみ状の中心部に焼土があり、焼土周囲の床面は被熱により赤化している。焼土の周囲から土師質土器の細片が出土したが、図化できるものはなかった。

炉状遺構 2 (図35)

調査区中央やや西よりで検出された炉状遺構で、南北両端を柱穴によって削平されているが、長径0.4m、短径0.35mほどの平面形が復元される。掘り方は検出面から0.15mで、淡黄茶灰色微砂の上に粘土を貼っている。粘土は焼土化している。掘り方から土師質土器の小片が出土したが図化できる

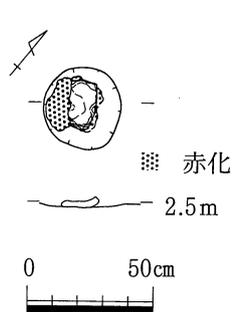


図34 炉状遺構 1

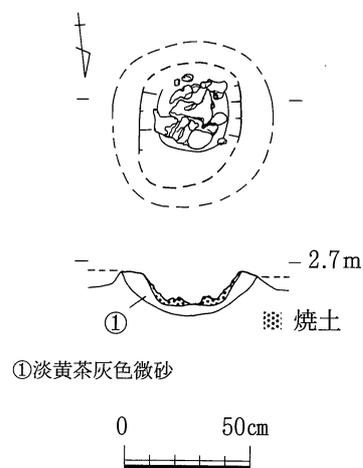


図35 炉状遺構 2

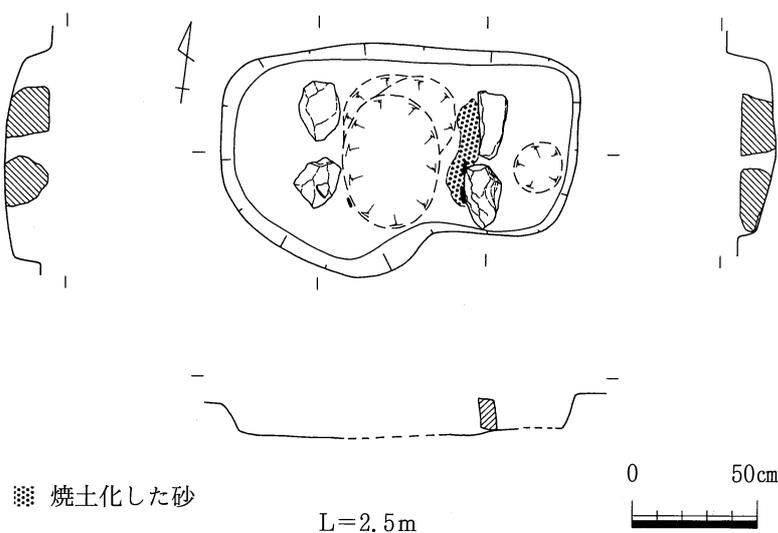


図36 炉状遺構 3

ものはなかった。

炉状遺構 3 (図36)

調査区中央やや北寄りで検出された炉状遺構で、長さ1.4m、幅0.7~0.9mの隅丸方形の平面形を呈する。遺構検出面は2.4m付近で、断面形は箱形、最深部の深さは検出面から0.14mである。遺構中央部は柱穴によって削平されているが、中央付近の床面は被熱によって赤化しており、火を焚いたことがうかがわれる。一辺0.2mほどの角礫を4個、中央の被熱部分の周囲に置いており、石上面のレベルもほぼ同じであることから、鍋などの台に用いたものと考えられる。同じ様な遺構が倉敷市塩生遺跡でも検出されており、同遺跡は海浜部にあることや鹹水を溜めておくためと推測される土壌な

ども伴っていることから、塩を得るために煮つめる炉であることが推測されている⁽¹⁾。本例も当海浜部に位置していたことから、塩釜の炉であった可能性が高いように思われる。遺物は土師質土器の小片が若干出土した。

溝 2 (図37)

調査区中央の北端で検出された。建物 8 の柱穴を切っているが建物 9 とほぼ平行していることから、建物 9 に伴う溝と考えられる。おそらく山側からの流水を受ける機能を有していたと思われる。ただ、建物 8、建物 9、溝 2 は方向がほとんど共通していることから、同じ建物の建て替えて、溝 2 との重複関係から建物 9 → 建物 8 の順序が想定される。そして建物 8 の北側の調査区外には溝 1 と同様の溝が存在していると推測される。

溝 2 の幅は 0.6~1.0m で、断面形は台形、遺構検出面は 2.8m 付近、最深部の深さは検出面から 0.1

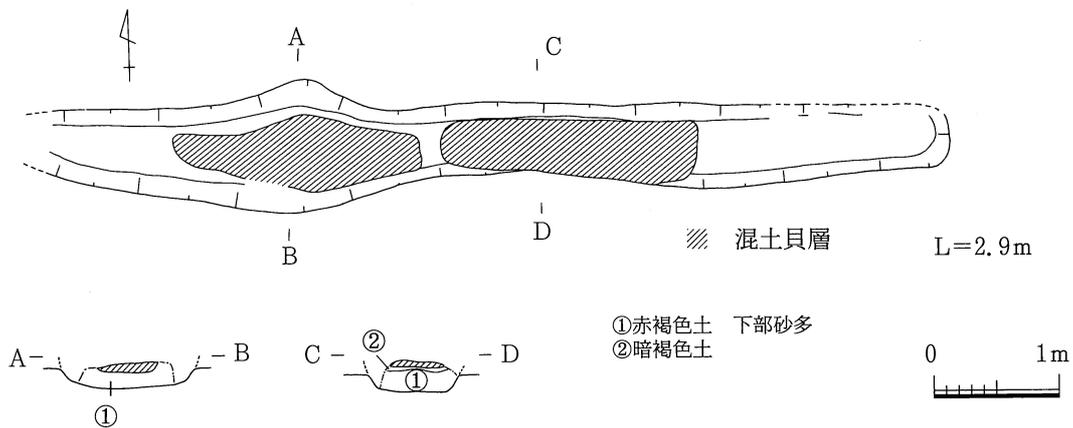


図37 溝 2 実測図

m ほどである。溝の最終埋土には貝殻が廃棄されていた(附章参照)。

遺物は土師質土器の小片が若干出土した。

2. B区 (図38)

A区西側で、擁壁の掘削深度を決めるために設定した調査区で、古代及び中世の包含層は認められるが、近代以降のゴミ穴の掘削が著しく、遺構は中世の浅い土壌が 1 つ検出されたのみであった。古代の区画溝の西辺が検出されることも期待されたが検出されなかった。山裾部に位置する C 区でも古代の区画溝は検出されておらず、山裾部をカットした部分には区画溝は存在しなかった可能性が高いと思われる。

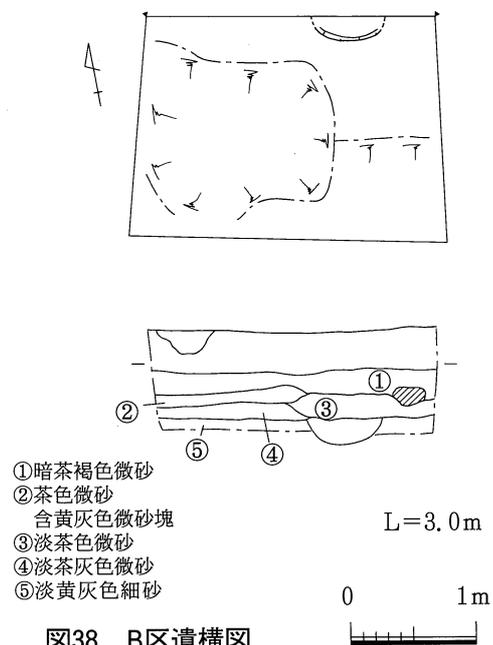


図38 B区遺構図

3. C区 (図39)

A区北東部に位置する。遺構面は中世と古代の2層である。基盤層は砂層で、背後の丘陵部を構成する花崗岩質の基盤層は当調査区へはのびてこない。中世面からは柱穴と土壌が検出された。

P 2 (図39、40)

調査区北東隅で検出された土壌で、大半は調査区外へのびるため全形は不明である。遺構検出面は2.9m付近で断面形は台形を呈する。深さは検出面から0.3mである。埋土は1層で多量の土師質土器が出土した。ただ、当調査区から東へかなり急激に地形が下がっており、P 2も斜面堆積の一部である可能性もある。

遺物は土師質土器のみで、直径の計測が可能なもののみを図化した。

4. D区 (図42)

A区北東に位置する。遺構面は中世のみの1層である。基盤層は花崗岩質で、調査区背後の丘陵裾部に位置するということになる。基盤層は南側に向かって傾斜している。古代遺構面における丘陵裾部のカット面は、C区の古代面との関係からすると、当調査区の南ぐらいからおこなわれているものと推測される。そうするとA区北西部の直線的な山裾部のカット面が、古代のカット面で、本来はこの直線部分が東側へものびてきていたものと考えられ、D区付近で現況のカット面が北側へ入り込んでいるのは、中世の時期においておこなわれた結果と考えられる。

P 2 7 (図41、42、43、44、45)

調査区中央南側で検出された土壌で、長さ2.0m、幅1.5mの隅丸方形の花崗岩の巨岩の周囲を掘り下げ、多量の土師質土器を廃棄している。土壌は長さ5.2m、幅3.0m以上の不整形円の平面形で、断面形は台形であるが底部は平坦でなく、部分的に土壌状、溝状に掘り下げている。埋土は2層で、花

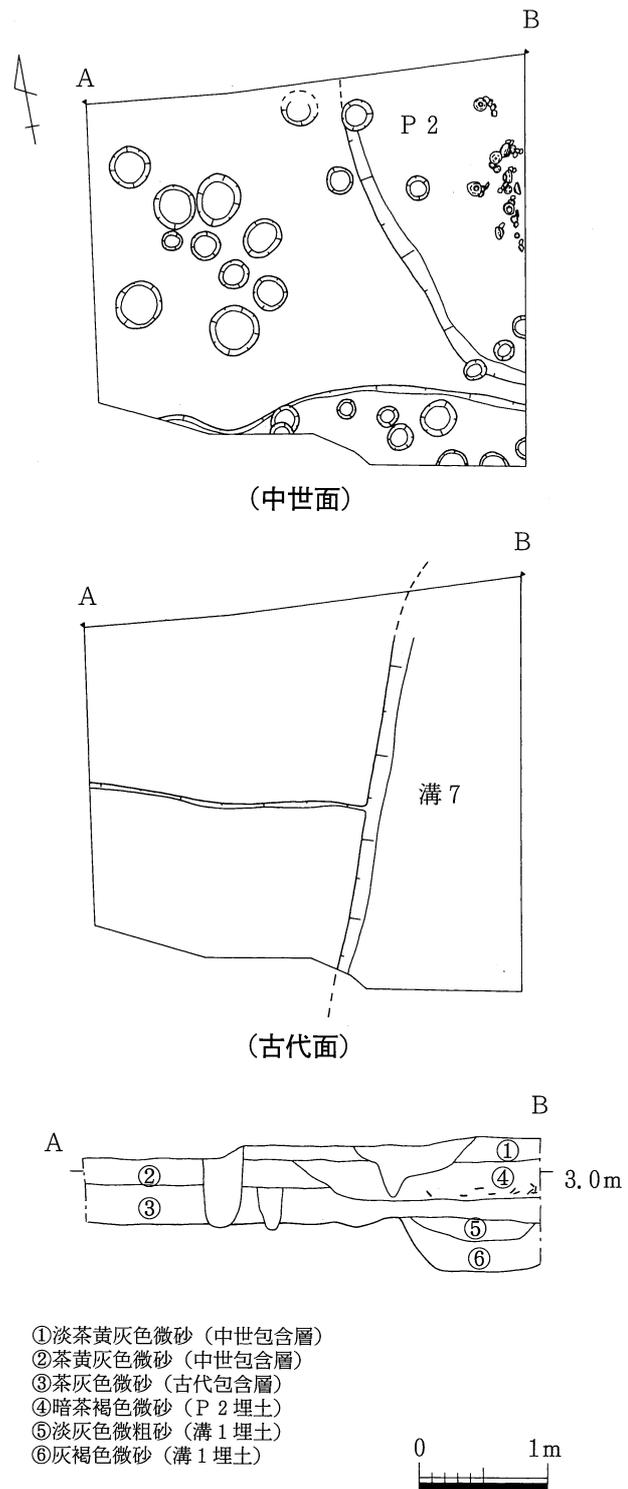


図39 C区遺構図

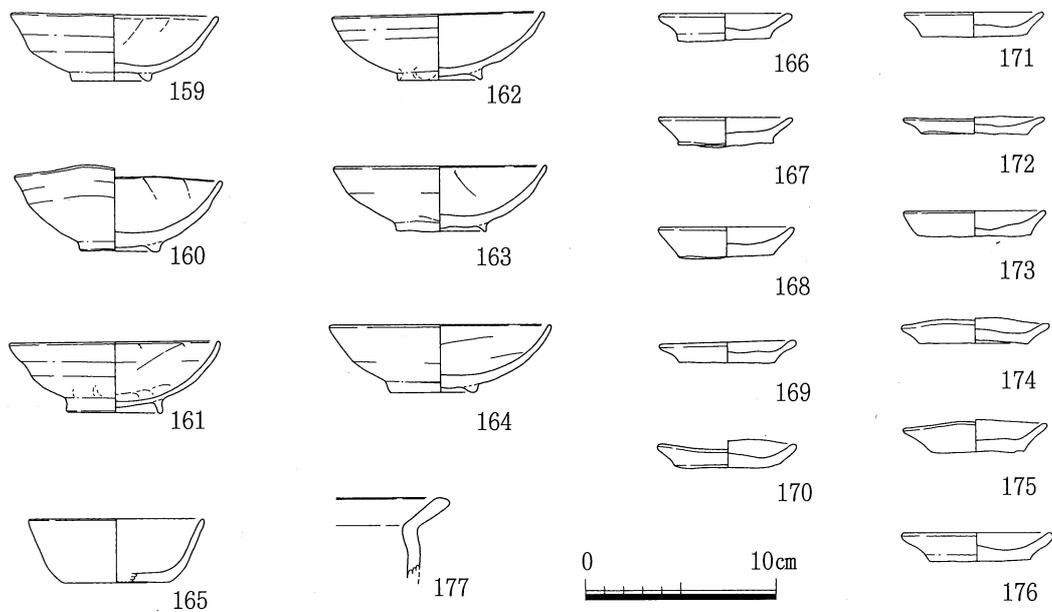


図40 C区P2出土遺物

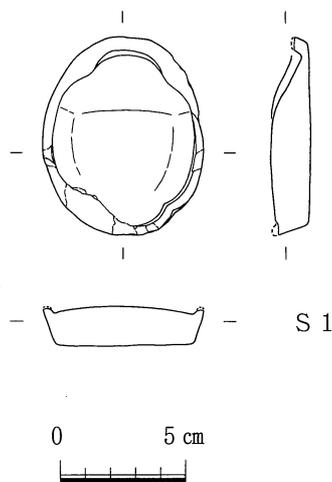


図41 D区P27出土遺物(1)

崗岩周囲の埋土と花崗岩を覆う覆土に分けられる。しかし埋土や覆土に含まれる土師質土器の量は多く、花崗岩の周囲や花崗岩の巨岩そのものを土師質土器で埋めようとした感もある。当調査区の南側にあるA区北壁周辺からは土師質土器が多量に出土しており、部分的には重なった土器のため、スコップで掘り下げられなかった箇所もあった。おそらくP27の南側、現況では花崗岩の南側では土器があまり出土していないことから、この部分の土器はA区に流れ落ちた可能性も高い。遺構検出面は3.5m付近で、深さは検出面から0.6mである。

出土遺物は土師質土器の碗と皿で、石硯(S1)が1点出土した。



- ① 暗茶褐色微砂
- ② 暗茶灰褐色微砂
- ③ 淡茶褐色微砂
- ④ 暗茶褐色微砂
- ⑤ 暗茶灰褐色微砂
- ⑥ 茶褐色微砂

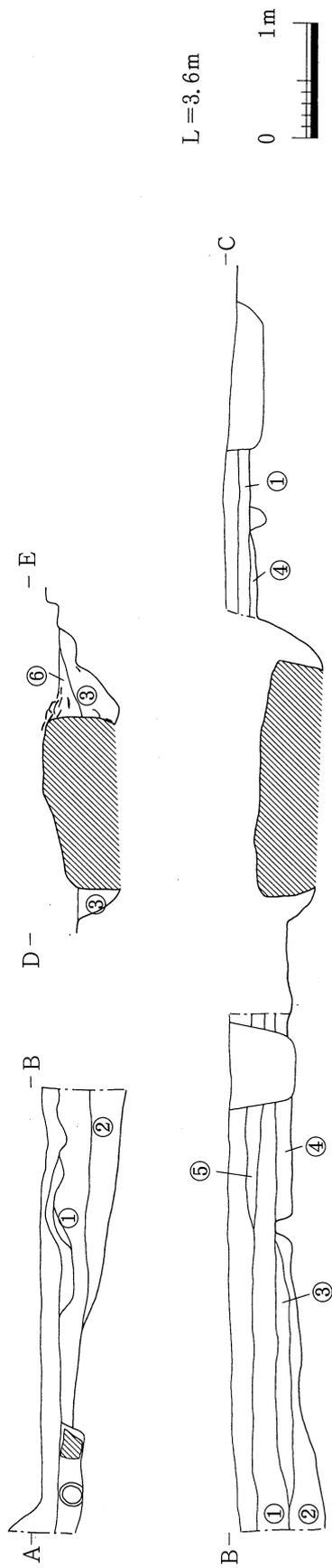


图42 D区遺構図

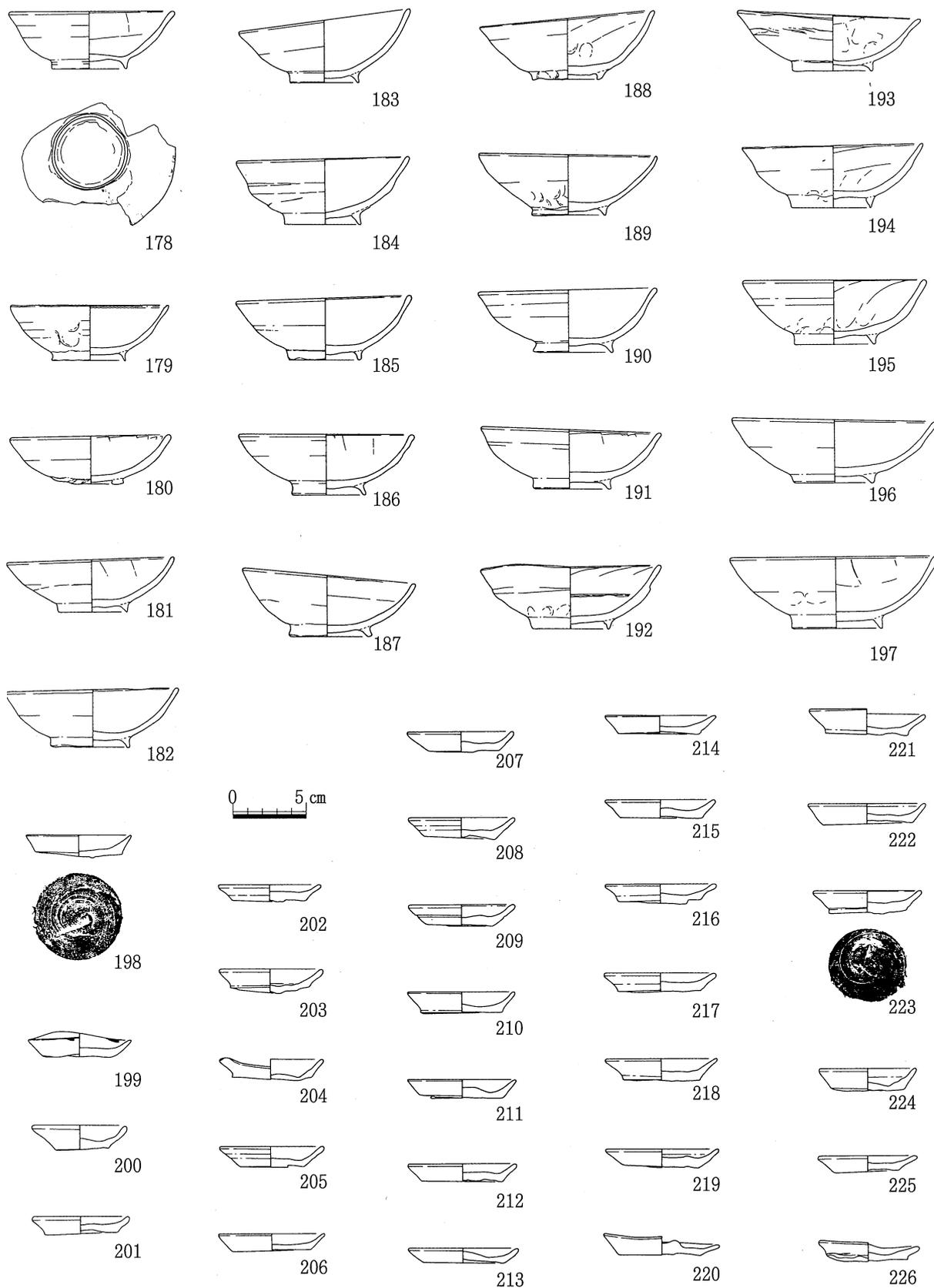


图43 D区P27出土遗物(2)

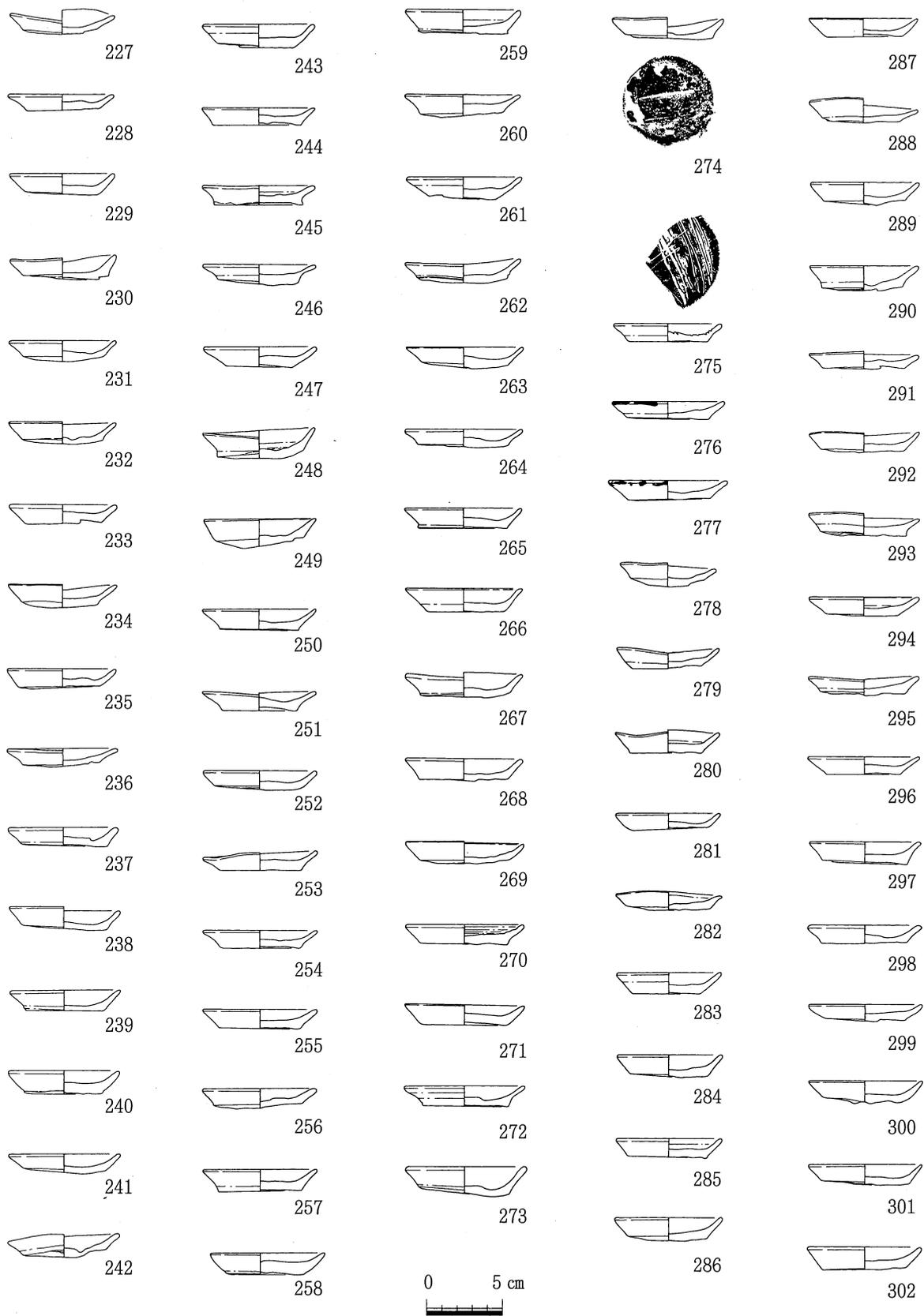


图44 D区P27出土遗物(3)

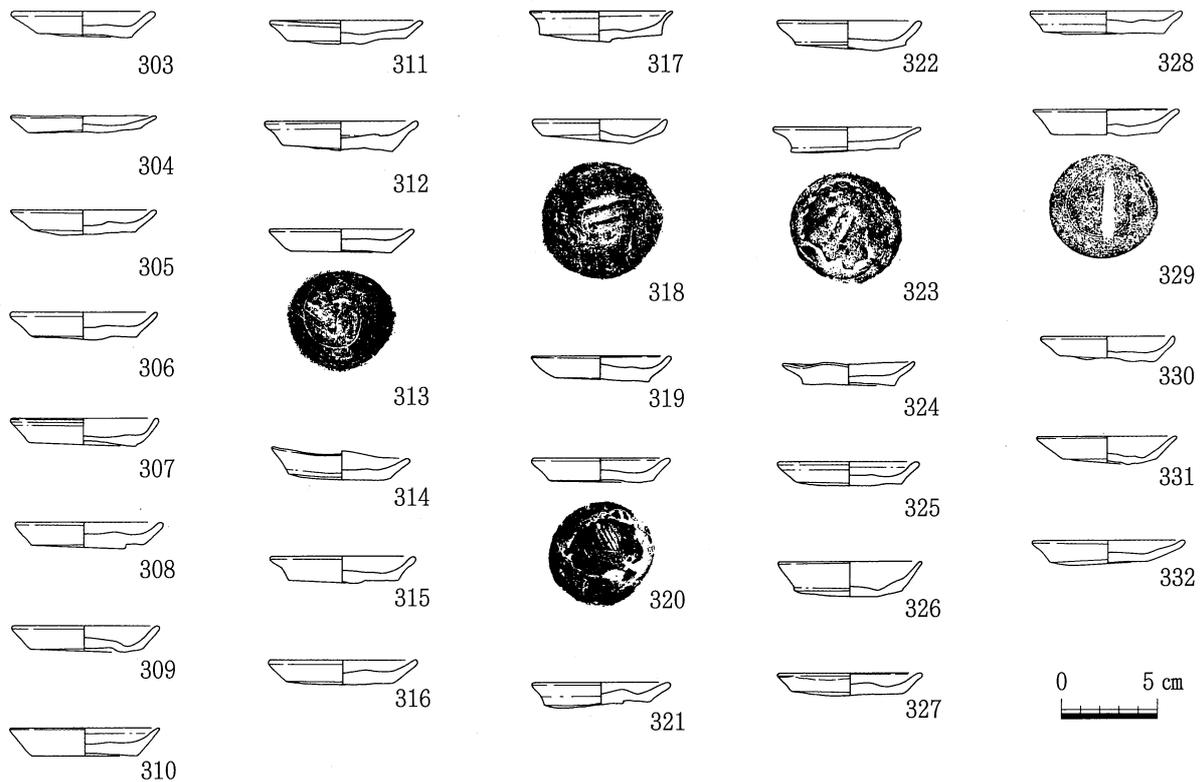


図45 D区P27出土遺物(4)

II 古代(9世紀末~11世紀)

古代の遺構は調査区全体で認められるが、中世の遺構とは異なり規則的で整然としている。掘立柱建物の柱穴掘り方の平面形は方形に近く、建物の方向も真北方向に合わせている。中心的な建物は同じ位置で建て替えがおこなわれており、官衙的性格の強い遺跡であることを示している。

出土遺物も食膳具の占める割合が高く、緑釉陶器や灰釉陶器もかなり出土している。それらは破片数も合わせると、整理箱(60cm×40cm×深さ15cm)1箱分にも及ぶ。県下における同期の鉛釉陶器を出土した遺跡のなかでは突出している。現在は遺跡の前面には水田が広がっているが、この景観は近世以降の干拓の結果であり、当時は内海が広がっていた。おそらく海上交通と密接な関係であった官衙遺跡の範疇でとらえられるものと考えられる。

1. A区(図46)

建物1(図47)

調査区の北西端で検出された掘立柱建物で、柱穴が3個並んでいるだけであるが、周囲に1間×2間の建物が検出されていることから、この柱穴列も調査区の北へのびる同じ様な建物と考えた。柱穴の平面形は径0.3~0.5mの円形で、遺構検出面は2.5m付近である。深さは検出面から0.2~0.25mである。遺物は土師器の小片が若干出土した。

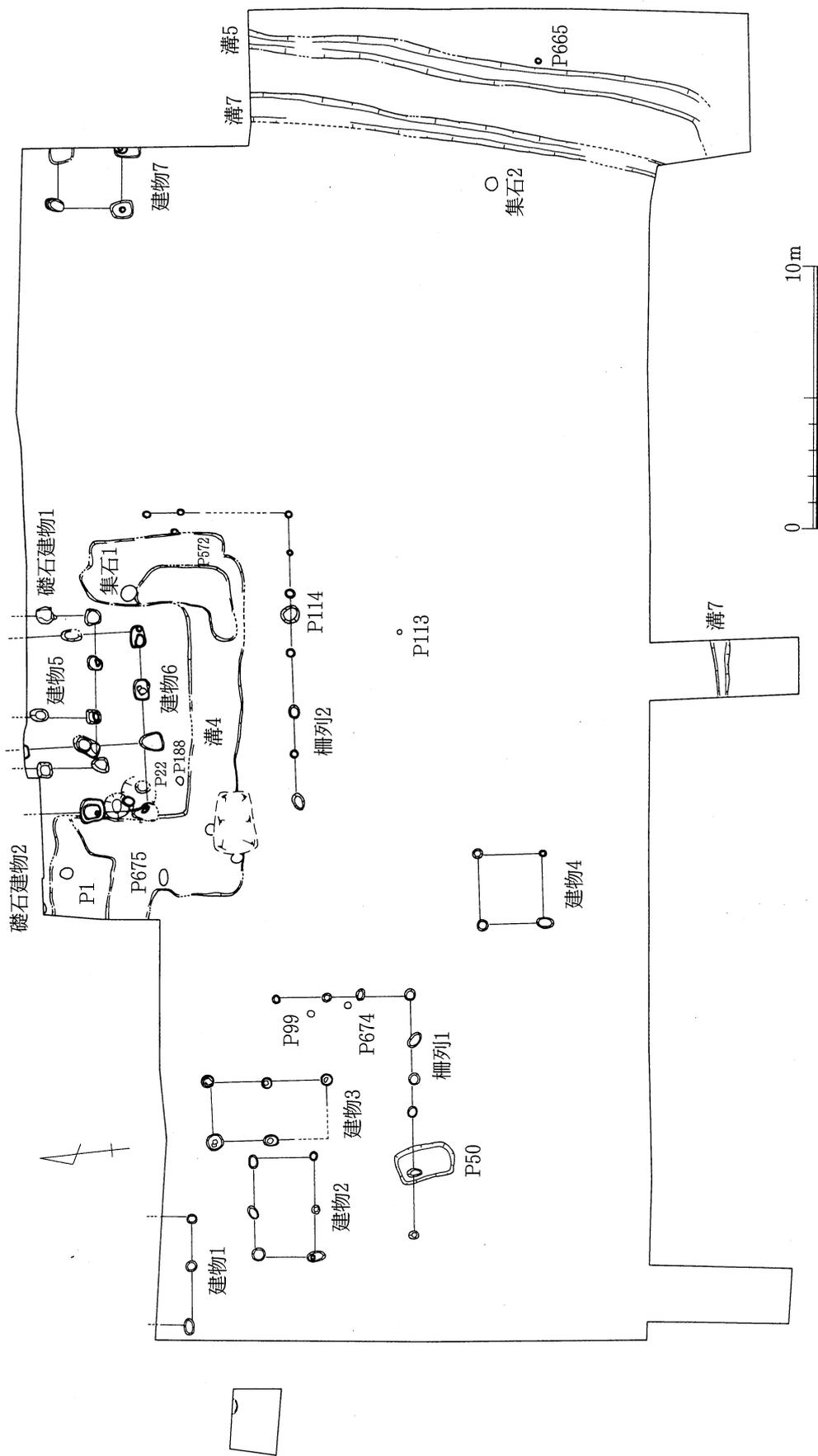


图46 古代遺構配置図

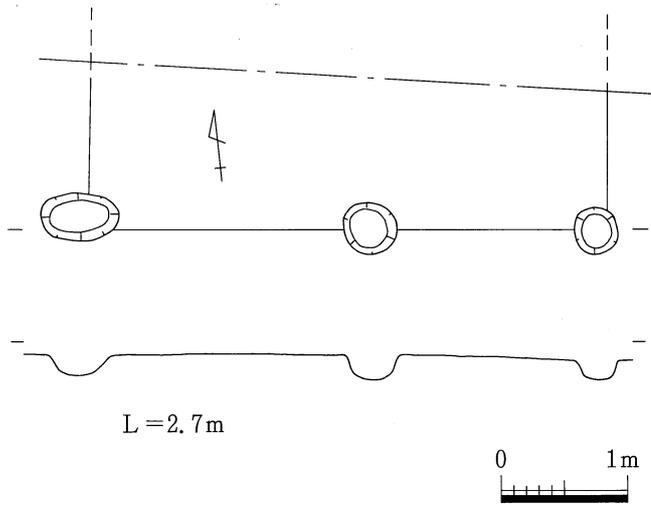


图47 建物1 実測図

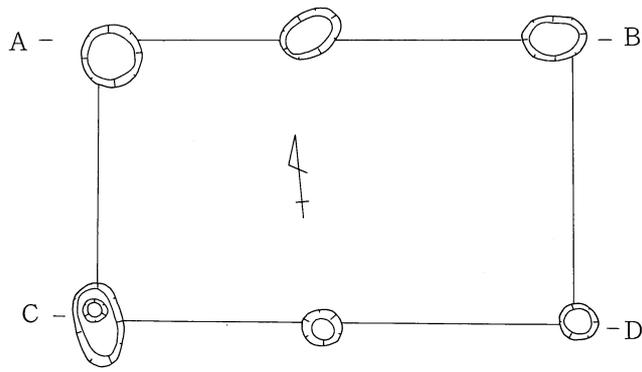
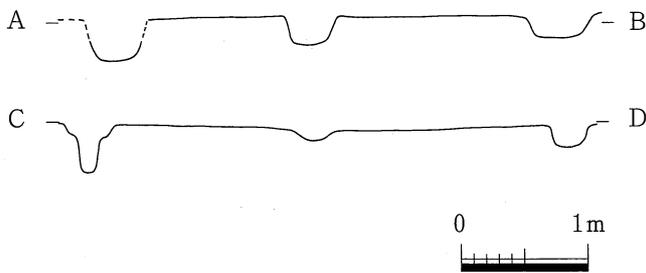


图49 建物2 柱穴出土遺物



L = 2.5m

图48 建物2 実測図

建物 2 (図48、49)

調査区北西部で検出された掘立柱建物で、桁行2間、梁間1間の柱構成である。棟方向は、ほぼ東西方向を指向している。柱穴の平面形は径0.3~0.5mの円形もしくは楕円形で、南西隅部分の柱穴には、径0.15mの柱痕跡が確認された。遺構検出面は2.5m付近で、深さは検出面から0.15~0.4mである。各柱穴の埋土からは土師器の小片が出土しているが、柱痕跡のある南西コーナー部の柱穴掘り方からは、2/3ほど残存している土師器椀(333)が出土している。この1点をもって、建物2周囲の小規模な建物の時期を全て決めることはできないが、建物2は少なくとも古代の遺構のうち、比較的新しい時期といえる。建物1や建物3についても同様の時期である可能性もあり、調査区西側で検出された小規模建物群は、この遺跡が官衙的性格を喪失していく過程で建てられたとも考えられる。

建物 3 (図50)

調査区西側で検出された掘立柱建物で、桁行2間、梁間1間の柱構成である。棟方向は、ほぼ南北方向を指向している。柱穴の平面形は一部に隅丸方形気味のものもあるが、基本的には円形で径0.4~0.6mである。柱穴掘り方は極めて浅く、当初柱穴中央にある根石だけが検出されたので、簡単な礎石建物の可能性を考えていた。根石は柱穴中央に平石を置いているだけであるが、北西コーナー部分の柱穴だけは2枚平石を重ねて

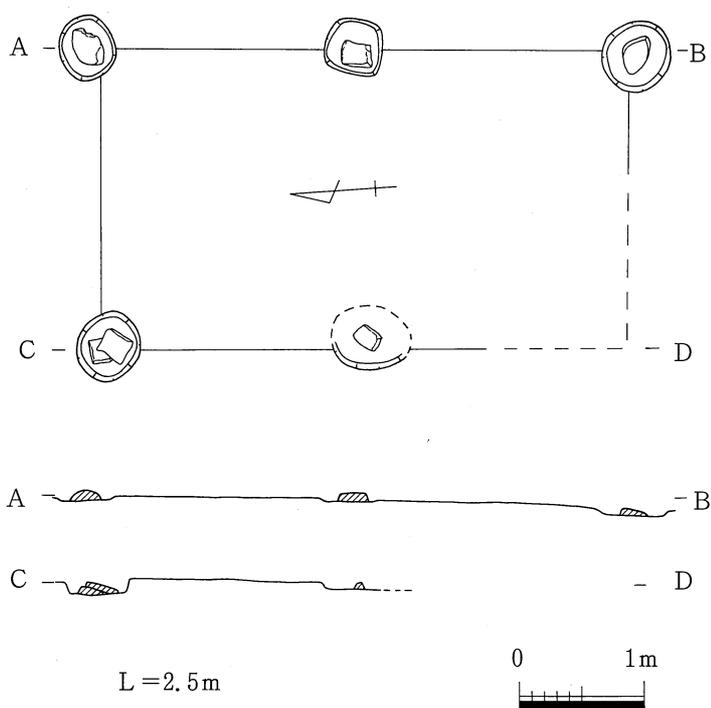


図50 建物3実測図

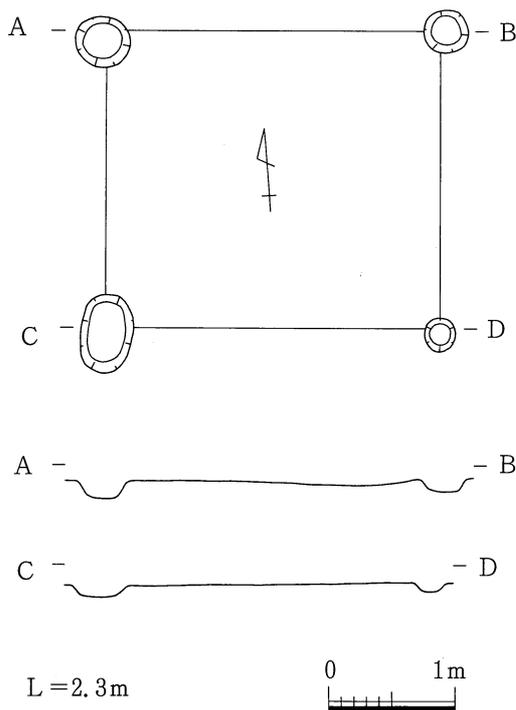


図51 建物4実測図

あった。遺構検出面は2.5m付近で、これは根石の上面レベルとほぼ同じである。しかしベースのレベル高との関係からか、南側の根石の上面レベルは若干低い傾向にある。遺物は全く出土しなかったが、建物1や建物2と同じ一群としてとらえられるので、古代の時期に属すると考えられる。

建物4 (図51)

調査区中央やや西よりで検出された掘立柱建物で、1間×1間の柱構成である。ほぼ東西南北の方向を指向している。柱穴の平面形は円形で径0.2~0.6mである。遺構検出面は2.2m付近で、柱穴の深さは検出面から0.1~0.15mである。床面積的にみても、ちょうど建物2、建物3の半分であることから楼状建物などは想定されず、むしろ調査区西側にある小規模建物群の1つと考えられる。遺物は柱穴掘り方から土師器の小片が出土している。

建物5 (図52)

調査区中央北側で検出された掘立柱建物で、棟方向は南北方向と推測される。桁行2間以上、梁間2間の身舎に西側へ庇が付く。柱間寸法は2.0m前後である。柱穴の平面形は隅丸方形で一辺が0.6m前後である。遺構検出面は2.5~2.6mで北側の方がやや高い。建物5を建てるに際し、若干の造成をおこなっている(図5-⑰層)。しかし基盤層の傾斜は解消されず、北側から南への緩やかな傾斜の造成面上に建物5を建てているということになる。建物南側には浅い溝があり、それは建物5の南側をコ字形にめぐった後、西側の調査区外へものびている。おそらくA区北端やE区で一部を検出した

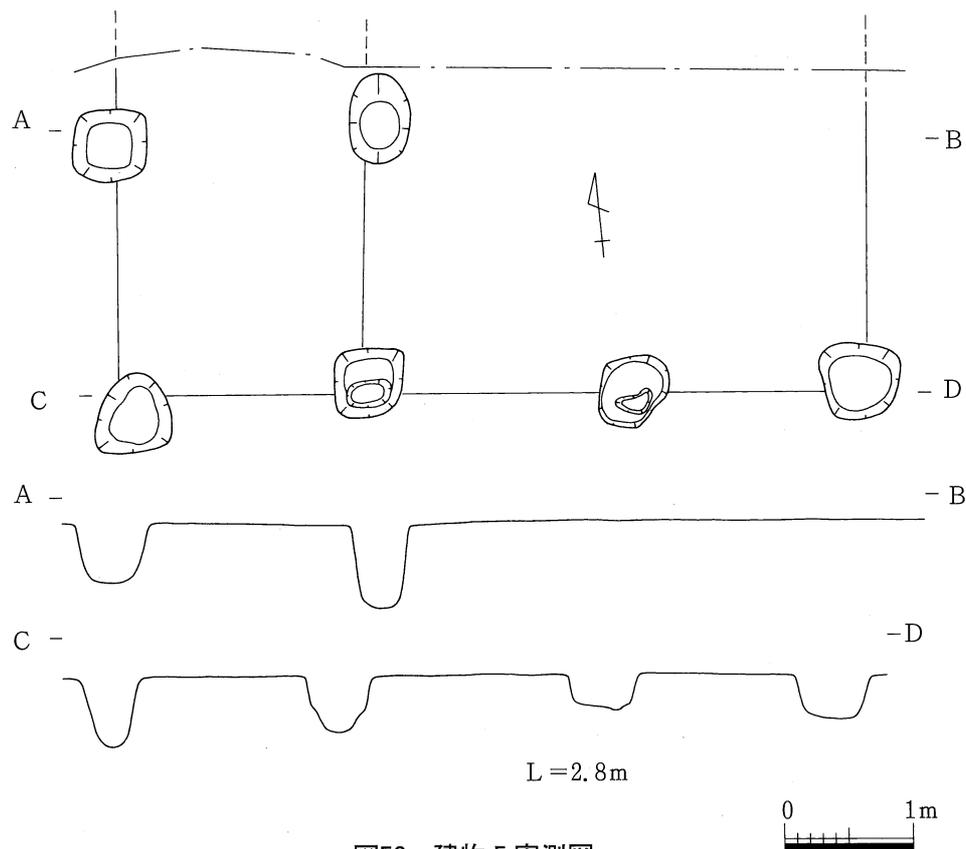


図52 建物5実測図

棟方向が東西方向になると推測される建物の南側の雨落ち溝になると考えられる。

遺物は柱穴掘り方から丹塗土師器の小片が出土しており、この建物に伴う溝4からは多くの土器が出土している。それらから建物5の時期は9世紀末から10世紀初頭と考えられる。柱穴の大きさも調査区西側にある小規模建物の柱穴よりは大きく、かつ平面形も方形に近いことから、当遺跡の中心建物の1つと考えてよいであろう。

建物6 (図53)

調査区中央北側で検出された掘立柱建物で、棟方向は南北方向と推測される。桁行2間以上、梁間

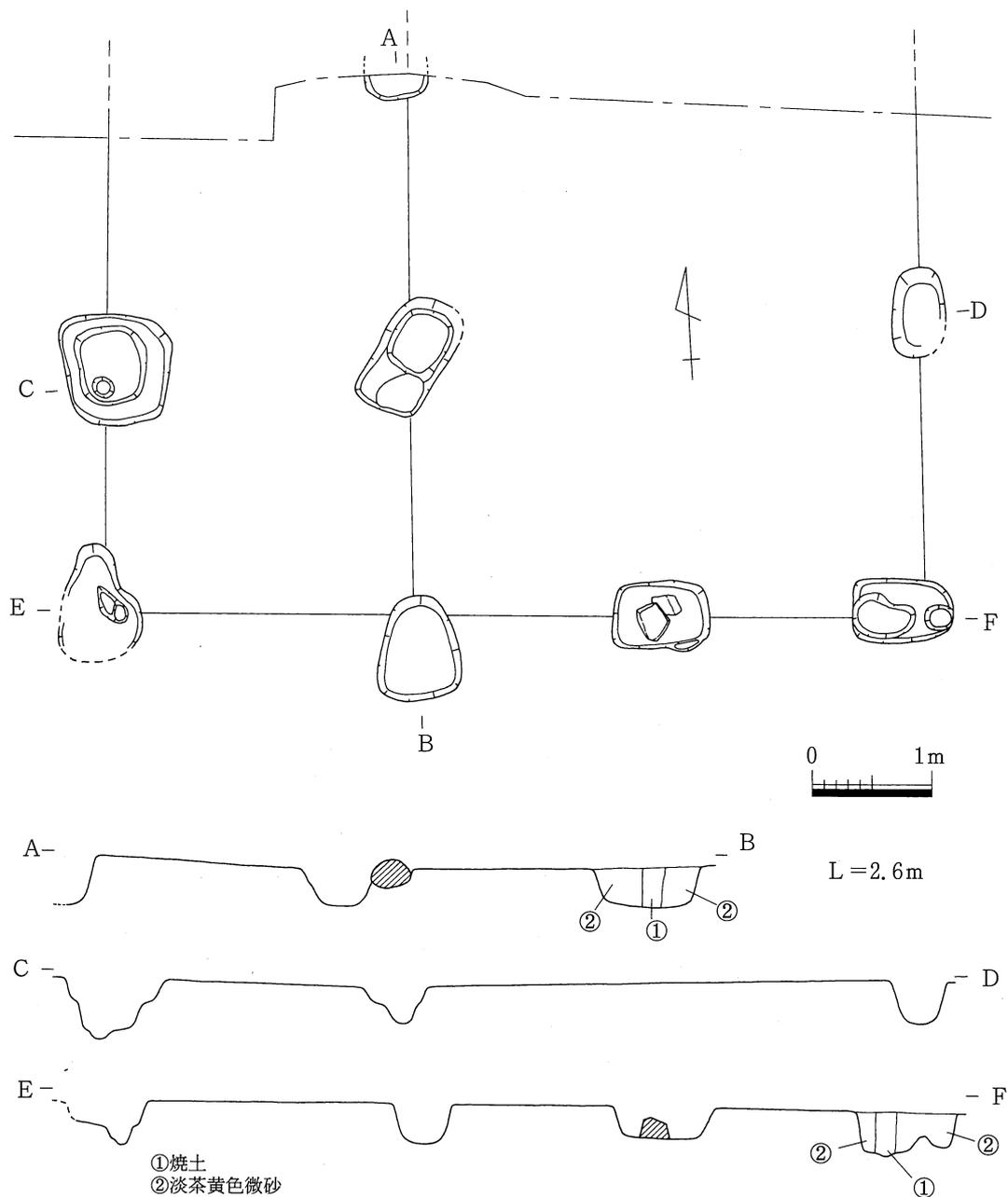


図53 建物6実測図

2間の身舎に西側へ庇が付く。柱間寸法は2.0mと2.4mである。柱穴の平面形は、ややいびつであるが方形を意識しているようで、一辺が0.7~0.9mである。遺構検出面は2.7m付近であったが、全体に明確なプランを検出できたのは2.6m前後まで掘り下げてからであった。それは建物6を建てる際の造成層(図5-①層)と柱穴掘り方の埋土とが極めて似ていたことによる。柱痕跡には焼土が多量に含まれており、柱痕跡そのものが焼土化しているものもある。建物5検出時、周囲からは多量の焼土片が出土しており、厚さ5cm前後の板状の焼土塊も認められた。板状の焼土塊は建物の壁とも推測される。以上のことから建物6は火災によって焼失した可能性が高いといえる。焼失した建物6は、その後造成をおこないほぼ同じ位置で、礎石建物に建て替えられている。

遺物は柱穴掘り方から土師器の小片が出土しているが、図化できるほどのものはなかった。しかし建物6の造成に伴う遺構としては、P114、P99、P1があり、それらは甕に土師器の椀や杯を重ねて埋納した地鎮具と考えられるもので、その時期から建物6は10世紀前半の時期が考えられる。

礎石建物 1 (図54)

調査区中央北端で検出された。建物6を建てる際の造成には、建物5、6の造成土とは異なって、淡黄灰色の山土(図5-⑧層)を用いている。この造成はかなり堅緻で、ほとんど遺物も含まれていない。造成土の範囲は東西20m、南北10m以上で、北側の土層観察からすると基壇状に盛り上がっていた可能性もあるが、面的な精査では確認できなかった。

検出できた礎石は1個だけで、径0.65m、厚さ0.4mの花崗岩製の石で下部周囲に一辺0.1~0.2mの花崗岩製の角礫を2個置いて支え、上面が水平になるように据えている。掘り方は検出することができなかった。おそらく山土による造成をおこなって礎石を置いた後、礎石を1/2ほど埋める造成(図5-⑨層)をおこなったものと考えられる。礎石を埋める造成土層は包含層とよく似ており、礎石が残存していなければ、礎石の抜き取り痕などの検出は不可能で、結果として礎石が残存していた一箇所のみしか検出できなかった。この位置は、建物5の東側の外側ラインと重なる位置であり、造成土の範囲からもおそらく建物5と近い平面形の建物の礎石になる可能性が高い。

出土遺物は造成層から土師器の小片が出土したが、図化できるものはなかった。しかし10世紀初頭の建物6の上面を造成していることや、造成層出土の遺物のなかに11世紀にまで下る遺物は含まれていないことから、10世紀中葉から後半ぐらいの時期が推測される。

調査区中央北側で検出された建物5、建物6、礎石建物1は、建物5→建物6→礎石建物1の順に9世紀から10世紀にかけて建て替えられ、しかもほぼ同じ地点であることから、当遺跡の中心建物の1つであるといえる。

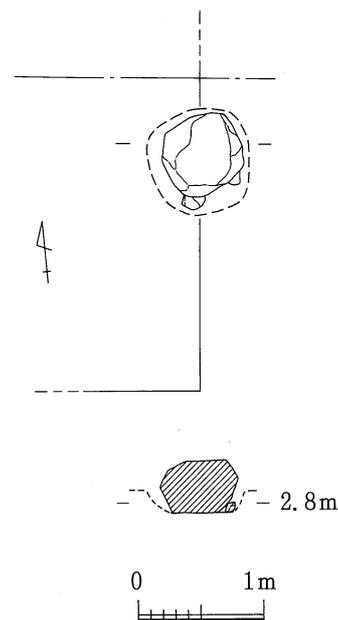


図54 礎石建物1実測図

礎石建物 2 (図55)

調査区中央の北端で検出した。調査区の北壁が若干崩落した際に露出した礎石で、調査区対象外となるため記録を取った後埋め戻した。礎石は径0.5m以上の花崗岩製の平石で、建物5に伴うと同じ層序関係にある造成層の上面から礎石を置くための掘り方を掘っている。掘り方の平面形については、調査区端部の側溝と重複したということもあり、明確にできなかった。この礎石に対応すると推測される掘り方がE区で検出されている。このことからこの礎石建物は棟方向が東西方向で、建物の南東コーナー部分がA区で検出された礎石で、北西コーナー部分がE区で検出された掘り方ということになる。建物5、建物6、礎石建物1とは直交方向、つまりL字形に配置されていたことになり、建物の規模的にも、このL字形に並ぶ2棟の建物が中心的な建物になるということになると考えられる。さらに礎石建物2は部分的にしかわかっていないが、建物5、建物6が当初掘立柱建物で、最後に礎石建物になるが、当初から礎石建物であった可能性が高く、さらに規模的にも建物5、建物6よりも大きいことや、南側に広がる海に対して棟方向を平行にしていることなどから、当遺跡の主屋である可能性が高い。

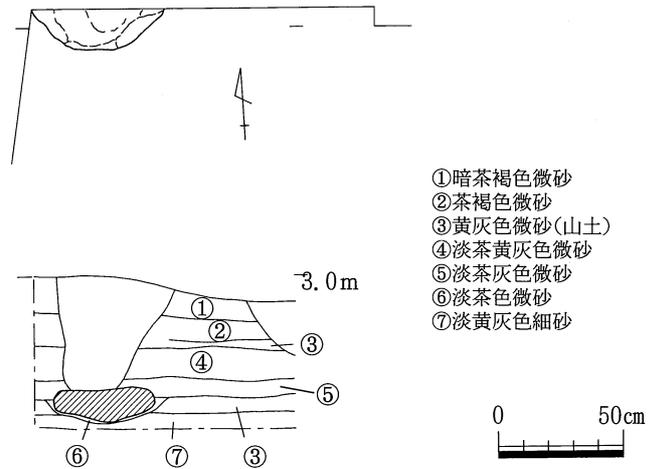


図55 礎石建物 2 実測図

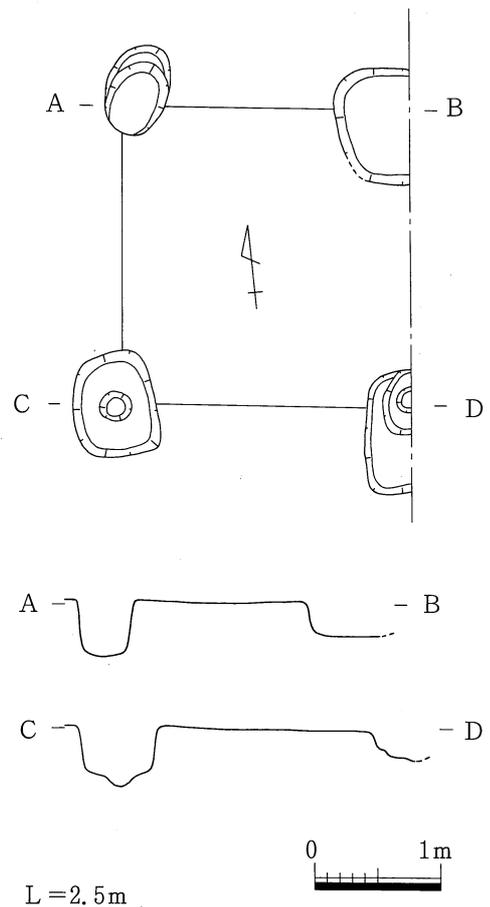


図56 建物 7 実測図

建物 7 (図56)

調査区北東端部で検出された掘立柱建物である。東側は調査区外へ出るため明確ではないが、遺跡外周をめぐる溝5、溝7の区画溝との関係から、東側へはのびないといえる。ただし北側へはのびる可能性があり、西側で検出した桁行2間、梁間1間の小規模な建物になる可能性はある。ただし柱穴の掘り方はしっかりしている。遺構検出面は2.5m付近で、深さは検出面から0.3~0.5mであ

る。柱痕跡が認められるものがあり、それから柱の径は0.2m前後ということになる。
遺物は掘り方埋土から土師器の小片が出土したが、図化できるものはなかった。

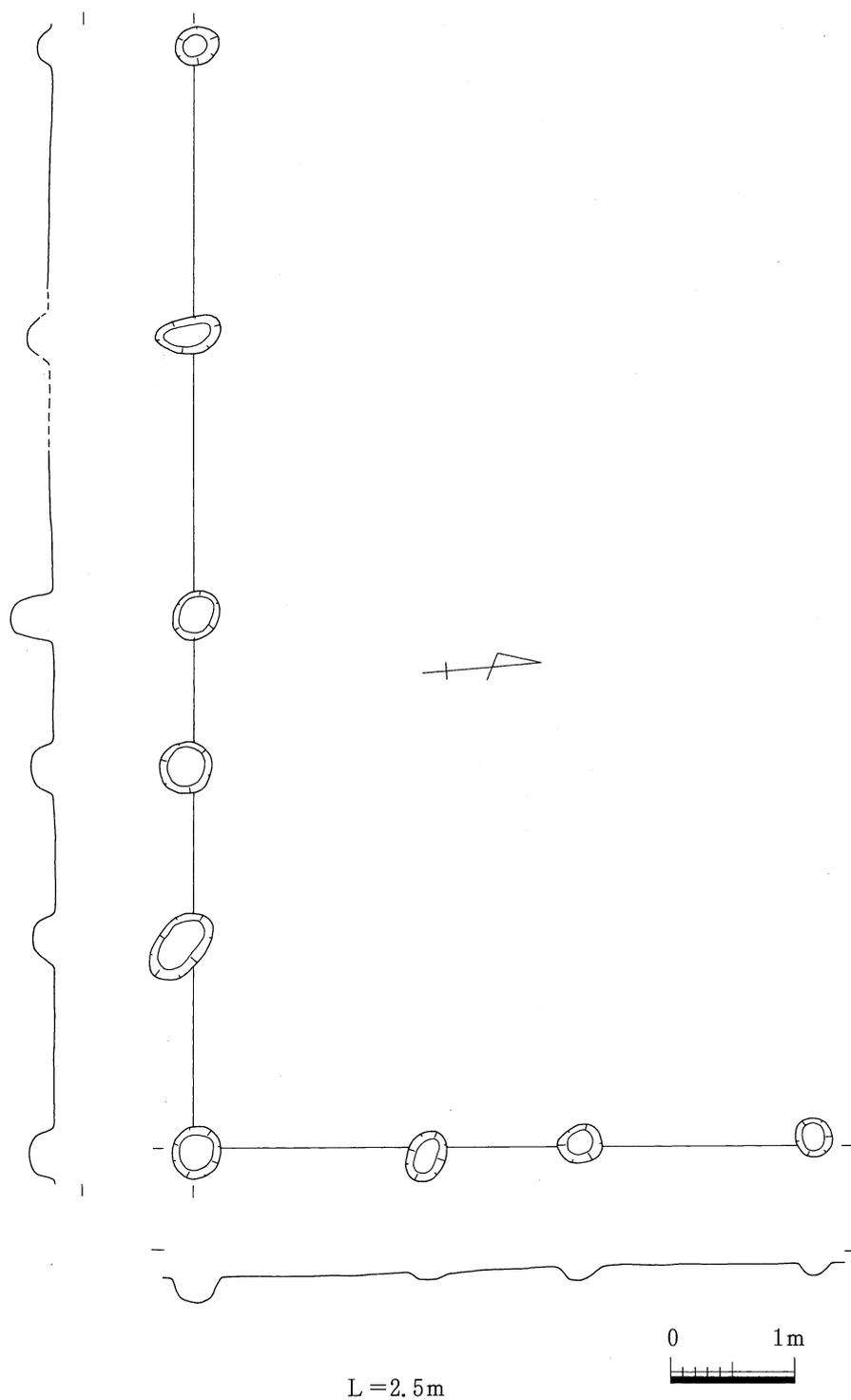


図57 柵列1実測図

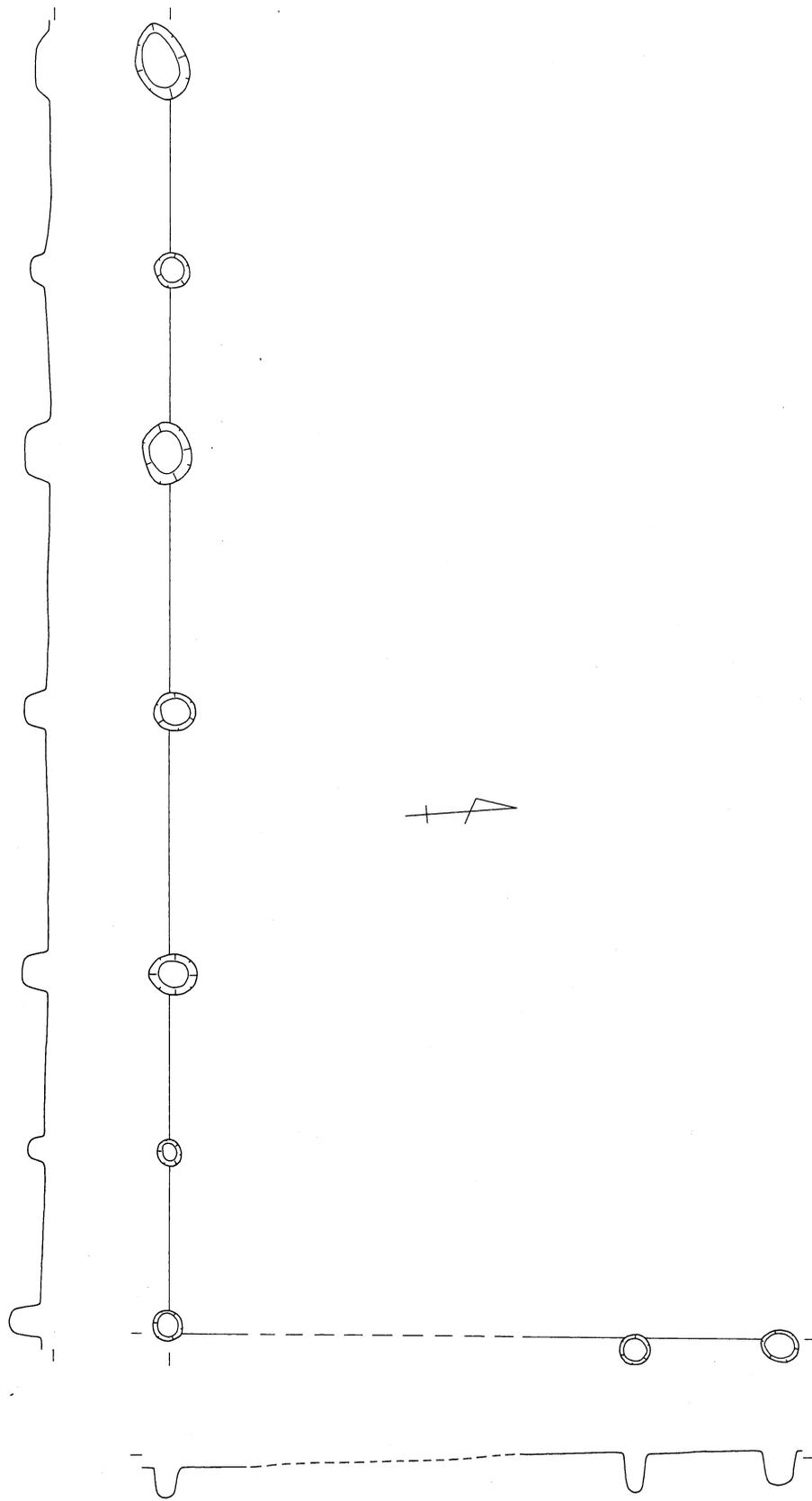


图58 栅列2实测图

柵列 1 (図57)

調査区の西側で検出された。掘立柱の板塀と考えられる。西から東へ9mのびた後、ほぼ直角に北へ屈曲して、北へ5mのびるL字形の平面形を呈している。近接してP99やP674などの土器を埋納した地鎮と考えられる遺構があることから、溝5、溝7で大きく区画された内部を、さらに小さく仕切るための板塀であり、おそらく調査区外にある建物(礎石建物2)に付属するものであると考えられる。遺構の検出面は2.4m付近で、深さは検出面から0.1~0.4mである。柱穴の平面形は円形である。遺物は土師器の小片が各柱穴埋土から出土したが、図化できるものはなかった。

柵列 2 (図58)

調査区中央付近で検出された。柵列1と同様に掘立柱の板塀と考えられる。西から東へ11mのびた後、ほぼ直角に北へ屈曲して北へ5.2mのびるL字形の平面形を呈している。北側にある建物5、建物6、礎石建物1に伴う板塀と考えられる。遺構の検出面は2.4~2.6m付近で、深さは検出面から0.1~0.3mである。平面形は円形である。遺物は土師器の小片が各柱穴埋土から出土したが、図化できるものはなかった。

集石遺構 1 (図59)

調査区中央付近、建物6の南東コーナー部分の東側で検出された。建物5に伴う溝4の埋没後に掘られており、上面は礎石建物1の造成土が覆っていることから、建物6に伴う可能性が高い。遺構の平面形は長径1.3m、短径1.1mの倒卵形で、遺構検出面は2.6m付近である。深さは検出面から0.2m、断面形はU字形を呈する。遺構中央部を中心に、径0.1m程の円礫が多数検出された。円礫の間から土師器の小片は出土したが、土器などを埋納した痕跡は認められなかった。

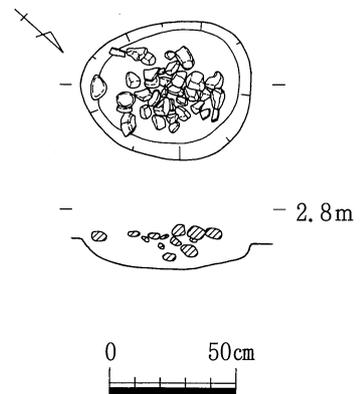


図59 集石遺構 1 実測図

集石遺構 2 (図60、61)

調査区南東部で検出された。溝7、溝5によって区画された大区

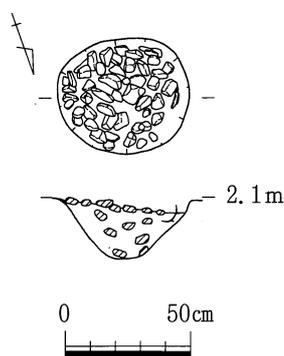


図60 集石遺構 2 実測図

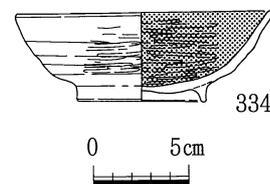


図61 集石遺構 2 出土遺物

面の南東コーナー付近に相当する。同様の集石遺構1が、付属する建物6の南東コーナー付近に位置するのと共通する。つまり集石遺構1は建物6の南東、集石遺構2は妹尾住田遺跡全体区画の南東に位置するのである。遺構の平面形は径1.0mの円形で、検出面は2.1m付近である。断面形は逆三角形を呈し、深さは遺構検出面から0.5mである。埋土中には径0.1m程の円礫が充填されている。遺構西端の検出面付近から、ほぼ完形の黒色土器碗(334)が出土しており、当遺構に埋納されたものと考えられる。黒色土器碗(334)は、溝4出土の黒色土器碗と比べ若干体部に丸みが出ており、やや後出的と考えられる。集石遺構1が建物6に伴っていると考えられるが、集石遺構2の時期もそれとほぼ同じといえる。

P 99 (図62、63)

調査区西側で検出された。径3.6mの円形の土壇に土師器の杯と黒色土器の碗を入れた土師器の甕を埋納していた。遺構検出面は2.6m付近で、土師器甕の上半は後世の削平のためか、残存していなかった。ただし甕内部には土砂が流入しており、検出時には杯や碗は埋没した状態であったことから、甕内底部付近に重ねられた杯や碗は削平を受けておらず、埋納当初のままであった可能性が高い。

甕内部の杯や碗の出土状況から、まず中央やや西寄りに碗を倒置し、その上に杯を重ね、さらに碗を重ねる。その後、東側に杯を5個体正置に重ねたと考えられる。倒置した碗の横に杯を重ねることはP 114やP 1と共通することであり、この種の土器埋納に関して一定の手順があったことを示唆している。

P 114 (図64、65)

調査区中央付近で検出された。一辺0.6mの隅丸方形の土壇に、黒色土器碗、土師器碗、土師器杯を入れた土師器甕を埋納していた。上面はかなり削平されて

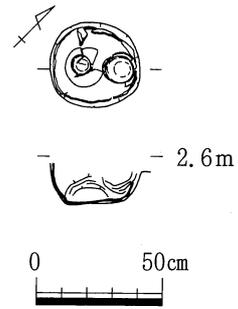


図62 P99実測図

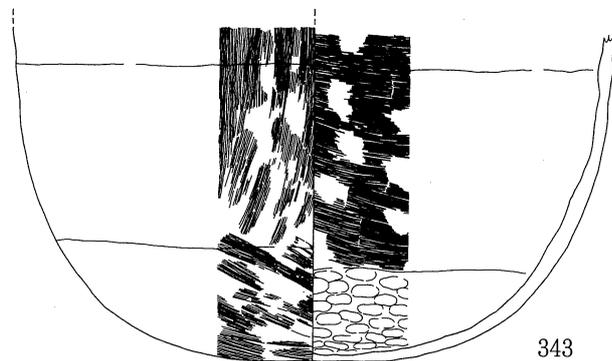
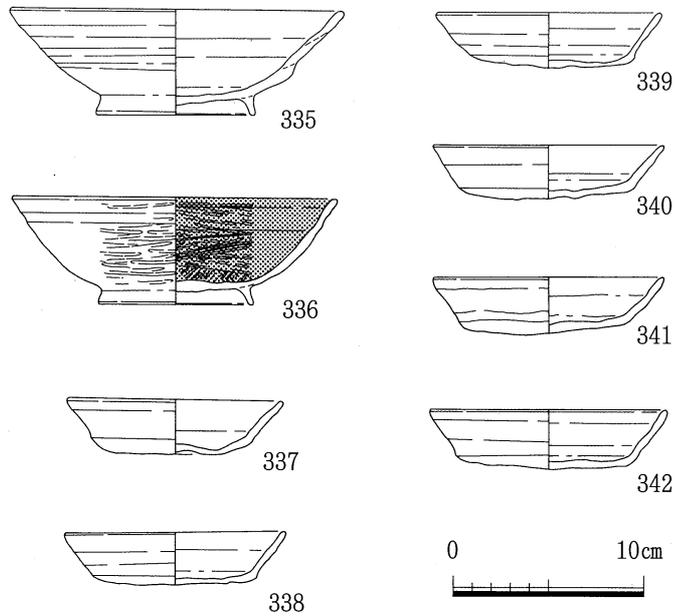


図63 P99出土遺物

おり、検出時には甕内部の杯や碗も露出していたため、少なからず内部の土器についても削平されている可能性が高い。遺構検出面は2.6m付近で、深さは検出面から0.1mである。

甕内部の土器については、P66ほど良好に残存していないが、碗が甕中央付近に倒置してあることと、破片の出土状況から、その脇に杯を重ねていたことがうかがえる。杯が倒置して重ねられていたのか、それとも正置して重ねられていたのかは明確ではないが、碗を最初に倒置し、脇に杯を重ねるといったことでは、P99と共通しているといえよう。

P 1 (図66、67)

調査区中央の北端で検出された。溝4の上面、建物6に伴う造成層から掘られている。径0.3mの円形の土壇に、黒色土器碗、土師器杯を入れた土師器甕を埋納していた。甕の上半は削平されていたが、削平面と甕内部の土器との間には流入した土砂である間層があったことから、甕内部の土器は埋納当初のままであった可能性が高い。遺構検出面は2.7m付近で、深さは検出面から0.12mである。

甕内部の土器の出土状況から、まず中央北寄りに碗を倒置し、その上に杯を置き、さらに碗を倒置して重ねる。その後、南側に杯を倒置して重ねたと考えられる。碗を倒置した横に杯を重ねることは、P99、P114とも共通しており、埋納に関して一定の手順があったことを示唆している。

P 188 (図68、69)

調査区中央北寄りで検出された。建物5に伴う造成面から掘られている。したがってP188は建物5、溝4と同じ時期といえる。遺構の平面形は長さ0.33m、幅0.3mの三角形もしくは楕円形で、遺

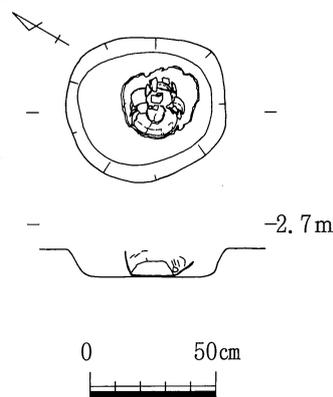


図64 P114実測図

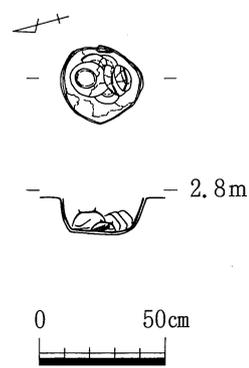


図66 P1実測図

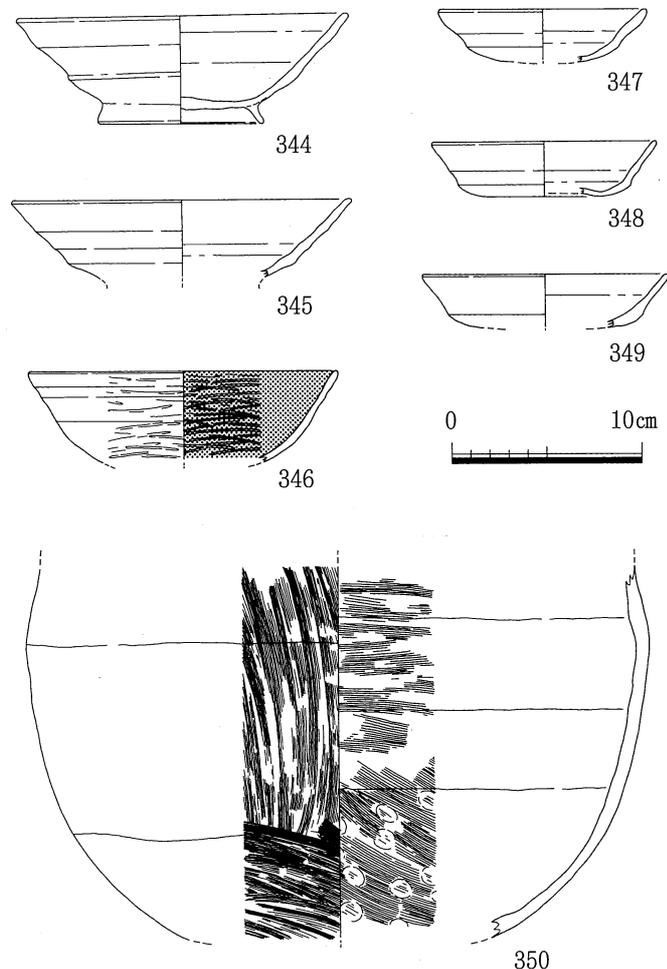


図65 P114出土遺物

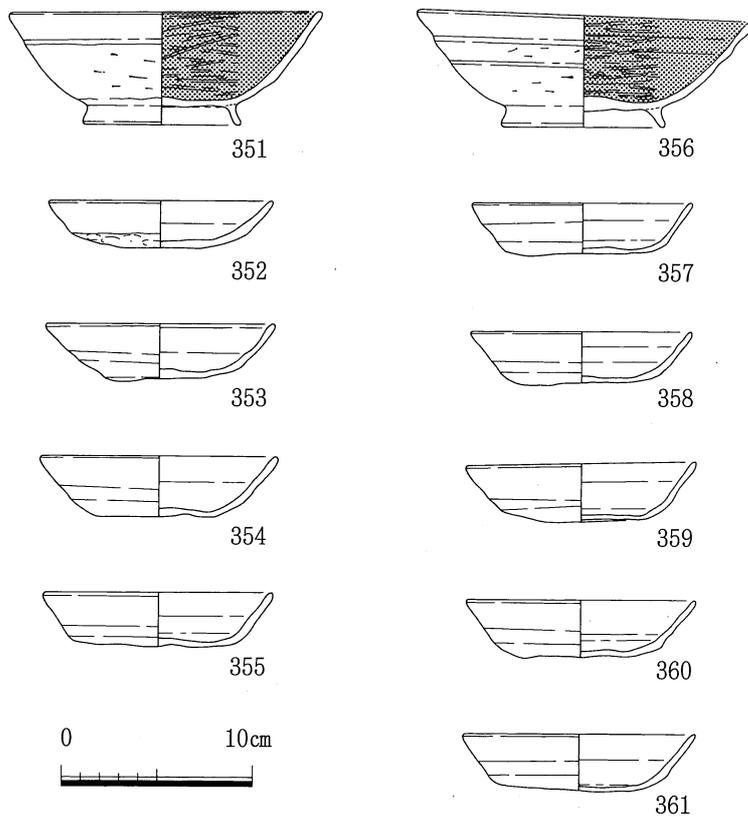


図67 P1出土遺物

構検出面は2.6m付近である。遺構中央付近は若干くぼんでおり、そこに土師器の蓋付の壺を正置していた。壺の北東部からは蓋の破片が出土したが、これは壺上の蓋と接合した。おそらく自然に移動したものと考えられる。当遺構内からは埋納された蓋付の壺以外の遺物は出土しなかった。壺内部の土壌は洗浄したが、何も検出されなかった。

P113 (図70、71)

調査区中央付近で検出された。壺の口縁部の上部まで削平されており、蓋が本来存在したかどうか

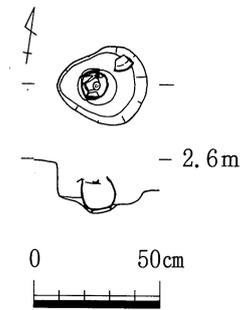


図68 P188実測図

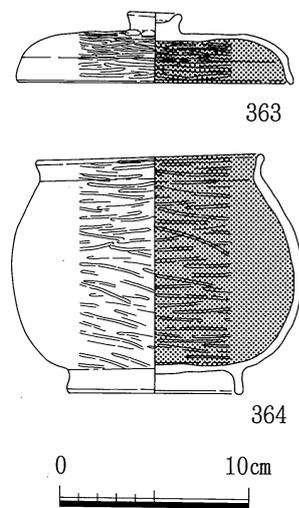
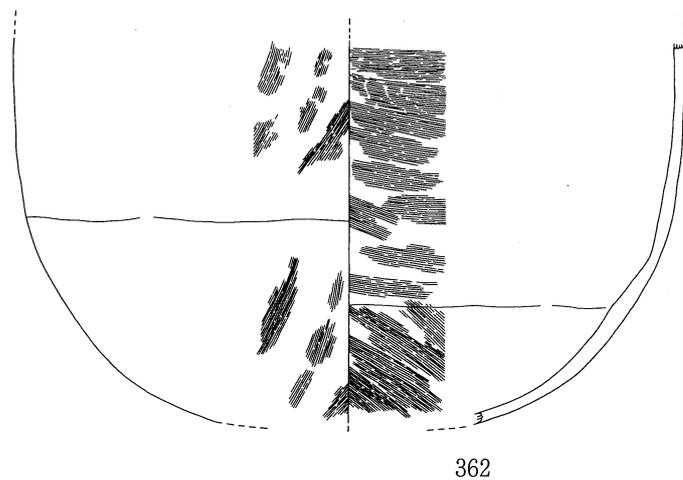


図69 P188出土遺物

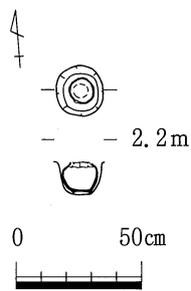


図70 P113実測図

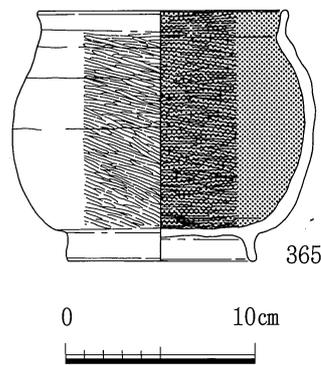


図71 P113出土遺物

は不明である。しかし同様の遺構であるP188やP674には蓋があることから、当遺構の壺にも蓋が存在していた可能性は高い。

遺構検出面は2.1m付近、深さは検出面から0.15mである。径0.18mの円形の平面形を呈す土壌に土師器の壺を埋納している。壺以外の遺物は検出されなかった。

P674 (図72、73)

調査区西側で検出された。径0.2mの円形の土壌に土師器の蓋付の壺を埋納している。壺を埋納する前に円礫を2個置いている。遺構検出面は2.3m付近で、深さは検出面から0.18m、断面形は逆三角形を呈する。壺内部の土壌は洗浄したが何も検出されなかった。P113やP188と同様の遺構と考えられる。

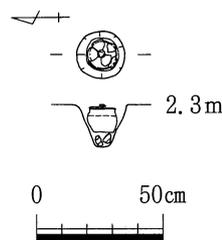


図72 P674実測図

P238 (図74、75)

調査区中央やや西寄りで検出された。径0.3mの円形の平面形を呈する土壌、あるいは柱の抜き取り後の柱穴上部に黒色土器碗、土師器皿・杯を正置に重ねてあった。遺構上面は削平を受けており、埋納された土器の上部については、明確ではないが出土状況としては杯と皿を重ねた後、碗を重ねたようである。遺構検出面は2.5m付近で、深さは検出面から0.3mである。溝4の埋土上面から掘られている。しかし建物の造成層との関係は、付近における造成層の残存状況が良くなかったため確認することができなかった。したがって建物6もしくは礎石建物1に伴うものと考えられる。

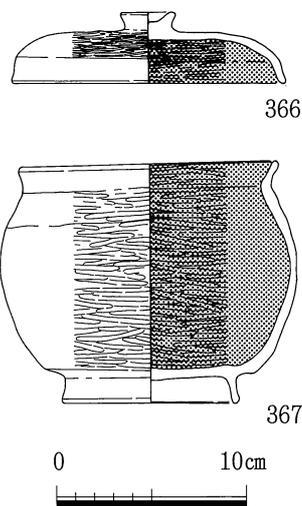


図73 P674出土遺物

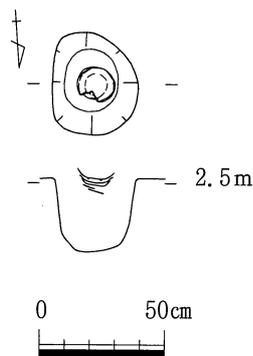


図74 P238実測図

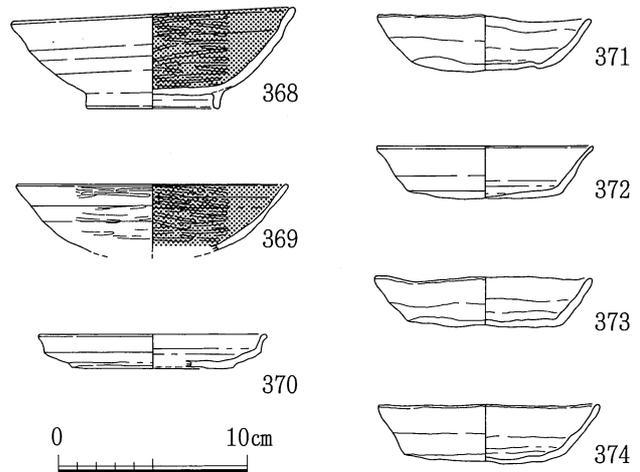


図75 P238出土遺物

P22 (図76、77)

調査区中央北側で検出された。中世の遺構との切り合いもあったため、建物6との新旧関係をとらえることは困難であったが、一応建物6に切られている可能性が高いと考えられる。径1.2mの円形の平面形で、南側が径0.7m、深さ0.3mほど一段下がる。遺物は一段下がった部分でまとまって出土した。遺構検出面は2.3m付近で、深さは検出面から0.5mである。

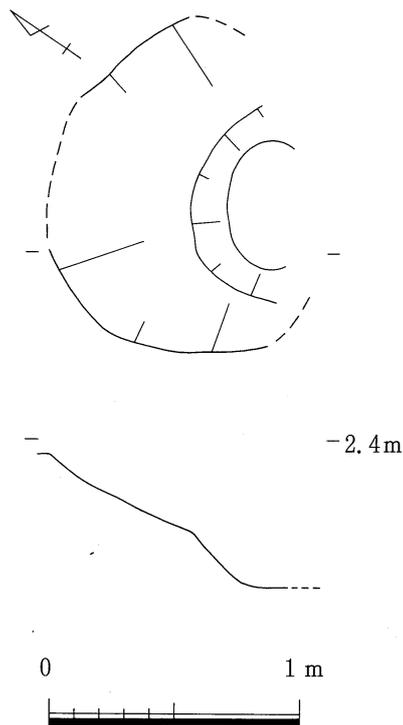


図76 P22実測図

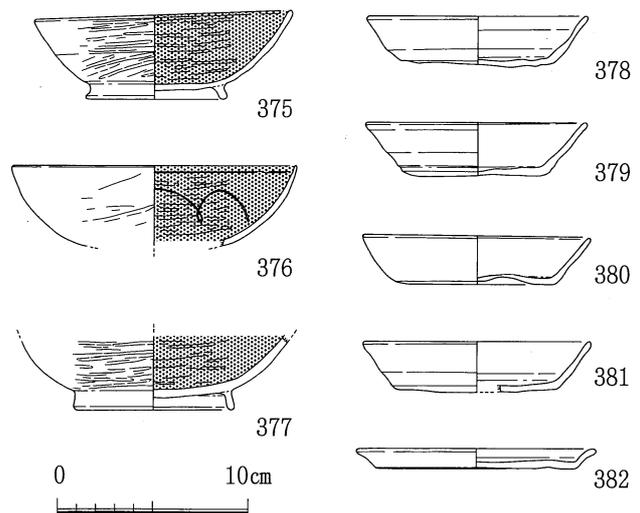


図77 P22出土遺物

P572 (図78、79)

調査区中央東寄りで検出された。径0.2 mの平面形を呈し断面形は台形である。遺構検出面は2.6 m付近で、深さは検出面から0.1 mである。礎石建物1に伴う造成層よりも下から掘られており、古代に属する遺構であることは確実であるが、土器が出土しなかったため詳細な時期は明らかにできない。ただ埋土中位から銅製の小碗(M1)が出土した。小碗は口径2.8 cm、器高1.2 cm、高台径1.4 cmで、口縁端部をわずかに外反させる。鑄上がりは良く、保存状態も良好である。

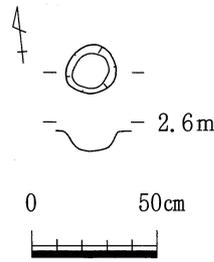


図78 P572実測図

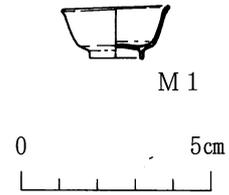
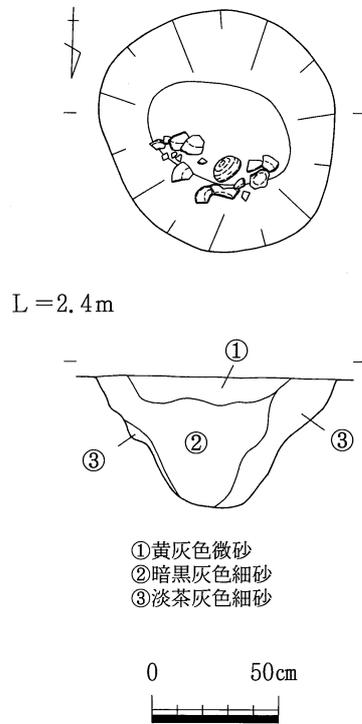


図79 P572出土遺物

P23 (図80、81)

調査区中央北側で検出された。建物6の柱穴に切られており、建物5の造成層の上面から掘られていることや溝4と切り合い関係になっていることから、建物5と同じ時期と考えられる。径0.9 mの円形の平面形を呈し、断面形は逆三角形である。埋土は3層で遺物は主に②層から出土した。遺構検出面は2.3 m付近で、深さは検出面から0.5 mである。

遺物は土師器杯(383)、碗(384)、黒色土器碗(386)、緑釉陶器碗(387)で、青磁の小片(385)が検出時に出土した。緑釉陶器皿(387)はほぼ完形で尾張産⁽²⁾である。



- ①黄灰色微砂
- ②暗黒灰色細砂
- ③淡茶灰色細砂

図80 P23実測図

P665 (図82、83)

調査区東側で検出された。妹尾住田遺跡の外周を画すると考えられる溝7、溝5の最終埋土から出土した土器群よりも先行する時期の土器群で、おそらく礎石建物1と同じ時期と考えられる。径0.2 mの円形の円面形を呈し、断面形は台形である。遺構検出面は2.2 m付近で、深さは検出面から0.1 mである。

遺物は土師器の碗(390・391)を倒置し、その上に土師器杯(388)を重ね、

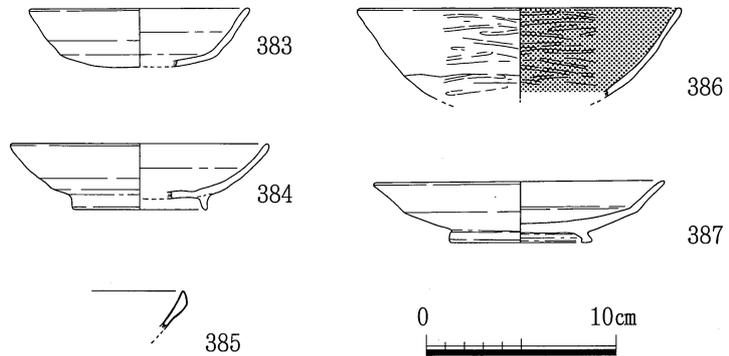


図81 P23出土遺物

脇に土師器杯(389)が横置されていた。ただし、杯(389)については本来重ねられていたものが2次的に移動した可能性も高い。

P50 (図84、85)

調査区西側で検出された土壌で、柵列1を切っている。従って柵列は本土壌よりも古いといえる。遺構の平面形は、長さ2.2m、幅1.3mの長方形を呈し、遺構検出面は2.2m付近である。深さは検出面から0.1mで、断面形は緩やかにくぼむ皿状である。遺構中央部やや南よりの位置から黒色土器碗が2個体、倒置した状態で出土した。

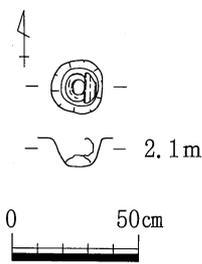


図82 P665実測図

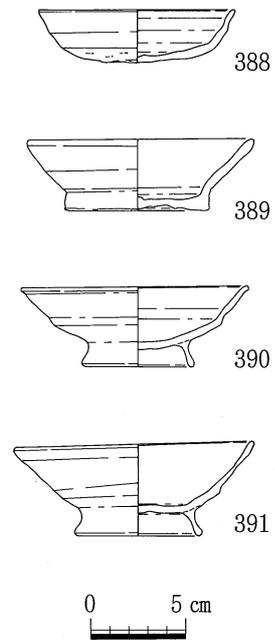


図83 P665出土遺物

溝4 (図86、87、88)

調査区中央北側で検出された溝で、建物5及び調査区北側に存

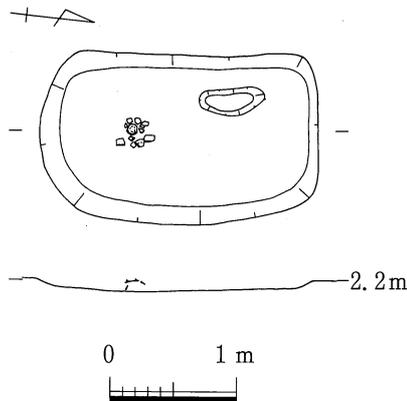


図84 P50実測図

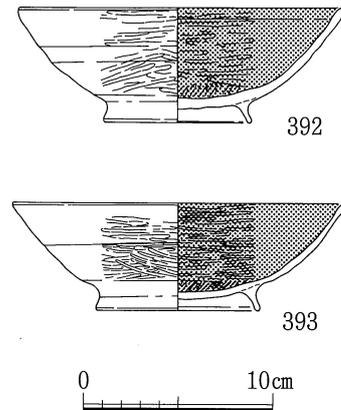


図85 P50出土遺物

在すると推測される礎石建物2の南側の雨落ち溝である。幅2.0~2.5m、断面形は台形である。遺構検出面は2.7m付近であるが2.8m付近から溝埋土に含まれる土器群は検出できた。溝埋土には建物5の造成土の2次堆積が含まれており埋土の区別がつきにくく、結果として2.7m付近まで掘り下げた時点まで溝のプランをとらえることができなかった。なお、溝部分までは建物5の造成土は及んでおらず、建物5の造成土の端部を溝5がめぐっていたということになる。

遺物は全体から出土したが、特に東側コーナー付近でまとまって出土した。完形品が多く含まれていることから、溝廃絶時に投棄されたものと考えられる。そのため一括性は高いといえる。ただし上面は建物6に伴う造成土が落ち込んでいる部分でもあり、若干上層の遺物が混入している可能性がある。遺構上面で検出した須恵器碗(394・396・397)や緑釉陶器(433・429)や灰釉陶器(438)などはその



図86 溝4 東側コーナー部分遺物出土状況実測図

可能性がある。それら以外の土器群をみると、緑釉陶器(425・426・428・430・431・434～436・440～457)、灰釉陶器(427・432・439)、須恵器(395)、越州窯産青磁(424)、土師器(398・403～421)、黒色土器(399～402・422・423)で、食膳具のみで構成される。また緑釉陶器は器種も豊富で、碗、皿、香炉、瓶がある。碗(425)は長門産、瓶(428)、皿(443)は尾張産、他は全て京都産で9世紀後半から末の時期である⁽³⁾。灰釉陶器も(438)をのぞくと緑釉陶器と同じ時期であり、(438)が土器群上面で出土していることから、溝4出土の土器群は9世紀後半から末の時期といえる。土師器や黒色土器にも時期幅が認められてないことから、9世紀後半から末の一括性の高い土器群といえよう。

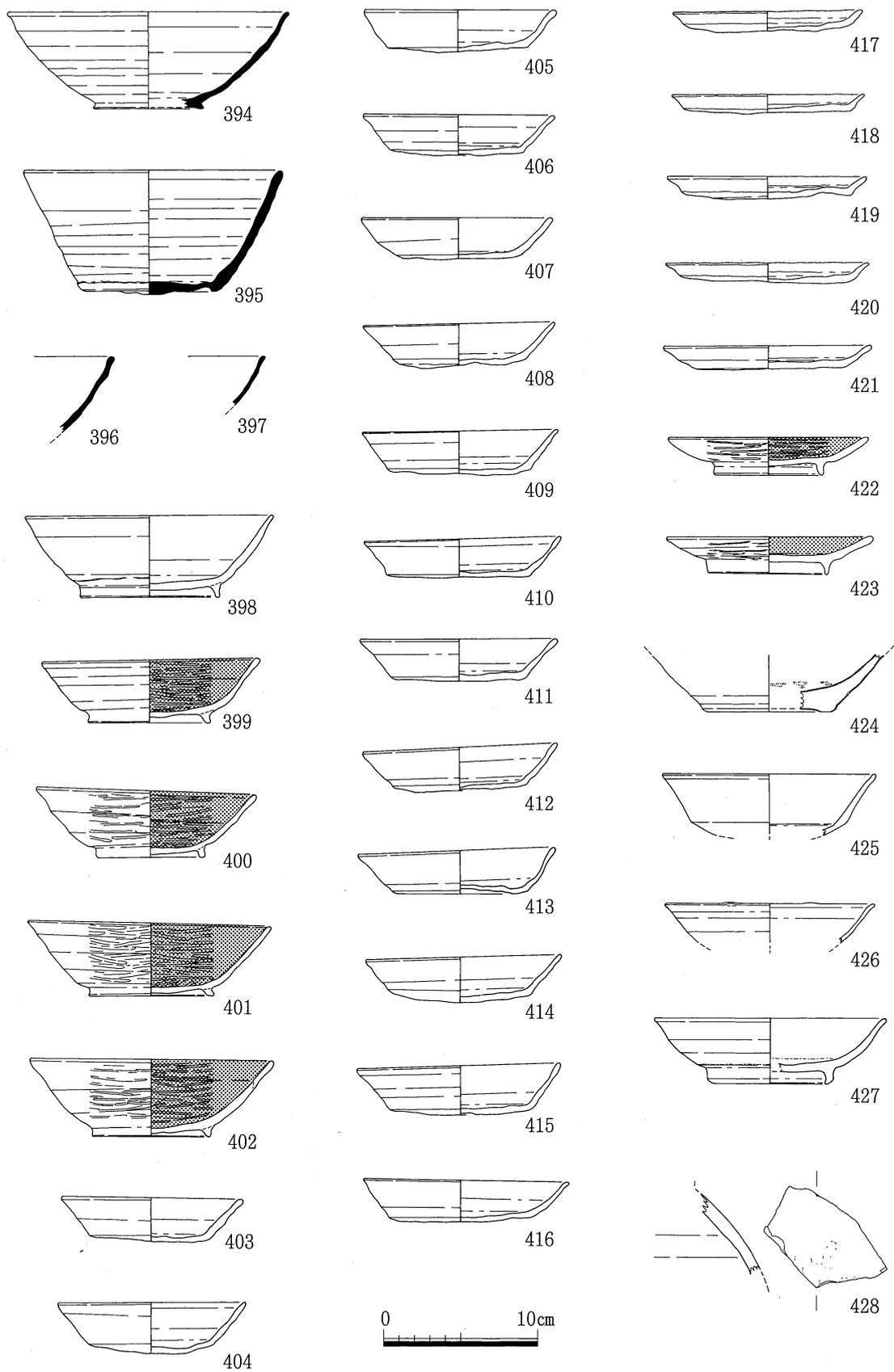


图87 沟4出土遗物(1)

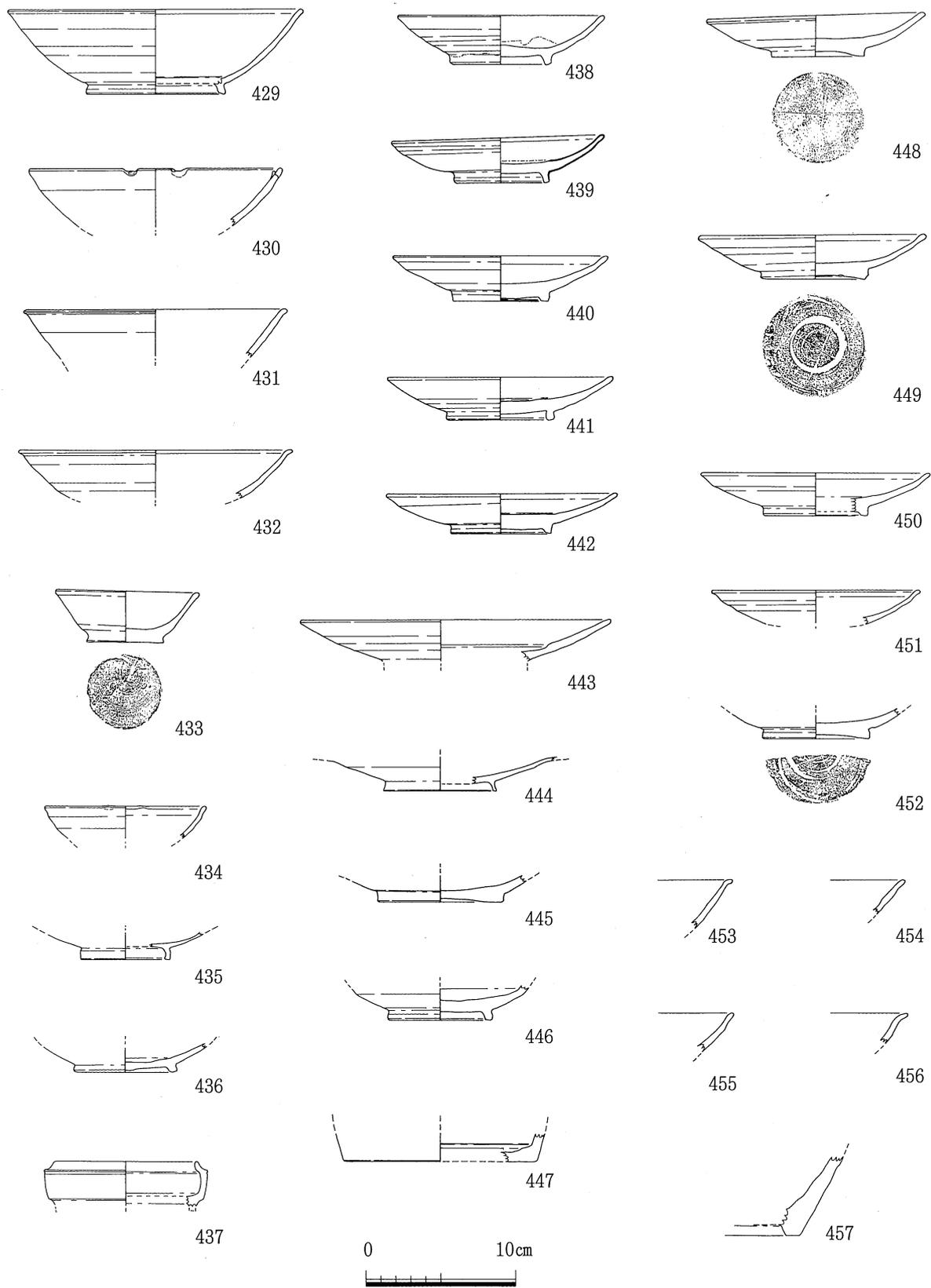


图88 溝4 出土遺物 (2)

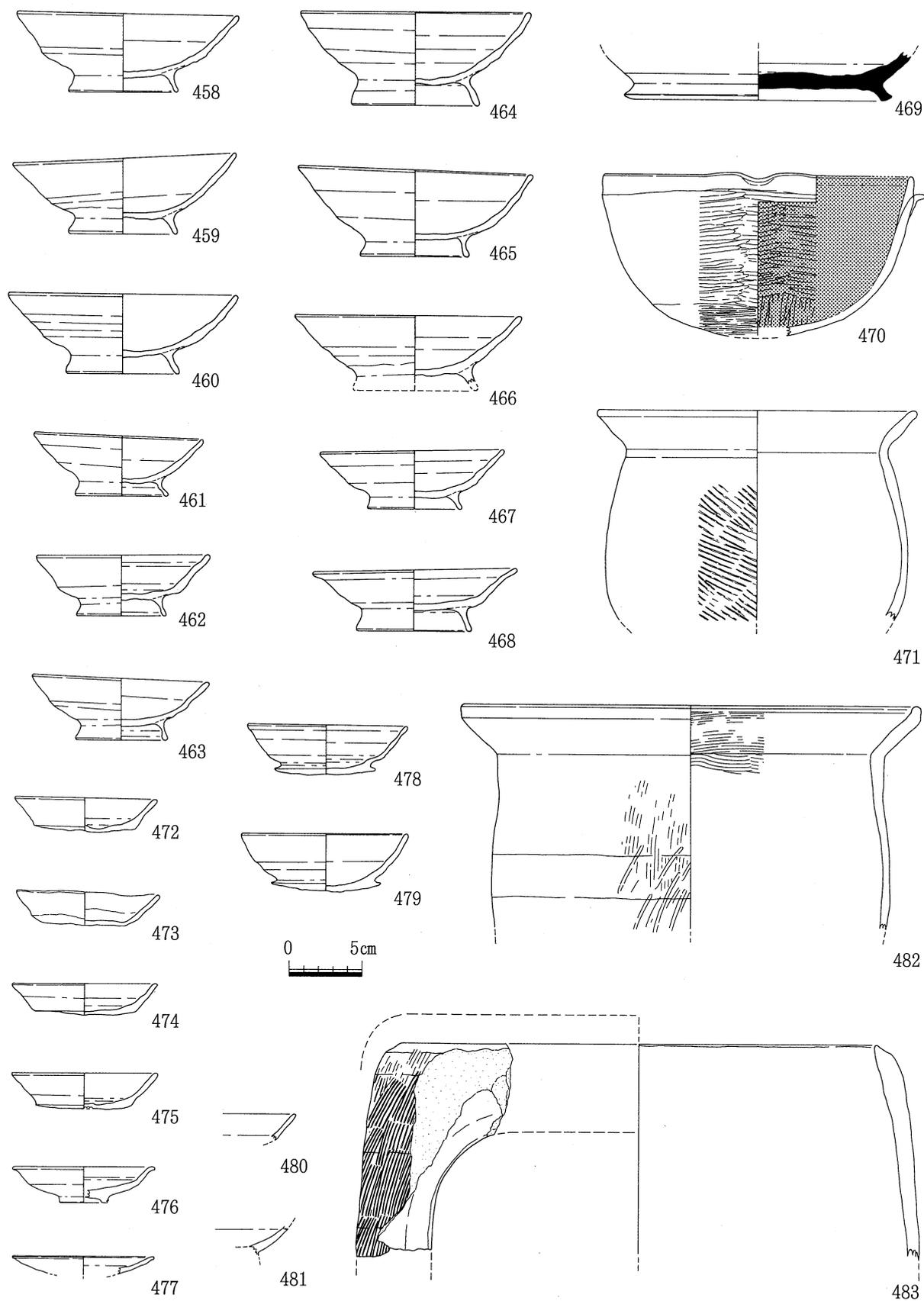


图89 沟5出土遗物

また緑釉陶器の内容や越州窯産青磁が含まれていることは、この遺跡の性格を示唆している。当時は遺跡前面には内海が広がっていた。しかし、この内海の水運を考慮に入れても施釉陶器の量や質は豊富すぎるようにも思われ、おそらく地方官衙の最高レベルである国衙との関係がある遺跡である可能性が最も高いことを示している。

溝 5 (図89、90)

調査区東側で検出された。溝 7 とは約 1.5m の間隔をあけて(両溝の中心間の距離は 2.4m)、平行であることから、調査区内で検出されている建物群の外周を区画する溝と考えられる。この両溝によって区画される範囲は、背後の丘陵部や現況の地割との関係から、一辺 50m ほどと推測される。溝 5 の検出面は 2.0~2.3m 付近で、南側に向かって傾斜している。深さは検出面から 0.25m である。断面は台形である。

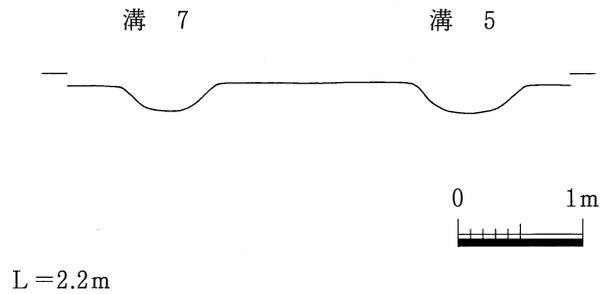


図90 溝 5・7 断面図

遺物は検出面付近からまとめて検出され、埋土中層や下層からはほとんど出土しなかった。したがって出土した遺物は溝 5 廃絶時にまとめて投棄されたものと考えられ、古代において区画を伴った妹尾住田遺跡の下限の時期を示している。土師器碗(458~468)、土師器杯(472~475・478・479)、黒色土器鉢(470)、土師器甕(471・482)、カマド(483)、緑釉陶器(476・477・480・481)が出土し、碗や杯はほとんど完形品である。

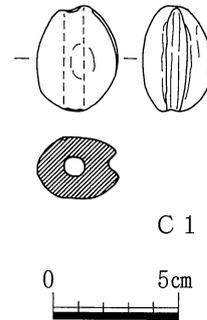


図91 溝 7 出土遺物 (1)

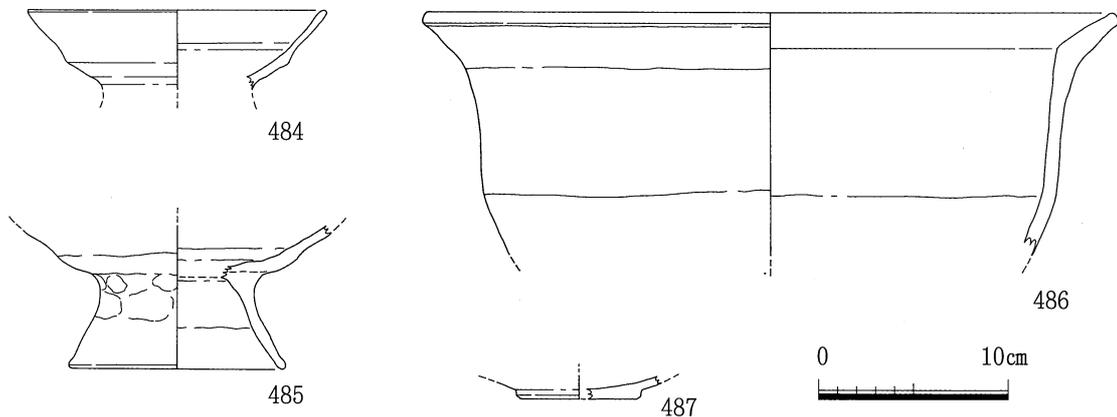


図92 溝 7 出土遺物 (2)

溝7 (図90、91、92)

調査区東端で検出された。溝5とは約1.5mの間隔をあけて(両溝の中心間の距離は2.4m)平行であることから、調査区内で検出される建物群を区画する溝と考えられる。この両溝によって区画される範囲は背後の丘陵部や現況の地割との関係から、一辺50mほどと推測される。溝7の検出面は2.0~2.3m付近で南側に向かって傾斜している。深さは検出面から0.2mである。断面は台形である。

遺物は溝に比べると少なく、全て遺構検出時に出土した。土師器椀(484・485)、土師器甕(486)、緑釉陶器(487)、土錘(C1)であり、土師器椀(484)から溝5廃絶時期の土器群とほぼ同じ時期といえる。

2. B区 (図38)

A区西側で擁壁の堀削深度を決めるために設定した調査区で、古代の包含層は認められるが、近代以降のゴミ穴の堀削が激しく古代の遺構は検出されなかった。

3. C区 (図39)

A区北東部に位置する。古代の遺構は溝が1本検出されたのみである。この溝はA区で検出された溝7と同じ溝と考えられ、当遺跡東側については、区画溝が丘陵裾部までめぐっていたことを示している。ただしD区では古代の溝が認められないことから、当遺跡の背後、北側にはめぐっていなかった可能性が高い。遺構検出面は2.6m付近で埋土は2層、遺物は微細な土師器片と緑釉陶器片が若干出土した。

4. D区 (図42)

A区北東に位置する。古代の遺構は検出されなかった。当調査区の西側では、丘陵裾部がほぼ東西方向に合わせて直線的であるが、当調査区付近では北側へ入り込んでいる。当調査区の遺構は中世のみであることから、丘陵裾部の堀削も中世においておこなわれた可能性が高いと思われる。おそらく古代の丘陵カット面は調査区西側の直線的なカット面の延長までであったと考えられる。

5. E区 (図93)

A区北西に位置する。予想以上に遺構面が高かったために、駐車場造成の際に露出してしまった部分を記録するために設定した調査区で、記録作成後埋め戻した。検出されたのは径0.2~0.3mほどの中世と推測される柱穴4個と、礎石の抜き取り穴と考えられる柱穴が2個である。A区で検出された礎石建物は、造成土の上に礎石を置いてさらに造成土によって礎石を埋めているが、E区の

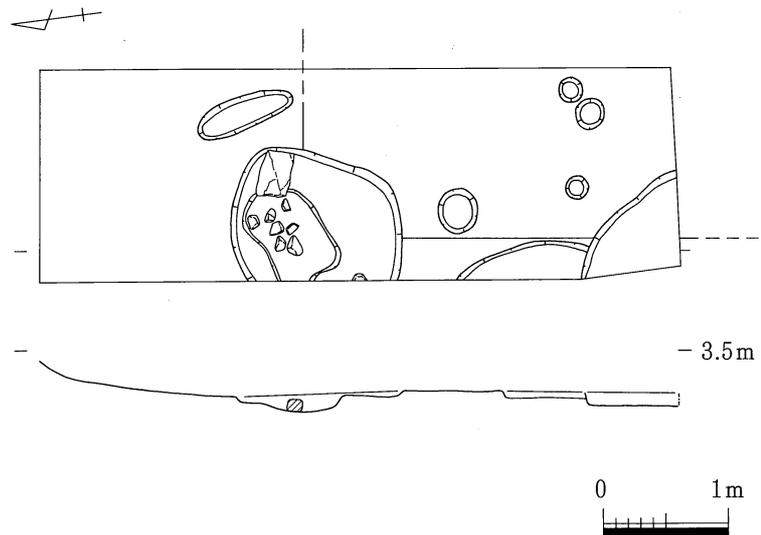


図93 E区遺構実測図

場合、丘陵裾部の花崗岩質の基盤層がかなり高い位置にあったため、造成はおこなわれず直接基盤層に径1.3mほどの礎石を据えるための穴を掘り、長さ0.1~0.15mの角礫を根石に置いている。当調査区で検出した2つの礎石掘り方と、A区の礎石建物2の礎石上面のレベル差は、基盤層のレベル差に起因するもので、おそらく同じ建物になるものと推測される。そうすると当調査区は、A区北側にあって東西の棟方向の建物の北西コーナー付近ということになる。

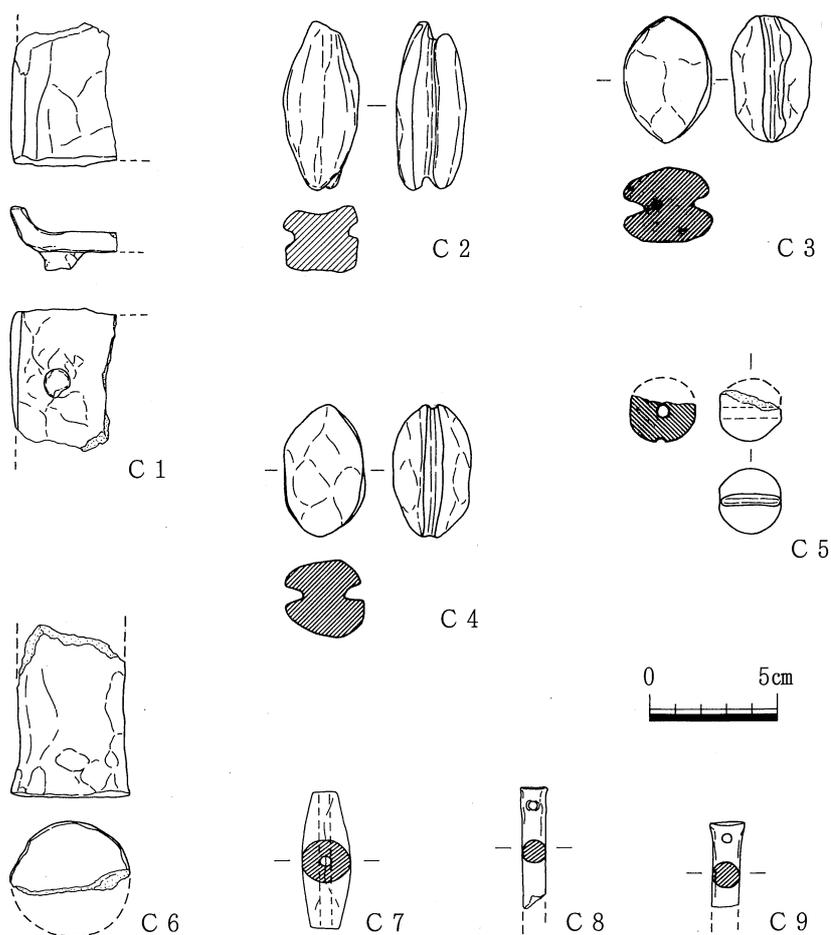


図94 古代造成層及び包含層出土遺物（1）

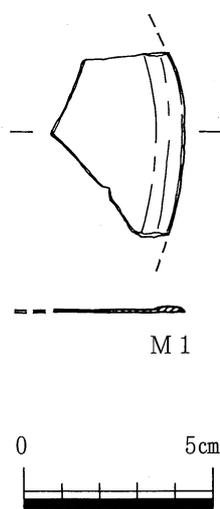


図95 古代造成層及び包含層出土遺物（2）

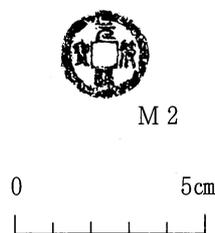


図96 古代造成層及び包含層出土遺物（3）

6. 古代造成層及び包含層出土遺物 (図94、95、96、97、98、99)

調査区中央北側で検出された建物は、建物5→建物6→礎石建物1の順に建て替えられており、建て替えるにあたって造成をおこなっている。建物5に対しておこなった造成を造成1、建物6に対しておこなった造成を造成2、礎石建物1に対しておこなった造成を造成3とする。このうち、造成3については山土を用いていることから、土層的には最も区別が容易であった。造成1と造成2については、断面観察に於いては分離できるものの、平面的な精査では区別が極めて困難で、部分的には遺物

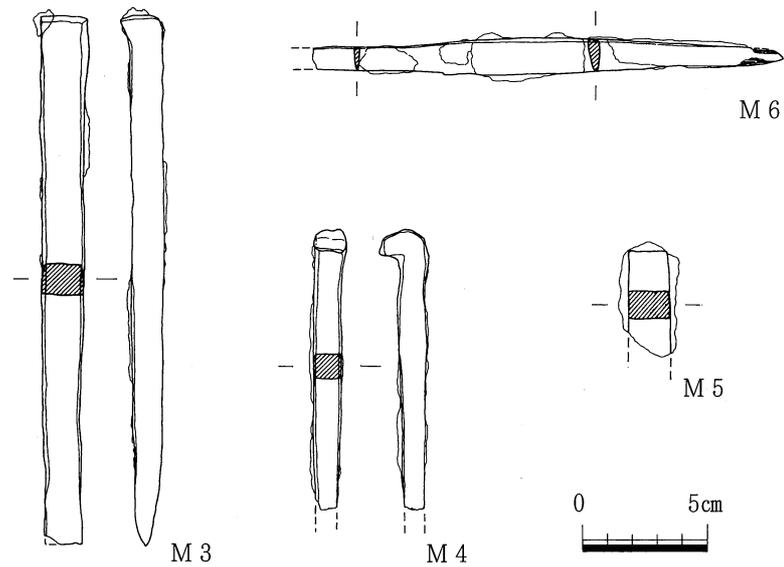


図97 古代造成層及び包含層出土遺物 (4)

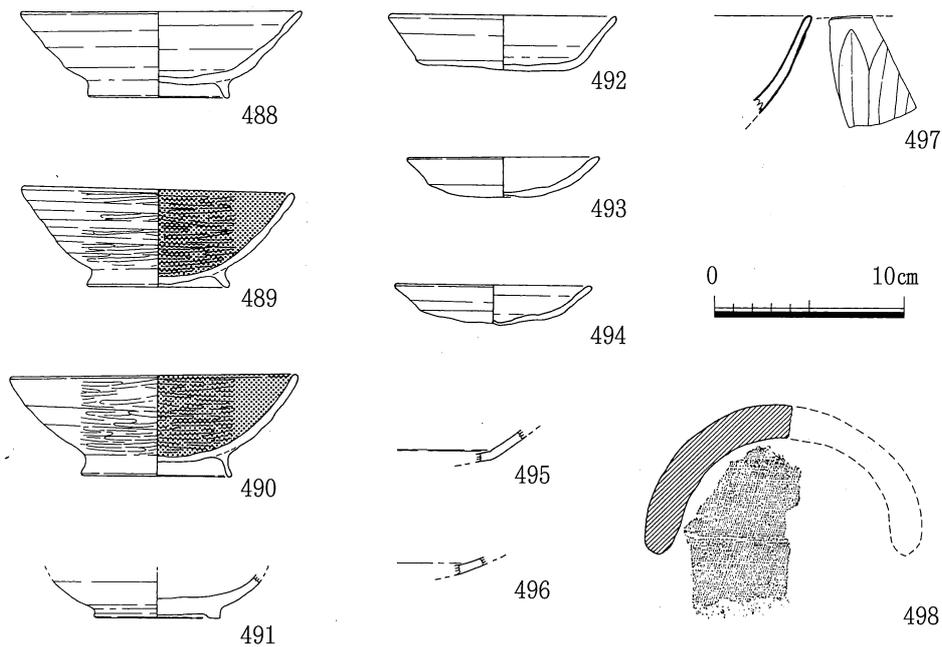


図98 古代造成層及び包含層出土遺物 (5)

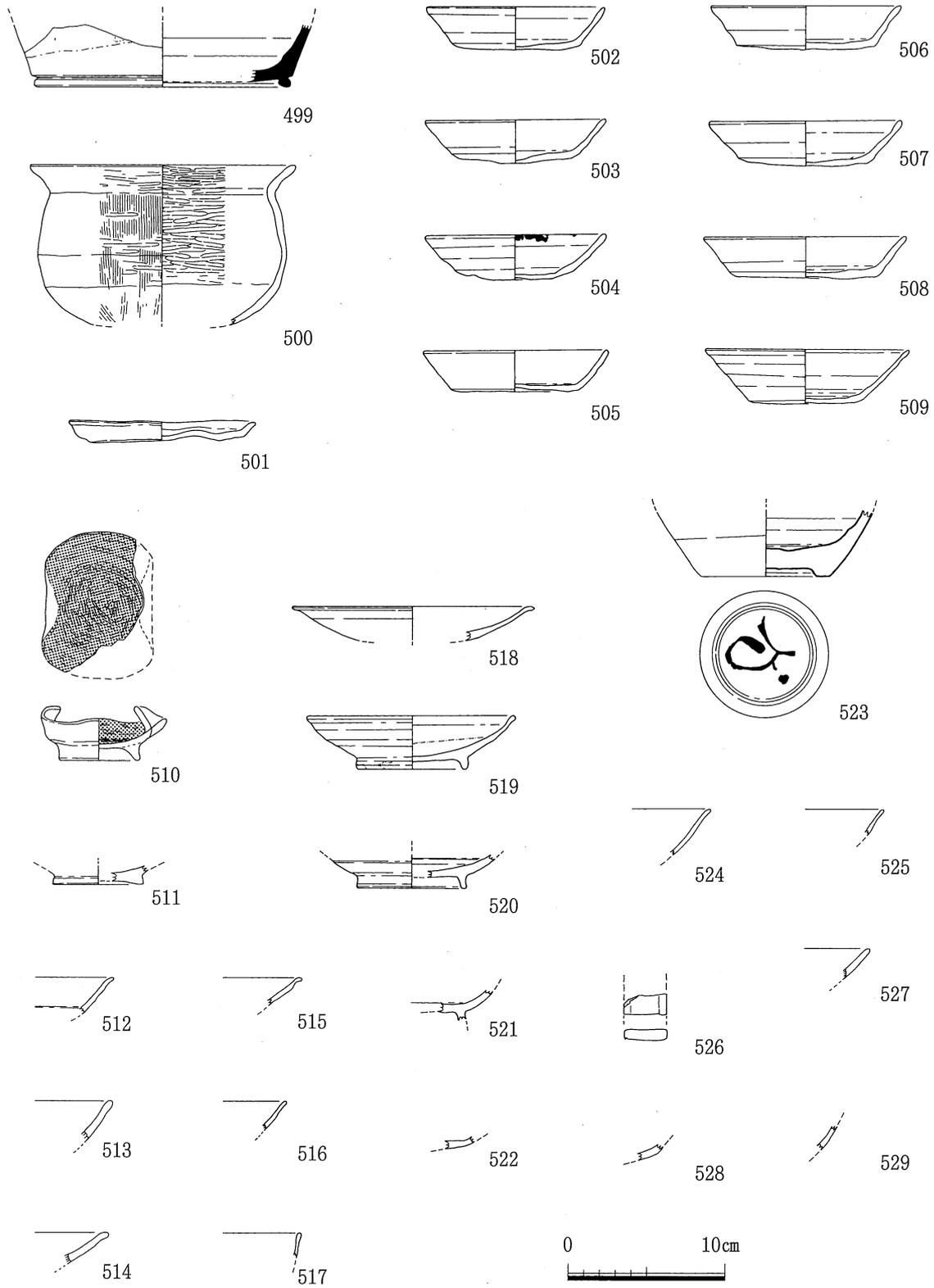


图99 古代造成層及び包含層出土遺物（6）

の混入した可能性がある。造成1で出土した遺物は杯(492)と緑釉陶器(491・495・496)である。造成2に比べると含まれる遺物の量は少ない。造成2で出土した遺物は、杯(502～509)、皿(501)、甕(500)、黒色土器耳皿(510)、緑釉陶器(514・516・519)、灰釉陶器(517)、風字硯(C1)である。造成3で出土した遺物は、椀(488)、黒色土器椀(489・490)、底部外面に墨書のある陶器(523)、銅鏡片(M1)である。しかし山土そのものからは土器はほとんど出土しておらず、椀(488)は、山土の下面から出土しており、それらは造成2に属する遺物である可能性が高い。ただし銅鏡片(M1)は、確実に造成層中から出土した。造成3の上面では杯(493・494)が出土しており、造成3を埋める中世の包含層からは青磁(497)、瓦片(498)、銅銭(M2)、鉄釘(M3～M5)、鉄製刀子(M6)と古代及び中世の土器が出土した。古代の造成土周辺の古代の包含層からは、須恵器壺(499)、緑釉陶器(511～513・515・518・520～522・526・528)、灰釉陶器(524・525・527・529)、土錘(C3～C5)が出土した。

Ⅲ 古代以前（古墳時代・縄紋時代）

中世と古代の遺構面のベースとなるのは砂質土で、いわゆる海岸の海浜の堆積土層である。この土層についても、面的に掘り下げたが遺構は検出されなかった。ただ掘り下げた過程で土器や石器が出土したが、それらは層的に分離して出土しておらず、新旧のものが混在していた。二次的な堆積による埋没であると考えられるが、それほど土器は摩滅していないことから、遠方から流されてきたものではなさそうである。

遺物は古墳時代と縄紋時代で、古墳時代は前期、縄紋時代は前期から中期である。古墳時代前期には足守川中流域の平野部に数多くの大規模な集落遺跡が形成されており、該期の吉備の土器は各地に移動している。当調査区で出土した土器も、足守川中流域の遺跡の動向との関係で理解できるのかもしれない。

縄紋土器は断片的ではあるものの、石器も比較的まとまって出土している。倉敷市北半のかつての島嶼部では、前期以降数多くの貝塚が形成されており、該期の中心地的様相を呈している。妹尾住田遺跡の周辺では、大内田貝塚に前期の遺物が含まれているものの、前期から中期の遺跡の形成は貧弱で、おそらく倉敷市北半島嶼部の中心地の縁辺となる地域の小規模集落、あるいはキャンプサイトであった可能性が高いと思われる。

1. 古墳時代前期の遺物（図100）

出土した遺物の量は少ない。図化できたのは3点で、そのほか細片となった甕や高杯が若干ある。遺物の時期幅は少なく、比較的単一時期の遺物でまとまる。当地の土器編年では亀川上層式⁽⁴⁾、高橋編年のXc期⁽⁵⁾に相当する。

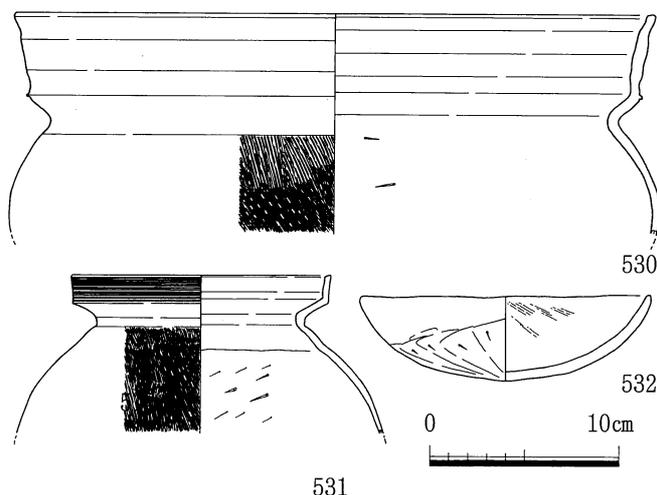


図100 古墳時代前期の遺物

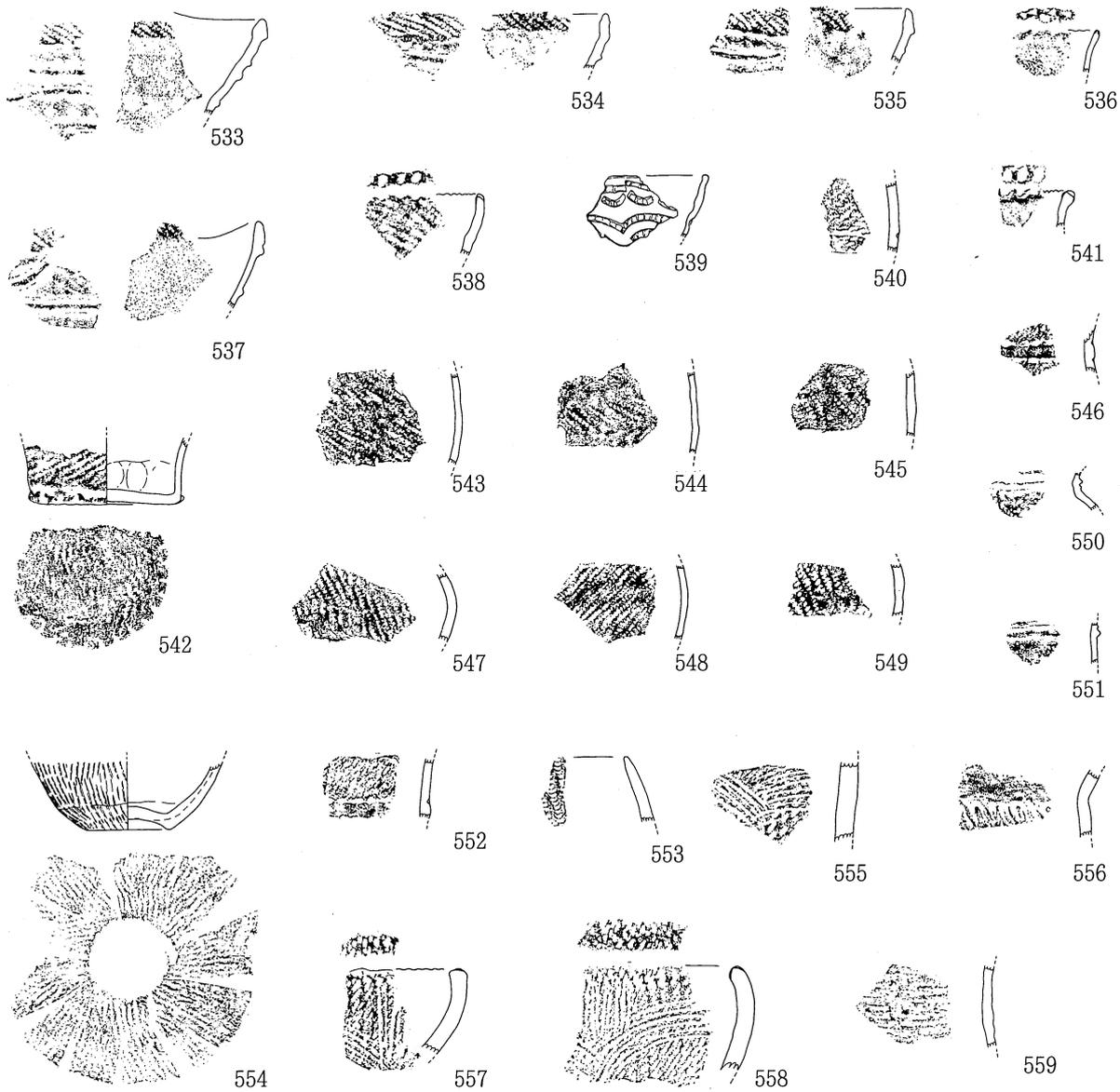


図101 縄紋時代の遺物 (1)

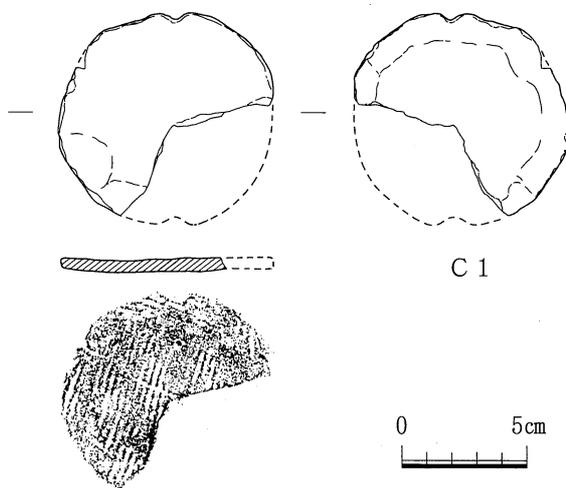


図102 縄紋時代の遺物 (2)

2. 縄紋時代の遺物 (図101、102、103)

土器、土製品、石器が出土している。土器は小片であるが器壁の厚さから2類に分けることができる。薄い器壁のもの(A類)は(533~552)で、比較的厚いもの(B類)は(553~559)である。A類は縄紋の密度がやや粗で、紋様も半截竹管の押し引き紋、細い粘土紐の貼付け突帯、爪形文で、口縁部内面は折り返し状に肥厚させて縄紋を施しているものがある。底部はやや上げ底気味の平底である。B類は地紋である縄紋の密度がA類よりも濃く、紋様も竹管状工具による沈線紋や爪形紋、貝殻圧痕紋である。底部は上げ底である。以上の特徴からA類は前期終末の里木I式、あるいは彦崎ZII式⁽⁶⁾と平行し、B類は中期の船元式⁽⁷⁾に併行すると考えられる。

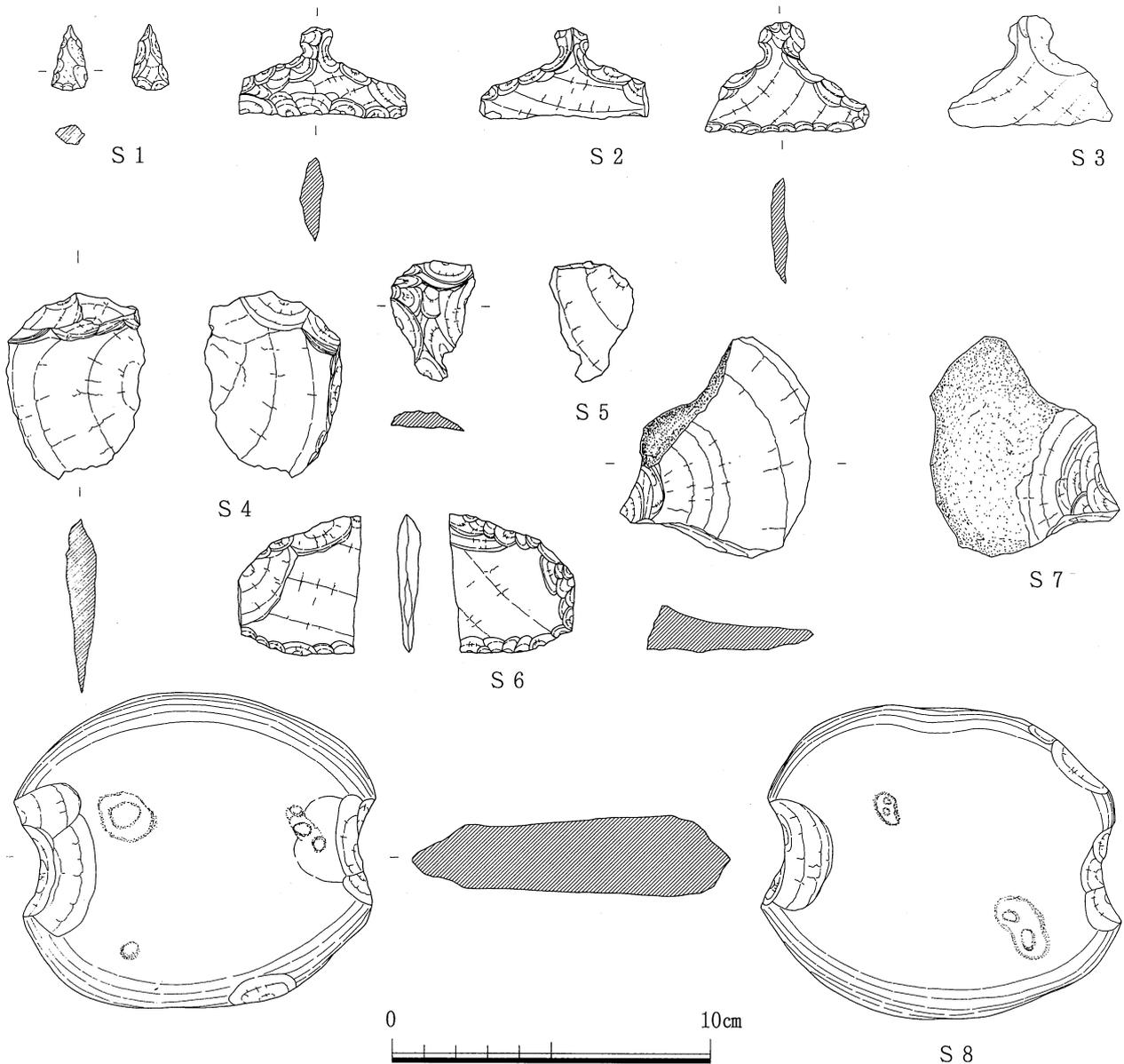


図103 縄紋時代の遺物 (3)

土製品は1点(C1)で、土器を円形に打ち欠いて整形し、一カ所にやや深めに打ち欠いていることから、土錘に用いられたと考えられる。比較的薄手であることや縄紋の密度がやや粗であることからA類の土器に伴う可能性が高い。

石器は、石鏃(S1)、石匙(S2・S3)、石錘(S8)、スクレイパー、剥片で、石錘は砂岩系の河原石、ほかはサヌカイトである。

注

- (1) 小野雅明「塩生遺跡発掘調査報告」『倉敷市埋蔵文化財センター年報』1 1994年
 - (2) 中四国中世土器研究会の平成13年度第1回遺物見学会の際、百瀬正恒氏より御教示を得た。
 - (3) 注2
 - (4) 柳瀬昭彦「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 1977年
 - (5) 高橋護「土師器の編年 中国・四国」『古墳時代の研究』6 雄山閣 1991年
 - (6) 間壁忠彦・間壁菫子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号 1971年
 - (7) 注6
- 平井勝「第3章縄文時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年

出土土器観察表

器形	土器番号	法量 (cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調	遺構
		口径	底径	器高				
椀	1	10.2	4.0	3.45	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、底部外面ヘラ切り痕あり。内面重ね焼痕あり。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P278
椀	2	10.5	4.7	3.4	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、底部外面ヘラ切り痕あり。内面重ね焼痕あり。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P278
椀	3	10.9	3.9	3.75	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、底部外面ヘラ切り痕あり。内面重ね焼痕あり。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P278
椀	4	11.6	4.2	3.65	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、底部外面ヘラ切り痕あり。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P278
椀	5	11.6	4.6	3.35	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、底部外面ヘラ切り痕あり。内面重ね焼痕あり。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P278
皿	6	6.8	4.9	1.2	内外面ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P278
皿	7	7.0	6.0	1.3	内外面ナデ、底部外面ヘラ切り後板圧痕。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P278
皿	8	7.2	6.2	1.3	内外面ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P278
備前焼壺	9	15.2	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	P400
椀	10	14.5	6.1	5.25	内面ミガキ、外面上半ヨコナデ、下半ナデ。	含長石石英	灰白色	P400
椀	11	14.4	—	—	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P400
椀	12	15.5	6.55	4.8	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P400
椀	13	11.6	6.05	4.95	外面ヨコミガキ後、内外面ヨコナデ。内面底部付近に黒斑あり。	含長石石英	淡黄褐色	P400
椀	14	15.1	—	—	内面ミガキ後、内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P400
皿	15	7.1	5.5	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P400
皿	16	7.2	5.3	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板圧痕。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P400
皿	17	7.3	5.35	1.65	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板圧痕。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P400
皿	18	7.8	6.1	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P400
皿	19	7.1	6.5	1.35	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板圧痕。	含長石石英	淡黄褐色	P400
皿	20	7.2	7.5	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡灰色	P400
皿	21	7.7	5.7	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。内面に重ね焼痕あり。	含長石石英	淡黄褐色	P400
皿	22	7.8	5.5	1.35	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P400
皿	23	8.85	5.4	2.0	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕。	含長石石英金雲母	灰白色	P400
皿	24	8.9	4.9	2.75	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	灰白色	P400
鍋	25	36.7	—	—	外面クテハケ、内面ヨコハケ後、口線端部内外面ナデ。	含長石石英金雲母	褐色	P400
カマド	26	—	—	—	内面ナナメハケ、外面ナデ。	含長石石英金雲母	褐色	P400
カマド	27	10.35	4.8	4.05	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英金雲母	灰白色	P446
カマド	28	11.2	4.75	3.85	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英金雲母	黄褐色	P446
カマド	29	11.3	5.15	3.7	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P446
カマド	30	11.5	4.6	4.15	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P446
カマド	31	10.8	4.3	3.75	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	淡黄褐色	P446
カマド	32	11.2	4.6	3.9	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P446
カマド	33	11.2	4.3	4.15	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内外面にスス付着。	含長石石英	黄褐色	P446
カマド	34	11.6	4.8	4.8	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P446
カマド	35	10.95	2.35	3.75	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P446

カ マ ド	36	11.15	2.65	4.05	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P 4 4 6
カ マ ド	37	11.4	4.1	4.2	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	淡黄褐色	P 4 4 6
カ マ ド	38	11.6	4.6	4.0	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 4 6
カ マ ド	39	11.0	4.2	3.15	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 4 6
カ マ ド	40	11.2	4.6	4.1	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 4 6
椀	41	11.4	5.3	4.45	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英金雲母	淡灰赤褐色	P 4 4 6
椀	42	12.3	4.2	4.05	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 4 6
椀	43	11.1	4.6	3.75	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P 4 4 6
椀	44	11.25	4.85	3.7	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P 4 4 6
椀	45	11.45	3.7	4.0	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	淡灰黄色	P 4 4 6
皿	46	6.35	4.05	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。	含長石石英	黄 橙 色	P 4 4 6
皿	47	7.1	4.8	1.35	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P 4 4 6
皿	48	7.2	5.8	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英	橙 色	P 4 4 6
皿	49	7.35	5.2	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 4 6
皿	50	7.5	5.75	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡灰褐色	P 4 4 6
皿	51	6.7	5.0	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 4 6
皿	52	7.1	5.4	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 4 6
皿	53	7.6	5.8	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P 4 4 6
皿	54	7.8	5.4	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	P 4 4 6
皿	55	6.7	5.0	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 4 6
皿	56	7.1	5.65	1.35	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 4 6
鍋	57	43.0	—	—	内面ヨコハケ、外面タテハケ後、内外面ヨコナデ。	含長石石英金雲母	黄 橙 色	P 4 4 6
青 磁 碗	58	—	—	—	台形状の厚い高台で、鉛色ガラス質の釉である。	—	—	P 4 4 6
青 磁 碗	59	—	—	—	鉛色ガラス質の釉である。	—	—	P 4 4 6
青 磁	60	—	—	—	釉の発色は青味を帯びた緑色を主体とする。	—	—	P 4 4 6
椀	61	10.6	5.0	3.6	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	黄 橙 色	P 4 5 8
椀	62	11.1	4.8	4.15	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英金雲母	淡灰褐色	P 4 5 8
椀	63	11.4	4.7	4.05	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 5 8
椀	64	11.7	4.8	4.25	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
椀	65	10.95	4.5	3.45	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
椀	66	11.2	4.9	3.7	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡灰黄褐色	P 4 5 8
椀	67	11.7	5.35	4.0	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 5 8
椀	68	11.8	5.0	3.6	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
椀	69	11.0	4.5	4.05	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡灰黄褐色	P 4 5 8
椀	70	11.2	5.0	3.95	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 5 8
椀	71	11.7	5.1	4.95	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
椀	72	12.0	4.6	3.75	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	淡灰褐色	P 4 5 8
椀	73	11.05	4.8	4.4	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
椀	74	11.3	4.8	4.1	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P 4 5 8
皿	75	7.4	5.3	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P 4 5 8
皿	76	6.4	4.7	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	77	6.5	4.5	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	78	6.55	4.9	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	P 4 5 8
皿	79	6.7	5.7	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英黒雲母	淡橙褐色	P 4 5 8
皿	80	6.7	5.1	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	81	6.7	5.6	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	82	6.8	5.2	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡黄褐色	P 4 5 8
皿	83	6.8	5.6	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡灰褐色	P 4 5 8
皿	84	6.8	5.7	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡灰黄褐色	P 4 5 8
皿	85	6.8	5.6	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	86	6.9	4.8	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	87	6.95	5.5	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡灰褐色	P 4 5 8
皿	88	7.0	5.7	1.05	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	89	7.0	5.2	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英金雲母	淡灰褐色	P 4 5 8
皿	90	7.0	5.4	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	91	7.0	5.8	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡黄褐色	P 4 5 8
皿	92	7.1	5.4	1.35	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡灰黄色	P 4 5 8
皿	93	7.0	5.5	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	94	7.0	5.05	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	95	7.0	5.4	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	96	7.1	5.4	1.0	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	97	7.1	6.0	1.15	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	98	7.1	5.8	1.1	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	P 4 5 8
皿	99	7.1	5.2	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	100	7.1	5.3	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡黄褐色	P 4 5 8
皿	101	7.1	5.8	1.7	内外面ヨコナデ、底部外面へら切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8

皿	102	7.1	5.6	1.8	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英金雲母	淡灰橙色	P 4 5 8
皿	103	7.2	5.2	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英金雲母	淡灰橙色	P 4 5 8
皿	104	7.2	5.6	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	105	7.25	5.6	1.35	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英黒雲母	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	106	7.25	5.8	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	107	7.25	5.7	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	108	7.4	5.4	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 4 5 8
皿	109	7.5	5.7	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙 色	P 4 5 8
皿	110	7.6	5.8	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	111	7.6	5.4	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	橙 色	P 4 5 8
皿	112	7.8	5.8	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	113	7.8	5.6	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	114	7.8	5.6	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡黄橙色	P 4 5 8
皿	115	7.9	5.7	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	116	6.9	5.5	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡黄橙色	P 4 5 8
皿	117	7.25	5.8	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	118	7.3	5.7	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	119	7.3	5.3	1.35	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 4 5 8
皿	120	7.6	5.8	1.15	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	橙 色	P 4 5 8
白磁碗	121	—	—	—	釉は灰色を帯びた白色を呈し、若干厚目に施釉される。	—	—	P 4 5 8
緑釉碗	122	—	—	—	黄色を帯びた緑色の釉である。	—	—	P 4 5 8
緑釉底部	123	—	8.2	—	やや黒ずんだ緑色の釉である。	—	—	—
魚住焼こね鉢	124	—	9.5	—	内外面ナデ、内面ヨコナデ。	含長石石英	灰 色	P 4 5 8
瓦器羽釜	125	7.2	—	—	口縁部外面ヨコナデ、ナデ。	含長石石英	灰 色	P 5 3 7
灰釉小皿	126	—	—	5.1	底部外面糸切り、内外面ナデ。	含長石石英	淡黄灰色	P 5 3 7
碗	127	10.6	3.6	3.3	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英黒雲母	淡褐橙色	P 5 3 7
碗	128	10.4	4.7	3.45	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	黄 橙 色	P 5 3 7
碗	129	10.7	4.35	3.7	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英黒雲母	淡黄橙色	P 5 3 7
碗	130	11.0	4.8	2.8	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英黒雲母	淡灰黄褐色	P 5 3 7
碗	131	11.2	4.5	3.7	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 5 3 7
碗	132	11.9	5.6	4.2	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 5 3 7
碗	133	11.4	—	—	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	P 5 3 7
皿	134	6.0	5.3	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 5 3 7
皿	135	6.6	5.4	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	黄 橙 色	P 5 3 7
皿	136	7.1	5.3	1.15	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡黄橙色	P 5 3 7
皿	137	6.4	5.0	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	橙 色	P 5 3 7
皿	138	6.8	5.0	1.35	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡黄橙色	P 5 3 7
皿	139	6.65	5.2	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英黒雲母	淡橙褐色	P 5 3 7
碗	140	10.8	5.4	3.0	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P 5 5 1
碗	141	11.0	4.8	3.4	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P 5 5 1
碗	142	11.1	4.4	3.8	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P 5 5 1
碗	143	11.4	5.0	4.4	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P 5 5 1
杯	144	11.0	8.0	3.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P 5 5 1
碗	145	10.0	4.0	3.8	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P 5 5 1
碗	146	—	—	—	ヨコヘラミガキ後、内面に暗紋、内黒。	含長石石英	橙 褐色	P 5 5 1
皿	147	7.0	4.2	1.8	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙 灰 色	P 5 5 1
皿	148	7.0	5.0	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙 灰 色	P 5 5 1
皿	149	7.4	5.2	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙 灰 色	P 5 5 1
皿	150	7.4	5.8	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙 灰 色	P 5 5 1
皿	151	7.3	5.4	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙 灰 色	P 5 5 1
皿	152	8.4	6.0	1.0	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙 灰 色	P 5 5 1
皿	153	7.4	6.0	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙 灰 色	P 5 5 1
皿	154	7.6	5.4	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目。	含長石石英	橙 灰 色	P 5 5 1
皿	155	8.2	6.4	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目。	含長石石英	橙 灰 色	P 5 5 1
青磁碗	156	—	3.2	—	鉛色ガラス質の釉である。	—	—	P 5 5 1
白磁碗	157	—	—	—	詳細不明。	—	—	P 5 5 1
灰釉陶器	158	—	—	—	詳細不明。	—	—	P 5 5 1
碗	159	10.75	4.2	3.55	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	灰 白 色	P 2
碗	160	10.65	4.15	4.5	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	灰 黄 色	P 2
碗	161	10.9	5.0	3.75	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	黄 橙 色	P 2
碗	162	11.0	4.45	3.5	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	黄 橙 色	P 2
碗	163	11.05	4.7	3.5	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英金雲母	黄 橙 色	P 2
碗	164	11.45	4.5	3.6	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	黄 橙 色	P 2
杯	165	9.05	5.55	3.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡 黄 色	P 2
皿	166	6.6	4.8	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英黒雲母	淡黄橙色	P 2
皿	167	6.8	5.0	1.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英黒雲母	灰 白 色	P 2

皿	168	6.9	5.1	1.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	灰白色	P 2
皿	169	6.95	5.0	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英黒雲母	黄橙色	P 2
皿	170	7.0	5.6	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	黄橙色	P 2
皿	171	7.1	5.6	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英黒雲母	黄橙色	P 2
皿	172	7.2	5.6	0.95	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	黄橙色	P 2
皿	173	7.3	6.0	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	灰白色	P 2
皿	174	7.4	5.7	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	灰白色	P 2
皿	175	7.4	4.85	1.8	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	灰白色	P 2
皿	176	7.7	5.3	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英	淡黄橙色	P 2
鍋	177	—	—	—	外面タテハケ、内面ヨコハケ後、内外面ヨコナデ。	含長石石英金雲母	黄橙色	P 2
椀	178	11.4	5.0	4.0	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡黄色	P 2 7
椀	179	10.65	4.95	3.8	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	灰白色	P 2 7
椀	180	10.7	4.65	3.45	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	灰白色	P 2 7
椀	181	11.2	4.6	3.7	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	淡黄色	P 2 7
椀	182	11.55	5.1	4.1	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	灰白色	P 2 7
椀	183	11.55	4.6	5.1	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	灰白色	P 2 7
椀	184	11.6	5.1	4.6	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英黒雲母	橙黄色	P 2 7
椀	185	11.65	4.85	4.4	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
椀	186	11.7	4.9	4.2	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	灰白色	P 2 7
椀	187	11.7	5.25	4.7	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	灰白色	P 2 7
椀	188	11.8	4.7	4.7	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	淡黄色	P 2 7
椀	189	11.9	4.9	4.3	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
椀	190	12.0	4.9	4.25	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英金雲母	橙黄色	P 2 7
椀	191	12.05	4.95	4.3	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	灰白色	P 2 7
椀	192	12.05	5.1	4.4	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
椀	193	12.25	5.3	4.1	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英金雲母	黄橙色	P 2 7
椀	194	12.3	5.3	4.4	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石石英	灰白色	P 2 7
椀	195	12.3	5.5	4.55	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英	灰白色	P 2 7
椀	196	13.9	5.25	4.5	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
椀	197	14.0	6.05	4.9	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。内面に重ね焼痕。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
皿	198	7.0	5.95	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	199	6.95	4.7	1.8	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。灯明痕あり。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	200	6.2	3.7	1.8	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	灰白色	P 2 7
皿	201	6.45	5.0	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
皿	202	6.75	5.0	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄色	P 2 7
皿	203	6.85	5.4	1.9	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
皿	204	6.95	5.4	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	205	7.0	4.35	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P 2 7
皿	206	7.1	5.3	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	灰白色	P 2 7
皿	207	7.05	4.7	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	208	7.05	4.8	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	209	7.05	4.5	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	210	7.15	5.6	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	211	7.3	5.65	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	212	7.2	5.6	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	213	7.3	5.4	1.05	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	214	7.35	5.6	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	215	7.3	5.5	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	216	7.35	5.3	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	217	7.35	5.75	1.35	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	灰白色	P 2 7
皿	218	7.5	5.2	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	219	7.5	5.1	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	220	7.75	5.6	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英黒雲母	黄橙色	P 2 7
皿	221	7.75	5.6	1.75	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P 2 7
皿	222	7.85	5.05	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石石英黒雲母	黄橙色	P 2 7
皿	223	7.15	5.25	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	黄橙色	P 2 7
皿	224	6.5	5.0	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英黒雲母	黄橙色	P 2 7
皿	225	6.45	4.35	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
皿	226	6.65	5.45	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	227	6.75	4.9	1.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	228	6.75	4.8	1.15	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
皿	229	6.8	4.85	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	橙黄色	P 2 7
皿	230	6.9	5.95	1.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目圧痕あり。	含長石石英黒雲母	灰白色	P 2 7
皿	231	6.9	5.3	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	灰白色	P 2 7
皿	232	6.9	5.35	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	黄橙色	P 2 7
皿	233	6.8	5.0	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英黒雲母	淡黄色	P 2 7

皿	300	7.5	5.8	1.65	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	301	7.4	5.85	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英黒雲母	灰白色	P 2 7
皿	302	7.45	5.55	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	灰黄色	P 2 7
皿	303	7.3	5.0	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	304	7.6	5.9	1.0	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	灰白色	P 2 7
皿	305	7.45	5.5	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	306	7.5	5.6	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	灰黄色	P 2 7
皿	307	7.6	5.6	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
皿	308	7.55	5.9	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
皿	309	7.6	5.95	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	310	7.8	5.55	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
皿	311	7.85	6.2	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	312	7.75	5.75	1.65	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	灰白色	P 2 7
皿	313	7.4	5.3	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	314	7.05	5.4	1.75	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	灰白色	P 2 7
皿	315	7.45	5.75	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	316	7.6	5.2	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
皿	317	7.4	6.4	1.75	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	318	6.95	6.2	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	319	7.2	4.9	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
皿	320	7.05	5.5	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	321	7.0	5.6	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英黒雲母	灰白色	P 2 7
皿	322	7.3	5.8	1.75	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
皿	323	7.6	5.65	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	324	6.85	4.85	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	灰白色	P 2 7
皿	325	7.2	5.55	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	326	7.4	5.65	1.9	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	327	7.3	5.95	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	328	7.3	5.35	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	329	7.45	5.6	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	330	6.8	5.05	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
皿	331	7.2	4.95	1.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	P 2 7
皿	332	7.9	5.9	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。内面中央ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P 2 7
椀	333	12.4	6.7	3.9	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	建物 2
椀	334	13.25	6.6	4.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	橙 色	集石遺構 2
椀	335	17.2	8.2	5.7	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	橙 色	P 9 9
椀	336	16.75	7.9	5.75	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	黄 橙 色	P 9 9
杯	337	11.1	8.4	2.95	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	黄 橙 色	P 9 9
杯	338	11.4	8.55	2.9	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	橙 色	P 9 9
杯	339	11.6	8.6	2.95	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	黄 橙 色	P 9 9
杯	340	11.95	9.1	2.85	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	橙 色	P 9 9
杯	341	12.0	9.0	3.05	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	黄 橙 色	P 9 9
杯	342	12.3	9.55	3.2	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	橙 色	P 9 9
甕	343	—	—	—	外面ハケ、内面底部付近指頭圧痕、上面はハケ。	含長石石英	淡橙褐色	P 9 9
椀	344	17.1	8.5	5.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	P 1 1 4
椀	345	17.5	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英角閃石	黄 橙 色	P 1 1 4
椀	346	16.0	—	—	内外面ヨコナデ、内黒。	含長石石英金雲母	橙 色	P 1 1 4
杯	347	10.7	7.9	—	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	黄 橙 色	P 1 1 4
杯	348	11.6	9.1	—	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	黄 橙 色	P 1 1 4
杯	349	12.8	10.2	—	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡 橙 色	P 1 1 4
甕	350	—	—	—	外面上半タテハケ後下半ヨコハケ、内面ハケ後下半指頭圧痕。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	P 1 1 4
椀	351	16.05	8.0	6.05	底部外面ヘラ切り後ナデ、外面下半ケズリ後ナデ、内面ヘラミガキ、内黒。	含長石石英角閃石	橙 色	P 1
杯	352	11.6	9.0	2.6	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	P 1
杯	353	11.7	8.5	2.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	P 1
杯	354	12.4	8.9	3.2	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	P 1
杯	355	11.8	9.2	2.85	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	P 1
椀	356	17.2	8.2	6.15	底部外面ヘラ切り後ナデ、外面下半ケズリ後ナデ、内面ヘラミガキ、内黒。	含長石石英角閃石	橙 色	P 1
杯	357	11.3	8.95	2.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	橙 色	P 1
杯	358	11.5	8.4	2.85	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	P 1
杯	359	11.8	9.0	3.2	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	P 1
杯	360	11.8	8.7	3.05	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	P 1
杯	361	12.0	9.4	3.05	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	P 1
甕	362	—	—	—	外面タテハケ後ナデ、内面ヨコハケ後、下半ナデ。	含長石石英	褐 灰 色	P 1
蓋	363	14.3	—	3.75	内外面ヘラミガキ、つまみ付近ヨコナデ、内黒。	含長石石英	黄 橙 色	P 1 8 8
壺	364	11.65	8.9	12.75	内外面ヨコミガキ、口縁部及び底部外面付近ヨコナデ、内黒。	含長石石英角閃石	黄 橙 色	P 1 8 8
壺	365	12.9	9.6	13.3	内外面ヨコミガキ、口縁部及び底部外面付近ヨコナデ、内黒。	含長石石英角閃石	橙 色	P 1 1 3

蓋	366	14.2	—	3.8	内外面ヨコミガキ、口縁部及びつまみ付近ヨコナデ、内黒。	含長石石英角閃石	橙 色	P 6 7 4
壺	367	13.3	9	12.85	内外面ヨコミガキ、口縁部及び底部外面付近ヨコナデ、内黒。	含長石石英金雲母	橙 色	P 6 7 4
碗	368	14.7	6.8	5.4	底部外面ヘラ切り後ナデ、外面下半ケズリ後ナデ、内面ヘラミガキ、内黒。	含長石石英金雲母	黄 橙 色	P 2 3 8
碗	369	14.1	—	—	内外面ヘラミガキ、内黒。	含長石石英角閃石	淡 橙 色	P 2 3 8
皿	370	11.8	11.3	1.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	淡 橙 色	P 2 3 8
杯	371	11.05	7.9	3.05	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	黄 橙 色	P 2 3 8
杯	372	11.3	8.2	3.35	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ。	含長石石英角閃石	淡黄橙色	P 2 3 8
杯	373	11.3	8.2	2.7	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	P 2 3 8
杯	374	11.5	8.45	3.2	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	黄 橙 色	P 2 3 8
碗	375	13.3	7.3	4.6	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコヘラミガキ、内黒。	含長石石英角閃石	橙 色	P 2 2
碗	376	14.8	—	—	内外面ヨコミガキ、外面赤色顔料塗布、内面暗文、内黒。	含長石石英	黄 橙 色	P 2 2
碗	377	—	8.1	—	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコヘラミガキ、内黒。	含長石石英	黄 橙 色	P 2 2
杯	378	11.4	8.1	2.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ、赤色顔料塗布。	含長石石英角閃石	橙 色	P 2 2
杯	379	11.7	7.8	2.85	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	P 2 2
杯	380	11.85	7.5	2.6	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	橙 色	P 2 2
杯	381	11.8	4.9	2.7	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ、赤色顔料塗布。	含長石石英角閃石	橙 色	P 2 2
皿	382	12.3	10.5	1.05	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ、赤色顔料塗布。	含長石石英	橙 色	P 2 2
杯	383	11.4	8.3	3.1	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	黄 橙 色	P 2 3
碗	384	13.3	7.5	3.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	黄 橙 色	P 2 3
青磁碗	385	—	—	—	小片のため詳細不明。	—	—	P 2 3
碗	386	16.7	—	—	内外面ヨコミガキ、内黒。	含長石石英角閃石	橙 色	P 2 3
緑釉陶器皿	387	7.3	15.1	3.2	尾張産。	—	淡 緑 色	P 2 3
杯	388	10.2	8.0	2.85	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	淡 褐 色	P 6 6 5
杯	389	11.7	7.6	3.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	淡 褐 色	P 6 6 5
碗	390	11.8	5.6	4.3	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	P 6 6 5
碗	391	12.4	6.4	5.05	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	P 6 6 5
碗	392	16.45	7.6	6.1	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコヘラミガキ、内黒。	含長石石英角閃石	黄 橙 色	P 5 0
碗	393	17.3	4.45	5.7	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコヘラミガキ、内黒。	含長石石英	淡黄橙色	P 5 0
須恵器碗	394	18.0	7.1	6.3	底部外面糸切り、内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰 色	溝 4 土面
須恵器杯	395	16.4	6.0	8.2	底部外面ヘラ切り、内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰 色	溝 4
須恵器碗	396	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰 色	溝 4 土面
須恵器碗	397	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰 色	溝 4 土面
碗	398	15.9	8.8	5.35	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	橙 色	溝 4
碗	399	13.8	7.7	4.25	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコヘラミガキ、内黒。	含長石石英	淡黄褐色	溝 4
碗	400	14.0	6.7	4.65	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコヘラミガキ、内黒。	含長石石英	淡黄橙色	溝 4
碗	401	15.5	7.9	4.95	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコヘラミガキ、内黒。	含長石石英	黄 橙 色	溝 4
碗	402	15.5	7.4	5.1	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコヘラミガキ、内黒。	含長石石英角閃石	橙 色	溝 4
杯	403	11.5	8.0	2.9	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	橙 色	溝 4
杯	404	12.0	8.0	3.4	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	橙 色	溝 4
杯	405	12.1	9.0	2.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	溝 4
杯	406	12.15	8.65	2.65	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	溝 4
杯	407	12.15	8.1	2.7	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	淡 橙 色	溝 4
杯	408	12.2	8.6	2.75	底部外面ヘラ切り後指頭圧痕、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ。	含長石石英	橙 色	溝 4
杯	409	12.45	9.3	2.95	底部外面ヘラ切り後指頭圧痕、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	溝 4
杯	410	12.6	9.4	2.6	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	黄 橙 色	溝 4
杯	411	12.6	8.8	2.75	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	溝 4
杯	412	12.4	8.7	2.8	底部外面ヘラ切り後指頭圧痕、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	溝 4
杯	413	12.6	8.8	2.9	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	溝 4
杯	414	12.6	9.3	3.0	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	溝 4
杯	415	13.0	9.1	3.2	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	橙 色	溝 4
杯	416	13.05	9.2	2.75	底部外面ヘラ切り後指頭圧痕、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ。	含長石石英	橙 色	溝 4
皿	417	12.2	11.1	1.35	底部外面ヘラ切り後指頭圧痕、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ。	含長石石英	淡 褐 色	溝 4
皿	418	12.35	10.9	1.15	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	黄 橙 色	溝 4
皿	419	12.9	11.1	1.5	底部外面ヘラ切り後指頭圧痕、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ。	含長石石英角閃石	橙 色	溝 4
皿	420	13.0	11.4	1.4	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	淡 橙 色	溝 4
皿	421	13.35	9.3	1.55	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	橙 色	溝 4
皿	422	12.7	6.8	2.55	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコヘラミガキ、内黒。	含長石石英	黄 橙 色	溝 4
皿	423	13.0	7.6	2.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、外面ミガキ後、内外面ヨコナデ、内黒。	含長石石英角閃石	黄 橙 色	溝 4
越州窯産青磁碗	424	—	—	8.7	底部内面に重ね焼痕あり。	—	—	溝 4
緑釉陶器稜碗	425	13.7	—	—	長門産。	—	淡 緑 色	溝 4
緑釉陶器輪花碗	426	13.4	—	—	京都産。	—	淡 緑 色	溝 4
灰釉陶器碗	427	14.8	7.2	4.2	黒笹90号窯式。	—	淡灰白色	溝 4
緑釉陶器瓶	428	—	—	—	尾張産、輪花紋の陰刻あり。	—	濃 緑 色	溝 4
緑釉陶器碗	429	19.4	9.2	5.7	尾張産。	—	濃 緑 色	溝 4
緑釉陶器輪花碗	430	16.6	—	—	京都産。	—	淡 緑 色	溝 4
緑釉陶器碗	431	17.2	—	—	京都産。	—	淡 緑 色	溝 4

灰釉陶器皿	432	18.0	—	—	黒笹90号窯式。	—	灰白色	溝4
緑釉陶器小型碗	433	9.3	5.0	3.5	京都産。	—	緑色	溝4
緑釉陶器碗	434	10.5	—	—	京都産。	—	緑色	溝4
緑釉陶器高台	435	—	—	6.2	京都産。	—	緑色	溝4
緑釉陶器高台	436	—	—	6.2	京都産。	—	緑色	溝4
緑釉陶器香炉(合子)	437	9.4	—	—	京都産。	—	淡緑色	溝4
灰釉陶器皿	438	13.6	6.1	3.3	折戸53号窯式。	—	淡灰白色	溝4
灰釉陶器皿	439	14.6	5.9	3.1	黒笹90号窯式。	—	淡灰白色	溝4
緑釉陶器皿	440	14.1	6.3	3.05	京都産。	—	緑色	溝4
緑釉陶器皿	441	14.9	6.8	2.9	京都産。	—	濃緑色	溝4
緑釉陶器皿	442	15.1	2.7	6.6	京都産。	—	濃緑色	溝4
緑釉陶器段皿	443	20.6	—	—	尾張産。	—	濃緑色	溝4
釉陶器高台	444	—	—	7.4	京都産。	—	緑灰色	溝4
緑釉陶器高台	445	—	—	10.1	京都産。	—	緑色	溝4
釉陶器高台	446	—	—	6.8	京都産。	—	緑色	溝4
緑釉陶器壺(?)	447	—	—	17.9	京都産。	—	緑色	溝4
緑釉陶器皿	448	14.3	6.2	2.8	京都産。	—	淡緑色	溝4
緑釉陶器皿	449	14.9	6.3	3.0	京都産。	—	淡緑色	溝4
緑釉陶器皿	450	15.2	2.9	6.9	京都産。	—	淡緑色	溝4
緑釉陶器皿	451	13.7	—	—	京都産。	—	淡緑色	溝4
緑釉陶器底部	452	—	—	6.9	京都産。	—	淡緑色	溝4
緑釉陶器碗	453	—	—	—	京都産。	—	淡緑色	溝4
緑釉陶器碗	454	—	—	—	京都産。	—	淡緑色	溝4
緑釉陶器碗	455	—	—	—	京都産。	—	淡緑色	溝4
緑釉陶器碗	456	—	—	—	京都産。	—	淡緑色	溝4
緑釉陶器壺(?)	457	—	—	—	京都産(?)。	—	淡緑色	溝4
椀	458	15.0	7.3	5.6	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡褐橙色	溝5
椀	459	15.2	7.2	5.6	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	橙黄色	溝5
椀	460	15.5	7.45	5.6	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	溝5
椀	461	11.4	6.1	4.4	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡赤橙色	溝5
椀	462	11.6	5.9	4.25	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡褐橙色	溝5
椀	463	11.9	6.0	4.55	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	溝5
椀	464	15.6	8.6	6.5	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	淡赤橙色	溝5
椀	465	15.8	7.3	6.3	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	溝5
椀	466	15.3	—	—	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡灰褐色	溝5
椀	467	12.45	6.3	4.15	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡灰褐色	溝5
椀	468	13.75	7.6	4.4	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	淡褐橙色	溝5
須臾器底部	469	—	17.0	—	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後ナデ。	含長石石英	灰褐色	溝5
鉢	470	21.0	—	—	内外面ヨコミガキ後ナデ、口縁部付近ヨコナデ、内黒。	含長石石英	淡褐色	溝5
甕	471	21.7	—	—	外面平行タタキ、内面ナデ。	含長石石英金雲母	黄橙色	溝5
杯	472	9.6	6.9	2.35	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	黄橙色	溝5
杯	473	9.8	6.9	2.2	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	橙黄色	溝5
杯	474	9.8	7.3	2.4	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡橙色	溝5
杯	475	9.9	6.5	2.45	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	淡褐色	溝5
緑釉陶器皿	476	9.4	—	—	京都産。	—	濃緑色	溝5
緑釉陶器皿	477	9.6	—	—	京都産。	—	緑灰色	溝5
杯	478	10.8	6.9	3.5	底部外面へラ切り、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡橙色	溝5
杯	479	11.8	7.4	4.1	底部外面へラ切り、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡黄橙色	溝5
緑釉陶器	480	—	—	—	京都産。	—	緑灰色	溝5
緑釉陶器	481	—	—	—	京都産。	—	緑灰色	溝5
甕	482	31.0	—	—	外面ハケ後ナデ後ミガキ、内面ハケ後ナデ、口縁部付近ヨコナデ。	含長石石英金雲母	橙黄色	溝5
カマド	483	—	—	—	外面ハケ、内面ナデ。	含長石石英金雲母	淡褐橙色	溝5
椀	484	15.5	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英金雲母	淡赤橙色	溝7
椀	485	—	11.1	—	内面ヨコナデ後ナデ、外面ヨコナデ後ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	溝7
甕	486	35.9	—	—	内外面ナデ、口縁部付近ヨコナデ。	含長石石英金雲母	淡黄褐色	溝7
緑釉陶器	487	—	6.1	—	京都産。	—	淡緑色	溝7
椀	488	14.6	7.1	4.55	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙黄色	古代造成層
椀	489	14.0	7.25	5.3	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコヘラミガキ、内黒。	含長石石英角閃石	淡黄褐色	古代造成層
椀	490	14.8	7.7	4.45	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコヘラミガキ、内黒。	含長石石英金雲母	橙黄色	古代造成層
緑釉陶器碗	491	—	6.6	—	京都産。	—	濃緑色	古代造成層
杯	492	11.7	8.8	3.0	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	橙黄色	古代造成層
杯	493	9.9	7.4	2.1	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡橙色	古代造成層
杯	494	10.0	7.6	2.65	底部外面へラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英金雲母	淡橙色	古代造成層
緑釉陶器	495	—	—	—	詳細不明。	—	緑色	古代造成層
緑釉陶器	496	—	—	—	詳細不明。	—	緑色	古代造成層
青磁碗	497	—	—	—	外面に蓮弁の削り出し紋様がある。	—	濃緑色	包含層

丸瓦	498	—	—	—	凸面はナデ、凹面は布目。	含長石石英	灰色	包含層
須恵器壺	499	—	16.0	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰色	包含層
甕	500	16.8	—	—	内外面ヘラミガキ後、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡橙褐色	古代造成層
皿	501	11.7	9.8	1.45	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	淡黄褐色	古代造成層
杯	502	11.2	8.2	2.75	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙色	古代造成層
杯	503	11.4	8.2	2.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙色	古代造成層
杯	504	11.3	7.7	3.95	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙色	古代造成層
杯	505	11.62	8.2	2.7	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙色	古代造成層
杯	506	12.0	8.8	2.85	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	淡橙色	古代造成層
杯	507	12.1	8.7	2.9	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙色	古代造成層
杯	508	12.7	9.7	2.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英角閃石	橙色	古代造成層
杯	509	12.9	7.3	4.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ。	含長石石英	橙色	古代造成層
耳皿	510	—	4.9	3.5	内面ミガキ、外面ヨコナデ、内黒。	含長石石英角閃石	黄橙色	古代造成層
緑釉陶器	511	—	5.8	—	京都産。	—	緑灰色	包含層
緑釉陶器	512	—	—	—	京都産。	—	緑灰色	包含層
緑釉陶器	513	—	—	—	京都産。	—	緑灰色	包含層
緑釉陶器皿	514	—	—	—	京都産。	—	淡緑色	古代造成層
緑釉陶器皿	515	—	—	—	京都産。	—	淡緑色	包含層
緑釉陶器	516	—	—	—	京都産。	—	淡緑色	古代造成層
灰釉陶器	517	—	—	—	詳細不明。	—	灰色	古代造成層
緑釉陶器皿	518	15.0	—	—	京都産。	—	緑灰色	包含層
緑釉陶器皿	519	13.05	6.75	3.45	京都産。	—	淡緑色	古代造成層
緑釉陶器	520	—	6.8	—	京都産。	—	淡緑色	包含層
緑釉陶器	521	—	—	—	京都産。	—	淡緑色	包含層
緑釉陶器	522	—	—	—	京都産。	—	淡緑色	包含層
産地不明陶器壺	523	—	8.2	—	淡青灰色の釉が内外面に認められ、底部外面には墨書が認められる。	—	淡青灰色	古代造成層
灰釉陶器	524	—	—	—	詳細不明。	—	灰色	包含層
灰釉陶器	525	—	—	—	詳細不明。	—	灰色	包含層
緑釉陶器瓶把手	526	—	—	—	京都産。	—	緑灰色	包含層
灰釉陶器	527	—	—	—	詳細不明。	—	灰色	包含層
緑釉陶器	528	—	—	—	京都産。	—	淡緑色	包含層
灰釉陶器	529	—	—	—	詳細不明。	—	灰色	包含層
鉢	530	33.4	—	—	外面タテハケ、内面ヨコケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	砂層
甕	531	13.2	—	—	外面タテハケ、内面ヨコケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	砂層
鉢	532	15.2	—	4.2	外面下半ケズリ、内面ハケ後ナデ。	含長石石英	淡橙灰色	砂層
縄紋土器	533	—	—	—	貼り付け突帯、口縁部肥厚し縄紋を施す。	含長石石英	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	534	—	—	—	貼り付け突帯、口縁部肥厚し縄紋を施す。	含長石石英	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	535	—	—	—	貼り付け突帯、口縁部肥厚し縄紋を施す。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	536	—	—	—	口縁端部を押圧し刻む。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	537	—	—	—	貼り付け突帯、口縁部肥厚し縄紋を施す。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	538	—	—	—	口縁端部を押圧し刻む。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	539	—	—	—	押し絞りを施す。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	540	—	—	—	縄紋を施す。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	541	—	—	—	口縁端部刻み目。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	542	—	8.6	—	外端部に刻み目をめぐらす。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	543	—	—	—	縄紋を施す。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	544	—	—	—	縄紋を施す。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	545	—	—	—	縄紋を施す。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	546	—	—	—	貼り付け突帯を施す。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	547	—	—	—	縄紋を施す。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	548	—	—	—	縄紋を施す。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	549	—	—	—	縄紋を施す。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	砂層
縄紋土器	550	—	—	—	貼り付け突帯を施す。	含長石石英金雲母	橙灰褐色	砂層
縄紋土器	551	—	—	—	貼り付け突帯を施す。	含長石石英金雲母	橙灰褐色	砂層
縄紋土器	552	—	—	—	竹管状工具による沈線紋を施す。	含長石石英金雲母	橙灰褐色	砂層
縄紋土器	553	—	—	—	爪形紋を施す。	含長石石英金雲母	橙灰褐色	砂層
縄紋土器	554	—	4.4	—	二枚貝条痕紋を施す。	含長石石英金雲母	橙灰褐色	砂層
縄紋土器	555	—	—	—	竹管状工具による沈線紋を施す。	含長石石英金雲母	橙灰褐色	砂層
縄紋土器	556	—	—	—	貝殻圧痕紋を施す。	含長石石英金雲母	橙灰褐色	砂層
縄紋土器	557	—	—	—	口縁端部刻み目、竹管状工具による沈線紋を施す。	含長石石英金雲母	橙灰褐色	砂層
縄紋土器	558	—	—	—	縄紋を施す。	含長石石英金雲母	橙灰褐色	砂層
縄紋土器	559	—	—	—	条痕紋を施す。	含長石石英金雲母	橙灰褐色	砂層

第IV章 結 語

妹尾住田遺跡は今回の調査の結果、間欠的ながらも縄紋時代前期から中世までの遺構・遺物が検出され、なかでも9世紀～10世紀と14世紀には、活発な遺構の形成があったことが確認できた。遺跡背後が丘陵で、前面には水田が広がるといった現在の景観は近世の干拓以降のもので、中世以前は吉備穴海といわれた内海に浮かぶ小島(ここでは仮に妹尾島と呼称する)であり、妹尾住田遺跡の基盤層が砂層であることから、この遺跡が波打ち際の砂浜上にあったといえる。9世紀～10世紀の古代の遺構面と、14世紀の中世の遺構面とは遺構の構成が全く異なっているが、遺跡の存立基盤が前面に広がる内海にあったということでは共通するであろう。そしてこの遺跡の様相は、そのまま「妹尾」という地域の成立と展開の問題に直結する内容を含んでいる。

第III章では検出した遺構と遺物を大まかな時期ごとに分けて説明したが、ここではさらに細かく遺構の変遷を整理し、遺跡の性格を検討する。そして中世以前の「妹尾」の歴史的・地理的特質の一端を明らかにしてみたい。

I 古代

1. 出土土器の様相 (図104)

まず遺跡の時期を決める基準となる土器の整理をおこなう。古代の遺構面には造成層が3層あり、それぞれの造成面で検出された土壌や溝から土器が出土している。同一造成面で出土している土器群については、別の遺構から出土しても基本的な特徴は共通するので1つの土器群として扱う。そうすると、それらの土器群は各造成面の時期を示しているということになる。したがってそれぞれの造成面の土器群は古い方から、妹尾住田Ⅰ期、妹尾住田Ⅱ期、妹尾住田Ⅲ期と呼称し、さらに妹尾住田Ⅲ期の造成面上の遺構廃絶直後の土器群を妹尾住田Ⅳ期とする。以下、各期の土器の様相の概略を説明したい。そしてそれら土器群と当地における該期の土器編年の成果や、都城の土器編年とを比較して各土器群に実年代を与えることにする。

妹尾住田Ⅰ期

建物6の雨落ち溝(溝4)から出土した土器群が指標となる。また同期の建物に伴う地鎮遺構と考えられるP113、P188、P674の短頸壺も含まれる。溝4の土器群は遺構検出時に取り上げた土器の中には上面の造成面に伴う土器が若干混入した可能性があるものの、基本的には同時に廃棄されたと考えられ、さらに緑釉陶器と灰釉陶器の完形品が含まれていることから、一括性が高く、なおかつ土器群の実年代を示す指標が伴っている良好な編年資料といえる。

まず須恵器は極めて退化した高台の貼付された杯Bと碗がある。前者は胎土に砂粒が目立つが、後者の胎土は比較的緻密である。ただし碗は出土状況から上層の造成層に属する可能性がある。須恵器はこの2点だけで、大半は土師器で、他に黒色土器と鉛釉陶器がある。土師器は碗、杯、皿の器種が確認できる。黒色土器は内面を黒色処理されたもので、碗、皿、壺の器種が確認できる。まず土師器の杯Aであるが、これは妹尾住田Ⅰ期～Ⅳ期まで存在する器種で、しかも時期が下るにしたがって段階的に法量が縮小する(図105)傾向が看取される。Ⅰ期は口径11.5～13.5cm、器高が2.6～3.4cmで数

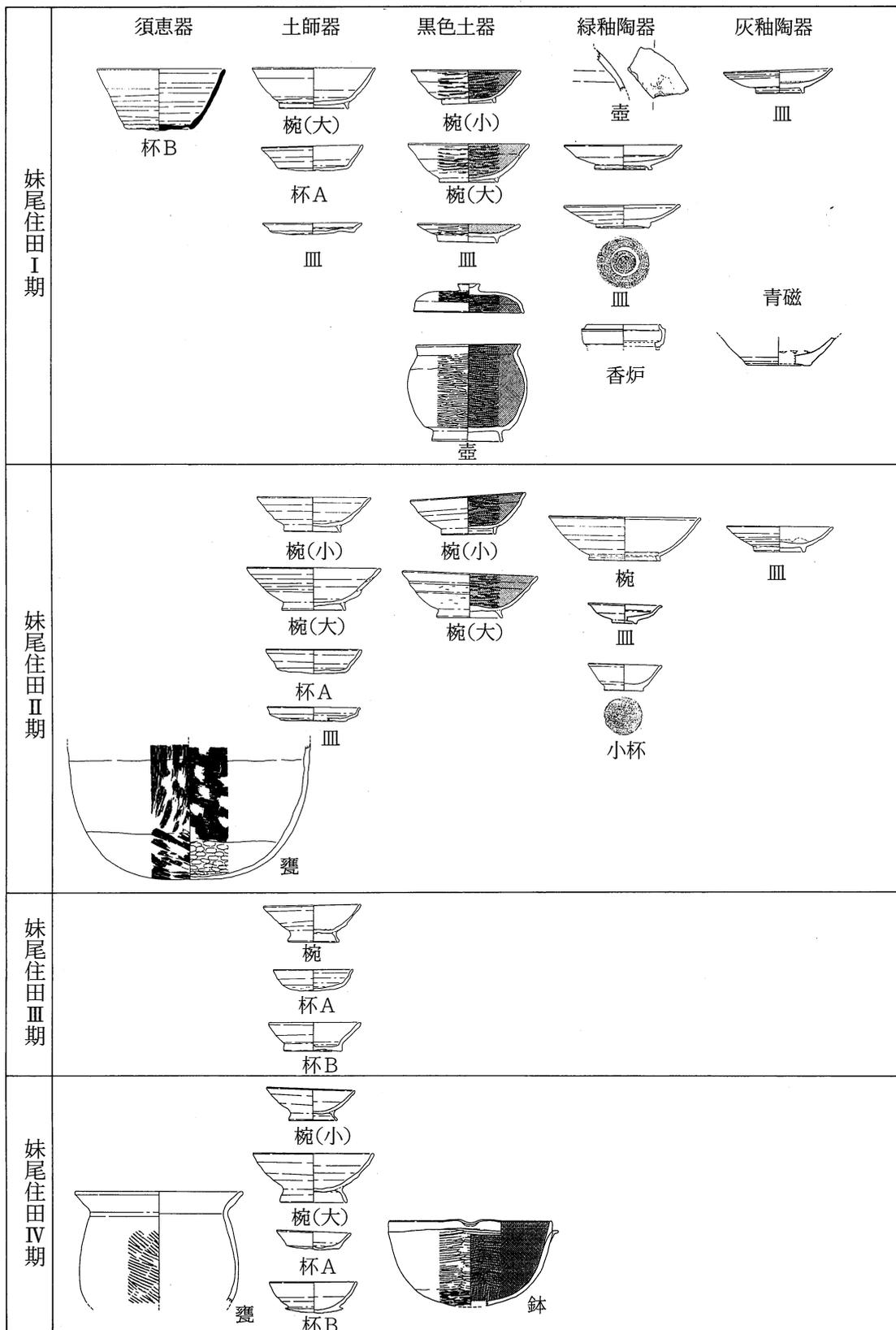
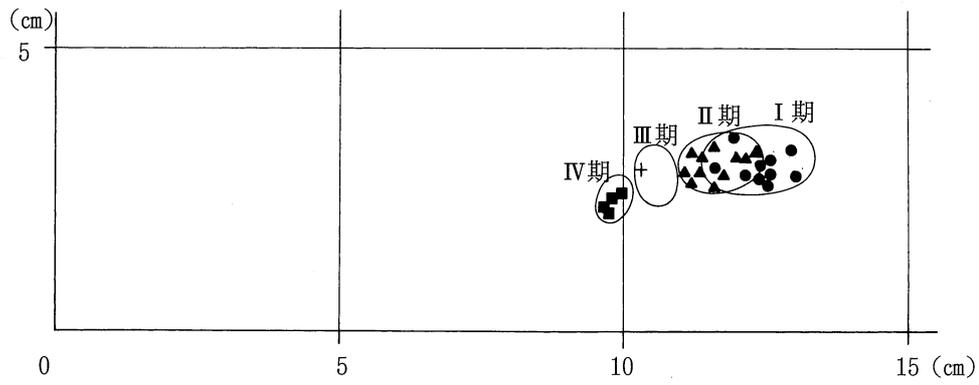
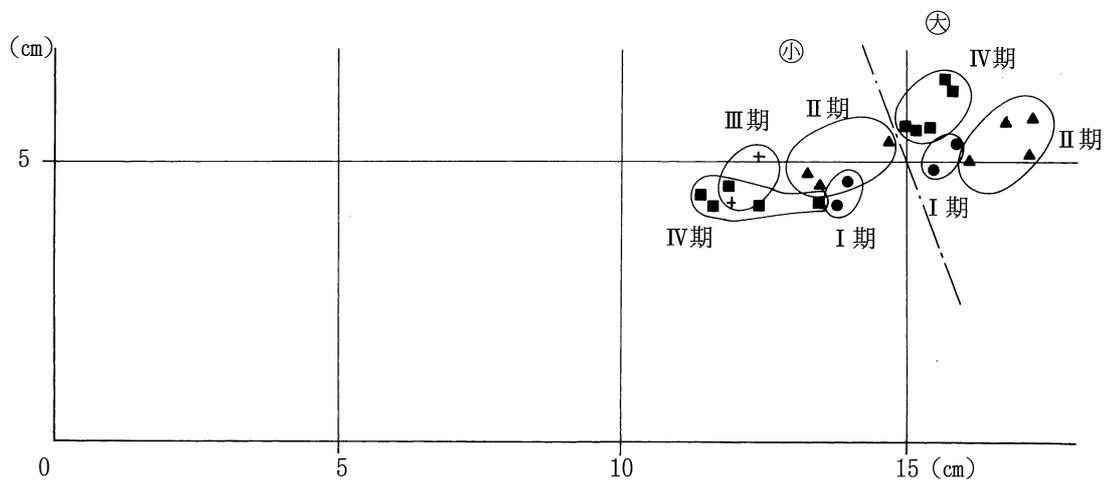


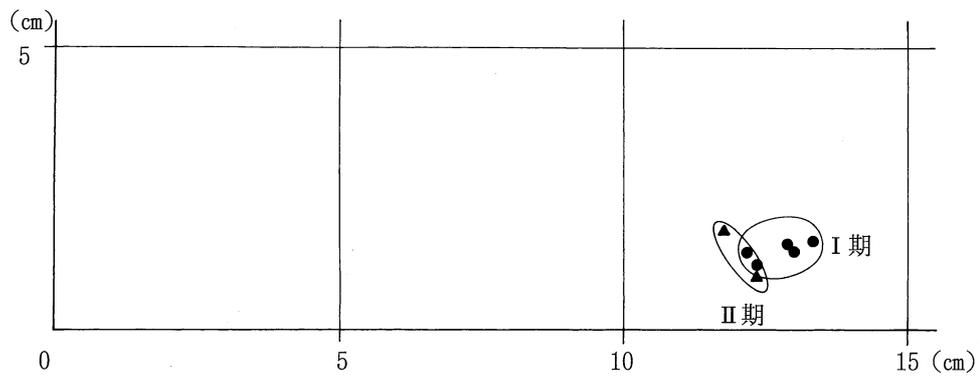
图104 出土土器分類



杯A



碗



皿

- 妹尾住田 I 期
- ▲ 妹尾住田 II 期
- + 妹尾住田 III 期
- 妹尾住田 IV 期

图105 古代土器法量分布

的には口径12.5cm前後、器高3.0cm以下のものが多い。調整は底部外面は周縁部をヘラ切り後ユビ押さえをおこない、底部内面はヨコナデ後ナデをおこなっている。椀については法量的にみると、土師器も黒色土器も同じ傾向が看取される。また椀も杯と同様にⅠ期からⅣ期まで存在する器種で、しかも法量の増減が段階的に変化している。ただ杯と異なり同期に大・小の2種が存在し、両種とも法量の変化は相似形である(図105)。Ⅰ期は法量の大きいものが口径15.5~16.0cm、器高4.8~5.3cm、法量が小さいものが口径14.0cm前後、器高4.2~4.7cmである。調整は土師器が内外面ヨコナデ後底部内面ナデである。黒色土器は外面のミガキを省略しているものも若干あるが、基本的には内外面にミガキをおこなっている。皿は高台の付くものと付かないものがあり、前者は黒色土器、後者は土師器である。皿はⅡ期以降みられなくなる。法量的にはⅠ期の土師器皿は口径12.0~13.4cm、器高は1.2~1.6cmで、調整は杯と同じである。黒色土器には椀や皿などの食膳具以外に有蓋の短頸壺があり、内外面を丁寧にみがいている。

これらの土器群に伴う緑釉陶器の器種は多彩で、碗、皿、瓶、香炉(合子)がある。長門産や尾張産のものもあるが大半は京都産である⁽¹⁾。また緑釉陶器の量と比べると少ないが、灰釉陶器の皿、碗もあり、それらは上層の造成層からの混入の可能性のあるものを除くと、黒笹90号窯式⁽²⁾に属するものである。緑釉陶器の年代もほぼ同じで、これらの土器群には9世紀末の年代が与えられる。このほか越州窯産青磁碗も伴っている。

妹尾住田Ⅱ期

P1、P22、P23、P99、P114、P238で出土した土器群が指標となる。Ⅱ期に属する土器群は比較的多くあるものの、それらは地鎮と推定される土器埋納遺構であるため、器種が椀・杯・皿に偏っている。

まず土師器の杯Aであるが、口径11.0~12.4cm、器高2.5~3.3cm、数的には口径11.5cm前後、器高3.0cm以下のものが多い。Ⅰ期と比べると口径が縮小する傾向にある。調整はⅠ期と同様に底部外面は周縁部をヘラ切り後ユビ押さえ、内外面ヨコナデ後底部内面にはナデをおこなう。土師器及び黒色土器の椀は、法量の大きなものは口径16.0~17.3cm、器高5.0~5.7cmで、Ⅰ期と比べると口径や器高が増える傾向がある。法量の小さなものは口径13.3~14.7cm、器高4.5~5.4cmで、Ⅰ期に比べると口径はほとんど変わらないか、もしくは若干縮小傾向にあるが、器高は高くなっており結果として法量は増える傾向になる。黒色土器椀の調整については、外面ヘラミガキが省略されてくるものが目立つようになる。土師器の皿は数が減る。法量についてもⅠ期と比べると口径が12.0cm前後で、縮小する傾向にある。また高台付の黒色土器皿は認められない。土師器の甕は、上半部まで残存したものがないため全形は明らかではないが、丸底で内外面をハケ調整した粗雑なつくりである。この土器群の時期を示すものとしては、溝4上面で検出されているが、おそらくⅡ期の造成層に伴う遺物と考えられる折戸53号窯式期⁽³⁾の灰釉陶器皿と緑釉陶器椀と小杯がある。

妹尾住田Ⅲ期

この期は造成が山土によっておこなわれており、建物も礎石を用いたものになっている。妹尾住田遺跡における建物の変遷からは画期といえる。しかし山土の造成層には遺物がほとんど含まれておらず、また多くの土器を含む良好な遺構も少ない。わずかにP655出土の土器群で、その内容が

わかる程度である。したがってⅠ期やⅡ期と比べ不明瞭な点が多い。

まず土師器の杯Aであるが、口径10.0～11.0cm、器高3.0cm以下で、Ⅱ期よりも口径の縮小する傾向が看取される。調整については底部外面へラ切り後のユビ押さえは省略される傾向がある。またやや法量が大きく、底部が円板状に厚くなった杯も新たに出現する(杯B)。これの底部外面はへラ切りが中央部まで及んでおり、へラ切り後の調整はおこなわない⁽⁴⁾。土師器の椀は法量の小さいものしかないが、Ⅳ期には法量の大きいものがあることから、Ⅲ期だけに法量の大きいものが欠落したのではないであろう。おそらくⅢ期の法量の大きな椀は、Ⅱ期とⅣ期の中間、すなわち口径16cm前後、器高5.5cm前後になるものと推測される。法量の小さな椀は口径が11.9～12.4cm、器高4.3～5.1cmで、Ⅱ期と比べると口径が縮小している。

妹尾住田Ⅳ期

区画溝(溝5)最終埋土で出土した土器群が指標となる。これは妹尾住田遺跡古代遺構面の下限を示している。

まず土師器の杯Aであるが、口径9.7～10.0cm、器高2.0～2.5cmで、Ⅲ期よりも口径、器高とも縮小する。調整は底部外面へラ切り後ナデているが、へラ切りは中央まで及んでいる。土師器の椀は、法量の大きなものは口径15.0～15.8cm、器高5.5～6.5cmで、Ⅱ期と比べ口径は縮小し、器高は高くなる。法量の小さな椀は、口径11.3～13.6cm、器高4.1～4.6cmで、口径は12cm前後が主体となる。Ⅲ期と比べると、口径、器高とも縮小傾向になる。Ⅲ期以降、黒色土器椀は認められないが、1点だけ片口の鉢が出土しており、内外面を丁寧にみがいている。ほかに土師器の甕があり、外面を叩き調整しているものもある。

Ⅰ期からⅣ期までの変遷は、土師器の杯や椀の法量変化が極めて漸移的であることが示しているように、連続的な変化と考えるとよいように思われる。当地域における該期の土器編年は、武田恭彰⁽⁵⁾、平井泰男⁽⁶⁾の両氏が積極的におこなっており、とくに武田恭彰氏の編年は精緻で網羅的である。氏の編年に対応させると妹尾住田Ⅰ期が武田編年Ⅱa期に、妹尾住田Ⅱ期が武田編年Ⅱb期～Ⅲa期前半に、妹尾住田Ⅲ期が武田編年Ⅱa期後半に、妹尾住田Ⅳ期が武田編年Ⅱa期後半～Ⅲb期前半に大体対応する。また妹尾住田Ⅳ期は法量的には、平井泰男氏の指摘した「窪木・山陰川」の土器群と対応する。この土器群は伴出した緑釉陶器の年代観から10世紀後葉の年代が推測されている。以上のことから妹尾住田Ⅲ期は、緑釉・灰釉陶器の時期から9世紀末、妹尾住田Ⅱ期は、灰釉陶器の年代と当地の編年の位置づけから10世紀前葉、妹尾住田Ⅲ期は10世紀中葉、妹尾住田Ⅳ期は「窪木・山陰川」の土器群の年代観から10世紀後葉という年代が与えられる。

平安京の土器編年では10世紀になると杯がなくなるが、当地ではその後も存続するなどかなり地域差があり、緑釉陶器などで併行関係を確認する以外は、直接的な対応関係の検証は難しい。ただ妹尾住田遺跡Ⅰ期の黒色土器は平安京Ⅱ期の段階⁽⁷⁾とよく似ており、両者は年代的にも矛盾はない。

ところで妹尾住田Ⅳ期に後続する土器群として、岡山市東山遺跡P508の土器群がある(図106)。東山遺跡は吉備津神社の南約600mに位置し、P508は柱穴状の小ピットで、椀・杯・皿を重ねて埋納していた。(1)は灰白色の色調の黒色土器(内黒)椀で、口径15.8cm、器高5.7cm、高台径8.1cm、(2)も同じく黒色土器(内黒)椀で口径15.3cmである。ただし(2)は色調が淡茶褐色で、(1)と比べると内湾気

味に口縁部が開くなど両碗の相違も明瞭である。

(3)は杯で口径15.8cm、器高4.2cm、底径8.7cm、底部はヘラ切りで、中心部までヘラ切りが及んでいる。色調は淡橙褐色である。(4)は皿で、口径10.5cm、器高2.0cm、底径7.0cm、底部はヘラ切りで中心部までヘラ切りが及んでいる。色調は淡橙褐色である。(5)も皿で、口径9.9cm、器高1.9cm、底径5.8cm、底部は糸切りで、色調は橙褐色である。(6)は杯で、口径12.11cm、器高3.5cm、底径7.0cm、底部はヘラ切りで色調は橙褐色である。この土器群と妹尾住田IV期の土器を比較すると、円板状の底部をもつ杯(6)や、碗の法量が妹尾住田IV期と比べ器高が縮小するなど連続的な変化の延長にあると思われる要素も認められるが、一方で杯(3)や皿などの変化はやや飛躍的である。したがってこの土器群は妹尾住田IV期よりも一時期ほど後続する土器群

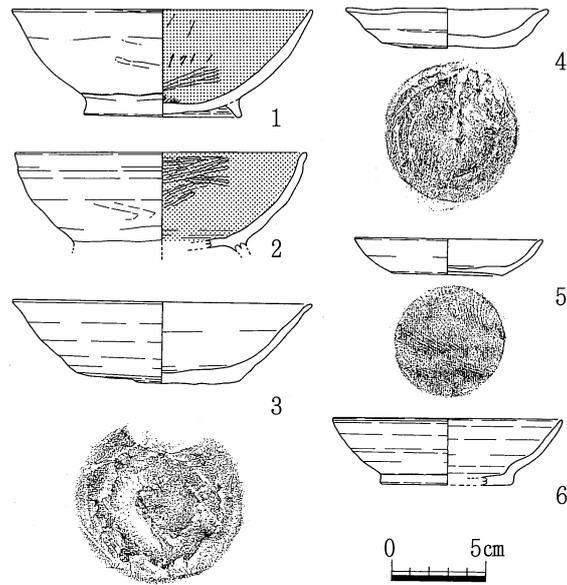


図106 東山遺跡 P508遺物

と考えられ、実年代としては11世紀中葉ぐらいが推測される⁽⁸⁾。妹尾住田遺跡ではこの土器群、もしくはこの土器群に若干先行されるような土器は出土しておらず、遺跡は11世紀段階には完全に廃絶していると考えられる。

注

- (1) 中四国中世土器研究会平成13年度第1回遺物見学会の会場で、百瀬正恒氏より御教示を得た。また、その後大阪大学の高橋照彦氏からも御教示を得た。
- (2) 注1
- (3) 注1
- (4) 碗Aと碗Bの底部のヘラ切りは後者が極めてシャープであり、中世の土師質土器杯とほとんど変わらない。この差はヘラ切りの工具の差というより、用いたロクロの回転速度に関係するよう
に思われる。
- (5) 武田恭彰「奥坂遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15 1999年
- (6) 平井泰男「窪木遺跡」2『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124 1998年
- (7) 小森俊寛「平安京の土器・陶磁器の概要」『平安京提要』角川書店 1995年
- (8) 武田恭彰「古代土器生産についての一予察(2)」『古代吉備』第12集 1990年
畿内でも11世紀中葉の土器については、ヘラ切りと糸切りが混在する様相であり、それらは東山
遺跡 P508の土器群の様相とも共通する。

2. 遺構の構成

出土土器の分類と中心建物に伴う造成層の層数から、古代の遺構面は4小期に分けられ、実年代的には9世紀末～10世紀末の幅と考えられた。また中心建物の位置がほとんど変わらないことから、小期における遺構の変化は基本的には同一建物の同一場所における建て替えであったといえる。したがって9世紀末～10世紀末までの遺構の構成は、基本的には踏襲されていると考えてよい。建物の方向も全て真北方向にほぼ合わせており、建て替え以外の建物が相互に重なり合うわけでもなく、全体の建物配置も整然としており計画的である。このような遺構の構成は当遺跡が官衙であったことを示唆している。

(1) 周辺の微地形と地割の分布

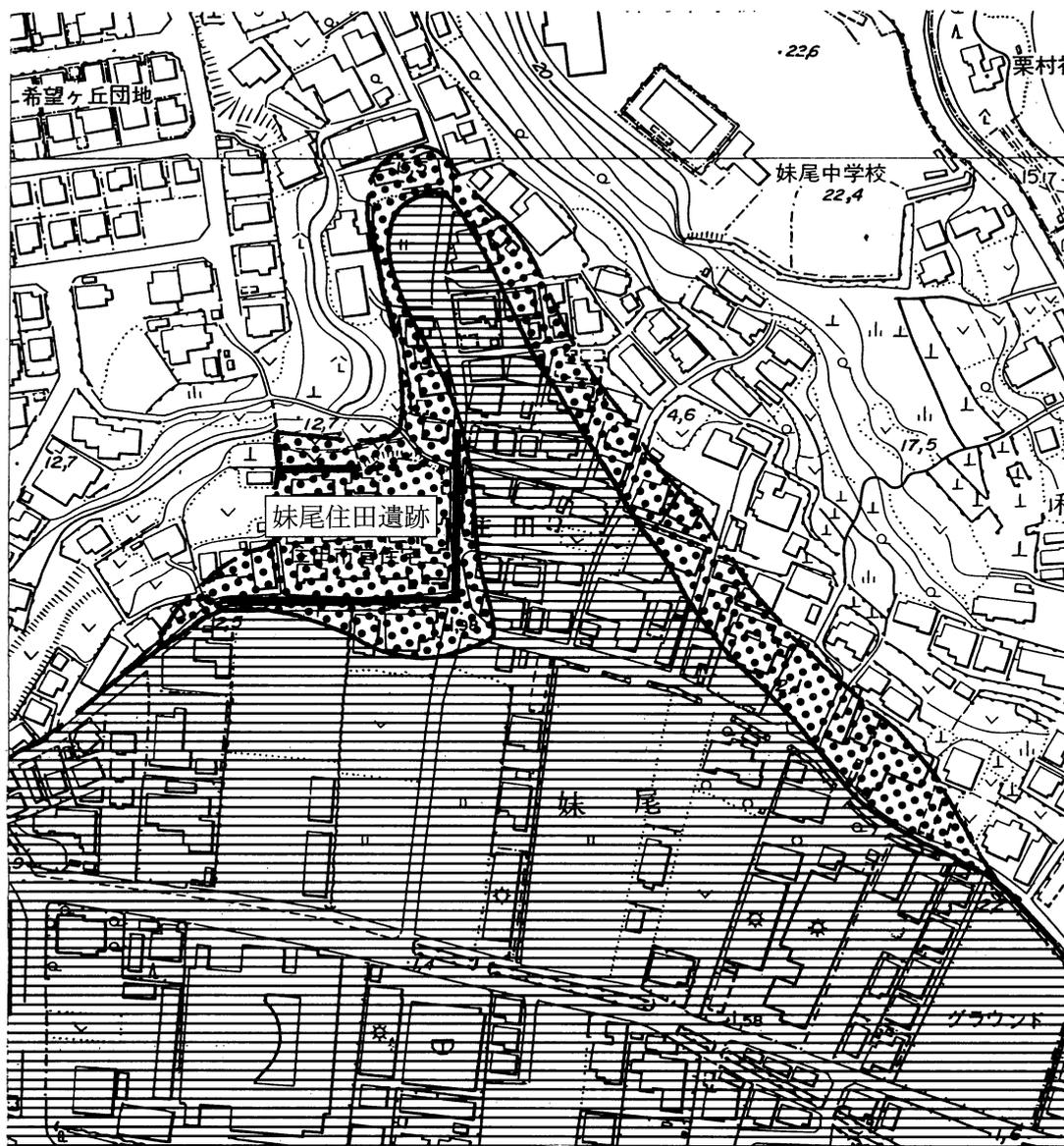
まず妹尾住田遺跡周辺の微地形から復元される旧地形と地割の分布から、遺跡の範囲を推測してみたい。妹尾住田遺跡は岡山平野と児島の間にかつて存在した吉備穴海といわれる内海に浮かぶ、周囲4kmほどの島(以降妹尾島と呼称する)の南側に位置する。遺跡の北側と西側は丘陵部であり、それらは海浜部の丘陵であることから、裾部は浸食や風化の影響を受けて傾斜は比較的急峻である。遺跡が形成されるのは、丘陵裾部から海の間形成された砂浜部である。当時の海岸線がどの辺りに設定されるのかを推測すると、丘陵裾部から南へ約55mの地点で現況のレベル高が0.5mも急激に下がることや、この下がったレベル高の延長上にある地点で試掘調査をおこなった際、海中であったことを示す粘土層の互層堆積が認められたことから、このレベル高の変換点付近が妹尾住田遺跡の形成された砂浜部の海岸線と推定される。遺跡の東側は現在家が建っており、その際の造成等の影響で旧地形はかなり埋没しているが、それでも調査区の表土面からすると0.3mほど低くなっている。若干残存している旧地形部分や、古い都市計画図のレベル高から復元すると、妹尾住田遺跡の東側は幅50mほどの入江状の地形になっていたようである。昭和23年撮影の空中写真でもこの部分は水田となっている。

このように旧地形をみてくると、一面的な敷地を確保できるのは東西約60m、南北55mの範囲の砂浜部(図107)ということになる。この範囲は遺跡の外周を区画する溝の範囲とほぼ一致しており、当遺跡の古代の遺構面は最大限に地形を利用しているといえる。

遺跡周辺の地割は、丘陵部の地形に即した部分を除くといくつかの方向性が認められる。それはいくつかのブロックでまとまっており、近世以降の干拓の単位を反映させている。妹尾住田遺跡の形成されている同一レベル高に分布する地割は、近世以前から陸地化していたこともあり、丘陵及び丘陵裾部の地形に即した形状である。しかし当遺跡部分については正方位の地割となっている。背後の丘陵端部もほぼ東西方向に直線的にカットされており、道路についても遺跡の存在が推測される部分だけ正方位となっている。発掘調査により検出された古代の建物が正方位であることから、この正方位の地割は古代まで遡る可能性が高い。正方位の地割の分布範囲は東西60m、南北50mで、遺跡が形成された範囲と推測した砂浜部の範囲とほぼ重なるのである(図107)。

(2) 建物配置

旧地形の復元と地割の検討から、妹尾住田遺跡が東西60m、南北50mの範囲に形成されたことが予想された。したがって今回の調査は、この範囲の南半に対しておこなったことになる。また部分的な調査ではあるが、北半の様相も一部明らかとなった。これらのことから、部分的に推測を含むことに



 砂浜 (推定)

0 100m

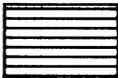
 海 (推定)

図107 調査区周辺の旧地形 (復元)

はなるが、遺跡全体の建物配置を復元してみたい。

まず外周については、A区の東端やC区で検出された2本の平行する溝によって区画されている。この溝の東側は直線であるが、正方位よりも 7° ほど西へ振っている。西側については調査区の範囲が及んでいないことから明確ではないものの、丘陵部との境は現況では幅1.2mほどの山道となっている。山道南半は直線的で、正方位よりも、 7° ほど東へ振っている。これは東端の区画溝と左右対称になるように見える。この山道が西端の区画を踏襲しているとすると、区画の南半はややすぼまりながら直線的に延びる区画溝によって画されているといえる。南側へすぼまっているのは、内海を航

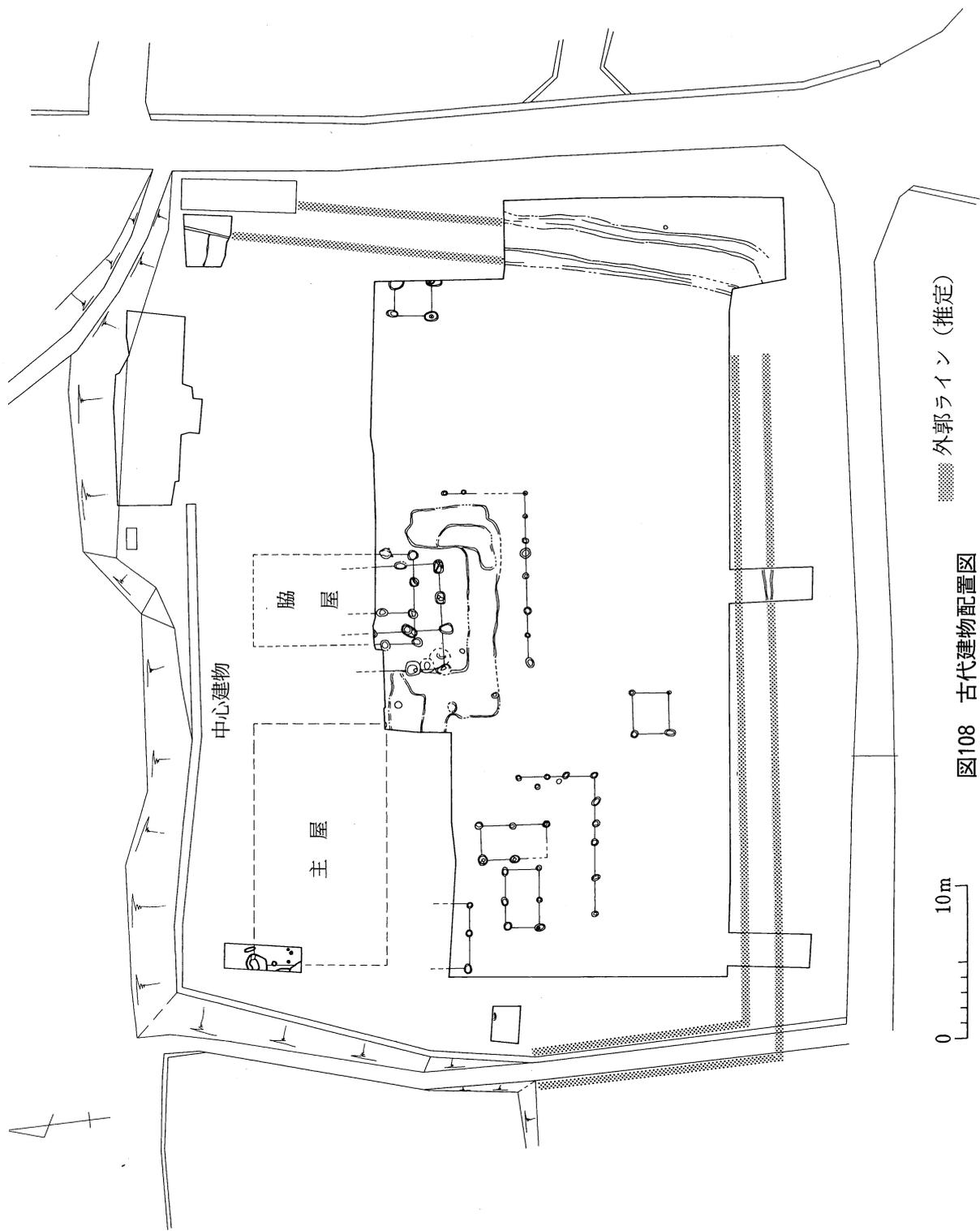


図108 古代建物配置図

行する船から見て、遺跡の奥行きが広がっている印象を与える工夫であったのかもしれない。なお外周溝の東側コーナー外側部分と、西側の山道のコーナー部分との間隔はちょうど50mである。おそらく1町の1/2を意識しているのであろう。

建物は9棟検出されたがいずれも正方位である。1間×2間の柱間の小規模建物が数棟あるが、これについては付属屋的な性格が推測される。とくに建物3や建物7は礎石に近い大きさの根石や、中心建物と同じ様な大きな掘り方の柱穴であることから、単なる付属屋でなく仏堂のような建物であった可能性も推測される。なお仏具とも推測される小形の銅椀が出土している。

これら建物群の中心となるのは、A区でその南半を検出した建物6、建物7、礎石建物1と、E区とA区で一部を検出した礎石建物2である。建物6、建物7、礎石建物1は南北方向の棟方向で、西側に庇が付く。桁行は調査区外へ出るため不明だが、梁間は5.7~6.7mである。当初は掘立柱建物であるが、10世紀中葉には礎石建物に変わる。礎石建物2は東西方向の棟方向で、最初から礎石建物である。梁間も8.2mに推定され、東側の建物6、建物7、礎石建物1よりも大きい。これが当遺跡の主屋と考えられる。つまり中心建物は棟方向が東西方向の主屋と、それに直交する南北方向の棟方向をもつ脇屋によって構成されており、2棟の建物はL字形に配置されていることになる。そして、それぞれの中心建物の南側にはL字形の平面形である目隠し塀が付属する(図108)。

(3) 遺構の性格

外周を2本の平行する溝で画することは、都宇郡衙に推定されている岡山市津寺遺跡⁽¹⁾で典型的にみられるように、当地域の官衙遺跡の特徴の1つである。また外周溝の南半を若干角度を変えていることは奥行きを浮き立たすための工夫と考えると、背後の丘陵カット面や、建物が正方位に規定されていることから、遺跡全体は正方位に合わせているといえる。そして中心建物が同一位置で建て替えられていることから、それが恒久的な施設であった事がうかがわれる。さらに出土する土器類については、杯や皿などの食器類が圧倒的に多く、とくに中心建物に付属する溝4からは食器類のみしか出土していない。しかも青磁、緑釉陶器、灰釉陶器などの高級食器の含まれる比率も高い。これらのことは、この遺跡が官衙であることを示している。ただ中心建物の配置が左右対称とならず、L字形になることについては同様の建物配置が一般集落で認められるタイプであるという指摘⁽²⁾と、明確でないものの官衙の建物配置の類型として設定される可能性を指摘する意見⁽³⁾がある。一般集落におけるL字形配置の建物には、両者に差がない場合が多いが、平城京や平安京においてみつかるとL字形建物配置は、主屋が存在する場合が多い⁽⁴⁾。そういった意味で主屋の存在するL字形建物配置は、一般集落からやや乖離した性格であったことがうかがわれる。

建物が整然としていることや出土遺物が食器類に偏ることなどは、この遺跡が官衙であることを示しているが、中心建物がL字形になることについては、それが官衙的な建物配置の類型に含まれない可能性もあるものの、別の性格も具備していた官衙であったことを示唆しているように思われる。この点については遺跡の性格〔3. 遺跡の性格(4)国司の赴任と妹尾住田遺跡〕で若干追求してみたい。

注

(1) 高畑知功「津寺遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 1998年

葛原克人「吉備の津」『古代の「海の道」』学生社 1996年

- (2) a 黒崎直「平城京における宅地の構造」『日本古代の都城と国家』塙書房 1984年
- b 堀内明博「平安京における宅地と建物配置について」『平安京歴史研究』 1993年
- c 平良泰久「長岡京の貴紳の家」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 1996年
- (3) 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房 1994年
- (4) 注2 a

3. 遺跡の性格

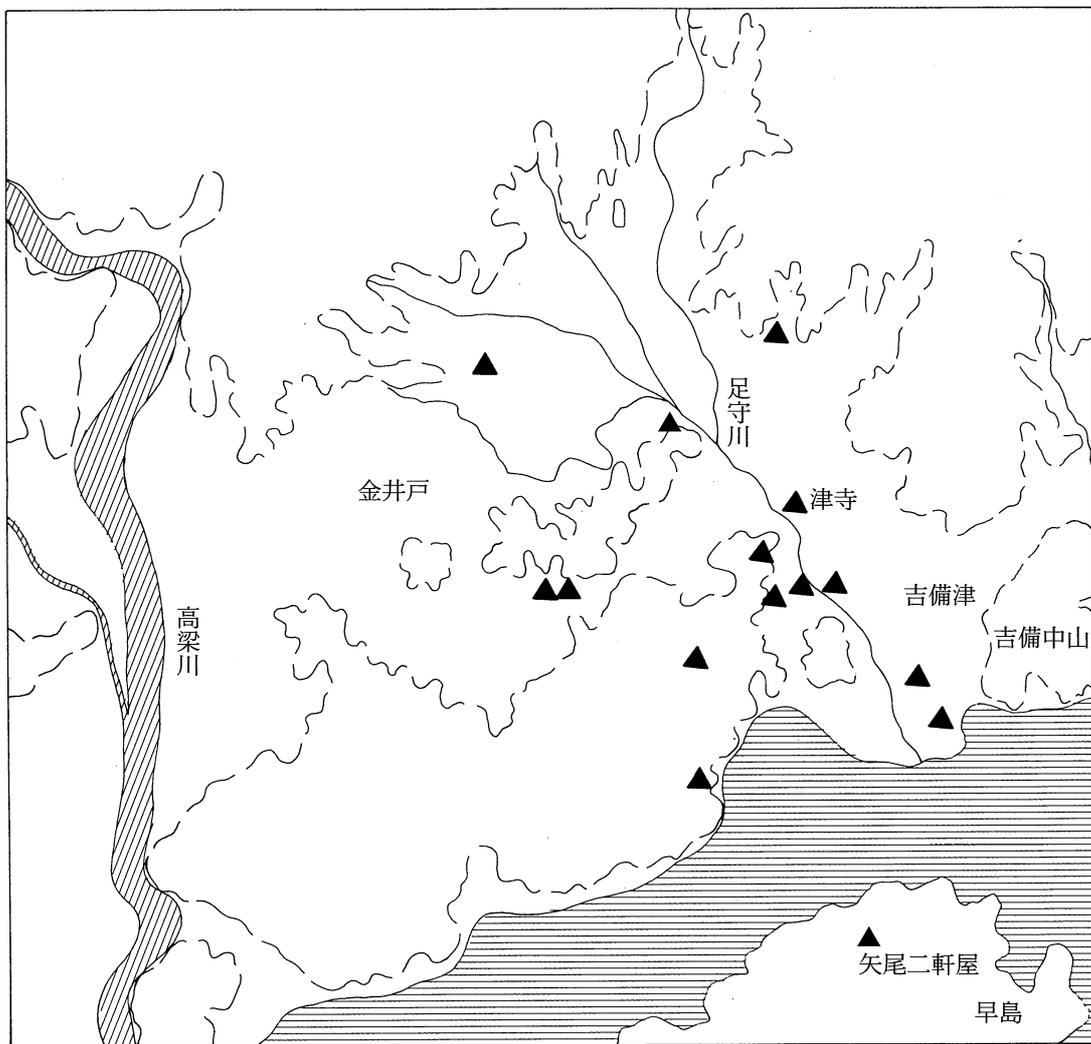
妹尾住田遺跡は瀬戸内海の内海に浮かぶ小島に立地し、現況で眼前に広がる水田地帯は近世以降の開拓事業の成果であり、中世以前はまとまった水田域などは想定できなかった。にもかかわらず、9世紀末から10世紀にかけて極めて多く的高级食器を出土する官衙が形成される。これは前面に広がる内海の海上交通との関係なしには説明できない。この点を整理して、当遺跡のより具体的な性格について若干検討してみたい。

(1) 備中国の中枢地について

妹尾住田遺跡は、律令制下では備中国都宇郡に属する。妹尾については『吾妻鏡』元暦二年四月二十九日条に妹尾郷が出てくるものの、『和名類聚抄』などの古代の文献上には認められない。このことから妹尾郷の成立は新しいと考えられており、近世の地誌である『備中誌』では、都宇郡深井郷の土地が妹尾に含まれていると記されていることから、中世以前は深井郷の一部であったと考えられている⁽¹⁾。

備中国の中枢地は遺跡が密集し、古代寺院も集中していることなどから足守川流域の沖積平野であることはまちがいない。備中国府の位置は『和名類聚抄』に「在賀夜郡」とあることや、同郡域内になる総社市金井戸周辺に国府関連の小字が多いことから、若干の振幅はあるものの総社市金井戸周辺に比定する説が有力であった。しかし総社市教育委員会が昭和60・61・63年度の3ヶ年にわたって確認調査をおこなったが、金井戸周辺にはその痕跡が認められなかった⁽²⁾。また金井戸周辺は南に備中国分寺・尼寺などがあるものの、足守川流域よりもやや西側へ入ったところにある。最近、金井戸の西約800mの地点にある総社宮付近で古代の遺物が出土し、国府との関連も推測されているように⁽³⁾、周辺での国府関連遺跡の存在の可能性は否定できないが、足守川流域の遺跡の密集度は他地域を圧倒しており、この地が備中国の中枢地であることは間違いないように思われる。備前国において平城宮式瓦の分布を検討したところ、備前国府推定地が分布の中心で国衙関連施設の所在を示すように面的な分布をしている⁽⁴⁾。備中国はやや異なって一般的な集落遺跡へも分布しているが、一見して分布の中心は足守川流域で、地点数だけでもかなりの密度となる(図109)⁽⁵⁾。

岡山市津寺遺跡は足守川中流域に位置する官衙遺跡で、南北約120m、東西約90mの範囲を2条の溝で方形に区画し、内部に掘立柱建物が整然と並んでいる。多くの遺物が出土しているが、その中に蹄脚硯が含まれている。官衙に配備される文房具と対応する官衙のクラスを検討した成果によると、蹄脚硯は最も上のクラスの陶硯である⁽⁶⁾。県下において蹄脚硯が出土した遺跡は、美作国府⁽⁷⁾、ハガ遺跡⁽⁸⁾、百間川当麻(米田)遺跡⁽⁹⁾、平遺跡⁽¹⁰⁾、津寺遺跡⁽¹¹⁾である。国衙関連の遺跡は美作国府と、備前国府関連遺跡のハガ遺跡と百間川当麻(米田)遺跡で、平遺跡は勝田郡衙の一部に推定されている。津寺遺跡は都宇郡衙に推定されている。ただ平遺跡はそれほど整然とした配置をとらない掘立柱建物



▲ 平城宮式系軒瓦出土地点

0 2km

図109 備中南東部地域の平城宮式系軒瓦出土分布

で構成されているにもかかわらず多量の瓦が出土していたり鍛冶炉が多数あるなど、生産と物資の集積に関わる性格もうかがわれ、円面硯が6点も出土していることも、通常の官衙遺跡のなかではかなり多いといえる。また美作国府や美作国分寺で使用されている平城宮式系の軒平瓦も出土している。美作国では平城宮式系の軒瓦は大海廃寺で軒丸瓦が出土した1例だけの例があるだけで、国衙関連の遺跡だけにしか分布しないことから⁽¹²⁾、国衙との関連も想起されてくる。平遺跡は勝田郡衙の一部、もしくは郡衙に付随する寺との解釈がなされているが、国衙関連の工房という解釈も可能のように思われる。

平遺跡に国衙関連の遺跡の可能性があるとすると、蹄脚硯の分布する遺跡のうち津寺遺跡以外は、全て国衙関連遺跡ということになる。平安時代中頃と時期は少し下るが、津寺遺跡の東約400mの位置にある加茂政所遺跡からは寺院跡が検出されている。上面が後世の削平をかなり受けているため遺跡の残存状態はよくないが、寺域を画する区画と瓦葺き建物が存在していたようである。出土している軒瓦は備前国と備中国の南部を中心に分布し、その中には備中国分寺や備前国分寺も含まれている。

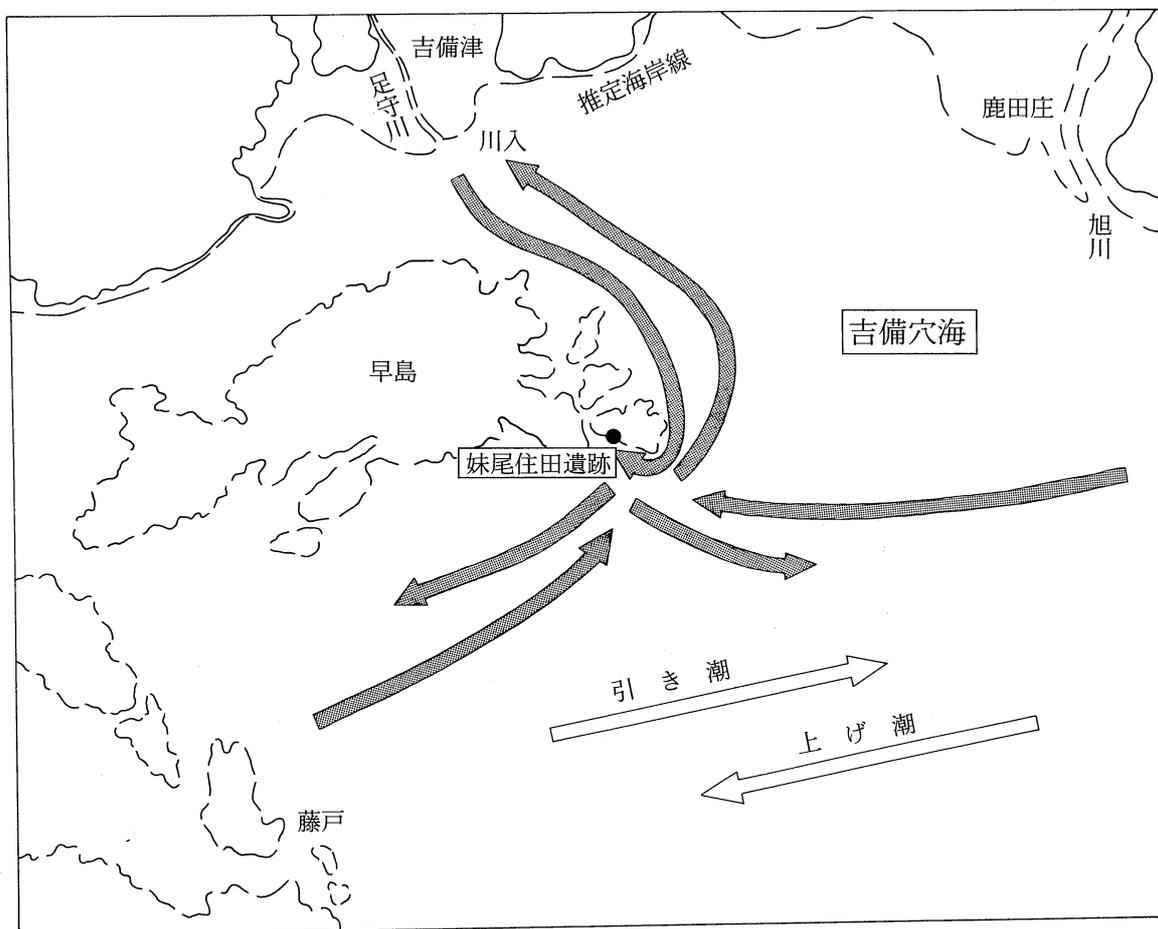
また平安宮の内裏からも出土している。これは報告書でも指摘されているように、国衙との関係が推測され、備中国府とかなり密接な関係のあった寺院であった可能性が高い⁽¹³⁾。

津寺遺跡と加茂政所遺跡とはかなり時期差があり、両者を直結させて比較するわけにはいかないが、平城宮式瓦の分布、国衙関連遺跡にのみ分布する可能性の高い蹄脚硯が出土していること、国衙と関連ある寺院と推測される加茂政所廃寺が近接することなどは、足守川流域の遺跡密集度の高さにプラスして、備中国の中核である国衙の存在がうかがわれてならない。

しかし『和名類聚抄』において、備中国府が存在するのは賀夜郡であり、賀夜郡は旧足守川(板倉川)を境に東側で、現足守川の沖積平野部の大半は都宇郡である。古代の郡境の変更、もしくは『和名類聚抄』の誤記などを認めない限り、文献等との整合性は見いだせない。

(2) 妹尾住田遺跡のヒンターランド

ここでは妹尾住田遺跡の当時の地理的環境を復元して、備中国中核地との関連を検討してみたい。妹尾住田遺跡周辺の海岸線を復元したのが図110である。妹尾住田遺跡の南に広がる内海(吉備穴海)は畿内と九州を結ぶ瀬戸内海航路の一部で、牛窓の西から入り玉島の辺りで内海を出る。この内海では12世紀末の源平の争乱の際、「水島合戦」、「藤戸合戦」などの主要な合戦がおこなわれており、こ



← 予想される航路

← 潮の流れ

図110 瀬戸内海航路と妹尾住田遺跡

の内海における航路の重要性を知ることができる。したがってこの航路と妹尾住田遺跡は密接な関係があったといえる。

古代の航海技術については、八尾市久宝寺遺跡出土の準構造船や、舟形埴輪等や、『吉備大臣入唐絵詞』などに描かれた古代の遣唐使船の絵画資料などから船の構造はある程度復元できるものの、詳細については具体的な資料は残っておらず不明な点が多い⁽¹⁴⁾。日本の船に関して写実的で詳細な観察記録として認められる最も古いものは、永祿6年(1563)に来日したポルトガル宣教師ルイス・フロイスの書いた『日欧文化比較』である。そこにはポルトガルの船と日本の船を比較した記述があり、当時の日本の船が刳船を母体とした古墳時代以来の準構造船の延長にあったことがわかる。とくに日本の船の推進力には帆を主体的に用いていないとの指摘は重要で、風力よりも潮の流れを利用して航海していたことがうかがわれる。この点は遣唐使船などの外洋航海用の船は別として、古代においてもおそらく大差がないと思われる。

これを瀬戸内海航路、とくに内海での航行にあてはめると、九州から畿内、すなわち西から東への航行には同方向の引き潮に乗り、それと逆方向である畿内から九州への航行には上げ潮に乗っていくということになる。内陸の平野部から内海の航路に出る場合、目的地の方向に合わせた潮の流れを見極める地点が必要で、妹尾島のような内海を前面に控えた島は、絶好の潮待ちの場所であったといえる(図110)。また瀬戸内海航路から内陸へ入ろうとした場合、内陸用の小型の船に乗り換える場としても用いられたと思われる。つまり妹尾の背後、足守川流域の沖積平野部から瀬戸内海航路に出る際の潮待ち、瀬戸内海航路から足守川流域の沖積平野に入るための小型船への乗り換えの場として最も適当な位置にあったのが妹尾島であったといえる。

(3) 妹尾住田遺跡の出現と海上交通路発展の画期

妹尾島は足守川流域の沖積平野部と瀬戸内海航路を結ぶ結節点に位置していたといえるが、この点と妹尾住田遺跡が9世紀末から出現してくることと、どのような関係にあるのかを若干検討したい。

律令体制下における交通体系は駅制と伝制といわれるとおり、陸路が主体であった。水駅も『令集解』の凡水駅条に出ているものの、他の古代の文献には出ておらず、海路は積極的な交通手段としては規定されていなかったようである。ところが8世紀末になると、瀬戸内海航路に五泊の制が設けられ、国家的事業として海路の拠点である泊を設定・維持するようになる。これは米などの重量物の輸送は費用の点、量の点からも海上輸送の方が有利であったことと、律令体制の変質により陸路の国家的な保障の根幹である、駅制・伝制が崩壊しつつあることに起因している。そして『類聚三代格』巻一八、六月十一日官府によると、大同元年(806)には山陽道諸国の新任国司も海路によって赴任することとなった。また同じく『類聚三代格』巻一九、七月十六日官府によると、寛平六年(894)には官米の運送には船を主体的に使用するようになっており、物流方法の主体も海運に変化していったことがわかる⁽¹⁵⁾。まさにこの時期に妹尾住田遺跡は出現しているのである。

瀬戸内海航路の中で、尼崎市の河尻から西へ大輪田泊、魚住泊、韓泊、檀生と一日行程で順次碇泊するシステムである五泊の制は行基の事業にまで遡るといふ史料はあるものの、本格的な整備と利用は平安時代初期とされる。それら泊の築港は国家的な事業としておこなっているが、維持・管理は国司の職務であり、他に各地の船舶関連の職務に国司が関わっている事例が多く見られることから、港湾関係の行政は基本的には国司の管掌であったと考えられる⁽¹⁶⁾。

妹尾住田遺跡の所属する官衙レベルは、整然とした遺構の配置や中心建物が礎石建物である点、緑釉陶器を多量に出土し、かつ越州窯産青磁を含む点から、郡衙クラスに帰属する官衙とは考えにくい。妹尾住田遺跡は同遺跡が出現する9世紀末以降、国司主導の港湾整備が盛んにおこなわれ、交通体系が陸路から海路へ変化していることと連動していると考えることが自然であろう。そうすると妹尾住田遺跡は足守川流域を起点とする場合、地理的關係から、瀬戸内海航路を利用するためには通らなくてはならない地点であり、遺構や遺物の内容が国府と関連することは足守川流域に国府の存在を示しているように思える。

ただし国府については、経済的機能を担う国府市と国府津という施設が想定されている。国府市とは国府や国衙官人のために設定された市で、国府津は中央への貢納物を運送する拠点とされる⁽¹⁷⁾。いずれも倉庫や交易の広場などの広い空間が必要であり、妹尾住田遺跡には適しない。当時の足守川河口付近に位置する岡山市川入遺跡からは築地の跡や、平城宮式系瓦が出土していることから、備中国府の国府津と推定されている⁽¹⁸⁾。その北には備中一宮の吉備津神社がある。吉備津という地名は国府津との関連をうかがわせる。つまり国府－国府津・市－妹尾住田遺跡はやや距離を置いて存在していたと考えると、国府津・市自体は足守川流域であるが、国府はもう少し内陸に入ったところでもよいということになる。しかし平城宮式系瓦の集中的な分布や、国府津・市と推定される川入遺跡と国府は同一水系で結ばれていることが自然であろうと思われる点から、やはり備中国府は足守川流域に想定されるように思われてならない。

備中国の中核である国府の位置についてはまだまだ不明確な点が多いが、地理的・歴史的な検討から、妹尾住田遺跡は社会的な交通体系が陸路主体から海路主体へ変化したことを契機に出現し、それが国府と瀬戸内海航路を結ぶ結節点、平易な表現では備中国の玄関口に相当する施設であった可能性が高いと考えられる。

(4) 国司の赴任と妹尾住田遺跡

妹尾住田遺跡は備中国中核と瀬戸内海航路を結ぶ結節点であり、物流以外の交流も海路を主体的に利用するようになってからは、備中国へ入るありとあらゆるものの門戸として存在していたと考えられる。大同元年(806)の新任国司の赴任を海路に規定した官符からも、平安時代の備中国司が都から赴任する際も妹尾住田遺跡を経たと思われる。

国司が任国へ赴く際、最初におこなう、あるいは受けなければならない儀礼は「境迎えの儀」である。これは新任国司を迎えるための単なる儀礼的な饗応ではない。国司の守るべき事項を記した「国務条々事」(『朝野群載』)によると、「境迎えの儀」では在庁官人達が国司の政務上最も重要な国印と国倉の鍵である印鑑を持ってきて新任国司に渡すことになっており、国司としておこなわなければならない任国での最初の重要政務とでもいえるものであった⁽¹⁹⁾。

海路から備中国へはいる場合、国司が最初に踏む備中国の地はおそらく妹尾住田遺跡ではなかったかと思われる。そこで「境迎えの儀」がおこなわれたのではなかろうか。妹尾住田遺跡の中心建物がL字形に配置され、官衙特有のコの字形などの左右対称形の配置とならないのは、迎賓施設である客館⁽²⁰⁾に用いられたことに起因しているのではなかろうか。国司の赴任へは国司の家族も伴っており、そういった人々の饗応といった側面も中心建物の配置は反映されていると推測されるのである。

妹尾島の中央部には栗村神社があり、この祭神は妹尾叔奈麻呂で、妹尾叔奈麻呂が大和から吉備へ

やってきた吉備津彦を饗応した和田の宮の跡に建てられたという伝承が残っている。伝承の大半は『吉備津宮惣解文』や『備中国一宮社法』などの中世以降の文献上に見られるように、この地と吉備津神社との貢納関係の成立によって形成されたものと思われるが、畿内中央から派遣された貴人を饗応するという話の骨格は、「境迎えの儀」からも反映されているように思われる。また国司や代官が任地に到着した際の饗応を厨雑事、あるいは三日厨ともいう。栗村神社の栗(くり)は、厨(くりや)に語源があるのかもしれない。

ところで妹尾住田遺跡では中心建物の主屋は当初から礎石建物と推定されるが、同じく中心建物である主屋に直交する脇屋は掘立柱建物であった。ところが10世紀中葉になるとそれまでとは異なって山土を用いた丁寧な造成をおこない、脇屋も礎石建物へ建て替えがおこなわれている。当遺跡の建物の変遷では画期といえる。脇屋が礎石建物に建て替える前の掘立柱建物は、柱穴の柱痕跡が焼土化しているものや、造成面に焼土がまとまっていることから焼失したと考えられる。この掘立柱建物の上限はこの建物に伴う地鎮・宅鎮遺構から10世紀前葉と考えられ、下限は礎石建物の時期である10世紀中葉と考えられる。掘立柱建物の焼失は単なる失火である可能性も高いが、造成層に含まれる焼土の量や、焼土の分布する範囲はかなり広く、少なくとも10世紀前葉の造成をおこなった建物、おそらく中心建物全ては焼失したのではないかと推測される。

交通路の主体が海路へ移ってくると海賊が出没するようになる。『三代実録』貞観四年(862)五月廿日条によると、中央政府に納める米を海賊が掠奪したため備前国が追捕したことが記されており、これ以降、海賊が本格的な活動をおこなったことが記録にあらわれるようになる。そして最も大きな動きとしては、承平六年(936)から天慶四年(941)の間でおこったいわゆる「藤原純友の乱(承平・天慶の乱)」である。藤原純友は伊予国の椽であったが多くの海賊集団を支配下において、伊予国の日振島を拠点として官物・私財を掠奪する海賊活動をおこなった。そして讃岐国府や周防国鑄銭司、太宰府なども攻撃し、讃岐国府は放火されたという⁽²⁰⁾。この乱以降も海賊の活動はなくなることはないが、この乱のような公的施設への大規模な攻撃は中世まではほとんど認められない。

備中国がこの乱によりどの程度の被害を受けたのかは明らかではないが、『貞信公記抄』によると、天慶三年(940)には備中軍が敗走したことが記されている。これが純友と直接関係あるのかは不詳であるが、一連と考える方が自然であろう。また対岸の讃岐国の被害や、隣国の備前介も襲撃されており、やはりある程度の被害は受けたと考えられる。そうすると備中国の瀬戸内海航路の拠点と考えた妹尾住田遺跡の中心建物が10世紀前半、すなわち乱と同時期に焼失していることは、偶然ではないように思われる。そして焼失後、建物を礎石建物にするなど、以前よりも壮麗化される。これには海賊によって受けた古代国家の物理的・精神的打撃を回復させる意図も感じられる。

かなりの推測を混じえたことになったが、妹尾住田遺跡を国府関連の施設と考えると、当時の歴史的事件や、妹尾島の伝承と整合して理解できることが少なくない。

注

- (1) 永山卯三郎『吉備郡誌』吉備郡教育会 1937年
- (2) 村上幸雄 ほか「備中国府緊急確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994年
- (3) 武田恭彰「総社小学校プール建設に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』9(平成10年度) 1999年

- (4) 草原孝典『新道遺跡』岡山市教育委員会 2002年
- (5) 中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 1977年
正岡睦夫 ほか「黒住・雲山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 1994年
江見正己 ほか「矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 1995年
- (6) 佐藤浩司「墨書土器、ヘラ書き土器と硯に関する一考察」『古文化談叢』30 1993年
- (7) 岡田博 ほか「美作国府」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』6 1974年
岡田博 ほか「美作国府」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』24 1978年
- (8) 草原孝典「ハガ(高島小)遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』2000(平成12)年度 2002年
- (9) 松本和男 ほか「百間川岩間遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46 1981年
- (10) 井上弘 ほか「備中平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12 1976年
- (11) 出宮徳尚 「第2節古代寺院址」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年
- (12) 高畑知功 ほか「津寺遺跡」4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 1997年
- (13) 柴田英樹「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138 1999年
- (14) 須藤利一編『ものと人間の文化史』1・船 法政大学出版局 1968年
- (15) 千田稔『埋もれた港』小学館 2001年
森田悌『日本古代の駅伝と交通』岩田書院 2000年
- (16) 郷原誠『上代日本の通関制』牛尾洞 1995年
- (17) 栄原永遠男「奈良時代の流通経済」『史林』第55巻 第4号 1972年
- (18) 岡田博「官衙」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社 1992年
- (19) 村井康彦『王朝風土記』角川書店 2000年
- (20) 太宰府政庁は発掘調査の結果、藤原純友によって焼亡させられた様相が明らかになっており、
焼亡後すぐに再建されたことも明らかになった。
松原弘宣『藤原純友』吉川弘文館 1999年
石松好雄 ほか『太宰府政庁跡』吉川弘文館 2002年

4. 地鎮遺構について

9世紀末から10世紀末の遺構面には建物や溝のほかに、土器や石を埋納したいわゆる地鎮・宅鎮の祭祀に係る遺構が多数検出された。ここではそれらを時期ごとに整理し、県下における同時期資料と比較して、古代の当地の地鎮・宅鎮遺構の大雑把な傾向を整理してみたい。

(1) 妹尾住田遺跡の地鎮・宅鎮遺構の変遷

妹尾住田遺跡は中心建物に伴って造成が繰り返しておこなわれていたことから、遺構の検出過程で各造成層にともなう遺構を分離できた。また埋納された土器に杯が多いことから、編年的な位置付けも比較的容易であった。

まず最も古いのは9世紀末のP188、P113、P674で、蓋付の黒色土器壺を埋納したものである。基本的には土器を埋納するだけのスペースの土壌を掘っている。内部には何も残存していなかったためよくわからないが、壺という器形から御神酒などの液体が入っていたことが想像される。

次は10世紀前葉で、P1、P99、P114のように土師器甕の中に土師器碗・杯を入れているものである。それらは必ず碗を伏せており、しかも杯は重ねているなど、碗・杯の入れ方も共通しており、埋納方法までもある程度一定の手順が存在していたようである。また一方でP238のように柱の抜き取り跡と推測されるピットに碗・杯・皿を重ねて入っていたり、集石遺構2のように小礫を充填していたりするものがあるなど、かなりのバラエティが認められるようになる。

10世紀中葉の例はP665だけで少ないが、土器の含まれない集石遺構1などもこの時期に属する可能性がある。P665もP238と同様に柱を抜き取った後に埋納された可能性が高いもので、10世紀中葉は土師器甕の中に土師器の碗・杯を入れる例が認められない。一見、地鎮・宅鎮遺構の貧弱化の傾向にも見られるが、東側の中心建物はこの時期に山土を用いたそれまでとは異なった丁寧な造成をおこない、建物構造も掘立柱から礎石へ変化している。建物的には最も隆盛した時期であったといえる。山土の造成土中から銅鏡の破片が出土しており、このことはこの時期、土器以上のクラスである青銅製の祭祀具を用いた地鎮・宅鎮がおこなわれたことを示唆しているように思われる。

(2) 県下における他例との比較

県下における地鎮・宅鎮に関する遺構は、8世紀後半から認められるようになる。そして中世になると、かなりバラエティある形態をとりながら事例も急激に増加していく。おそらく、受容層の拡大がおこったのであろう。

まず最も古い例は、津寺遺跡高田調査区で検出された土器埋納遺構1⁽¹⁾で、8世紀後半の時期である。柱穴群の一角に位置することから、地鎮・宅鎮に関する遺構であることは確実である。平面形が楕円形の土壇に、須恵器杯蓋をのせた小形の土師器甕を埋納してあった。これは蓋付の容器という点で妹尾住田遺跡のP188、P113、P674につながるものであろう。このタイプの地鎮・宅鎮遺構は、10世紀以降認められなくなる。

蓋付容器以外の例として、同じく津寺遺跡中屋調査区、溝480埋土内で検出された甕1・2・3がある⁽²⁾。墓である可能性もなくはないが、溝480が2本の平行する溝で区画された官衙域内の掘立柱建物に付属するか、もしくは区画内のさらなる区画に用いられた溝と推測されることから、地鎮・宅鎮遺構の可能性が高いと推測される。これらは一般的な大きさの土師器甕を正置したもので、内部から小礫や刀子、若干の土器片が出土している。碗や杯などの土器は小片であることから甕内に埋納していた可能性は少ないと思われるが、正置していることから残存しにくい何らかの物を入れていた可能性は高いように思われる。時期が下ると甕の中の物が残存しにくい穀物などから、それらを供献、あるいは盛りつけた食器に置きかわったと推測すると、これは妹尾住田遺跡のP1、P99、P114へつながるものと考えられる。このタイプの地鎮・宅鎮遺構は10世紀中葉の例として、斎富遺跡の墓10、墓11⁽³⁾とされる遺構にも認められる。斎富遺跡の墓10、墓11は掘立柱建物に近接しており、骨が出土しないことから墓よりも地鎮・宅鎮遺構の可能性の方が高いと思われる。斎富遺跡の例では土師器甕が倒置しており、内容物を入れて供献していたという意識がかなり薄れてきていることがうかがわれる。この地鎮・宅鎮のタイプは、15世紀の遺構である本谷遺跡の祭祀状遺構⁽⁴⁾でも認められることから、古代以降、中世まで継続されるといえる。

以上の二つのタイプの地鎮・宅鎮遺構はいずれも埋納用の土壇を掘っているが、碗・杯・皿などの食器のみを埋納しているものは、柱穴の抜き取った穴などを利用しているものが多い。このタイプは

10世紀前葉の妹尾住田遺跡P 238が初源で、以降の地鎮・宅鎮遺構の主流をなす。このほか石を土壌に詰め集石遺構もある。これは時期を決める遺物がない場合が多い。不明な点も多いが、食器タイプと同様に中世の遺構でも一般的に認められる地鎮・宅鎮遺構といえる。以上の様相をまとめたのが図111である。

(3) 小結

地鎮・宅鎮に関する考古学的な検討は、平安京出土事例をもとに久世康博氏⁽⁵⁾によりおこなわれている。それによると地鎮・宅鎮は、9世紀後半から10世紀前半に画期があり、それは律令的祭祀から個別的な宗教観に基づく祭祀へ変化したことに起因するとされる。この画期は岡山県下の例をみても、10世紀に食器タイプが出現し、以後、地鎮・宅鎮遺構の主体となっていくといった変化点とも合致する。とくに10世紀になって、柱穴抜き取り穴に地鎮・宅鎮をおこなってくるようになることは、建物を建てる前はもちろん、建物廃絶後の祭祀権までも管掌してくるようになったといえ、宅地の所有権が拡大したことも示唆している。このような変化は香川県の事例を集成・整理した山元敏裕氏⁽⁶⁾の成果とも共通することであり、平安京のみの様相ではなく、かなり広汎な地域での共通した様相であった可能性が高い。

ただ柴田英樹氏が指摘するように⁽⁷⁾、地鎮・宅鎮遺構以外の土器埋納遺構である火葬墓においても、付近の建物との関係から地鎮・宅鎮の機能がうかがえる。それは加茂政所遺跡、火葬墓1・2で、副葬品として鉄製鋤先がある。鉄製鋤先のみを埋納したピットは津寺遺跡土筆山調査区土壙50の中世のピットにも認められ、鉄製鋤先は地鎮具の一種といえる。加茂政所遺跡の火葬墓1・2を地鎮・宅鎮にも関係する遺構であるとするならば、火葬墓と同化した地鎮・宅鎮遺構もあるということであろう。この一例が示すように地鎮・宅鎮の構造はかなり複合的であり、出産や病気快癒、あるいは井戸の廃絶などの異なった範疇に関する祭祀との関連も含めて、より多角的な分析をおこなう余地がありそうである。今後の課題としたい。

注

- (1) 岡本寛久^{ほか}「津寺遺跡」6『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』143 1999年
- (2) 中野雅美^{ほか}「津寺遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 1998年
- (3) 下澤公明^{ほか}「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105 1996年
- (4) 網本善光^{ほか}「本谷遺跡」『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告』1 1987年
- (5) 久世康博「平安京の埋納遺構」『考古学論集』第3集 1990年
久世康博「植物園北遺跡の埋納遺構について」『平安京歴史研究』 1993年
- (6) 山元敏裕「古代から中世にかけての土器埋納遺構」『香川考古』第6号 1997年
- (7) 柴田英樹「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』138 1999年

II 中世

1. 遺構の様相と時期幅

中世の遺構は、調査区全体に及んでおり、A区で見ると北半に柱穴が密集するようにみえる。ただA区南半は断面図からもうかがわれるように、後世の浸食作用により遺構面が削平されており、遺構

の残存状態の差が反映されている可能性が高い。A区南端でも浸食による削平が認められる。粗密の問題は別として、丘陵南端に形成された砂浜部全体に遺構が形成されていたと考えられる。またD区の様相から、丘陵部を削って集落域を拡大している部分も認められる。

時期については最も古いのが12世紀中葉のP400であるが、この時期に属する遺構は他になく、包含層から出土する遺物もほとんどない。最も多いというより、ほぼ主体となるのは13世紀後半から14世紀の時期である。14世紀中葉には土師質土器碗の形態は高台の省略されたいわゆる「ヘソ皿」となるが、その形態の土師質土器碗の出土量は少なく、それが主体をしめる遺構はない。包含層出土の土器でも圧倒的に高台付碗が多いことから、14世紀中葉以降には遺構が形成されなくなったと考えられる。

13世紀後半から14世紀に形成された集落は遺構数が多いものの、遺構の配置や遺物のなかに青磁や白磁などの高級品があまり認められないことから、一般的な集落であったといえる。しかも遺跡の前面には海が広がっており、遺跡自体も砂浜にあることから海浜集落といえる。

2. 妹尾住田遺跡からみた海浜集落の性格

海浜集落という観点から遺構を整理してみたい。遺構は建物に伴う柱穴、炉状遺構、土壇で、そのうち炉状遺構は小鍛冶に用いたと推測される炉状遺構1、2と、それ以外の炉状遺構3に分けられる。炉状遺構3は長方形の土壇内に、台に用いたと考えられる角礫を4つ配置したもので、倉敷市塩生遺跡の1号炉⁽¹⁾と玉野市沖須賀遺跡4号炉⁽²⁾に類例がある。両遺跡とも海浜部に位置しており、製塩をおこなうための鹹水を集めておくための壁面に粘土を貼った土壇もセットで検出されていることから、それらの炉は鹹水を煎熬して塩を取り出すための炉と考えられている⁽³⁾。妹尾住田遺跡でも、A区東半で一辺あるいは、径1～3mの土壇が数多く検出されている。それらはP278のように比較的整った円形のものもあるが、大半は不整形なものである。それらは基盤層が脆弱な砂層であるため、本来の土壇の形態が損なわれ易いことに起因した廃棄時の様相であり、なかには炉状遺構3とセットになる鹹水溜りの機能を持った土壇が含まれていた可能性もあると思われる。それら土壇の配置は相互に規則性はないものの、全体として炉状遺構3から、遺跡東側の入り江状地形(図107)に向かって延びていることから、海と炉状遺構3を結ぶ一定のライン上に分布することがうかがわれる。つまり妹尾住田遺跡では、製塩作業をおこなっていたと考えられるのである。

そのほか海に関する生業活動としては、土錘が出土していることから漁猟があり、さらに貝殻を廃棄した土壇があることから、貝の採集もおこなわれていたといえる。またP446からフイゴ羽口が出土し、鍛冶炉と推測される炉状遺構も検出されていることから、製鉄に関する作業もおこなわれていたようである。ただし鉄滓の出土は極めて少ないことから、それ程大きい操業はおこなわれていなかったようである。また土師質土器の焼成に用いた窯道具も出土している。妹尾に隣接する早島では、該期の土師質土器碗の名称となった「早島式土器」の由来する土器焼成窯がみつかっており⁽⁴⁾、さらに発掘調査によっても、付近で土器焼成をおこなったと推測される窯道具が出土している遺跡もある⁽⁵⁾。同様に妹尾住田遺跡周辺でも土師質土器を焼成していた可能性は高い。

このようにみえてくると妹尾住田遺跡の生産活動は、製塩や漁猟などの海と直接結びついたものから、製鉄、土器づくりなど多方面に及んでいることがわかる。これが古代からの流通拠点であった妹尾の特徴なのか、それとも中世前半の海浜集落の一般的な様相であったのかは、海浜集落の調査例が少な

いためよくわからないが、やや様相のわかっている該期の貝塚について若干検討を加え、この点に関する見通しを立てておきたい。

3. 中世前期の貝塚から見た海浜集落の性格

12世紀から14世紀を中世前期、15世紀から16世紀を中世後期とする。妹尾住田遺跡は中世前期である。岡山県南部の丘陵裾部には貝塚が数多く分布しておりそれらは縄紋時代のものもあるが、数からすると圧倒的に中世のものが多い。妹尾でもかつておこなわれた分布調査により、7箇所も確認されている⁽⁶⁾。中世の貝塚は出土する遺物が少なく、かつ遺構も炉跡や作業場と推定される遺構の伴っている例があることや、数カ所の貝塚が集中して貝塚群を形成していること、貝の種類が蛤、あるいはハイガイなどの単一種類に偏っていることなどから、干貝などの加工を集中的におこなった加工場の跡と推測されている⁽⁷⁾。これまで発掘調査された中世の貝塚は、倉敷市連島北面貝塚群の第26号貝塚⁽⁸⁾、同市亀山遺跡⁽⁹⁾、同市城が端遺跡⁽¹⁰⁾、船穂町西谷貝塚⁽¹¹⁾、同町上の山貝塚⁽¹²⁾、同町中山2・4号貝塚⁽¹³⁾、岡山市橋詰3号貝塚⁽¹⁴⁾、同市西村貝塚⁽¹⁵⁾、玉野市左古谷遺跡⁽¹⁶⁾などである。このうち左古谷遺跡以外は、12世紀から14世紀の幅の中で形成された中世前期の時期である。左古谷遺跡は14世紀の貝塚もあるが、主体は16世紀である。調査された大半が中世前期のもので、現況での中世貝塚全体の主体も該期と考えられている⁽¹⁷⁾。

中世の貝塚は一般的な集落地から、やや離れた丘陵部に分布している傾向がある。妹尾住田遺跡の背後にある丘陵部にも中世貝塚が認められ、それらは一般的な中世貝塚と同様に貝種はハイガイなどの単種で、表面で見る限り土器などの遺物はほとんど含まれていない。一方集落地である妹尾住田遺

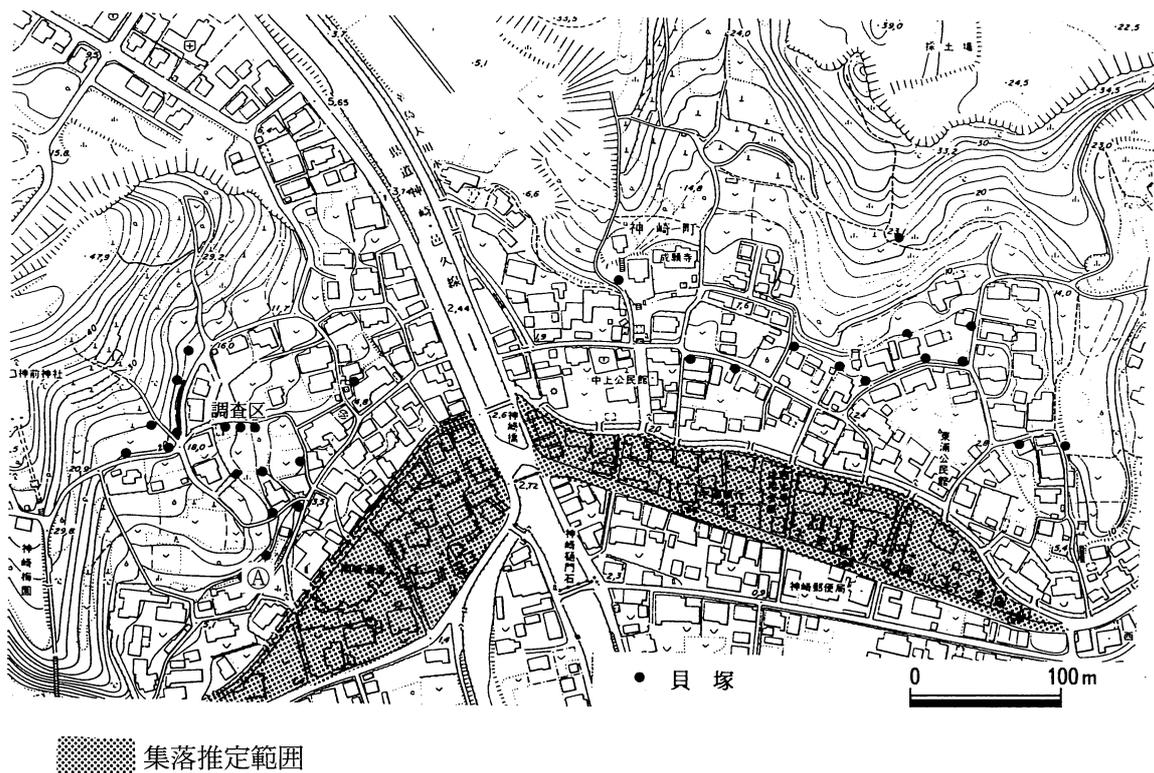


図112 西村貝塚分布図

跡のなかでも貝殻を廃棄した土壌や溝、ピットが検出されている。これらは集落内で消費された貝殻と考えられる。また城が端遺跡も貝殻とともに多くの土器が出土していることや、その位置する地点から、丘陵裾部の内海に面した集落地の一面と考えられ⁽¹⁸⁾、妹尾住田遺跡と同様の集落内の貝塚といえる。妹尾住田遺跡では貝層に含まれる動物遺体の分析をおこなったところ（附章参照）、魚骨や鳥骨が出土した。それらは貝と同様に集落内で消費された残滓と考えられる。

西村貝塚の発掘調査では妹尾住田遺跡と同様に、貝層中の動物遺体を追求した⁽¹⁹⁾。西村貝塚は丘陵部に位置し、付近の分布調査をおこなった結果、現在32地点の貝塚が確認できる（図112）。貝塚周辺の丘陵部も丹念に踏査したが、集落が形成されそうな尾根上にも遺物の分布は認められず、むしろ丘陵裾部（図112スクリーン部分）において遺物の散布が認められる。おそらく妹尾住田遺跡と同様に、丘陵裾部の砂浜部であった地点が集落地であったと推測される。そうするといずれも集落地から若干離れた地点の貝塚と考えられる。発掘調査の結果、土壌状のくぼみに廃棄された貝塚を2つ、柱穴抜き取り穴に貝殻を遺棄したものを1つ検出した。貝種や動物遺体を分析した結果、一見ハイガイのみであるかのようにみえたが、ヤマトシジミやマガキなどのほかの貝種も混入していることや、魚骨や動物骨なども検出した。この結果は中世貝塚が干貝の加工などを集中的におこなった加工場というイメージとは異なっている。妹尾住田遺跡の分析結果と比較すると、魚骨や動物骨が少ないものの、基本的には集落における残滓の廃棄のパターンと同じといえるからである。

中世の貝塚の場合、比較的斜面の急な丘陵上までも分布しているために、当地の丘陵部が果樹園として利用される場合に土地改良などがおこなわれ、かなり攪拌されている場合が多い。そういった影響を受けている可能性も考慮されるが、中世の貝塚は1つ1つの地点は比較的小規模で完結していることが多い。大規模な貝層を形成している地点もよく観察すると、いくつかの小単位が複合して、見掛け上大きな貝塚になっている場合が多い。例えば西村貝塚の④地点（図112）などはそうである。つまり丘陵上に分布する中世の貝塚は比較的小さな単位で形成されており、貝種もある程度限られていることから、貝の加工を集中的におこなった結果形成されたというよりも、短期間の間に形成されたもので、しかも規模的にも集中して処理されたといえる程のものではなく、むしろ自己完結的な性格が強かったように思われる。それは貝層に動物遺体などが含まれる有り様とも一致するものである。

そうすると中世の貝塚についても、妹尾住田遺跡で推測された海浜集落の多角的な生産活動の一部に位置づけられる程度のものであったことが推測されてくるのである。つまり中世貝塚の広汎な分布は同じ様な海浜集落が広く存在していたことを示していると考えられるのである。

4. 小結

妹尾住田遺跡と西村貝塚のわずか2例の分析例から、かなり強引な推測を試みた。より多くの事例を増やしていき、中世貝塚における動物遺体の有無、貝種等の基礎データを蓄積していく必要がある。しかし妹尾住田遺跡の調査データから、海浜集落は土器づくりや製塩、製鉄などの漁業以外の多角的な手工業生産をおこなっていたこともおぼろげながらみえてきた。それは海浜集落が支柱としておこなう生業活動が確立していない状況を物語っているように思われる。中世以降も貝塚は形成されているが、中世前期の貝塚が目立つ背景は、中世前期における海浜集落のそのような存立基盤の脆弱さを反映させていると推測されるのである。

注

- (1) 小野雅明「塩生遺跡発掘調査報告」『倉敷市埋蔵文化財センター年報』1 (1993年度) 1994年
- (2) 福田正継「沖須賀遺跡」『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1981年
- (3) 注) 1. 2
- (4) 水原岩太郎「考古行脚—早島行—」『吉備考古』第32号 1937年
- (5) 高畑知功^{ほか}「奥坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53 1983年
- (6) 妹尾町『妹尾町の歴史』妹尾町の歴史編纂委員会 1970年
- (7) a 小野一臣「備中連島北面貝塚群調査報告」『古代吉備』第1集 1958年
b 根木修「三 中世海浜貝塚」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年
- (8) 注7
- (9) 岡田博^{ほか}「亀山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69 1988年
- (10) 間壁葎子「倉敷市城が端遺跡」『倉敷考古館研究集報』第18号 1984年
- (11) 小野一臣「浅口郡船穂町西谷貝塚」『古代吉備』第7集 1971年
- (12) 江見正己「上の山貝塚確認調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12 1981年
- (13) 浅倉秀昭^{ほか}「中山1、2号貝塚」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81 1993年
- (14) 福田正継「橋詰三号貝塚確認調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』14 1984年
- (15) 高橋伸二「西村貝塚(市道)遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1998(平成10)年度 2000年
草原孝典「西村貝塚(市道)遺跡」3『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1999(平成11)年度
2001年
- (16) 田嶋正憲「左古谷遺跡」『灘崎町埋蔵文化財発掘調査報告』1 2001年
- (17) 注7b
- (18) 注10
- (19) 小林園子「西村貝塚出土動物遺体について」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1999(平成10)年
度 2001年

Ⅲ 妹尾に関する中世以前の文献及び関係史料

妹尾に関する文献、とくに中世以前のものについては『角川日本地名大辞典』(角川書店 1989年)、『岡山県の地名』(平凡社 1988年)によって網羅されている。ここではそれらの成果を概観し、さらに妹尾の地名についても、その起源が妹尾住田遺跡の発掘調査成果と関わる可能性があることを指摘したい。

1. 文献及び関係史料

妹尾に関する最も古い文献は①の『吾妻鏡』で、平家の没官領として出てくる。妹尾は平家方の有力な部将であった妹尾太郎兼康の本拠ともいわれており、源平の争乱が終息した後は没官領となっていたのだろう。妹尾郷はこれ以前の文献では見ることができず『和名類聚抄』にも記されていない。近世の地誌には妹尾に深井郷の土地が含まれていることが書かれていることから、中世以前は備中国都宇郡深井郷の一部であったと思われる。ただし『吾妻鏡』の別本では妹尾庄となっている。

不可有他妨、此所為高野山 崇徳院御骨三昧堂領之間、関東
自余之恒例・臨時之課役、不可勤仕之地也、然者有限御仏事
米、無懈怠可令備進之矣、仍所讓渡之状如件、

正和二年五月廿三日

正四位下藤原朝臣(公廉)(花押)

〈藤波家文書〉

被知行之状如件、

康永四年七月廿六日

阿野中將殿(美康)

尊氏(足利)(花押)

〈阿野文書〉

④

後醍醐天皇綸旨

尾張国青山庄地頭職半分・備中国妹尾庄(都宇郡)和太方地頭職半分併
預所職使田免返名等、任公廉卿讓、領掌不可有相違之由、可
被伝仰尼妙僧者、

天氣如此、仍執啓如件、

元弘三年七月五日

式部少輔(花押)奉

謹上 内蔵頭殿

〈藤波家文書〉

⑥

守安 備中 元応(一三一九)一三二一)

「備州妹尾住守安」

〈刀匠全集古刀編〉

⑦

九〇三 平家物語

長門本
卷四

たんの少将は、備中のくにせのおのみなと、ゆく井とい
ふ所より御船にめして、浪ちはるかにこきかよふ、

〈古典資料研究会〉

○右近衛少将丹波守藤原成経、安元三年(一一七七)六月鬼界島ニ流サル。

足利尊氏御判御教書 阿野
文書

備中国妹尾庄(都宇郡)和田方領家職半分事、任親父公廉朝臣讓状、可

中世以前文献及び関係史料

①

吾妻鏡 第四(元暦二年(一一八五))四月廿九日条
〔前略〕今日、以備中国妹尾郷(郡字部)、被_レ付_二崇徳院法華堂_一、是為没官領、武衛所下令_二拜領_一給_上也、仍為_レ奉_レ資_二彼御菩提_一、被_レ宛_二衆僧供料_一云々、

〔国史大系〕

②

備前国一宮社法本社
文書

備前国中小神祇



中略

一 備中せ(妹尾)のう両うら村之あき人、右之ことく、悉く備せん
ノ一宮へ諸初尾参り候、并御へん、御さい浦役、はま(兵役)やく
とて、春ハひらノうほ卅三こん、同たいノうほ卅三こん、
秋ハしほたい百廿まい、又おかずの物とて、小肴百八十参
り候、

右ノ諸はつほ、神主、祝部、借屋此三殿ノ家より被_レ仰付候て、
それ_レ下奉行参り候、
備前国中村々在々ノ宮、かみ_レ御祭りに付而、一宮より

御存じの事、但むかしは大キ成るやうに申候、先々是は近年ノおほへを社人 衆かき付申候なり、

中略

一 備中の内せ(妹尾)のふ両うらより春秋ニ、○鯛ノうほ百卅かけ
○ひらのうほ百廿まい、○はまくり、○はいがい、○白う
ほまいる候、いそさかな御へんとて色々子細、是備前ノ内
へあき(番役)ない仕候付而、其はつほの心也、むかしも如此候、
ふ(番役)ごやく、人役、馬やくニ諸初尾い たし申候、

中略

康永元年壬午六月廿八日

後略

〔吉備津彦神社史料〕

③

藤原公廉備中国妹尾莊和太方領家職讓状
讓渡 所領事

備中国妹尾(郡字部)莊和太方領家職半分事
右、所領者、外祖相云之地也、仍子息讓与侍従季継畢、更以

②は備前国一宮(現吉備津彦神社)の祭りの有り様を記録した『備前国一宮社法』で、康永元年(1342)6月の年紀を持つ。この史料が康永元年まで遡ることに関しては疑問を呈する意見もあるが、少なくとも中世後期までの様子であることは肯定されている⁽¹⁾。この中には神前に捧げる各地の特産物が記されており、備中妹尾の両うら村からも、商人は浦役、浜役として春はひらのお(曹白魚)33、たいのうお(鯛魚)33、秋はしほたい(塩鯛)120、小魚180などを、また、ふご(畚)役・人役・馬役として、たいのうお(鯛魚)130、ひらのうお(曹白魚)120、はまくり(蛤)、はいがい(灰貝)、白うほ(白魚)を奉納している。両うら村については現在の地名には残っていないが、かつて妹尾に存在した村名と考えられている。しかし近代になって妹尾村は西磯と東磯が合併して成立した(明治9年)。江戸期においても『備中村鑑』では「〈西東〉妹尾村」と記しており、庄屋名も2人みえる。このような妹尾の2極化は元禄6年(1693)まで遡る。これは干拓によって耕地が増えたためといわれる。しかし両うら村も2つのうら村、即ち、うら(浦)と磯を同じ意味で漁村ととらえると、両うら村は2つの漁村という普通名詞ということになる。そうすると両うら村の地名が現在認められないのも、それが地名などの固有名詞ではなかったことに起因したのではないかと思われ、妹尾の2極化も中世まで遡る可能性があるように思われる。いずれにせよ②は妹尾でとれる豊富な海産物の具体的な内容を知ることができる。また塩鯛の存在は、塩生産もおこなわれていたことを示唆している。

③は正和4年(1315)に藤原公廉が同庄の和太方領家職を子息の季継に譲った譲状である。それによると当庄の一部が高野山崇徳院御骨三昧堂領であった。これは①の『吾妻鏡』にも通じる。

④は後醍醐天皇の綸旨であり、これは元弘3年(1333)に妹尾庄和太方地頭職半分と預所職使田免仮名などを藤原公廉が、尼妙僧に譲るのを認めているものである。和田は現在の地名でも確認できる。

⑤は阿野実廉が父藤原公廉から妹尾庄和田方領家職半分行知することを認めた足利尊氏御判御教書である。なお阿野実廉とは、後醍醐天皇の寵姫である廉子(新待賢門院)の兄であり、新田義貞と共に鎌倉へ攻め入っている人物である。

⑥は刀剣銘である。時期的にも妹尾住田遺跡と近く、同遺跡で検出された鍛冶炉状遺構や当史料から、妹尾では刀鍛冶をはじめとした製鉄関連の作業が比較的盛んにおこなわれていたと推測できる。

⑦は物語であるため史料的にはやや正確さを欠くが、妹尾の港が鬼界島へ行く出発点になっていることから、妹尾が瀬戸内海航路の拠点であったことを示しているといえる。

妹尾に関する文献は決して多いわけではないが、地方という立場からは比較的多い方だといえる。備中の古代における在地の状況を示す『備中国大税負死亡人帳』(天平11年(739))や、『和名類聚抄』に、妹尾郷が記載されていないことから、妹尾が1つの地域として独立したのは文献①の示す中世頃と推測される。妹尾を冠する氏族名が見当たらないのも、その考えを支持させる。平家方の武将として活躍したことが『平家物語』や『源平盛衰記』に描かれている妹尾(瀬尾)太郎兼康については確実な文献史料がないため、物語で語られるほどに実像はわからない。しかし、兼康が妹尾(瀬尾)を冠することや、文献①で妹尾郷が平家の没官領となっていることなどは兼康と妹尾の地が密接な関係にあったことを示す状況証拠になるものと思われる。また、⑥の文献は妹尾が単なる漁村や港だけでなく、手工業生産も盛んであったことを示しており、ある意味で内海の物流拠点であった可能性も示している。

2. 妹尾の地名考

妹尾が古代にどのような名称で呼ばれていたのかは明らかでない。わずかな史料から都宇郡深井郷に含まれていたと推測されるだけである。備中国における古代の史料として『備中国大税負死亡人帳』(天平11年(739))がある。これは大税を受けて返済せずに死亡した個人の郡・郷・里と郷戸主、房戸主の名を明らかにするために作成されたもので、地域全体の個人名を網羅したわけではないが、かなりの広範囲にわたっており、大体の傾向をみることができる。これによると都宇郡にのみ津臣の名がみえ、しかも深井郷の場合、郷戸主、房戸主ともに津臣となっている。津臣は海上交通に関する氏名である。また時期が下り、しかも近代における写しとして史料的価値はかなり不確かな点があるが、備中国一宮である吉備津神社に寄進した個人を記した中世の記録とされる『吉備津宮惣解文』のなかに深井郷の津守氏の名がみえる⁽²⁾。これも津臣と同様の意味があるように思われる。

以上の史料が深井郷のなかの妹尾を示しているとは限らないが、妹尾の属する郷に津関係の人名がかなり濃密に存在していたであろう事は肯定されよう。

妹尾住田遺跡は、平安時代の海上交通路の活発化に連動して出現した備中国の公的港湾施設と考えられた。ちょうど同じころ瀬戸内海航路上の泊も整備されていった。それらは『続日本紀』で大輪田船瀬、魚住船瀬、和迄船瀬が造営・修理されたという記事によってうかがわれる。それらの造営主体は中央政府であるが、維持・管理は国司によっておこなわれた⁽³⁾。船瀬と泊については同じ意味とも考えられてきたが、杉山宏・森田悌氏によると、船瀬は通常の津とは異なり難所を通過するためのものであり、寄港地的意味が強かったとされる⁽⁴⁾。つまり船瀬は官物の安全輸送を目的として、地方と中央との中間の津として整備されたものといえる。これはまさに備中国中枢と瀬戸内海航路を結ぶ中継基地としての妹尾住田遺跡の性格と合致する。

妹尾住田遺跡も船瀬の1つだとすると大輪田船瀬のように、かつては〇〇船瀬と呼ばれていたのではなかろうか。妹尾は瀬尾とも書く。平家物語では妹尾太郎兼康は瀬尾太郎兼康とも書かれている。また『吉備津神社文書』の中世文書のなかには、現在の地名である庭瀬を庭妹と表記したものがある。妹尾を瀬尾だとすると、瀬尾は浅瀬などの尾、もしくは狭小な海峡である瀬戸の尾、つまりそういった地形のすそや背後という意味にもみえるが、港湾施設である船瀬との関連でとらえると、〇〇船瀬のすそや背後という意味が省略されて瀬尾になったという解釈はどうであろうか。

大輪田船瀬は12世紀後半に平清盛が大規模な改修をおこない、瀬戸内海航路の掌握の拠点にしたが、その配下である妹尾太郎兼康が妹尾を本拠としていたといわれていることは、おそらく偶然ではないであろう。瀬戸内海航路といったつながりによって、兼康と平清盛は結びついていたと推測されるのである。兼康には水軍型領主⁽⁵⁾の側面もうかがわれるのである。

妹尾太郎兼康の出自については様々な伝承があるが、古代以来深井郷を拠点とした津臣氏の系譜で考えることも可能ではなかろうか。海を基盤とした古代豪族が古代末から中世においても在地領主となっている例として、邑久郡領である海宿禰氏がある。海宿禰氏は文献的にも11世紀初頭に郡領の地位を世襲的に独占していることが確認されている。海宿禰氏は記紀にあらわれる「吉備海部直」氏と系譜的につながると考えられている⁽⁶⁾。同様のことが妹尾太郎兼康の出自にもあてはめられるのではなかろうか。そうすると妹尾太郎兼康は海上交通路を掌握する古代的権威の最後の姿であり、その崩壊が妹尾の中世的世界への脱皮へとつながっていったのではないかと思われる。具体的には、妹尾太郎兼康が討ち取られた後は、妹尾の人々は在地権力である備前・備中の両吉備津宮との貢納関

係を結んで、手工業生産品や海産物の販路を確保し、経済的な自立化を達成させていったのではないかと考えられる。それは『備前国一宮社法』が示すように、そこには兼康のような有力者の名はなく「妹尾の商人」などといった民衆の姿が表現されるようになる。

つまり妹尾の歴史は陸上交通から海上交通路へ切り替わる9世紀から10世紀に始まるが、それは交通路の中継といった意味が大であり、豊富な海産資源をもとにした近代まで続く漁村としての妹尾は12世紀末以降の中世に成立した可能性が高い。そして古代的世界の崩壊した中世以降、古代の港湾を意味した船瀬の名は急速に忘れ去られていき、わずかに妹尾の妹(瀬)にのみ残っていると推測されるのである。

注

- (1) 三好基之「瀬戸内海運の発達と市庭の賑わい」『図説 岡山県の歴史』河出書房新社 1990年
- (2) 藤井駿『吉備津神社』日本文教出版 1973年
- (3) 郷原誠『上代日本の通関制』牛尾洞 1996年
- (4) 杉山宏「八・九世紀の海運に関する二、三の問題」『海事史研究』四〇号 1983年
森田悌「古代水運に関する二、三の問題」『金沢大学教育学部紀要』三四号 1985年
- (5) 戸田芳実『初期中世社会史の研究』東大出版会 1991年
- (6) 吉田晶『吉備の国造と県』『岡山県史』古代Ⅱ 1990年

参考文献

同前峰雄『悲運の平将「妹尾太郎兼康」評伝—十二カ郷用水利の偉功—』日本文教出版株式会社 1987年

附章 妹尾住田遺跡の動物遺体について

小林園子

妹尾住田遺跡では、中世の遺構面(12世紀から14世紀)から動物遺体が検出された。P 31・P 102・P 195・溝 2・P 600と、P 537からである。これらのうちP 675以外の 5 箇所からは、貝層が出土しており、遺跡の概要および貝類の分析概要については、すでに報告がなされている(岡山市教委1999)。今回はこれらの貝類遺体をはじめ、それ以外に出土した魚類・両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類を含めた動物遺体の報告をおこなう。

なお、分析を行うにあたり、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生、早稲田大学樋泉岳二氏には、基準となる標本を使用させていただき、また御教示・御助言をいただいた。記して感謝する次第である。

1、資料と方法

各遺構の貝層は土ごと全量をテンバコに採取し、水洗篩別をおこなうことを基本とした。採取した貝層の量は全部でテンバコ32箱となり、これらは天日で乾燥させた後に体積・重量を計り、その場で水洗篩別をおこなった。微小な魚骨の流出を防ぐため、篩のメッシュは最小を1mmとした。水洗篩別をおこなった資料は、乾燥後、さらに体積・重量を計量した後、魚骨・獣骨等の抽出および同定をおこなった。

また、貝類の詳細な内容を分析するために、水洗前のサンプルを遺構ごとに2400~2600cc分を別に抽出して、水洗篩別をおこなった(貝類分析用サンプル)。ただし、貝層の全体量の多い溝 2 と P 537 では、これらのサンプルを他よりも多く採取しており、溝 2 では 2 箇所の合計4900cc、P 537では 4 箇所の合計8500ccを抽出した(表 2)。これらのサンプルも他のサンプルと同様に天日乾燥し、1mmメッシュでの水洗篩別をおこない、乾燥後重量を計量した。その後、貝種の同定・計数・大きさの計測を行った。

まず、貝類の同定については、巻貝は軸部を残すものを1個とし、二枚貝は殻頂を1個としてカウントした(表 3)。さらに二枚貝は左殻と右殻を分類し、数の多い方を最小個体数として採用した。

各遺構全体の貝類の最小個体数は、貝類分析用サンプルの最小個体数に、貝類分析用サンプルの水洗・乾燥後の重量と貝層全体の水洗・乾燥後の重量の比率をかけることにより算出した。なお、遺構別の貝種の組成比率は最小個体数から算出している(表 4・図 1)。

また、各遺構出土のハイガイの大きさに偏りがみられたので、その大きさを計測することにした。方法は完形のハイガイの殻長をノギスで計り、計測結果は5mm毎の度数分布で示した(表 5・図 2)。

今回は以上の分析に加え、魚骨・獣骨などの詳細な分析もおこなった。これらは貝層全体から抽出し、同定できる部位についてはすべて同定をおこなった。標本は国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生の所蔵品および樋泉岳二氏所蔵のものを参考とした。同定作業の結果、魚類・両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類の出土が明らかとなり、種名一覧(表 1) および表 4・5 で詳細を記した。

2、分析結果

動物遺体分析の結果、表 1 に列記したように貝類14種、魚類18種、両生類 3 種、爬虫類 1 種、鳥類

3種、哺乳類5種が含まれていることが判明した。以下、遺構ごとに分析結果を報告する。

P31

小規模な土坑内貝層で、採取した土・貝の量はコンテナに約1箱分である。ハイガイ主体の貝ブロックで、その他マガキが少量出土している。ハイガイの大きさは、殻長平均28mmのやや小型の貝であった。人工遺物や魚骨・獣骨などは含んでいなかった。

P102

小規模な土坑内貝層で、土・貝の量はコンテナに約半箱分である。ハイガイの貝ブロックで、その他の貝の混入は見られなかった。ハイガイの殻長平均は40mmで大型である。人工遺物や魚骨・獣骨などは含んでいなかった。

P195

土坑内貝層で、土・貝の量はコンテナに約6箱分である。ハイガイ主体でその他に、小型のカキが少量含まれている。ハイガイの殻長平均は30.5mmである。また、タイ科の歯が1点とウシノシタ科の椎骨3点が出土しており、その他に保存状態が悪く種同定が困難な魚類椎骨が2点出土している。爬虫類はヘビ類の椎骨11点で、両生類では小型のカエルの椎骨1点、さらに下肢骨1匹分と大型のカエルの距骨・踵骨が1点出土している。このうち、ヘビ類の椎骨は非常に大型で、おそらく体長2メートル以上のものであろう。椎骨の一部のみの出土であることから、食用とされた可能性もある。

溝2

溝2の中には、東西に長い貝ブロックが存在していた。貝ブロックは東西2つのブロックに分かれており、土器片が少量含まれていた。土・貝の量はコンテナに約5箱分である。ヤマトシジミ主体の混貝土層で、他には稀に小型のハイガイが混入する程度である。ヤマトシジミの保存状況は悪く、計測は困難であったが、24mm前後の個体が多く出土していた。魚骨は1点出土しているが保存が悪く、種の同定は不可能であった。

P537

径約2m、厚さ約30cmの混貝土層である。土は固くしまりがあり、貝の保存はあまり良好ではなかった。発掘時より魚骨・鳥骨等の混入が目立ち、「カワラケ」の破片など、多くの人工遺物が出土している。

貝類は、ハイガイを中心に、スガイとヤマトシジミが出土し、また少量であるが、ハマグリ、イシダタミガイ、ゴマフダマガイ、タマキビガイ、ウミニナが分析サンプルより出土している。さらに貝類分析サンプル以外から、ヒロクチカノコガイ、カワアイガイ、レイシガイまたはイボニシ、マガキ、シラトリガイ類が数点ずつ出土している。ハイガイの殻長と大きさの計測を行ったが、平均29.6mmと小型のものが多く出土している。

魚種は、ウシノシタ科を中心に、イワシ類、ヒラ、ウナギ、コイ科、サヨリ属、トビウオまたはサンマのダツ目の一種、ボラ、スズキ属、ニベ科、マダイ、クロダイ、ウミタナゴ科、ハゼ科、カサゴ

類、メバル類、コチ科の18種が出土している。椎骨の量で見ると、最も多いのがウシノシタ科で、次にイワシなどのニシン科のものである。最小個体数でみると、ウナギの左上上顎骨が3点出土しており、少なくとも3個体含まれる。以上の魚類については、さらに次のような点が指摘できる。

まず、タイ科の椎骨の左側面に、金属器による削ぎ痕をもつものが2点見られた。このタイ類は、椎骨の大きさから体長50cm以上であったことがわかり、さらに金属器による削ぎ痕の状況からみて、2枚または3枚卸しの調理が行われたことがわかる。また、スズキも体長50cm前後のものと、非常に小型のものが出土している。魚類は瀬戸内の近海に生息するものを中心に多様な種類を捕獲しており、さらにコイ科などの淡水産の魚も漁獲していたことが指摘できる。

次に、鳥類ではキジとニワトリが出土している。キジは右鳥口骨、左右上腕骨、左大腿骨、右脛骨、左右中足骨が含まれ、ニワトリは雄の右中足骨の後面の蹴爪部分が出土している。その他種不明の鳥類の右中足骨が1点を確認しているため、鳥類は少なくとも3種、3個体である。

最後に哺乳類では、小型のネズミ類右寛骨1点が出土し、さらにドブネズミよりも大型のネズミ類の下顎骨の第1、2臼歯部分が1点、さらにノウサギの左肩甲骨1点とウマの左上腕骨1点が出土している。ウマの上腕骨遠位端破片部分には、骨端軟骨部分を削ぐためと思われるキズがあるが、犬の噛み痕か金属によるものかは不明である。その他、ヒトの下顎の第1もしくは第2後臼歯の破片が出土している。

P 600

ウマの上腕骨左破片が出土している。他にウマまたはウシの骨片が数点を確認しているが、同定は不可能であった。この遺構は貝層をともなっておらずウマのみの検出であった。

3、まとめ

以上の分析結果で明らかになったように、今回出土した動物遺体は実に多種多様であった。P 537を例にみると、貝類が18種、魚類のうち淡水に生息するものが1種、主に海水に棲息するものが17種、鳥類が3種、そして哺乳類が5種出土している。獲得方法は別にしても、多種多様な食料を得ていた事実が明らかになったのは重要である。

このように多種多様な種がP 537で出土している一方で、ピット内(P31、P102、P195)、や溝(溝2)に形成された小規模な貝層は、組成において単純な様相を示しつつ、遺構ごとに特色をもっていた。

貝類について具体的にその様相をみてみると、P 102はやや大型のハイガイのみで形成されている貝ブロックであり、P31とP195はハイガイを主体とした貝層で、マガキが8～9%ほど含まれる組成を示す。また、溝2遺構については、ヤマトシジミがほぼ100%を占める貝層である。P195では魚類と爬虫類・両生類が少量、溝2でも魚類が1点含まれていることを除き、人工遺物もほとんど含まれない単純な貝層である(図1)。一方で、P537では小型のハイガイを主体として、スガイを約13%含む貝層であるが、その他にもヤマトシジミ・ハマグリ・多種の巻貝類などを含んでいる(表3・図1)。

このようなピット内や溝の貝層の種類の内訳は、生息域が同じであるのに対して、P537の貝層は生息域の異なる貝種によって貝層が構成されているところに特異性がある。ハイガイは砂泥の干潟

に主に生息する貝であるが、スガイは岩礁に主に生息する貝である。ヤマトシジミは汽水域に生息する貝で、ハマグリは砂底に主に生息する貝である。生息域の異なる貝種を、別々に採取し消費していた状況がここから推定できる。

またP195と溝2・P537からは、多種の魚類が出土しており、特定の種に偏ることなく、各種が少量ずつ出土していることが特徴である。魚類の種類については、コイ科は淡水に生息する魚種であるが、大部分の種が瀬戸内海沿岸で捕獲可能な魚種である。P537から出土した動物遺存体個々については、生息域から見るとおそらく遺跡周辺で入手可能なものであったと推測する。

なお、P537から出土した動物遺存体の中には、調理時の解体痕跡が見られ、特定の部位の骨しか残存していないなど、日常的な食料の残滓が含まれている可能性が高い。

一方、その他のピット群から出土した貝層は、特定の貝種が出土し、さらにそこに選択性が認められる。内訳は、1～2種の貝種のみでほぼ100%の組成を示し、ごく少量の魚骨、獣骨などが含まれ、人工遺物などはほとんど含まれない。こうした貝層にみられる特徴は、岡山県南部にみられる他の中世貝塚に多くみられる様相と同様である。

このように遺跡周辺の資源を多角的に採取していたわけであるが、遺跡から出土する貝種が特定の種に限られることから、貝類採取に際してはある程度の選択性もあった。干潟には通常、多数の貝種が生息しており、ザルなどで一括して採取すると、1つの貝種の組成比が80%ないし90%以上を示すことは少ない。しかし、今回の貝種組成をみると、大部分の貝層において、ハイガイやヤマトシジミといった貝種が80%以上の組成比を示した。つまり、この貝種組成のありかたから、これらの貝を採取するために干潟もしくは河口に行き、本来の目的以外の貝種を見つけた場合は除去し、特定の貝種のみ遺跡に持ち込み、そして消費して廃棄するといった状況を想定できる。

また、本遺跡では鳥類・哺乳類が少ないのも特徴である。鳥類はニワトリ・キジの主に2種であり、カモ類など他の遺跡で一般に多く出土している種は出土していない。つまり、積極的に鳥類を捕獲した状況は認められない。哺乳類においてもシカやイノシシが出土していない点は、そのことを裏付けるものである。

このように、P537とピット群は動物遺体の組成からみた場合、異なる様相を示すことが分かった。このような違いの要因としては、貝層の規模つまり堆積の期間や、廃棄パターンの検討も考えなくては行けないが、消費活動の一端を示している可能性もある。両者の差異がどのような背景により形成されたか、今後類似する他の遺跡を分析する中で検討する必要がある。

参考文献

- 阿部 永監修 1994『日本の哺乳類』東海大学出版会
- 岡山市教育委員会 1999『岡山市埋蔵文化財調査の概要－1999(平成11年度)－』
- 高野伸二編 1981『カラー写真による日本産鳥類図鑑』東海大学出版会
- 波部 忠重監修 1990『学研生物図鑑 貝Ⅰ・Ⅱ改訂版』学習研究社
- 益田一他編 1984『日本産魚類大図鑑』東海大学出版会

表1 動物遺体種名一覧

貝類

イシダタミガイ	<i>Monodonta labio confusa</i>
スガイ	<i>Lunella coronata coreensis</i>
ヒロクチカノコガイ	<i>Dostia violacer</i>
タマキビガイ	<i>Littorina brevicula</i>
ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>
カワアイガイ	<i>Cerithideopsilla djadjariensis</i>
ゴマフダマガイ	<i>Tectonatica tigrina</i>
アカニシ	<i>Rapana venosa venosa</i>
レイシガイ類	<i>Reishia</i> sp.
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
シラトリガイ類	<i>Macoma</i> sp.

魚類

ニシン科	Clupeidae gen.
ヒラ	<i>Ilisha elongata</i>
ウナギ	<i>Anguilla japonica</i>
コイ科	Cyprinidae gen.
サヨリ属	<i>Hyporhamphus</i> sp.
ダツ目の一種	Beliniformes fam.
ボラ	<i>Mugil cephalus cephalus</i>
スズキ属	<i>Lateolabrax japonicus</i>
ニベ科	Sciaenidae gen.
マダイ	<i>Pagrus major</i>
クロダイ	<i>Acanthopagrus schlegeli</i>
タイ科	Sparidae gen.
ウミタナゴ科	Embiotocidae gen.
ハゼ科	Gobiidae gen.
カサゴ類	Scorpaenidae gen.a
メバル類	Scorpaenidae gen.b
コチ科	Platycephalidae gen.
ウシノシタ科	Soleoidei gen.

両生類

カエル類 a	Anura fam.a
カエル類 b	Anura fam.b

爬虫類

ヘビ類	Serpentes fam.
-----	----------------

鳥類

キジ	<i>Phasianus colochicus</i>
ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus</i>

哺乳類

ネズミ類 a	Muridae gen.a
ネズミ類 b	Muridae gen.b
ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>
ウマ	<i>Equus caballus</i>
ヒト	<i>Homo sapiens sapiens</i>

表2 貝層・貝類分析用サンプル出土量一覧

貝層全体				貝類分析用サンプル	
水洗前		水洗・乾燥後		水洗前	水洗・乾燥後
重量(kg)	体積(cc)	重量(kg)	体積(cc)	体積(cc)	重量(kg)
9.0	16500	3.2	5300	2400	0.5
11.4	7600	3.4	5550	2600	1.2
72.7	72600	9.0	18600	4900	0.8
92.2	93600	14.0	29300	2400	0.5
276.5	303200	19.3	43600	8500	1.3

表3 貝類分析用サンプルの貝類出土量

遺構	貝 種													
	スガイ		その他巻貝類	ハイガイ			ヤマトシジミ			マガキ		ハマグリ		
	軸部	ふた		左	右	不明	左	右	不明	左	右	左	右	不明
P 31	0	0		76	67	9	0	0	0	3	7	0	0	0
P 102	0	0		49	35	8	0	0	0	0	0	0	0	0
溝 2	0	0		1	1	0	269	281	210	0	0	0	0	0
P 195	0	0		53	49	30	0	0	0	4	7	0	0	0
P 537	43	66	イシダタミガイ2, ゴマフダマガイ1, タマキビガイ2, ウミナ類1, アカニシ? fr 1, 種不明巻貝軸50	194	201	43	25	21	4	0	0	0	1	1

表4 各遺構別貝類最小個体数(左)と組成比率(右カッコ内)

遺構	その他の巻貝		ハイガイ		ヤマトシジミ		マガキ		ハマグリ		合計
P 31	0	(0%)	564	(92.0%)	0	(0%)	49	(8.0%)	0	(0%)	613
P 102	0	(0%)	158	(100.0%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)	158
溝 2	0	(0%)	12	(0.3%)	4617	(99.7%)	0	(0%)	0	(0%)	4629
P 195	0	(0%)	2116	(90.7%)	0	(0%)	218	(9.3%)	0	(0%)	2333
P 537	3218	(13.3%)	20681	(85.5%)	263	(1.1%)	0	(0%)	13	(0.1%)	24174

表5 各遺構別ハイガイ殻長計測結果

遺構	P31	P102	P195	P537
サンプル数	127	65	104	319
平均(mm)	28.1	40.0	30.5	29.6
最小値(mm)	19.5	16.4	17.9	7.3
最大値(mm)	47.5	61.5	44.6	61.5
標準偏差(mm)	4.4	10.7	6.0	8.5
度数分布				
15.0mm以下	0	0	0	1
15.1~20.0mm	1	1	2	14
20.1~25.0mm	32	6	19	95
25.1~30.0mm	56	6	27	101
30.1~35.0mm	30	6	38	44
35.1~40.0mm	5	16	9	30
40.1~45.0mm	2	7	9	9
45.1~50.0mm	1	12	0	12
50.1~55.0mm	0	5	0	7
55.1~60.0mm	0	4	0	4
60.1~65.0mm	0	2	0	2

表7 両性・爬虫・鳥・哺乳類出土一覧

出土遺構	種名	部位 左右 残存状況 数	備考
P195	ヘビ類 カエル類	椎骨11 寛骨(腸骨部) 左右 各1 脛腓骨 左右 各1 大腿骨 左右 各1 距骨・踵骨 右1 椎骨1	大型 小型 小型 小型 大型
P537	カエル類 キジ キジ? ニワトリ↑ 鳥類種不明 ネズミ類 小型陸獣 ノウサギ ウマ ヒト	大腿骨 左? 1 鳥口骨 右1 脛骨 右 中間~遠位端1 中足骨 左 遠位端1 上腕骨 右 中間破片1 上腕骨 左 遠位端破片1 大腿骨 左 遠位端破片1 中足骨 右 近位破片1 中足骨 右 中間後面部分破片1 中足骨 右 遠位端破片1 指骨9 下顎 第1・2臼歯 左1 寛骨 右1 四肢骨 中間 破片1 椎骨1 肩甲骨 左 上腕骨 左 中間~遠位1 下顎第1または第2臼歯 右 破片1	キジ↑と同じ大きさ キジ↑と同じ大きさ キジ↑と同じ大きさ キジよりやや小 キジ♀より小 より大 エゾヤチネズミより少し大
P600	ウマ 大型哺乳類	上腕骨 左 中間~遠位1 破片5	

表6 魚類出土一覧

出土遺構	種名	部位 左右 数量
P195	タイ科 ウシノシタ科 同定不可	歯 破片1 椎骨3 椎骨3
溝2	同定不可	椎骨1
P537	ニシン科 ヒラ ウナギ コイ科 サヨリ属 ダツ目 (トビウオor サンマ) ボラ スズキ属 ニベ科 マダイ クロダイ タイ科 ウミタナゴ科 ハゼ科 カサゴ類 メバル類 コチ科 ウシノシタ科 未同定 同定不可	椎骨17 椎骨2 ?角骨 破片1 椎骨7 主上顎骨 左3 椎骨7 基咽頭骨 破片1 角骨 右1 咽頭歯 破片1 椎骨1 椎骨1 椎骨8 角骨 左1 鰓蓋骨 右1 椎骨5 ?椎骨1 方骨 左3 椎骨2 ?耳右1 棘破片1 前上顎 右1 角骨 左右各1 主上顎 左1 前上顎 左1 ?方骨 破片1 椎骨9 第一椎骨1, 棘3 舌顎骨 左右各1 椎骨2 椎骨3 椎骨1 ?椎骨1 椎骨8 椎骨4 角骨 左1 椎骨48 椎骨7 椎骨27

註)部位の前につく“?”は種名の同定に疑問が残るものである。

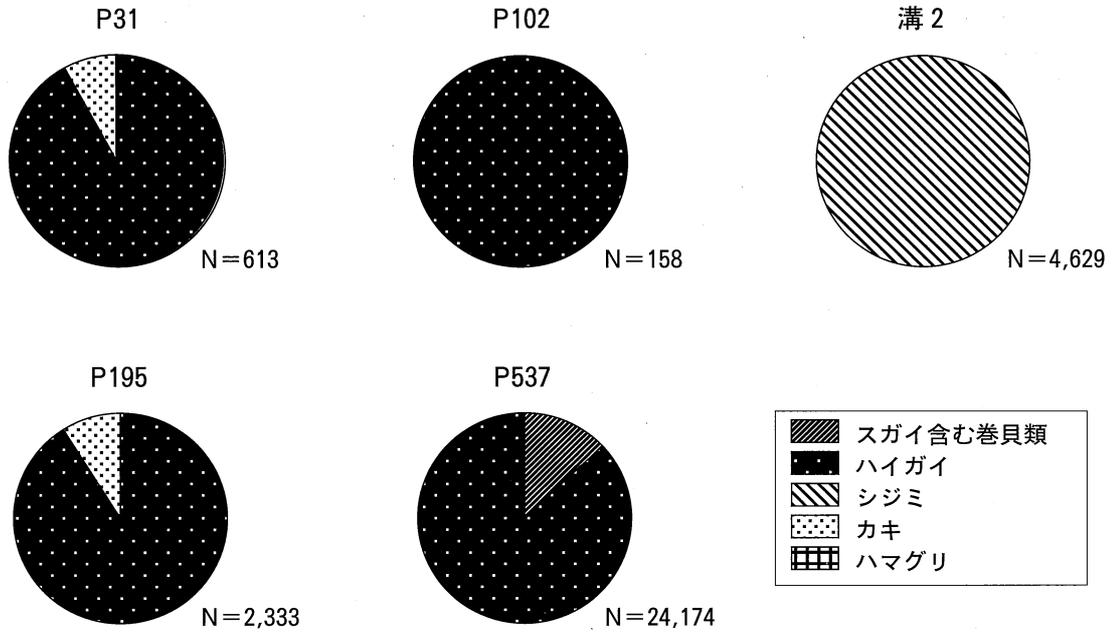


図1 貝種別組成比率
* Nは資料数を示す。

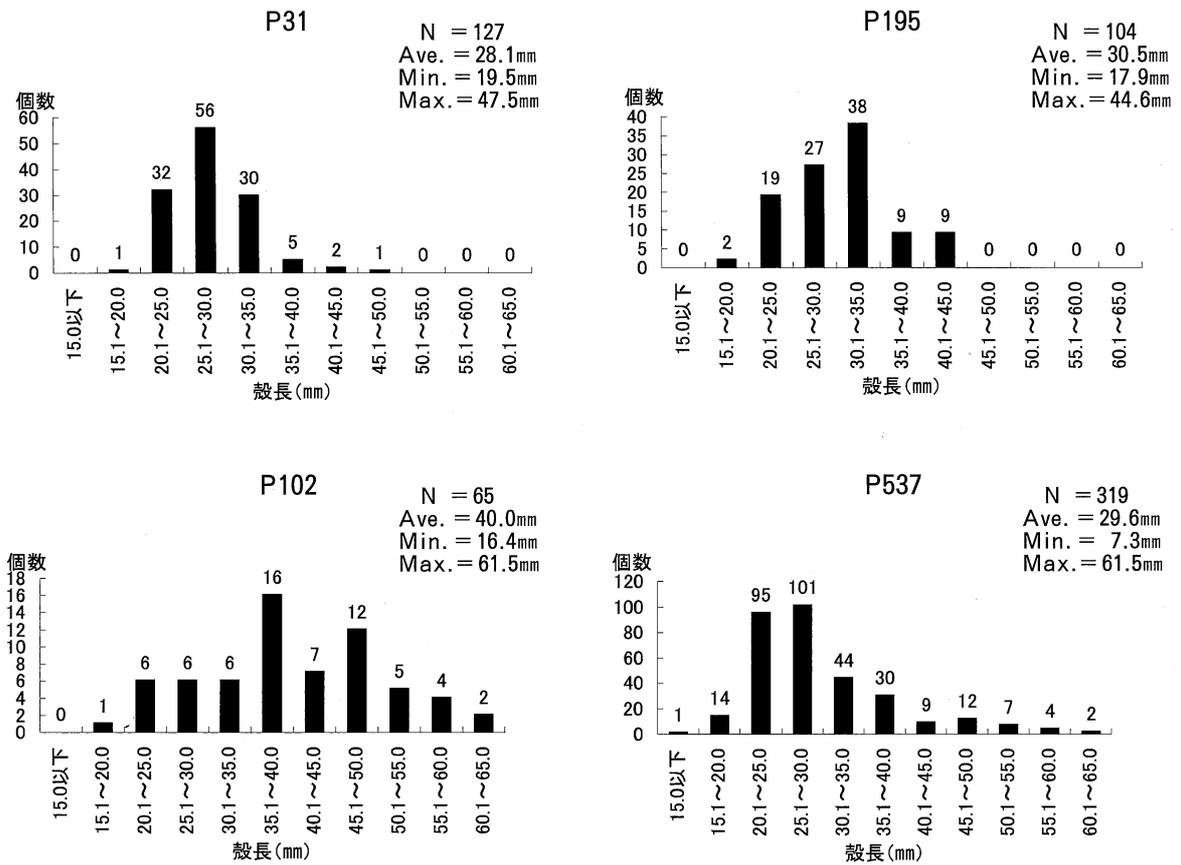
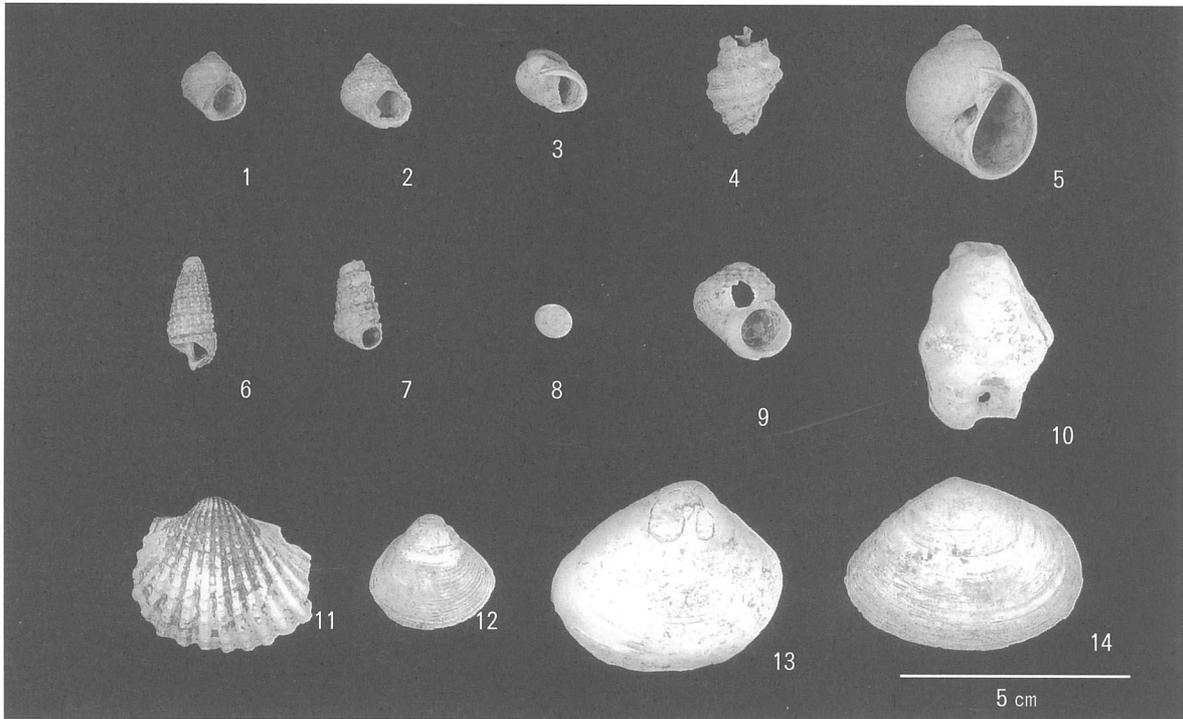
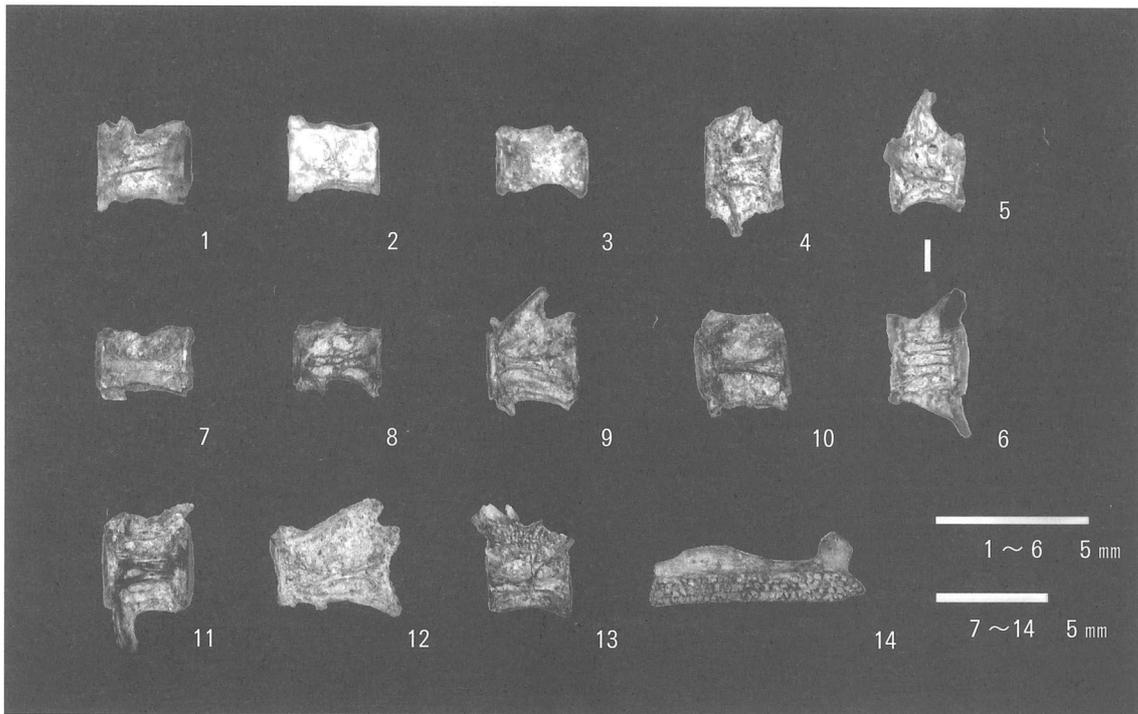


図2 ハイガイ殻長分布グラフ
* Nは資料数。Ave.は平均値、Min.は最小値、Max.は最大値を示す。
* グラフの中の数値は個数を示す。



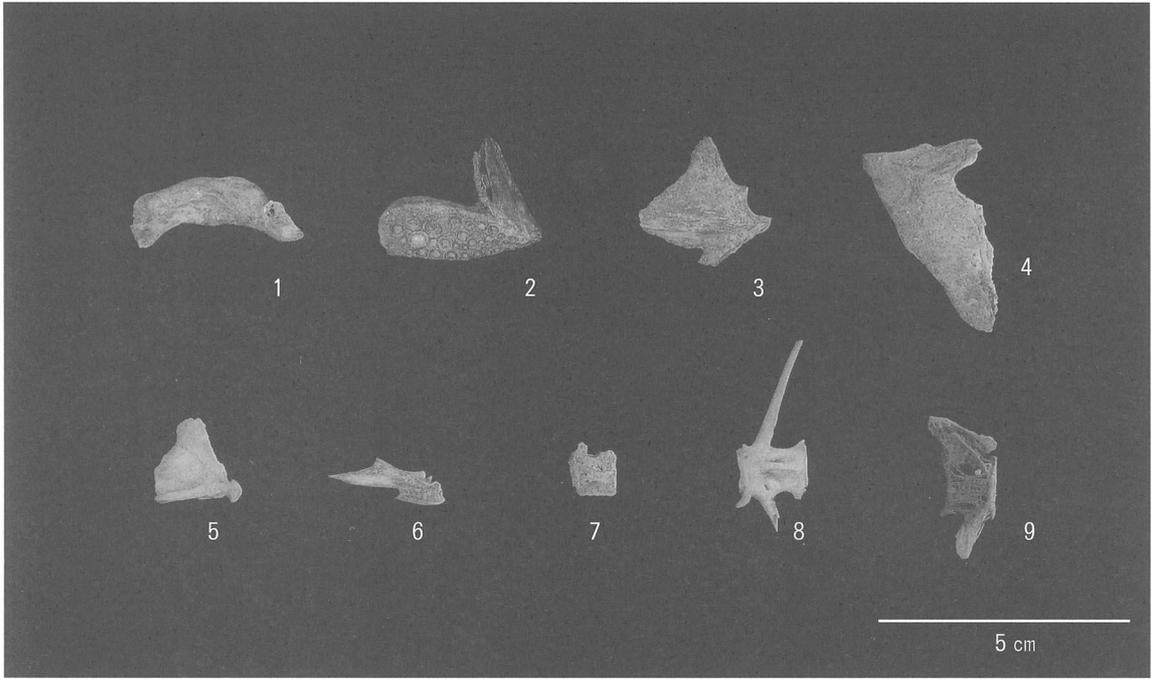
貝類

1. タマキビガイ 2. イシダタミガイ 3. ヒロクチカノコガイ 4. レイシガイ類
 5. ゴマフダマガイ 6. ウミニナ 7. カワアイガイ 8・9. スガイ 10. マガキ
 11. ハイガイ 12. ヤマトシジミ 13. ハマグリ 14. シラトリガイ類



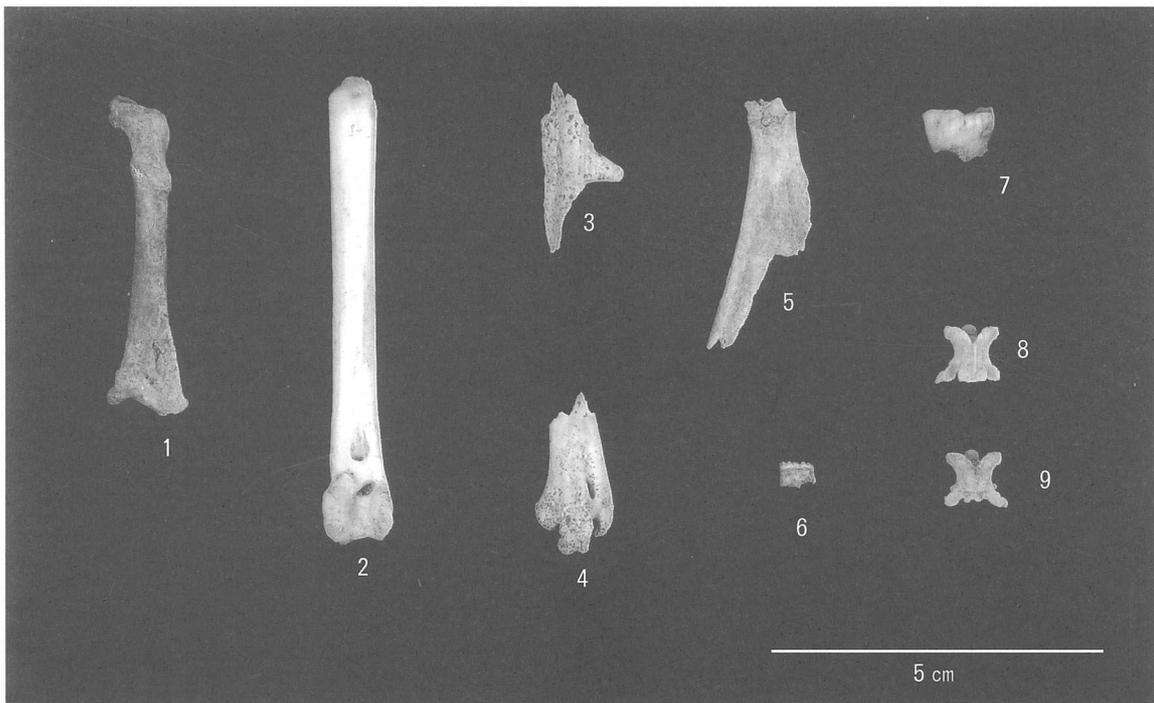
魚類 1

- 1~13. 椎骨 1. ニシン科 2. ウナギ 3. サヨリ属 4. ウミタナゴ科 5・6. ハゼ科
 7. コチ科 8. ボラ 9. ウシノシタ科 10. メバル類 11. ヒラ 12. ニベ科
 13. トビウオ又はサンマ 14. ウナギ 主上顎左



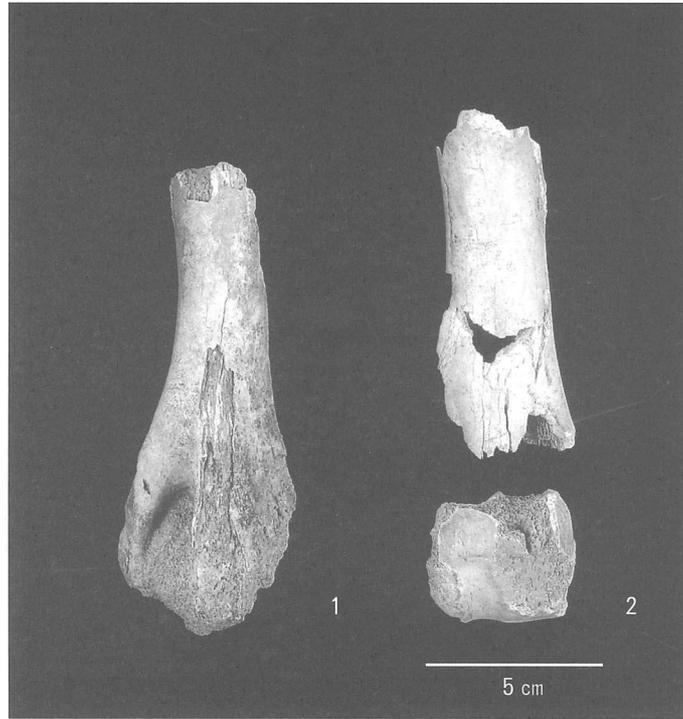
魚類 2

- 1.クロダイ 主上顎左 2.クロダイ 前上顎左 3.マダイ 角骨左 4.ボラ口鰓蓋骨左
 5.スズキ属 方骨左 6.コチ科 角骨左 7~9.椎骨 7.コイ科 8.タイ科 9.スズキ属



爬虫類・鳥類・哺乳類 1

- 1.キジ 鳥口骨右 2.キジ 脛骨左 3.ニワトリ♂ 中足骨右(蹴爪部分) 4.キジ 中足骨左
 5.ウサギ 肩甲骨左 6.ネズミ類 下顎破片左 7.ヒト 下顎第1または第2後臼歯右
 8・9.ヘビ類 椎骨



哺乳類 2

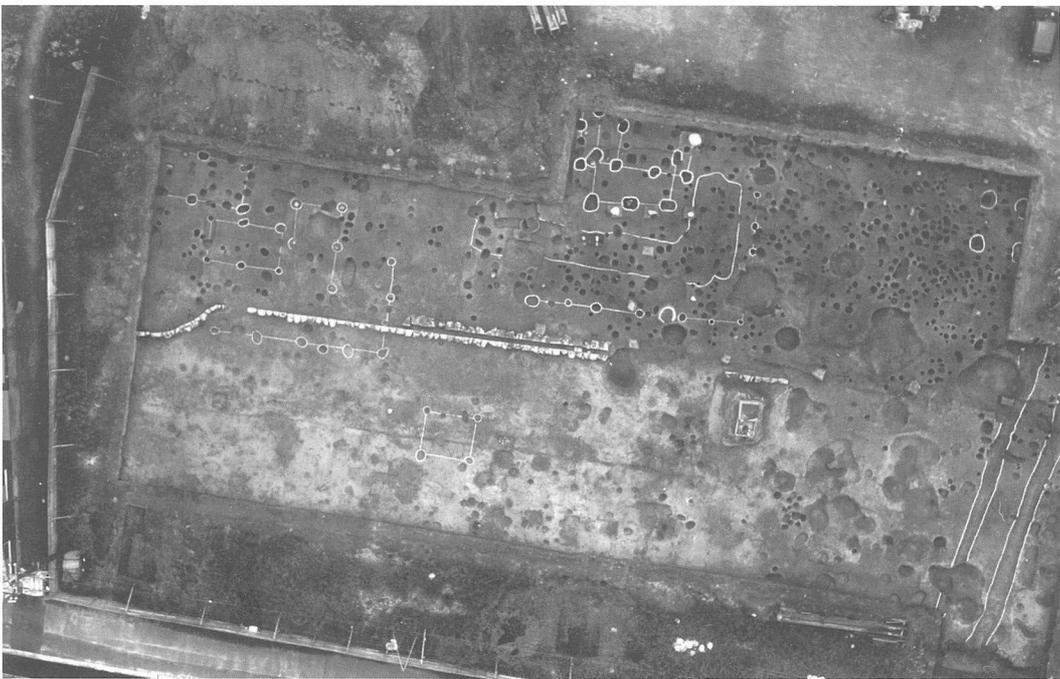
1・2. ウマ上腕骨左 1. P 600出土 2. 出土 P 537

報 告 書 抄 録

ふりがな	せのおすみだいせき							
書名	妹尾住田遺跡							
副書名								
編集者名	草原孝典							
編集・発行機関	岡山市教育委員会文化財課							
所在地	〒700-8544 岡山市大供1-1-1 Tel 086-803-1000							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
せのおすみだいせき 妹尾住田遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 せのお 妹尾1180	33201		34° 35' 30"	133° 51' 30"	1999.07.19~1999.10.15 2000.02.16~2000.02.25 2000.05.26~2000.06.20	1589.7	市営団地 工事に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
妹尾住田遺跡	官 衙 集 落	平安時代 中 世	建 物 土 壙 溝		土 師 器 須 恵 器 陶 磁 器	越州窯産青磁・緑釉陶 器・灰釉陶器などの 高級陶磁器が出土		



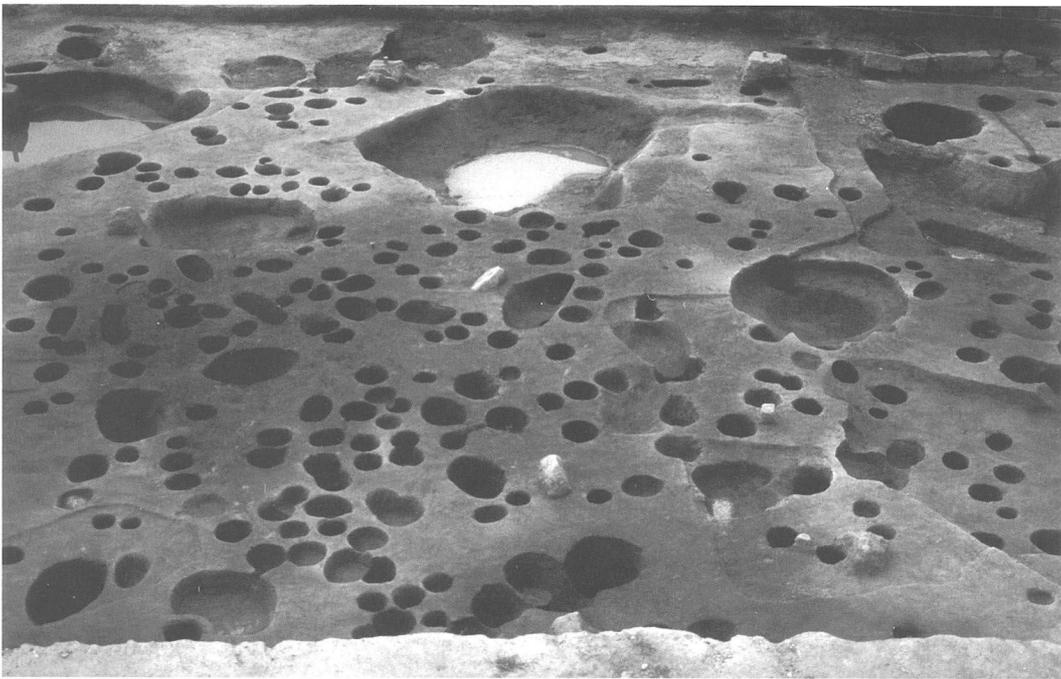
空撮 1
(堀家純一氏撮影)



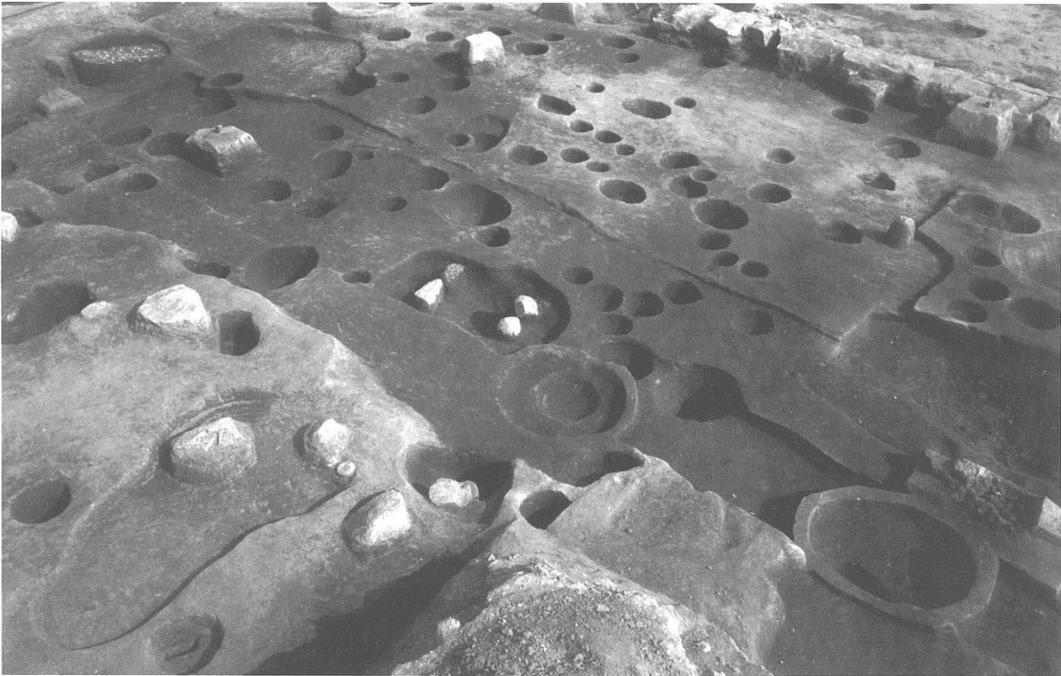
空撮 2
(堀家純一氏撮影)



北壁断面



A区中世遺構(1)



A区中世遺構(2)



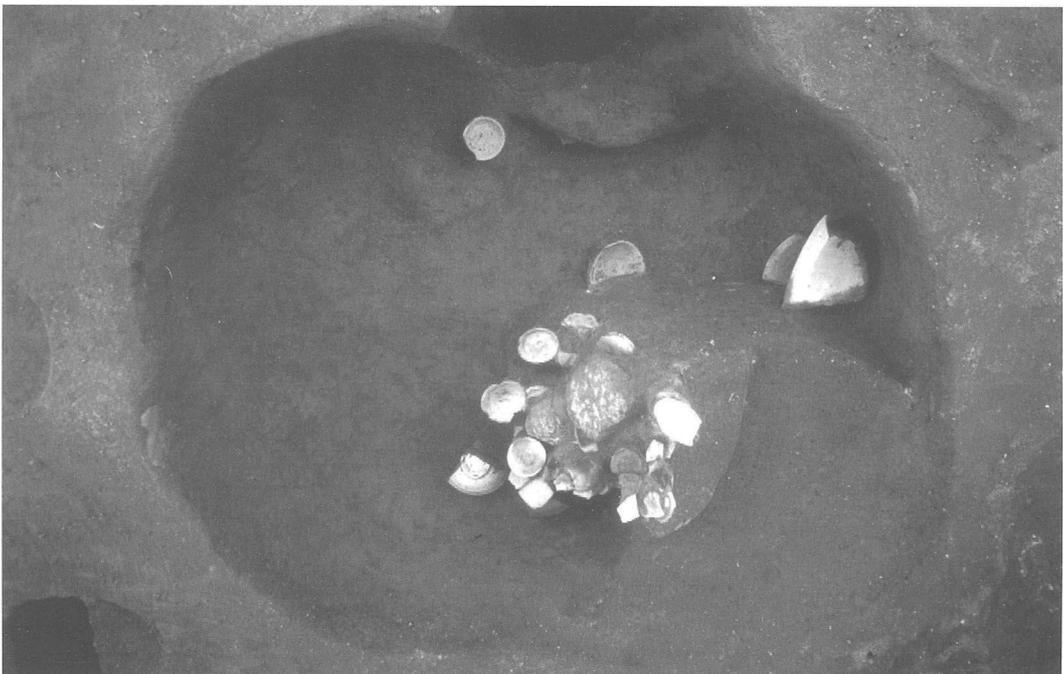
建物 10



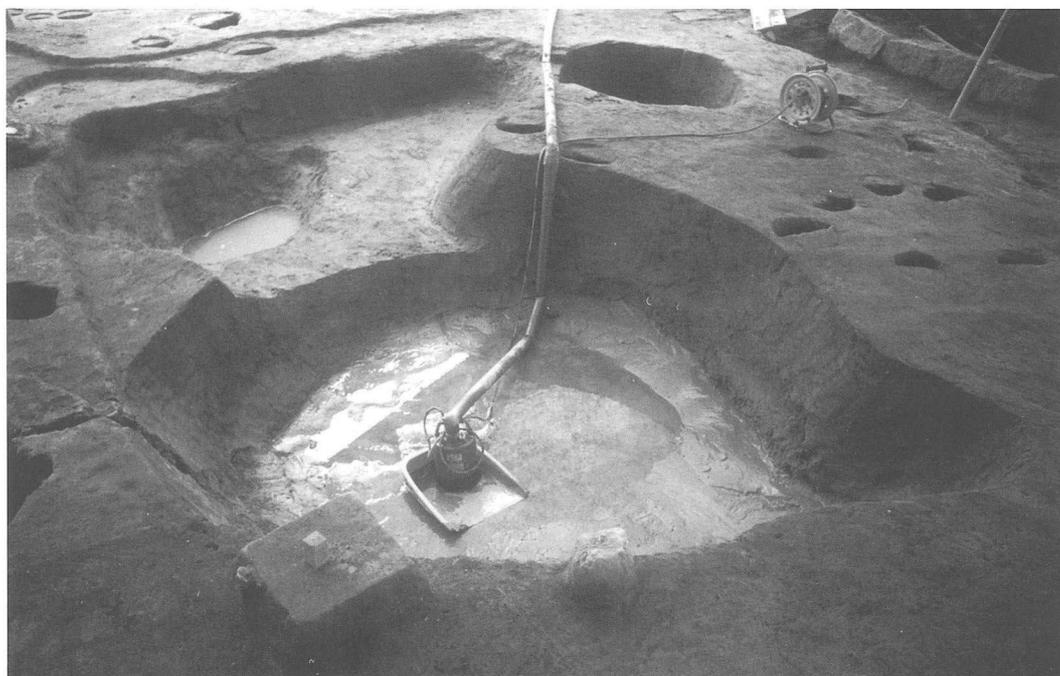
P 31
貝殻出土状況



P 195 断面



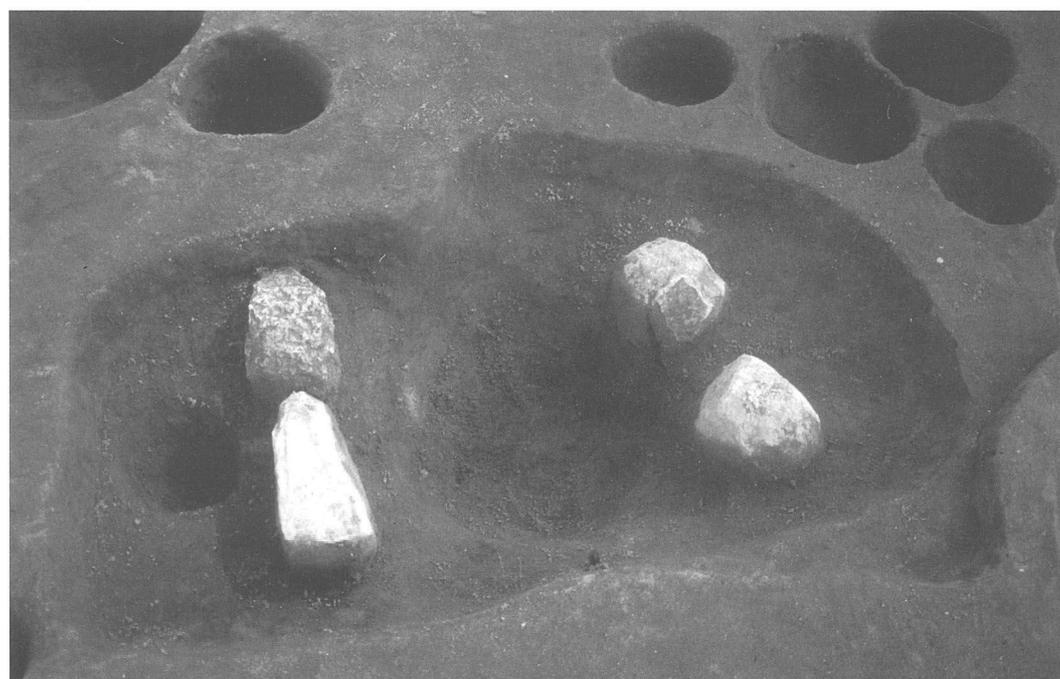
P 400
遺物出土状況



P551



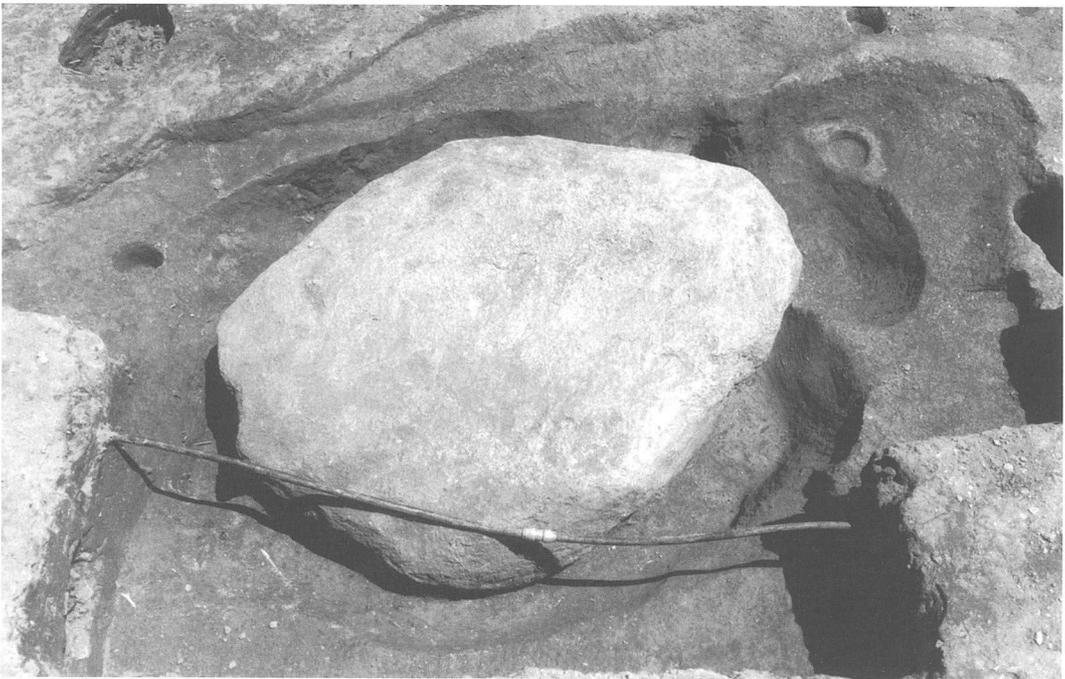
炉状遺構2



炉状遺構3



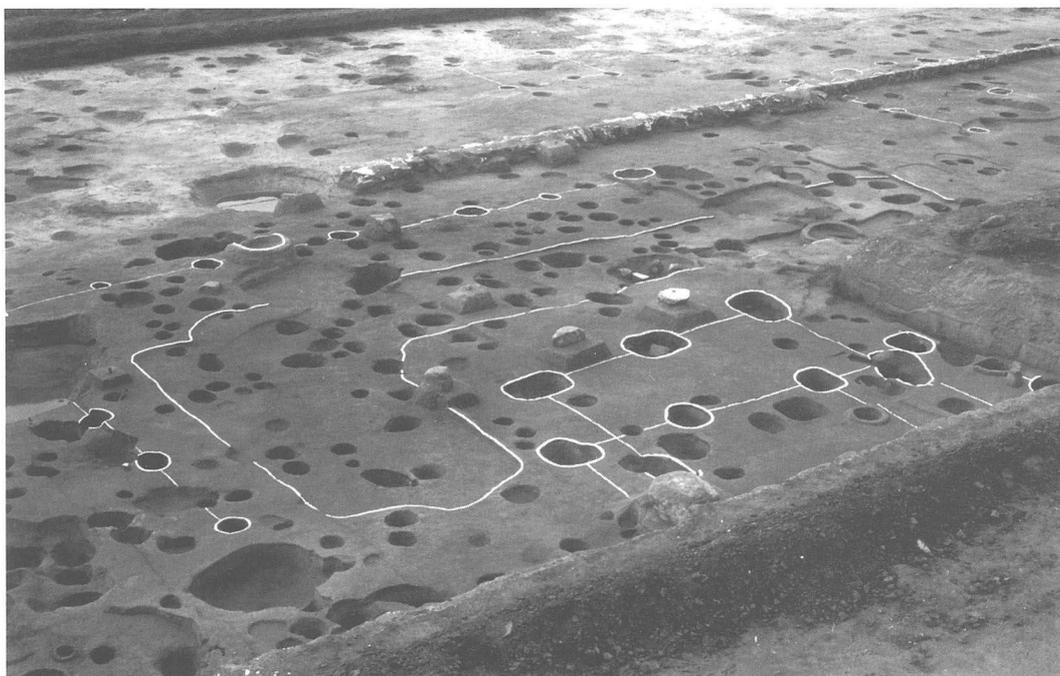
D区



P27



P27
遺物出土状況



A区
古代遺構(1)



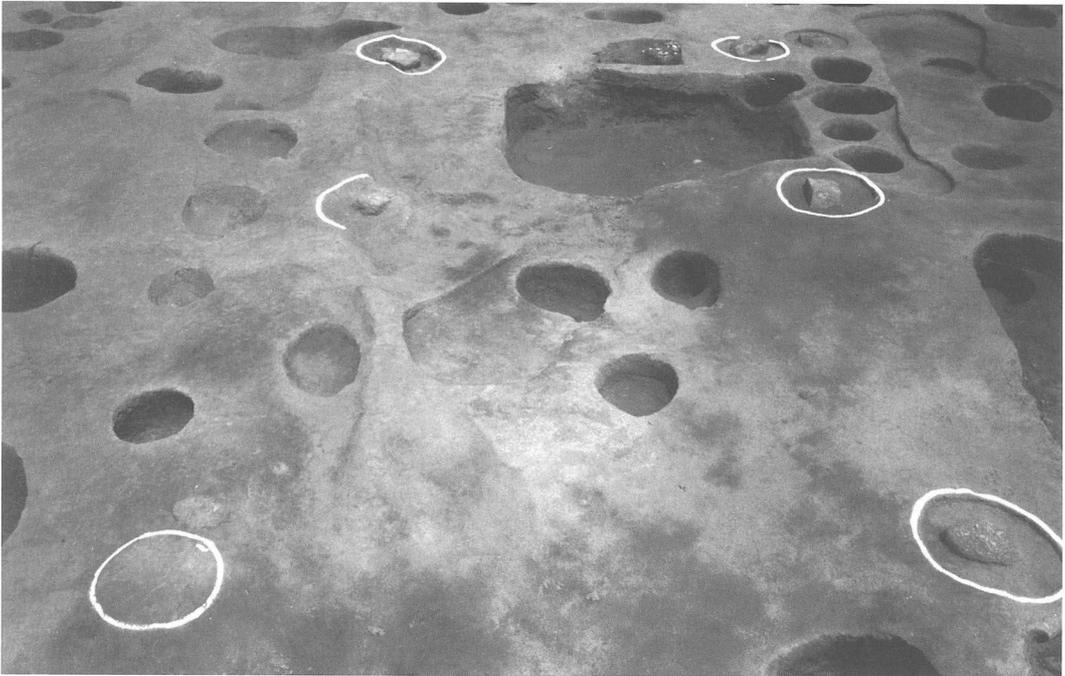
A区
古代遺構(2)



建物5・6・
礎石建物1



建物 5・建物 6・
礎石建物 1



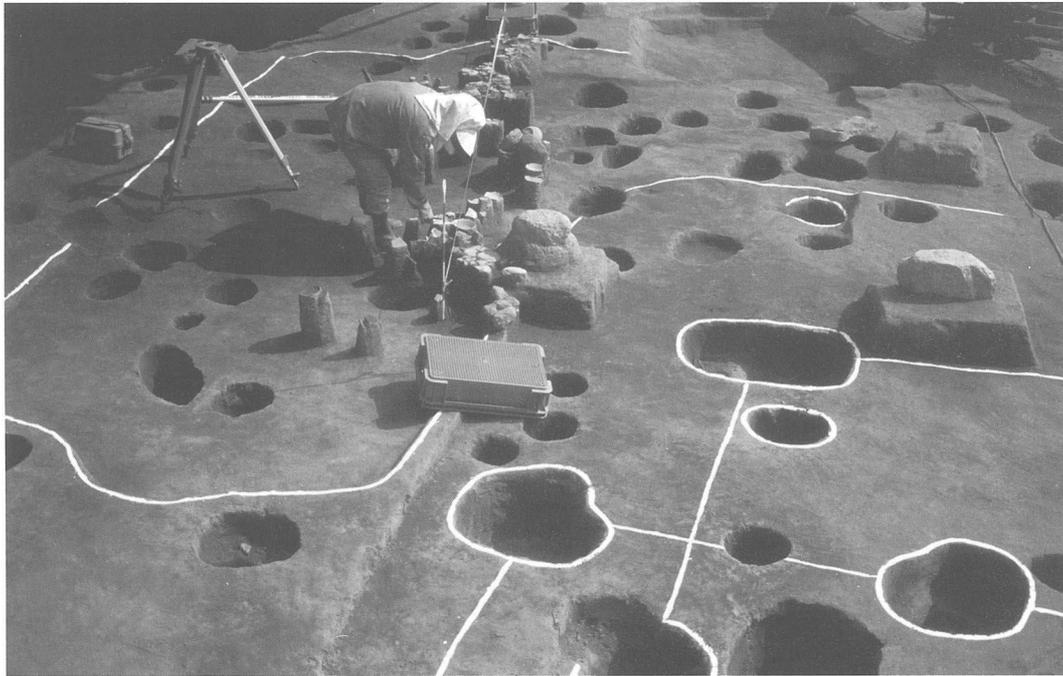
建物 3



礎石建物 2



溝4
遺物出土状況(1)



溝4
遺物出土状況(2)



集石遺構1



集石遺構 2



P 99



P 114